

大阪市内埋蔵文化財包蔵地  
発掘調査報告書

(2017)

第1分冊

2019.3

大阪市教育委員会  
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

#### 例言

1. 本報告書は平成 29 年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所が各原因者より委託をうけて実施したものである。本報告書では上記のうち、北区、福島区、中央区を取録する。
3. 本報告書の執筆は（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所所長 南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会事務局文化財保護課において行った。

## 目 次

### 北 区

中津5丁目所在遺跡発掘調査 (CT17-2) 報告書	1
同心町遺跡発掘調査 (DC17-1) 報告書	7
同心町遺跡発掘調査 (DC17-2) 報告書	15
堂島蔵屋敷跡C地点発掘調査 (DJ17-1) 報告書	25
東天満遺跡B地点発掘調査 (HX17-1) 報告書	37
中崎町遺跡B地点発掘調査 (NZ17-1) 報告書	57
天神橋遺跡発掘調査 (TJ17-1) 報告書	65
天神橋遺跡発掘調査 (TJ17-2) 報告書	79
天神橋遺跡発掘調査 (TJ17-3) 報告書	91
天満本願寺跡発掘調査 (TN17-1) 報告書	103

### 福 島 区

福島5丁目所在遺跡発掘調査 (FK17-1) 報告書	111
----------------------------	-----

### 中 央 区

南本町4丁目所在遺跡発掘調査 (MX17-1) 報告書	119
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-1) 報告書	147
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-2) 報告書	179
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-3) 報告書	187
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-4) 報告書	197
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-5) 報告書	215
大坂城下町跡D地点発掘調査 (OJ17-6) 報告書	239
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-7) 報告書	245
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-8) 報告書	255
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-9) 報告書	271
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-10) 報告書	281
南船場2丁目所在遺跡E地点発掘調査 (OJ17-11) 報告書	289
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-12) 報告書	297
大坂城下町跡発掘調査 (OJ17-13) 報告書	305
大坂城跡発掘調査 (OS17-1) 報告書	321
大坂城跡発掘調査 (OS17-2) 報告書	331
大坂城跡発掘調査 (OS17-3) 報告書	343
大坂城跡発掘調査 (OS17-6) 報告書	353
大坂城跡発掘調査 (OS17-7) 報告書	359
大坂城跡発掘調査 (OS17-8) 報告書	369
大坂城跡発掘調査 (OS17-9) 報告書	381
大坂城跡発掘調査 (OS17-11) 報告書	387
大坂城跡発掘調査 (OS17-12) 報告書	407
大坂城跡発掘調査 (OS17-13) 報告書	413
島之内2丁目所在遺跡発掘調査 (SI17-1) 報告書	419
島之内2丁目所在遺跡発掘調査 (SI17-2) 報告書	427
上本町遺跡発掘調査 (UH17-6) 報告書	435



北区中津五丁目4-10・4-7における建設工事に伴う  
中津5丁目所在遺跡発掘調査(CT17-2)報告書

調査個所 大阪市北区中津5丁目4-10・4-7  
調査面積 約300㎡  
調査期間 平成29年11月27日～12月13日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、積山 洋

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は標高0.0m前後の低地に位置し、中津5丁目所在遺跡として登録されている。ただ、遺跡の実態は不明である。この地の北方400m余には近世中国街道が北西に走り、東に隣接して近～現代の広大な旧梅田貨物駅に大深町遺跡が存在する(図1)。大深町遺跡B地点では中世の土器や中～近世の溝跡、幕末～明治初期以後の土器類が発見されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。またその南西の端には近世～近代の「大阪七墓」の一つである梅田墓があり、2016～2017年度の発掘調査により200体を超える土葬の人骨が検出されている[大阪文化財研究所2018]。

当該地において、大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、地表下約1.2m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたことにより、今回の調査を実施することとなった。調査に先立つ機械掘削は地表下1mまでとされた。調査規模は東西20m・南北15mである(図2)。調査期間は上にあげたとおりである。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5)

第0層：現代の攪乱層である。TP-0.1m前後の現地表面から最大で厚さ約100cmを測る。

第1層：暗灰黄色砂混り粘質シルト～シルト層で、近～現代の作土層である。層厚は20～30cmで、

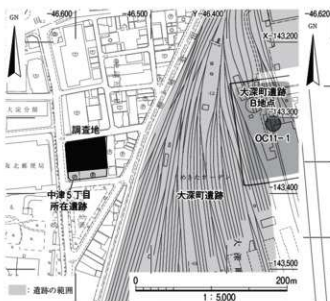


図1 調査地位置図

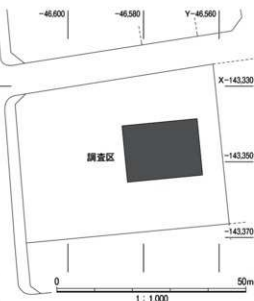


図2 調査区配置図

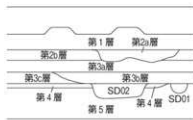
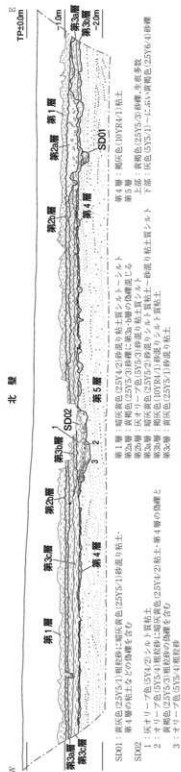


図3 地層と遺構の関係図



上面が保存されているところでは、畝状の高まりが規則的に見られた(写真図版：南壁断面2)。

第2層：2層に細分された。第2a層は黄褐色砂礫に第3層の偽礫が混じる遺構の埋土である。厚さは最大35cmである。本層まで機械で掘削したため、詳細は不明であるが、年代的には近世も

しくは近代に属する可能性がある。第2b層は灰オリーブ色砂混り粘質シルト層で、作土層である。厚さは10～20cmを測る。やはり年代等は不明であるが、古くとも近世と思われる。

第3層：本層以下は人力で掘り下げた。3層に細分される。第3a層は暗灰黄色砂混りシルト質粘土～粘質シルト層ないし礫・砂混り粘質シルト層で、作土層とみられる。厚さは10～15cmであった。第3b層は褐灰色砂混り粘土～シルト質粘土層で、層厚10～15cmの水成層である。第3c層は調査区の西部に分布していた黄灰色砂混り粘土で、やはり水成層であろう。層厚は約15cmであった。第3層からは遺物の出土がなく、年代は不明である。

第4層：調査区中央から西部にかけて堆積していた暗色帯で、褐灰色粘土層である。層厚は10cm以下である。やはり遺物の出土はない。本層上面で南北溝SD02が検出された。

第5層：自然堆積の砂礫層である。およそTP-0.4m以下に堆積し、斜交ミナが明瞭にみられた。強い水流で形成された地層である

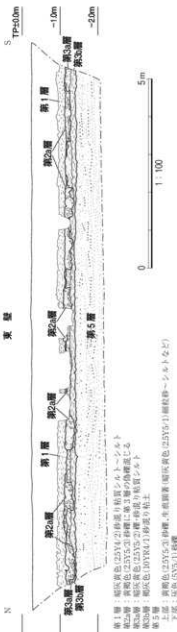


図4 地層断面図

1:100

0 5m

第1層：褐色色(25YR4/1)粘質黄褐色(25Y5/1)粘質粘土  
 第2層：黄褐色(25Y5/3)砂礫・粘質粘土  
 第3層：暗灰色(25Y4/1)粘質シルト質粘土  
 第4層：灰オリーブ色(5Y3/2)粘質シルト質粘土  
 第5層：灰褐色(25Y5/1)粘質粘土



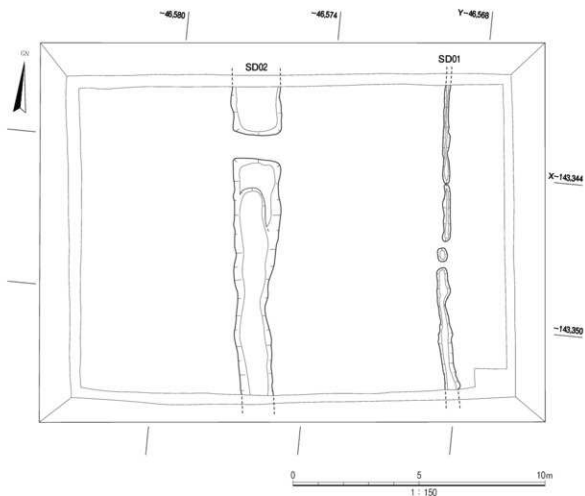


図5 遺構平面図

が、上部20～40cmほどには植物の根跡かと思われる生痕が顕著に認められた。3 cm大以下の土師器細片が約10点出土したが、正確な年代は決定できない。

ii) 遺構と遺物(図5)

**SD02** 第4層上面で検出された南北溝SD02は、幅1.8m前後、深さ約0.3mであるが、調査区内の北側で途切れている部分がある。埋土は3層に別れ、中層(図4：北壁断面図のSD02の2層)は第4層に由来する偽礫など様々な偽礫を含んでおり、人為的に埋められた地層である。南壁のSD02の断面では北壁の中層と下層(同図：SD02の2・3層)のみ認められた(写真図版中段)。北側の中層から指先大の土師器細片などが2点出土したが、やはり年代は不明である。

**SD01** 南北溝SD01は第4層との関係が不明であり、第3b層基底面の遺構であるが、SD02と同時期の可能性がある。SD02から東に7.5m余り離れて並行するこの溝は幅約0.4～0.5m、深さ約0.2～0.25mで、やはり途切れる部分があった。埋土にはSD01と同じく第4層の偽礫などを含んでいた(写真図版下段)。遺物は出土していない。

3) まとめ

今回の調査地は淀川デルタの形成を探る絶好の機会であったが、年代のわかる遺物は出土しなかつ

た。ただ、縄文土器や弥生土器は出土していないので、それより新しいとはいえる。

調査地の西方100m余には古墳時代から古代の頃かと推定される中津川の旧河道が復元されている[趙哲済・中条武司2017]。本調査地の第5層は直接それに係るものではないが、第5層上部の顕著な生痕は、調査地が水辺に近く、アシなどが繁茂していたような環境にあったことを推測させる。

このような環境は比較的長く続いたようで、第4層上面の段階にいたって初めて開発が及び、南北溝が検出された。その年代は明らかでないが、おそらく遡っても中世までであろう。しかし、第3c・3b層の粘土の堆積は、この地がふたたび水面下にあったことを示すようである。第3a層にいたって作土層が確認できた。おそらく近世段階ではないかと推測する。

引き続き、今後も調査を重ね、資料が増加することが期待される。

#### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「大深町遺跡B地点発掘調査(OC11-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.35-42
- 大阪文化財研究所2018、「大深町遺跡発掘調査報告」
- 趙哲済・中条武司2017、「大坂海岸低地における古地理の変遷-「上町科研」以後の研究-」:『ヒストリア』第364号、大阪歴史学会

北区天満橋三丁目45-2 他における建設工事に伴う  
同心町遺跡発掘調査(DC17-1) 報告書

調査個所 大阪市北区天満橋3丁目45-2他  
調査面積 100㎡  
調査期間 平成29年9月14日～9月27日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、松本啓子

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地はJR環状線の北約50m、谷町筋から大川を渡って北へ延びる天満橋筋の西に隣接する場所にあって、弥生時代～中世の集落遺跡である同心町遺跡の北部に位置する。

これまで付近では、調査地の南約70mのDC96-1次調査で弥生時代中期(第Ⅲ様式)の土壌と耕作痕跡が確認され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998]、北150mのDC02-3次調査でも弥生時代の土壌と弥生時代中期～奈良時代の遺物が多数見つかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004]。また、南約400mのDC07-1次調査では弥生中期前～中葉の遺構のほか、中世の遺構も検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。近世では、北東約100mのDC15-1次調査地で大川から天満の町を守る堤防跡が検出され、豊臣秀吉による1586(天正14)年の堤防普請に対応する可能性が高いことが指摘された[大阪文化財研究所2015]。

工事に先立ち、大阪市教育委員会が平成28年11月25日に行った試掘調査の結果、現地表下約1.2mで、中世～近世の遺構面および遺物包含層が検出され、本調査を実施することになった。

調査は平成29年9月14日から開始した。土置場を確保するため、関係諸機関と協議の上、東西11m、南北9mの調査区を設定した。地表下1.2mまでを重機によって掘削し、以下の地層を人力により掘削・精査した。平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行い、地表下約2.0mまで掘り下げて調査した。9月27日に現地における調査を完了し、撤収した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)である。また、本報告書で用いた方位は、図2は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にした。

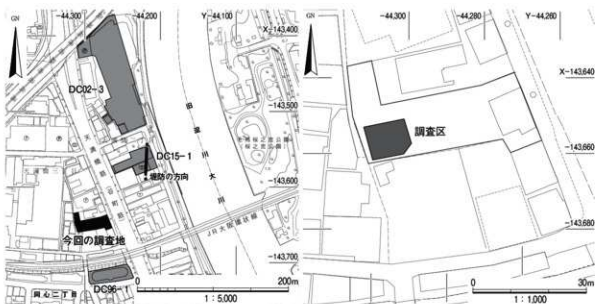


図1 調査地位置図

図2 調査区配置図

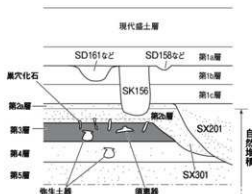


図3 地層と遺構の関係図

黄橙色(10YR7/3)細粒砂層、第1c層は灰黄褐色(10YR6/2)礫・砂・シルト混り細粒砂層で、最大層厚は第1a層から順に40cm、18cm、75cmである。第1b層上面で鋤溝や畝間の溝が見つかった。出土遺物から、第1a層が19世紀代の作土層、第1b層が18世紀後半～末頃の作土層、第1c層が18世紀後半～末頃の盛土層と考えられる。

第2層：2層に細分した。自然堆積層の第2b層は明黄褐色(10YR6/6)シルト質細粒砂層で、この上部にある灰黄色(2.5Y6/2)礫・シルト混り細粒砂層の第2a層は、第2b層の土壌化した部分である。最大層厚は第2a層が35cmで、第2b層が30cmである。第2a層上面で南西方向への落込みSX201が検出され、第2b層下部で果穴化石が観察された。第2a層から肥前陶器など、近世初頭までの遺物が出土した。

第3層：黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土の湿地の堆積層で、層厚は12～18cmで、ほぼ水平に堆積していた。第2b層下部で見られた果穴化石は本層まで達していた。SX201の真下の本層上面で、南西に落ち込みSX301を検出した。遺物は本層中で古代の須恵器が見つかったほか、本層下部で弥生土器が見つかった。

第4層：灰白色(7.5YR4/1～2.5Y7/1)粗粒砂～礫層で、水成層である。ほぼ水平に堆積し、最大層厚は20cmである。弥生土器の破片が出土した。

第5層：灰白色(7.5YR4/1～2.5Y7/1)粗粒砂～礫層で、水成層である。層厚は20cm以上ある。遺物は出土しなかった。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第5層上面・第4層上面・第3層の遺構と遺物(図5・6、図版中・下)

第5層上面では流水による起伏が見られたが、遺構はなく、出土遺物も見られなかった。

第4層上面はほぼ平坦で、本層中から弥生土器の破片が出土した。

第3層上面で小穴と落込みSX301が見つかった。

小穴は直径15cm未満、深さ5cmほどのもので、配列に規則性がなく、大半が果穴化石と考えられる。

SX301は調査区南西部にあって、ほぼ同じ平面位置にあるSX201により大半が失われていた。東西0.4m以上、南北0.3m以上で、断面から復元すると段差が0.5mほどの落込みである。第2b層に似たに、明黄褐色(10YR5/3)～明黄褐色(10YR6/6)礫・シルト混り細粒砂で埋まっていた、弥生土器や土師器・須恵器の破片が出土した。古代以降、江戸時代初頭までのいずれかの時期まであった自然の落込みと考えられる。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4、図版上)

調査地の現地表面はTP+2.8～2.9mで、ほぼ平坦である。現地表下約1.2mまでの間の現代盛土・攪乱層は重機で除去し、以下TP+0.6mまでの間で確認した地層を5層に大別した。各岩相の特徴は次の通りである。

第1層：本層を3層に細分した。第1a層は明黄褐色(10YR5/2)炭・砂・礫混りシルト層、第1b層はにぶい



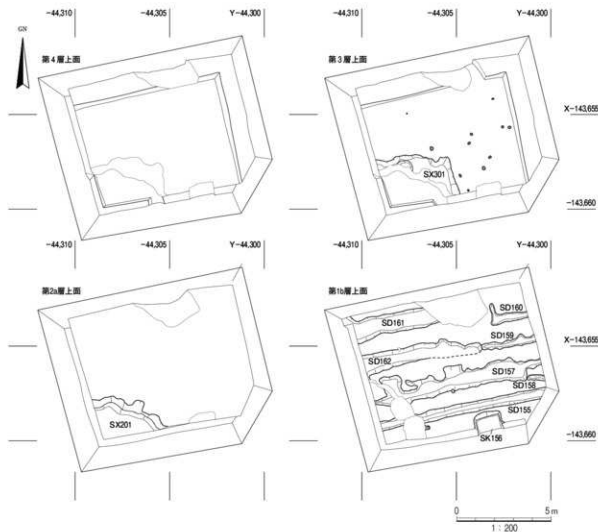


図5 各層の遺構平面図

第4・3層出土の遺物のうち、第3層中の弥生土器1～5、須恵器6・7を示した。1・2は壺の底部で、内面をハケで調整する。5は高杯の口縁部である。3・4は甕の底部で、4は内面に調整工具の痕跡が残る。これらは弥生中期のものと考えられる。6・7は須恵器の蓋で、奈良時代に属するものである。

b. 第2a層上面の遺構と遺物(図5・6)

第2a層上面のSX201は、東西0.4m以上、南北0.2m以上、深さ約0.8mの落込みである。上から順に水成のオリーブ褐色(2.5Y4/3)礫・粘土混り砂質シルト層、にぶい黄色(2.5Y6/3)礫混り粗粒～中粒砂層、暗灰黄色(2.5Y5/2)炭・礫・石・粘土混り砂層、黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂層で埋まっていた。埋土から肥前磁器や肥前陶器、土師器などが出土した。これらのうち、17世紀末頃の土師器焙烙8を図示した。SX201の埋まった時期を示すものである。

c. 第1b層上面の遺構と遺物(図5・6)

SK156は調査区の南壁にかかる土壌で、東西約1.5m、南北1.0m以上、深さ約1.2mである。埋土は2層に分かれ、下層は黒褐色(10YR3/2)礫・石・シルト・粘土混り砂層で、最終的に上層の灰黄色(2.5Y6/2)礫・炭・粘土混りシルトで埋めていた。上層から肥前磁器碗9など、18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土し、下層からは18世紀末頃の遺物が出土した。



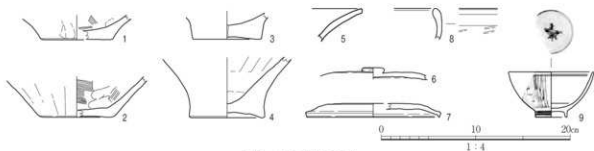


図6 出土遺物実測図

第3層(1~7)、SX201(8)、SK156(9)

SD155・157~161は、幅0.5~1.0m、深さ0.2m以下の東西方向の耕作溝で、幅約1mのSD157・161・162は畝間とみられ、褐灰色(7.5YR4/1)炭・細粒砂混りシルトで埋まっていた。幅0.5m前後のSD155・158~160は鋤溝とみられ、埋土は明黄褐色(10YR5/2)炭・砂・礫混りシルトである。これらの溝から18世紀後半~末頃の遺物が出土した。

### 3) まとめ

今回の調査では、弥生土器を含む水成の堆積層、弥生時代~奈良時代の遺物を含む湿地の堆積層、その後の自然堆積層を起源とする近世初頭頃の古土壌を検出し、18世紀後半から19世紀の耕作痕跡を検出した。図7に示したように、周辺調査の地層と対比して考えると、DC15-1次調査で検出された大川端の天満の堤防(図1)より西側の地域が市街地化された後も、この地では近世初頭まで湿地が残っていた可能性があり、江戸時代後半になって耕作地として利用され始めたものと考えられる。

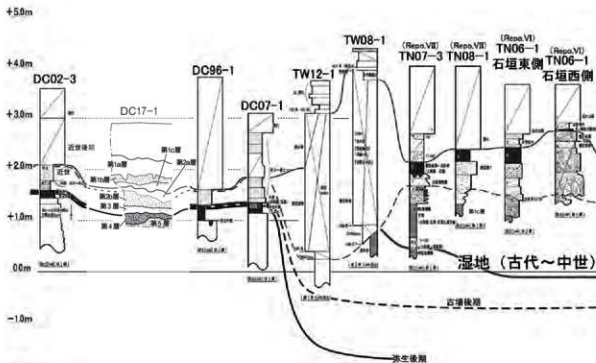


図7 周辺調査の地層との対比

藤田修ほか2014「大阪上町台地の総合的研究」の「図6 柱状図 天満砂州南端部」を部分転載・加筆

今後、周辺調査の蓄積によって、より確度の高い地域史像が復元できるものと期待される。

#### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

1998、「信開ホテルによる建設工事に伴う発掘調査(DC96-1)」:『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.13-22

2004、「同心町遺跡B地点発掘調査(DC02-3)報告書」:『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-11

2008、「同心町遺跡D地点発掘調査(DC07-1)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-11

2010、「桜宮地区埋蔵文化財調査(天満1丁目所在遺跡発掘調査(TW08-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.21-29

大阪文化財研究所2015、「北区天満橋二丁目34-3における建設工事に伴う同心町遺跡発掘調査(DC15-1)報告書』、pp.1-5

輪田修ほか2014、「平成21～25年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)大阪上町台地の総合的研究』、pp.1-288

北区天満橋二丁目29-7における建設工事に伴う  
同心町遺跡発掘調査(DC17-2)報告書

調査個所 大阪市北区天満橋2丁目29-7  
調査面積 約90㎡  
調査期間 平成29年12月20日～12月27日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、南 秀雄、平山裕之

## 1) 調査に至る経緯と経過

同心町遺跡は、淀川三角洲に立地する弥生時代中期を主体とする遺跡である。調査地点は、桜ノ宮駅西のJR環状線のすぐ北の大川西岸で、天満橋筋(谷町筋)に面している(図1)。

まず、周辺では北60mのDC15-1次調査と南約80mのDC96-1次調査で畿内第Ⅱ～Ⅲ様式の時期の土壌が、西約80mのDC17-1次調査と北約120mのDC02-3次調査で当該期の土器・石器が出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、2004][大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017a][大阪文化財研究所2018]。調査地から南約450mのDC07-1・TW15-1次調査では、畿内第Ⅱ～Ⅲ様式の時期の土壌や第Ⅱ様式の環濠状の溝が見つかっており、南北500m程度にわたって弥生時代中期前～中葉の集落が存在したと推定される[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008][大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017b]。

また、北側のDC15-1次調査では、大川岸の堤防の築造当初の土盛が発見された。同様の堤防跡は、南約850mの泉布親付近の大川岸2ヶ所で発掘されており、そこでは豊臣秀吉が天満の城下町開発に伴って築堤した1586(天正14)年に遡ると推定された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010][大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]。1655(明暦元)年の「大坂三郷町絵図」では、天満から北に位置するDC15-1次調査地付近まで堤は未だ延びていないが、出土遺物からDC15-1次調査検出の堤防跡の時期は絞り込めなかった[南秀雄2016]。

さらに、調査地は天満橋筋に面していることから、城下町から道に沿って長柄橋方向へ延びていく町の形成時期に対する手がかりも得られる可能性があった。

本調査は大阪市教育委員会の試掘を受け、敷地東半の南北10m・東西9mを対象とした(図2)。地

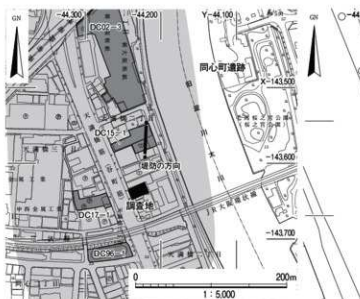


図1 調査地位置図

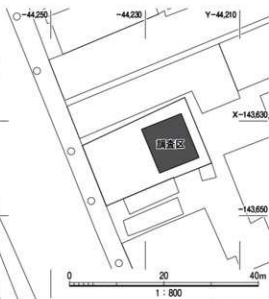


図2 調査区配置図

表下約1.3mまで重機で掘削し、第3層上面から自然堆積層である第8層上面までを調査した。敷地内に掘削土を取めるため、第4層以下は調査範囲を東側5.5mの間に狭めた。

基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

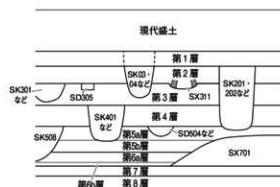


図3 地層と遺構の関係図

第2層：シルト偽礫混り灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂層の盛土で、層厚は10～30cmである。19世紀まで降らない可能性が高い。均質な中粒砂で埋められたSK201・202等は本層上面の遺構である。

第3層：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトの薄層を重ねた上層と、炭・細礫混りオリブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層の下層からなる盛土で、層厚は25～35cmである。本層上面は明瞭な遺構面で、竈SX311などがあつた。第3層の形成は18世紀中～後葉と推定される。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現地表の標高はTP+3.3mである。厚さ約80cmの現代盛土の下から層名を付した。

第1層：遺構埋土を含め、第2層と現代の盛土の間を一括して第1層とした。シルト偽礫混り黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂層等で、層厚は20～50cmである。

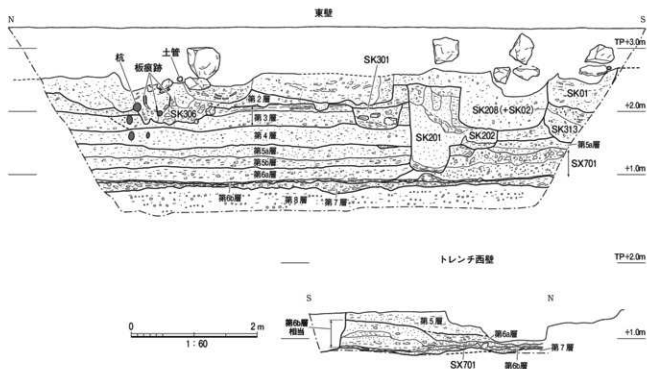


図4 地層断面図

第4層：炭・細礫混りオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂層で層厚は20～30cmである。畠の作土である。本層上面でSK401を検出した。SK401出土陶磁器には焼けたものがあり、妙知焼(1724年)で被熱した可能性がある。層中の遺物からみた第4層の下限は17世紀末である。

第5層：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂層の第5a層と、にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒～中粒砂層の第5b層からなり、層厚は30～40cmである。畠の作土である。本層上面でSD504などを検出した。時期は決め難いが、17世紀前半頃までの遺物しか出土していない。第5層から備前焼徳利4(図8)と銅銭1(聖宋元寶 北宋1101年初鋳)が出土した。

第6層：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質中粒砂層の第6a層と、水成層の暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土層である第6b層からなる。層厚は第6a層が17～23cm、第6b層が3～5cmである。第6a層は畠の作土である。時期は決め難いが、瓦類は少なくとも豊臣期以降のものであろう。第6a層出土の鬼瓦3を図示した(図8)。また第6b層から、13世紀の中国産白磁碗2が出土した。

第7層：褐灰色(10YR4/1)シルトやシルト質粗粒砂の偽礫からなる盛土層で、層厚は4～20cmである。上面に、DC15-1次調査検出の堤防跡と関連すると推定される盛土遺構SX701があった。土器や弥生土器片しか含まれず、時期は不明である。

第8層：黄灰色(2.5Y6/1)極粗粒砂～細礫の自然堆積層で、層厚は40cm以上である。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第7層上面(図5左)

調査区の東南で盛土遺構SX701を検出した。SX701は南北3m以上で、北側にはない。高さは0.5m前後である。下半はにぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質極粗粒砂層、上半は黒褐色(2.5Y3/2)シルト偽礫と黄褐色(2.5Y5/3)極粗粒砂～細礫層である。下端には一部に水成層を含む、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土～シルトの薄層がある。これを第6b層とみるとSX701の構築面は第6b層となるが、上層と一連の人為主体の地層と観察した。SX701からは遺物は出土していない。SX701は第6b層段階に西側に盛土が継ぎ足されている(図4下の西壁地層断面図)。

SX701は、その位置と層序、構築面のレベルの近似から、北のDC15-1次調査の堤防跡と関連する遺構と考える。

DC15-1次調査の堤防跡西裾の延長は、今回の調査区に掛かる可能性がある(図1)。DC15-1次調査から推測される堤防跡の伸びは、現在の大河の右岸の方向と微妙にずれ、南北に近い。

先述のように、1655(明暦元)年作の「大坂三郷町絵図」では調査地付近まで堤の表現は延びていない。一方、1654(承応3)年以前の作とされる篠山藩青山家伝来の「大坂図」と1662～63(寛文2～3)年作とされる同家伝来の「大坂図」では、堤は調査地に近い、より北まで描かれている[大阪歴史博物館2013]。そこでは南北に近い向きになっている。

SX701の時期は、それを覆う第6～5層のわずかな出土遺物から推測するほかないが、1586(天正14)年まで遡らなくとも、17世紀前半とは言えるのではなからうか。位置等は合うが、SX701の形態は、堤防の西裾の素直な延びにそぐわない。堤に取り付く道、あるいは第6a層以降の耕作によって変形した、などの推測も浮かぶが、狭いトレンチ調査でよくわからない。

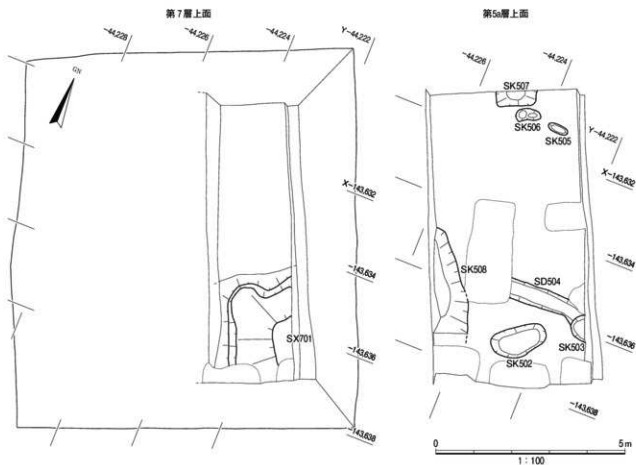


図5 遺構平面図(1)

水準がたいせつな築堤の前には、周辺の地均しがあったのではないかと推測する。あくまで推測だが、下面が凸凹した第7層の盛土はその可能性も考えられる。

b. 第5a層上面(図5右、図8)

第6層上面に遺構はなく、第5a層上面は17世紀中～後葉と推測される遺構面である。

SK503は直径0.75m、深さ0.08mと浅く、埋土に炭を多く含んでいた。SD504はSK503より古く、長さ2.2m以上、幅0.45～0.55m、深さ0.15mである。

SK508は一部のみを検出で、南北2.8m以上、深さ0.55mである。SK508からは土師器皿5、肥前陶器碗6など、17世紀前葉の遺物のみが出土した。北側のSK507は東西1.10mの方形で、深さ0.25mである。ほかは不定形の浅い土壇であった。

第5a層上面段階では、一定の屋敷割の存在を示すような遺構の方向性は窺えない。

c. 第4層上面(図6左・図7・8)

妙知焼(1724年)を前後する、18世紀前半と推定される遺構面である。

SK401は東西に長い長方形のごみ穴である。長さ1.2m以上、幅0.80m、深さ0.85mである(図7)。SK401からは信楽焼のお歯黒壺11、中国徳化窯の白磁杯12、肥前磁器染付蓋13、同碗14・15が出土した(図8)。12は型押し製の八仙人文八角酒杯である。13は焼けており、妙知焼で被熱した可能性がある。SK401出土遺物は17世紀末～18世紀前半のものである。



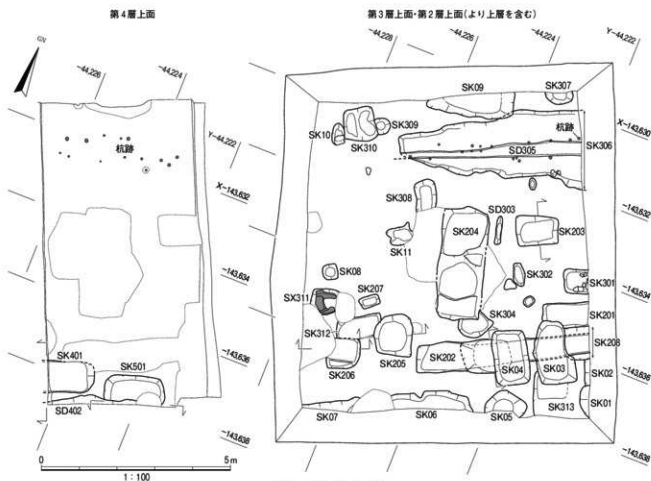


図6 遺構平面図(2)

SK501は第5a層上面で調査したが、本来、第4層上面の遺構であろう。長方形と推測されるごみ穴で、長さ1.60m、幅0.7m以上、深さ0.7~0.8mである(図7)。SK501からは肥前磁器碗7~10が出土した。7は型押し文様の白磁、8~10は染付で、10は印判手である。SK501出土遺物はSK401と同時期かやや新しく、18世紀前半のものである。

SD402は同じ場所で遺構が重複し、第3層上面の遺構かもしれない。現在の町割の方向と同じ東西の溝の北縁で、長さ2.3m以上である。また、調査区の北から1.9~2.5mの間には、第3層以上で明瞭になる敷地境の東西溝の場所に、杭跡が並んで検出された。個々の杭の遺構面ははっきりしないが、多くは第3層上面以上のものであろう。

大坂の城下町では、SK401のような長方形・小判形のごみ穴は、細長い敷地に長軸を合わせ、敷地内の建物等の遺構が密になるにしたがって増える。第4層段階では、天満橋筋に面した東西に屋敷割りした町屋ができていた可能性が考えられる。天満の城下町の成長に伴い、北の国分寺村・長柄橋に向って道沿いに町が伸びていった時期の手がかりになる。

#### d. 第3層上面(図6右・図7・8)

第3層上面で、より上面の遺構も検出した。第3層上面と推定される遺構を300番台、地層断面から第2層上面の確実な遺構、それと埋土が同じものなどを200番台、遺物・切合い等からより新しいと推測される遺構に二桁の番号を付した。以下、第3~2層に伴う主な遺構のみを記述する。

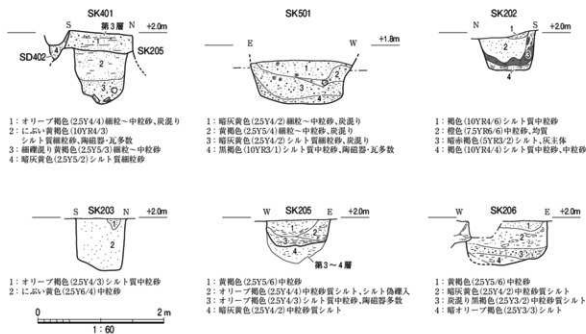


図7 遺構断面図

第3層上面は18世紀後葉頃と推定される遺構面である。これ以降、調査区北辺から2.3m前後に繰返し東西溝が掘られ、ここが敷地境であったと推定される。また調査区南辺辺りも、地層の不連続と東西方向の遺構の重複度から、敷地境に近い場所であった可能性も考えられる。

SD305は敷地境になると推定される東西の溝で、奥(東)に流れる。南の側板と杭が残り、長さ4.8m以上、幅0.15~0.40m、深さ0.15mであった。周囲のSK306は敷地境の溝に関係すると思われる浅い土壌だが、輪郭はまちがっているかもしれない。SK306からは肥前磁器碗18が出土した。ほかにSK306出土のTK209型式の須恵器蓋杯16と古代の平瓦17を図示した(図8)。

調査区西南のSX311は基底部分のみが残る竈で、焚口は東である。残存壁体の外法で径0.65mであった。

東壁にかかるSK301は東西0.65m以上、南北0.75m、深さ0.35mである。埋土に0.1~0.15mの石を多く含んでいた。

第2層上面の遺構で特徴的なのは、均質なにがい黄色(2.5Y6/3)中粒砂で埋められた一群で、SK201・202・203・208がそれに当たる。

SK202は長さ4.5m以上、幅0.60~0.80mで、深さは検出時で0.60mである。埋土の中粒砂の下に、灰を主とする地層があった(図7)。北に接するSK201も東西に長い土壌の可能性があり、東壁を確認できる第2層上面からの深さは1.35mである(図4東壁地層断面図)。SK201の底には、最大層厚10cmの粘土~シルトの水成層があった。SK203は長さ1.10m、幅0.80mで、深さは検出時で0.80mであった(図7)。本来の遺構面を勘案すると、幅に比べ深いことも特徴である。

これらの遺構の用途はよくわからない。時期は18世紀後葉以降である。同じ敷地内で鍋と思われる鋳造26(図8)が出土しており(SK204)、関連するかもしれない。

最後に調査区西南のごみ穴SK205・206(図7)の出土遺物を報告する。

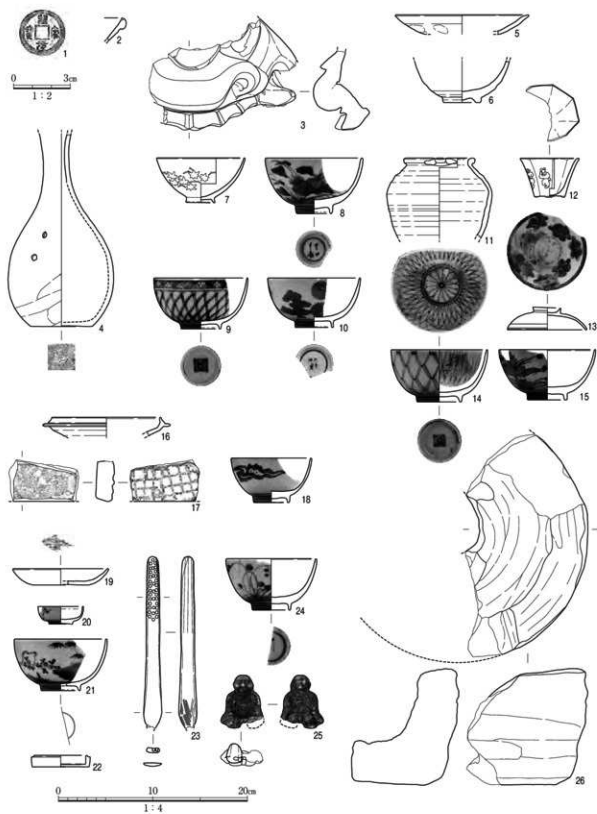


图8 出土实物实测图

第5层(1·4)、第6b层(2)、第6a层(3)、SK508(5·6)、SK501(7~10)、SK401(11~15)、  
SK306(16~18)、SK205(19~23)、SK206(24·25)、SK204(26)

図8の19～23はSK205の出土である。19は糸切り底の土師器皿で、見込に型押し文様がある。20・21は肥前磁器で、20が赤絵の合子、21が染付碗である。22は石製の合子、23はブラシ形の骨製櫛である。SK205出土遺物は18世紀中葉頃のものが多く、第3層上面の遺構とすべきかもしれない。

24・25はSK206の出土である。24は肥前磁器染付碗、25は褐色釉の軟質施軸陶器の人形である。背に「丸に二つ引き」紋がある。

### 3) まとめ

今回の調査の成果をまとめると以下のようになる。

- ・北側のDC15-1次調査で発見された大川岸の堤防跡と関連すると推定される、盛土遺構SX701を検出した。SX701の時期は、1586(天正14)年までは遡らなくとも、17世紀前半の可能性がある。
- ・調査区は17世紀を通じて島となっていたが、18世紀前半には、天満橋筋に面した町屋ができたと思定され、現在に繋がる東西方向の屋敷割が成立したと考えられる。

### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「信開ホテルによる建設工事に伴う発掘調査(DC96-1)」:『平成8年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.13-22
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004、「同心町遺跡B地点発掘調査(DC02-3)報告書」:『平成14年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-11
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「同心町遺跡D地点発掘調査(DC07-1)報告書」:『平成19年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-12
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「桜宮地区埋蔵文化財調査(天満1丁目所在遺跡発掘調査 TW08-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.21-29
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「北区天満橋1丁目所在遺跡発掘調査(TW12-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』、pp.45-54
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017a、「北区天満橋二丁目34-3における建設工事に伴う同心町遺跡発掘調査(DC15-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』、pp.1-8
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017b、「北区天満橋一丁目12-2における建設工事に伴う天満橋1丁目遺跡C地点発掘調査(TW15-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』、pp.27-60
- 大阪文化財研究所2018、「北区天満橋三丁目45-2他における建設工事に伴う同心町遺跡発掘調査(DC17-1)報告書」
- 大阪歴史博物館2013、「天下の城下町 大坂と江戸」、pp.115-120
- 南秀雄2016、「大川の堤の発掘」:大阪文化財研究所編『革火』183号、pp.4-5

北区堂島浜一丁目19-9 他における建設工事に伴う  
堂島蔵屋敷跡C地点発掘調査(DJ17-1)報告書

調査個所 大阪市北区堂島浜1丁目19-9他  
調査面積 約20㎡  
調査期間 平成30年2月21日～2月26日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、平田洋司

## 1) 調査に至る経緯と経過

淀川の支流である大川は上町台地北端で西へ流れを変えた後、中之島を挟んで南の土佐堀川と北の堂島川とに分かれる。さらに堂島川からは北に曾根崎川(観川)が分流し、曾根崎川と堂島川に挟まれた中洲が堂島と呼ばれている。堂島には1655(明暦元)年の大坂三郷町絵図によれば堂島船大町ほか4町が見られる。これらの三河川は河口部の九条島の東で合流していたが、九条島が水流を妨げるものとして、河村瑞賢により1684(貞享元)年以降、九条島の開削や堂島川・曾根崎川の浚渫・拡幅などの治水工事が行われた。また、これらの浚渫土を用いて堂島が整備されることとなり、1688(元禄元)年には中之島との間に大江・渡辺・田糞・玉江の四橋が架設されるとともに、堂島における本格的な開発が始まり、いわゆる「堂島新地」が誕生する。新地10町が開かれ、それまでの5町に加えた15町が成立することとなった。

その後、堂島は遊興の町として名を知られるようになる一方、1697(元禄10)年頃には米市が北浜より移設され、正徳・享保年間には公認の米会所が開設されるなど、米市場が形成される。1657(明暦3)年には松平周防守の屋敷のみであった諸般の大坂蔵屋敷が、1703(元禄16)年頃には肥前国大村藩・備後国福山藩など7藩の蔵屋敷が確認され、堂島は中之島とともに全国の米相場の決定と流通の拠点として繁栄する。明治維新により蔵屋敷の機能を終えると、堂島は新たな産業の拠点として鉄道駅や五代友厚により製藍所などが近代化に向けて設置されるようになる。1909(明治42)年、いわゆる「北の大火」により多くの屋敷が被災し、大量の瓦礫処理のため曾根崎川は埋め立てられ、中洲としての堂島は失われ、現在の景観となる。

堂島における調査例は多くないが、蔵屋敷が集中する西側の福島1丁目所在遺跡において数件の調



図1 調査地位置図

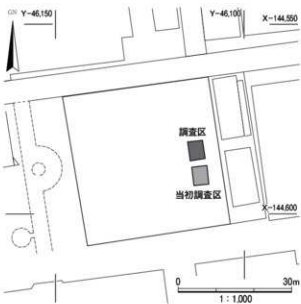


図2 調査区位置図

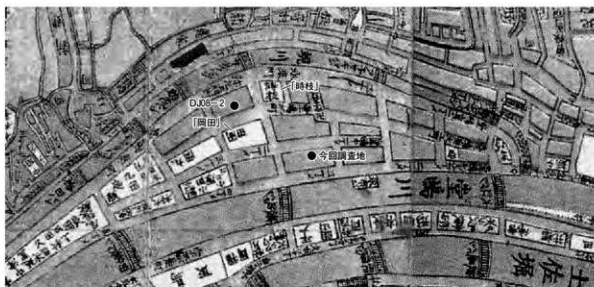


図3 「改正増補国史大阪全国図」部分[1863(文久3)年、一部加筆]

査が行われている。FK97-2・98-1次調査では広島藩上田家や長岡藩とみられる蔵屋敷や、蔵屋敷成立期あるいは直前の時期と推定される18世紀初頭に採業していた陶器窯が確認された[大阪市文化財協会1999]。FK04-1・2次調査では藩名の特定は困難であるが、礎石建物や構、上下水施設など蔵屋敷に関係すると想定される遺構が検出されている[大阪市文化財協会2006]。今回調査地に近い例としては、北西約250mに位置する堂島蔵屋敷跡B地点のDJ08-2次調査がある。18世紀前半の遺構として耕作溝・石垣・段・小規模な礎石建物・竈などが、18世紀中頃の遺構として前段階より規模の大きい礎石建物・石垣・水琴窟・土塀などが、18世紀後半の遺構として多量の陶磁器・動物遺体を含む土塀群が、18世紀後葉～19世紀前葉の遺構として礎石建物・瓦敷・土塀などが検出されている。遺構・遺物ともに時期が新しくなるにつれて増加しており、耕作地から蔵屋敷として整備されていく過程を示すと考えられている[大阪市文化財協会2010]。なお、今回の調査地には残されている絵図によれば蔵屋敷の記録はなく、近いものとしては北西の街区、DJ08-2次調査の南に当る備中岡田藩、北へ二つ目の街区、DJ08-2次調査の東に当る豊前時枝藩がある(図3)。

今回の調査地では、大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、地表下0.9m以下で近世以前の遺構面および遺物包含層が確認されたことから、「堂島蔵屋敷跡C地点」として命名し、調査を実施することとなった。調査は平成30年2月21日より開始した。教育委員会の指示により地層の残存状況がよいと判断された敷地東南部において東西4m、南北5mの調査区を設定した。重機による掘削を進めると地表下約1m付近にて改良土により埋め戻した固く締まる整地土が存在し、一部を掘削したところ地表下1.9mまで攪乱を受けていることが判明した。このため、教育委員会・事業者との協議の結果、北側に調査区を変更することとなった(図2)。調査区の規模は当初と同じ東西4m、南北5mである。重機による掘削は第2層までとし、以下は人力による掘削を行った。また、第6層以下については掘削深度が深くなることから、四周に犬走りを設けて、その内部において掘削を行った。途中適宜に遺構検出・掘削作業、図面作成・写真撮影などの記録作業を行いながら調査を進め、平成30年2月26日、現地における作業を終了した。



基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はTP値(東京湾平均海水面値)で、TP±〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図4・5、図版1)

調査地東端部の標高は北側でTP+1.2m、南側でTP+1.6mと南側ほど高い。調査地西側では工事作業が並行して行われてい

たため、計測できなかったが、北側道路においては東西方向では西側に向けて若干低くなる。調査では部分的な掘削を含め、現地表下約3.3mまでの地層を確認し、第1～7層の7層に区分した。

第1層：現代の整地層および攪乱で、層厚は120～130cmである。

第2層：上部が炭を多く含む黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルト、下部がシルト偽礫を主体とする黄

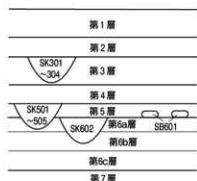


図4 地層と遺構の関係図

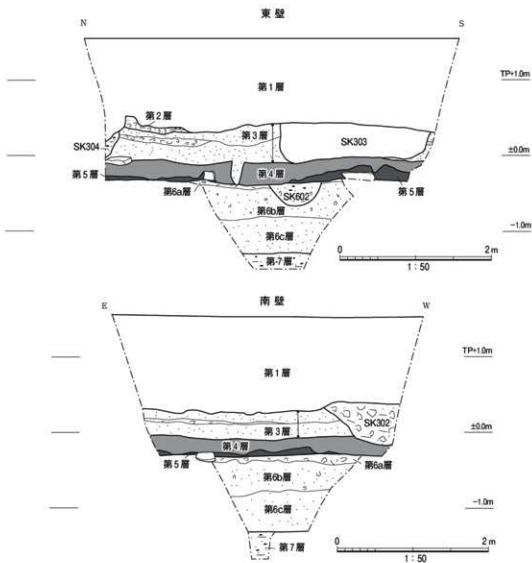


図5 地層断面図

褐色(10YR5/6)シルト質細粒砂からなる整地層である。調査区東北端で層厚20cm未満で部分的に遺存するのみである。遺物は確認できなかったが、下層との関係から18世紀後半以降のものであろう。

第3層：にぶい黄褐色(10YR4/4)細粒砂を主体とする整地層で、途中にシルト偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y6/4)シルト質細粒砂の薄層を介在する。層厚は40～50cmである。土師器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦片など18世紀中頃までの遺物が出土した。本層上面では土壌を検出した。

第4層：明赤褐色(5YR5/6)を呈する被熱した瓦主体の整地層で焼土・炭を多く含む。層厚は20～30cmである。第6a層上面に存在した建物が火災を受けて生じた廃棄物を用いた整地層である。下部が締まりが悪いのに対し、最上部は締まりがよく、平坦で偽礫も細粒化していることから、第3層の整地が行われるまでに時間差があったと推定できる。非常に多くの瓦片を含むことから、調査地のみならず周辺の被災建物の廃棄物も用いた可能性があるが、狭い調査範囲のため断定することはできない。遺物の多くは瓦片であるが、丹波焼・肥前陶器・肥前磁器など18世紀前半を主とし、一部、18世紀中頃に降る可能性のある遺物を含む。

第5層：黒色(2.5Y2/1)炭層でいわゆる焼土層である。層厚は15cm未満である。肥前磁器片が出土した。上下層の年代観から18世紀前半に位置づけられる。本層上面では土壌を検出した。

第6層：本層以下は部分的な掘削で確認した。第6層は整地層で第6a～6c層の3層に大別した。層厚は90～100cmである。第6a層はシルト偽礫を多く含む暗褐色(2.5Y2/1)細粒砂質シルトからなり、層厚は5～10cmである。第6層の整地の最終段階として地形を平坦に均すために施されたと考えられる。上面は火災により被熱し、焦げた部分も認められる。第6a層上面では礎石建物・土壌を検出した。第6b層はシルト偽礫・粗粒砂を少量含むにぶい黄褐色(10YR6/4)細粒砂からなり、層厚は40cmである。第6c層は黄褐色(10YR5/6)細粒砂からなり、層厚は40～50cmである。出土遺物は少ないが、第6a層から肥前磁器・瓦片が出土しており、17世紀末葉に位置づけられる。

第7層：オリーブ褐色(10YR5/6)炭混り細粒砂質シルトからなり、層厚は30cm以上である。一部で確認したのみであるが、作土層であろう。遺物は肥前陶器片とみられる細片が出土したのみであり、時期は不明である。

## ii) 遺構と遺物(図6～8、図版1・2)

遺構検出は第3層上面以下、各層で行った。

第7層は部分的に確認したのみであるが、作土層であることから調査地が耕作地として利用されたことがわかる。詳細な時期は不明であるが、第6層の年代観から17世紀末葉以前といえ、堂島新地形成以前の土地利用を示すものであろう。

続く第6層の厚い整地は堂島新地形成に関係するものであろう。砂が主体であり、河川の浸漬・拡幅により生じた砂を用いている。第6a層からは肥前磁器・瓦片が出土した。1は肥前磁器染付小杯で蓋物であろう。口縁部から体部は八角形を呈する。17世紀末葉に位置づけられる。

第6a層上面では礎石建物・土壌が確認された。火災により焼失している。なお、遺構としての検出は焼土層である第5層上面であっても、礎石の抜取り痕跡など本層の遺構と関連が深いものについては本層上面でも遺構として図化している。

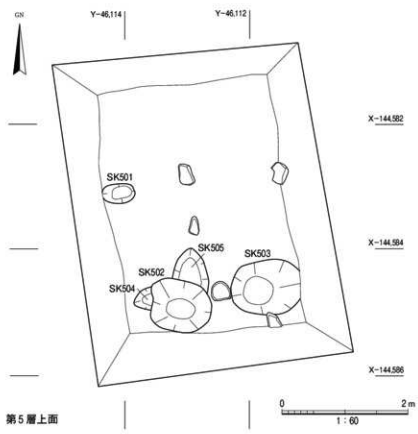
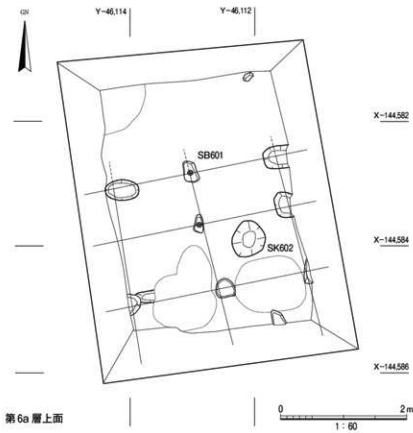


图6 第6a層上面·第5層上面遺構平面图

**SB601**：調査地南半で検出した礎石建物である。やや柱の通りは悪いが、一連の建物と考えた。礎石のいくつかは被災後に抜き取られている。炭層の分布からは、礎石は確認できなかった調査地北側にも建物が続く可能性がある。礎石の間隔は南北方向で0.8～1.0m、東西方向で1.2～1.4mと東西方向の方がやや広い。また、礎石には柱が焼けた痕跡を残すものがある。これによれば柱は直径が10cmの円柱であり、この2つの南北方向の柱間隔は0.8mである(図版1下)。

**SK602**：調査区東南部で検出した直径0.6～0.7m、深さ0.4mの土壌である。埋土はシルト偽礫を少量含む細粒砂で人為的に埋められ、火災の時点ではほぼ埋没していた。遺物は出土しなかった。

第6a層上面の遺構は火災に見舞われたことにより、焼土層である第5層の炭層が堆積する。床材の一部とみられる板状の炭化材も認められた。第5層からは瓦質土器・備前焼・肥前磁器・瓦など18世紀前半の遺物が出土した。2は肥前磁器染付碗である。

第6a層および第5層の出土遺物から、第6a層上面の遺構の年代は17世紀末葉～18世紀前半に位置づけられる。18世紀代に堂島が被災する著名な火災としては、1716(享保元)年の曾根崎大火、1724(享保9)年の妙智焼、1768(明和5)年の堂島火事、1784(天明4)年の曾根崎焼などがある。西の福島1丁目所在遺跡で広く確認された焼土層は、18世紀初頭の遺物を含むことから1716(享保元)年の曾根崎大火と推定されている。今回の調査成果では、このうち1716(享保元)年の曾根崎大火はやや古く、1784(天明4)年の曾根崎焼はやや新しいため、1724(享保9)年の妙智焼あるいは1768(明和5)年の堂島火事が遺物の年代からは候補となるが、ごく一部の調査で、出土遺物も少ないことから断定できない。また、北西のDJ08-2次調査では、火災痕跡のひとつが18世紀中葉を前後すると推定されており、同じ火災であるとすれば、文献に残された火災とは異なる可能性もある。

火災後の第5層上面では、埋没しなかった**SB601**の礎石のほか、土壌が検出された。

**SK501**：**SB601**の柱通りに当ることから礎石の抜き取り跡と想定できる。

**SK502**：直径1.0mの平面形が円形の土壌で、深さは0.3mである。埋土は上部が第4層、下部がシルト偽礫・炭を含む細粒砂からなる人為的な埋戻し土である。遺物は出土しなかった。

**SK503**：東西1.2m、南北0.8mの平面形が円形の土壌で、深さは0.4mである。埋土は**SK502**と同じである。遺物は出土しなかった。**SK502**・**503**は**SK501**と同様、第6a層上面に存在した施設を取り除いた痕跡の可能性もある。

**SK504**・**505**：平面形は不整形で、深さは0.1m未満と浅い。埋土は第4層であり、**SK502**と区別できなかった。**SK502**の一部かもしれない。

焼土層である第5層堆積後には、第4層の整地が行われる。第4層は被熱した瓦片が主体であり、火災によって生じた廃棄物の処理として行われたのであろう。厚く堆積することから、今回の調査地だけでなく、周辺からも運び込まれた可能性がある。第4層からの出土遺物は被熱した瓦のほか丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・堺播鉢など18世紀前半を主体とするが、一部、18世紀中頃に降る可能性がある遺物を含む。

第4層上面では遺構は検出されなかった。第4層は層序でも記したとおり、最上部は締まりがよく、平坦で偽礫も細粒化していることから、第3層の整地が行われるまである程度の期間があり、生活面

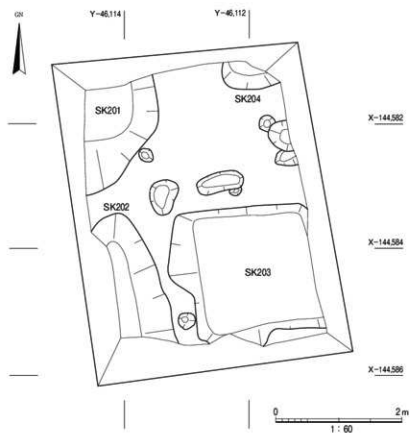


図7 第3層上面遺構平面図

であったと推定できる。

第4層を覆う第3層は厚く、河川に係わる砂主体の整地層であることから、今回調査地に限らず広範囲に整地された蓋然性が高く、火災後の本格的な復興を目指したものとしよう。土師器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦片など18世紀中頃までの遺物が出土した。

第3層上面では土壌を検出した。ただし、第3層上には一部第2層が遺存する以外は現代の整地層および攪乱である第1層に覆われていることから本来の遺構面は不明である。以下、主要なものを記す。

SK301：調査区東北端で検出した土壌である。東西1.2m以上、南北1.7m以上、深さは0.4m以上である。埋土はシルト偽礫・炭を多く含む細粒砂質シルトである。備前焼・丹波焼・肥前陶器片などが出土した。18世紀後葉に位置づけられる。

SK302：調査区西南端で検出した土壌である。東西1.0m以上、南北2.0m以上で、深さは0.3m以上である。埋土はシルト偽礫を多く含む細粒砂質シルトで、長径30～40cm程度の石を多く含む。石垣など石を用いた施設を壊して廃棄したと考えられる。土師器・肥前磁器・瓦など18世紀後葉の多くの遺物が出土した。3～7は肥前磁器である。3・4は蓋で、3は青磁染付である。5・6は碗で、6は青磁染付である。7は青磁染付輪花皿で、内面には山水文を描く。高台内には「大明成化年製」の字款と3箇所目の目跡がある。

SK303：調査区東南部で検出した土壌である。東西2.0～2.2m、南北2.0mの平面形が方形で、深さ

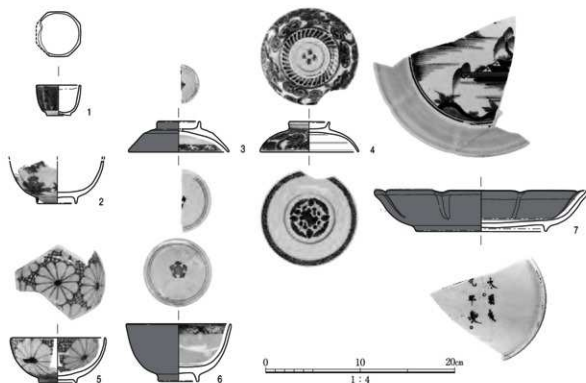


図8 出土遺物実測図

第6a層(1)、第5層(2)、SK302(3~7)

は0.4mである。埋土の多くは被熱した瓦片で、火災の片付けを行ったいわゆる瓦溜である。瓦のほかには丹波焼・肥前陶器・肥前磁器などが出土した。18世紀後葉に位置づけられる。

SK304：調査区東北端で検出した土壌である。東西0.8m以上、南北0.5m以上で、深さは0.3m以上である。埋土は炭・焼土・漆喰を含むシルト質細粒砂で、上部は攪乱によって失われている。遺物は出土しなかった。

第3層上面では、ほかに浅く不整形な土壌が検出されたが、遺物は出土しなかった。

### 3)まとめ

今回の調査は狭い面積が対象であったが、調査地における土地利用の変遷の一端を追うことができた。それまで耕作地として利用されていた土地に17世紀末葉に厚い整地が施される。堂島新地形成に係わるものであろう。整地後には礎石建物が築かれる。調査区が狭いため土地利用や屋敷地の性格は明らかにすることができなかった。18世紀前葉に大規模な火災に見舞われると、瓦などの廃棄物を投棄した整地が行われる。整地後、ある程度の期間生活面であったと考えられるが、遺構が検出されず、土地利用の実態は不明である。18世紀中葉には再び川砂を用いた大規模な整地が行われた。この整地は広範囲に及ぶと考えられ、火災後の復興として位置づけられる。整地後は土壌が見られるなど再び屋敷地として利用されたことが判明した。

堂島における遺跡範囲は蔵屋敷を主とし、範囲外についてはこれまで大規模開発に伴う遺跡の発見として調査を実施したいわゆる点に過ぎないが、今回の調査でも明らかのように絵図に蔵屋敷として表現されないとくわでも、広範囲に開発され建物が建ち並んでいた景観が復元できる。今回の

調査は小面積であり、遺物量も少なく、遺構の広がりや建物の性格および正確な時期など不明な部分が多く残されている。特に今回の第5層に当る焼土層、第4層に当る被災後の整地層は認識が容易な特徴的な地層であり、かつ広範囲に分布すると考えられる。この年代を特定していくことは西の福島1丁目所在遺跡の火災の年代とあわせ、火災の範囲を推定するとともに堂島における開発の画期を探るうえで極めて重要な作業である。今後の周辺の調査に期待したい。

引用・参考文献)

- 大阪市文化財協会1999、『堂島蔵屋敷跡』
- 大阪市文化財協会2006、『堂島蔵屋敷跡』Ⅱ
- 大阪市文化財協会2010、『堂島蔵屋敷跡』Ⅲ





北区東天満二丁目3における建設工事に伴う  
東天満遺跡B地点発掘調査(HX17-1)報告書

調査個所 大阪市北区東天満2丁目3  
調査面積 約700㎡  
調査期間 平成29年10月18日～12月18日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、大庭重信

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は天満砂州上の南東部、天神橋遺跡の北側および天満本願寺跡の北西側に位置し、今回初めて埋蔵文化財包蔵地として登録された東天満遺跡B地点である(図1)。近年の発掘調査で得られた基盤砂礫層のデータを基にした天満砂州の古地形復元では、砂州上に南北方向の3列のロープが並列していることが示されており[趙哲済・中条武司2017]、今回の調査地はこのうちのロープ東・中央間低地でも中央ロープ寄りに位置している。

周辺の調査では弥生時代以降、近世天満城下町までの遺構が検出されており、古い順から概観すると、まず北側230mのTW15-1次調査で弥生時代中期前・中葉の土器を含む大溝や土壌が検出され、北側の同心町遺跡を中心に展開する弥生時代前半の集落の南への広がりが確認されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。また、調査地南西側200mのHX99-1次調査、さらに南のTJ01-1次調査では、奈良時代後半を中心とした遺構・遺物が検出されており、文献にみられる東大寺新羅江庄との関わりが推定されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001・2003]。こうした古代以前の活動は地形の起伏の制約を受け、各ロープを中心に展開したことが予想される。その後、当地域における大きな画期は1585(天正13)年の豊臣秀吉による本願寺の天満移転とそれに伴う城下町の開発である。東側の大川沿いのTW08-1・TW12-1次調査では秀吉普請の堤跡が調査され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]、また調査地南東側120mのHX11-1次調査では、中世の耕作地から豊臣期の城下町開発を経て18世紀中葉までの遺構の変遷が層位的に明らかにされ、豊臣期の町割りが徳川期にも踏襲されていたことが推定されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

大阪市教育委員会による試掘調査により、地表下約2.3m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層の存在が示され、調査を実施することになった。比較的遺跡の残存状況が良いとされた敷地東半の東西35m、南北20mの範囲を対象に(図2)、平成29年10月18日より重機掘削を開始した。その結果、南西隅の一部を除いて調査区の大半は旧建物の解体に伴う攪乱が基盤層の第7層まで及んでおり、試掘調査で遺物包含層とされた地表下2.3~2.5mに分布する地層も基底に重機の爪痕が残る旧建物解体に伴う古い地層の再堆積であることが判明した。一方、調査区南西隅では地表下約1.0m以下で近世以前の地層が厚さ約1.4m遺存しており、この部分については層位的に調査を行い、その他の攪乱の及んでいる範囲は第7層上面で遺構の検出作業を行った。平面での記録作業を終えた12月14日には、調査区の東および南壁沿いにトレンチを設け、基盤層の観察・記録を行い、同18日には現地でのすべての作業を完了し、撤収した。

本報告で用いた基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±0mと記した。なお、本報告のうち、中世以降の遺物の記載は小田本富慈美学芸員が担当した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地における標高はTP+3.5m前後とほぼ平坦で、現代の盛土・攪乱埋土である第0層以下を第1~7層に区分した。なお、第1~4層は地層が遺存していた調査区南西隅のみ確認した。

第1層：ぶい黄褐色(10YR5/4)シルト偽礫からなる盛土層で、SK23・24・26を埋めるとともに第7層上面で検出したいくつかの土壌埋土中にも認められる特徴的な地層である。部分的に分布し、層厚は最大で10cmある。本層上面でSE21・SE25のほか、小型の小穴を複数検出した。SK24およびSE21からは19世紀前半の遺物が出土しており、第1層による盛土もこの頃と考えられる。

第2層：焼土粒を含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒~粗粒砂からなる盛土層で、上下の地層と比べて暗色化しており、上部には土壌生成が見られる。層厚は30cmある。本層上面で第1層で埋まるSK23・24・26のほか、これとは異なる埋土のSK39・42などを検出した。層序と遺構出土遺物の年代から、18世紀後半以降~19世紀前半までの間と考えられる。

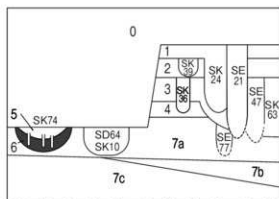


図3 地層と遺構の関係図

第3層：黄褐色(2.5Y5/3)炭混りシルト質細粒砂からなる盛土層で、層厚は40cmある。本層上面でSK33・36やSE47など、18世紀前半の遺物を含む遺構を、本層下面でSK49・63など17世紀後半の遺物を含む遺構を検出した。

第4層：ぶい黄色(2.5Y6/6)シルト混り粗粒砂~礫からなる作土層で、層厚は10~20cmある。地層が遺存する範囲が狭く平面では確認できなかったが、西壁断面ではレベル差のある溝状の凹

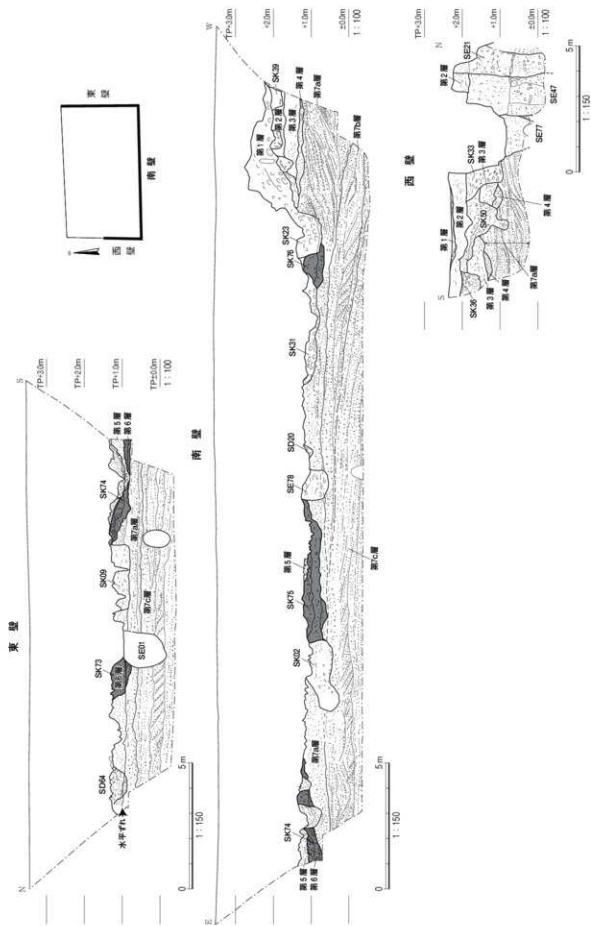


圖4 調查區東·南·西壁地層剖面圖

みの埋土として確認し、畝の畝間部分の可能性もある。本層からは8世紀後半～9世紀初め頃の古代の土師器杯17が出土している(図7)。

第5層：明黄褐色(10YR6/8)細粒砂を主体とし、中粒砂をわずかに含む分級の悪い地層で、第6層を埋土とする大型土壌埋土の上半に見られる。層厚は最大で30cmある。本層下部から縦方向にのびる直径1cm前後の生痕が顕著に見られ、本層は風成層の可能性もある。また、生痕はカニなど小動物の巣穴と考えられ、第5層が堆積した初期に当地が潮の影響を受ける環境にあったことを示している。上下の地層の年代から、本層の時期は7・8世紀の間と考えられる。

第6層：第7層上面で確認した土壌の埋土内に遺存しており、黒色(2.5Y2/1)を主体とした一部シルトを含む粗粒砂～礫からなる。上位層からの生痕によって壊乱されている。本層内には弥生時代中期前半の土器が多く含まれ、ごくわずかであるが、7世紀代の須恵器も出土した。

第7層：天満砂州を形成する河成の砂礫層で、調査区東・南壁および西壁の南半に深掘りトレンチを設けて層厚最大190cm、TP-0.5mまで確認した。第7a～7c層に区分した。

第7a層は、にぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂～細礫からなり、下位層上面の低所を埋めるとともに、調査区西端で高まりを形成し、西および南へ傾斜するフォアセットのラミナが発達する高まりを形成する。東側へいくにつれ層厚を減じ、分級の悪い粗粒砂～礫からなる。上端の標高はTP+1.3mある。

第7b層も調査区の西半に分布し、下位層上面の低所に西へ傾斜するフォアセットラミナが発達した灰白色(5Y7/1)粗粒砂～礫が覆う。基底には分級の悪い泥混り極細粒砂～礫が薄く堆積する。層厚は最大で60cmある。

第7c層は灰白色(5Y7/1)粗粒砂～礫を主体とし、調査区東部で厚く、層厚は最大で100cmまで確認した。下部は南へやや傾く平行ラミナが発達し、一部逆級化する。中・上部はトラフ型ラミナが発達し、古流向は北から南で、西側へ累重している。

以上の堆積相から、第7層の古流向は北から南を基調とし、第7c層は北から南へ流れる流路が東から西へ移動しながら土砂を堆積させた流路堆積物、第7a層は調査区外の西側を流れていた流路によって形成されたポイントバー堆積物、その間の第7b層は東側からの出水によって低い側流入した破堤堆積物とみなすことができる。第7層が堆積した当時の天満砂州上には複数の網状流路が流れており、これらが最終的に埋まることでロープ東・中央間の低地が形成されたと考えられる(註1)。

なお、調査区東壁断面の第7a層中で地層の水平ずれによるすべり面を確認した。弥生時代中期のSK73および中世後半のSD64を切っており、徳川期の17世紀中葉～末のSK09に切られており、その間の地震によるものの可能性がある。東壁の南半や調査区内には及んでいなかった。

## ii) 遺構と遺物

今回の調査では、調査区南西隅を除いたほぼ全域の地層が大きく削平されており、遺構検出作業を主に第7層上面で行ったため、層位関係が不明である。以下では、時期毎に検出した遺構・遺物を報告する。

### a. 弥生時代～古代

第7層上面で確認された第6層を埋土とする遺構はSK65・67～70・72～76の10基の土壌がある(図

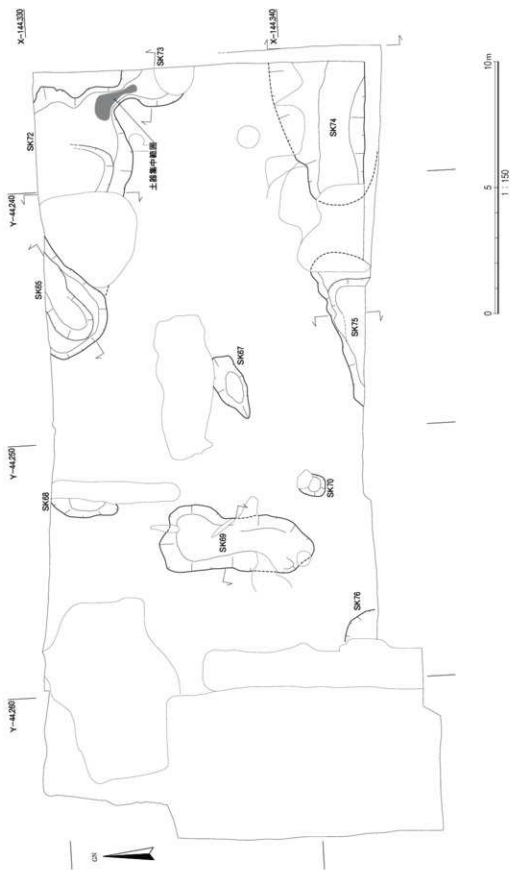


圖 5 張生時代—古代遺構平面圖

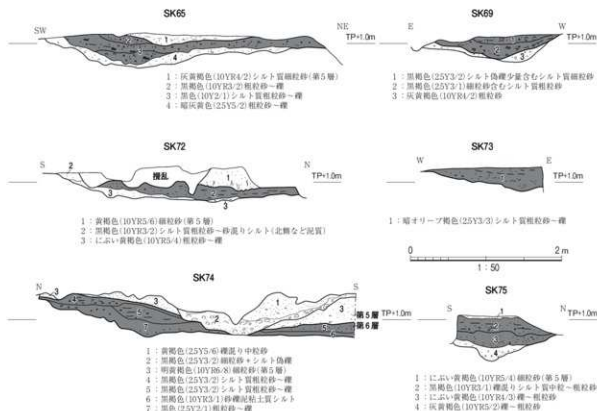


図6 弥生時代～古代遺構断面図

5)。不整形のものが多く、本来の地表面からは少なくとも20cm以上は削平されているため、遺構の性格が明確なものはないが、SK67・70以外からは弥生時代中期の土器がまんべんなく出土しており、弥生時代の遺構と判断される。検出面からの深さは小型のSK67・70・73が20～30cm、それ以外が40～50cmある(図6)。第7層の砂礫を掘り込んでいるため、加工面は不明瞭で、また埋土は生痕によりひどく擾乱を受けていた。後述するように、ごくわずかではあるが古代の土器も含まれていることから、弥生時代中期に形成されたのち長期間窪みとして残っていたと考えられる。また、SK65・72・74・75のなど規模の大きい土壌の上部には第5層が堆積していた。

各遺構から出土した遺物のうち、弥生土器1～13、土師器14、須恵器15を図化した(図7)。

1～5はSK72・73間を連結するような溝状の窪み内からまとまって出土した。3は口縁部が欠失する以外はほぼ完存する広口長頸壺で、丸味をもつ体部から頸部がすぼまり、外上方に開く。体部上半から頸部にかけて櫛描直線文を11帯巡らす。1も同様の器形と考えられ、体部上半に櫛描直線文を5帯巡らす。2は体部上半に櫛描直線文を2帯以上、最下段に波状文を1帯巡らす壺である。4は内外面ナデ調整の甕で、口縁部内面にハケを加えて口縁部を緩やかに外反させている。5は胎土中に結晶片岩粒を多く含む紀伊産の甕底部である。1～3は第Ⅲ様式に位置づけられ、4は第Ⅱ様式の特徴をもつ。

6～10はSK75から出土した。6は屈曲した頸部から口縁部が短く立ち上がる広口短頸壺、7は内傾する突帯の端面にキザミメを付けた破片で、水平口縁の高杯に復元した。8は厚手の甕の底部、9は緩やかに外反させた口縁部内面にヨコハケを施し、端部を丸くおさめる山城系の甕、10は口縁部を



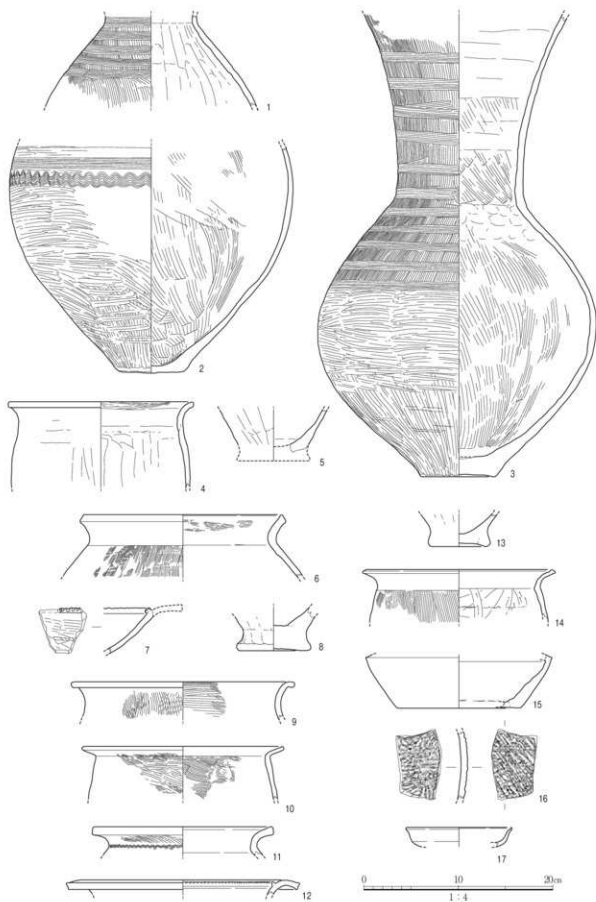


图7 弥生时代—古代遺物実測図(1)

SK72・73間(1-5)、SK75(6-10)、SK69(11・12)、SK74(13・14)、SK65(15)、SK52(16)、第4層(17)

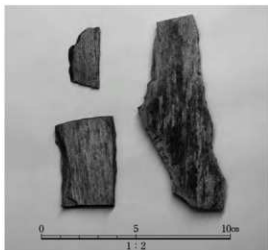


写真1 紅簾石石英片岩の石材  
(左2点はSK75、右はSK74より出土)

13・14はSK74から出土した。13は胎土中に結晶片岩粒を多く含む紀伊産の甕底部である。14は口縁端部を内側に肥厚させ、体部外面にタテハケ、内面にヘラケズリを施す土師器の甕である。14は7世紀に下るものである。

15はSK65から出土した、平瓶とみられる須恵器の底部片である。14とほぼ同時期のものと考えられる。

以上、第6層を埋土とする遺構から出土した弥生土器は、第Ⅲ様式を主体とし、これに第Ⅱ様式の様相をもつもので構成されている。このうち、大和川・大阪湾を介した交流関係を示す紀伊産の甕や山城形甕が含まれる点は、北東側約5kmの淀川下流域に立地する同時期の森小路遺跡と共通する[大阪市文化財協会2001]。また、SK74・75からは紅簾石石英片岩の石材が出土しており(写真1)、この点も森小路遺跡と同様、淀川下流域に展開する弥生時代中期前半の遺跡群との密接な関係がうかがえる。

また、こうした弥生時代中期の土器とともに、遺構内での出土層準は不明であるが7世紀に下る14・15が出土する点は、第6層を埋土とする土壌が7世紀までオープンな状態で残っていたことを示す。さらに、徳川期の遺構であるが、SK52からはこれらとほぼ同時期とみられる須恵器大甕の体部片16が出土している。外面に幅太の左上りの擬格子タタキののち横沈線が施され、内面には車輪文当て具痕が見られる。

#### b. 中世後半～豊臣期

第7層上面で検出した遺構のうち、埋土の特徴や出土遺物から徳川期のものと区別され、中世後半～豊臣期に遡ると考えられるものを報告する。中世後半の遺構はSD64、豊臣期の遺構はSD20、SE77・22、SP53～58からなる柱列がある(図8～10)。

SD64は、調査区北東端で検出したほぼ正方位の東西溝で、検出面での幅は1.5m、深さは0.4mあり、長さは9.5mまで確認した。埋土は砂質シルトの偽礫を含むにぶい黄褐色中粒～粗粒砂である。出土遺物は土師器羽釜・瓦・金属のほか、古代の須恵器が出土した。18は土師器羽釜で、口縁部には段を有し、体部外面はヘラケズリを施す。器壁は厚く、口径は縮小した段階のもので、16世紀後半に属するとみられる。

SE77は、調査区西端で検出した直径0.6mの円形の井戸で、徳川期のSK63の基底で確認した。中国産磁器・備前焼・瀬戸美濃焼播鉢のほか、弥生土器が出土した。19は中国産白磁皿で、口縁部が端

くの字に屈曲させ、口縁部内外面にヨコナデを施す甕である。7・10は第Ⅲ様式、6・9は第Ⅱ様式の特徴をもつ。

11・12はSK69から出土した。11は口縁部を短く外反させる広口短頸壺で、頸部に波状文を巡らす。12は水平口縁の高杯で、口縁部は短く湾曲し、杯部内側上端の突帯には7のようにキザミメを付けている。ともに第Ⅲ様式のものである。

13・14はSK74から出土した。13は胎土中に結晶片岩粒を多く含む紀伊産の甕底部である。14は口縁端部を内側に肥厚させ、体部外面にタテハケ、内面にヘラケズリを施す土師器の甕である。14は7世紀に下るものである。



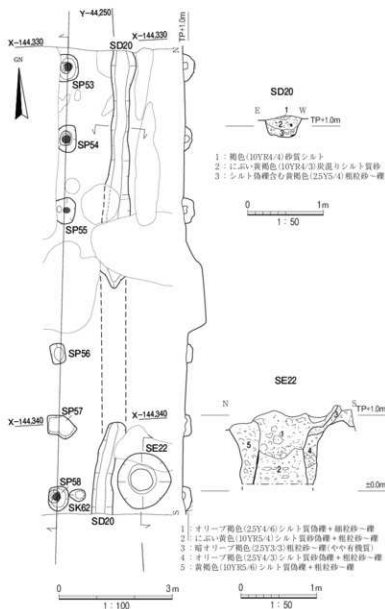


図9 豊臣期の遺構平・断面図

は西側を17世紀中葉の遺物を含むSD14に切れ、SK55・56間には柱が推定される場所に17世紀末の遺物を含むSK11が掘られており、これらよりも古い時期の遺構である。

柱穴からの出土遺物は少なく、土師器・瓦・備前焼・肥前陶器の小片に限られていることから、豊臣期の遺構と判断した。後述するSD20とともに屋敷地の区画施設の可能性が考えられる。

SD20は、SP53～58の東側で検出したこれと並行する南北溝で、中央部分は現代の掘乱によって削

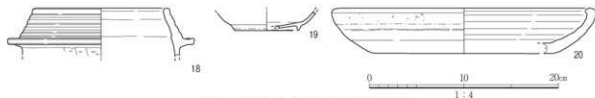


図10 中世後半～豊臣期遺物実測図(2)

SD64(18)、SE77(19・20)

反になるものであろう。20は備前焼の平鉢である。これらは豊臣期に属するものである。

SE22は、調査区中央南端で検出した、掘形が1.5mの円形で、内部に一部木質が残る直径0.6mの井戸側を確認した。出土遺物は弥生土器および土師器の細片のみで、遺構の時期を示す遺物を伴わないが、埋土の特徴から隣接するSD20と柱列に伴う豊臣期の遺構と判断した。

SP53～58は、調査区中央で検出したほぼ正南北方向の柱列である。柱掘形は0.5～0.7mの隅丸方形で、検出面からの深さは20cm前後あるが、本来の地表面からかなり削平を受けている。SP56・57以外は平面検出時に柱痕跡を確認しており(図9トーン部分)、SP53・54・58は直径約21cm、SP55は直径15cmあった。SP53～55の柱間隔は芯々で190cmある。SP53～55

平されている。溝の中心は柱列から1.2～1.4m離れている。検出面での幅は0.5m、深さは0.6mあった。遺物は弥生土器のほか土師器の細片が出土したのみであるが、西側の柱列とともに豊臣期の区画施設と考えられる。

#### c. 徳川期

徳川期の遺構は第7層上面で一括して検出したものと(図8)、調査区南西隅で層位毎に検出作業を行ったものがあり(図14)、両者を合わせて時期毎に報告する。

#### ・17世紀中葉～末

徳川期の遺構はこの時期に該当するものが最も多く、大半が第7層上面で検出したものである(図8)。調査区域が大きく削平されており、より深く掘削された徳川期でも古い時期の遺構が残存したことよると考えられる。遺構の性格を踏まえてまとめると、まず調査区中央北寄り検出した瓦製の井戸側をもつSE60とその西側で検出した溝SD14以外は土壌である。調査区西端には長軸が4mを超える大型の土壌SK52・63・49が南北に並ぶ。底は検出面から80cm以上と深く、掘削後時期を経ずに埋め戻し、上部を細かな単位で埋めている点で共通する。第3層下面で検出し、埋土が第3層と共通することから、第3層による盛土造成時の掘削痕と考えられる。同様の大型の土壌で、これらとは性格が異なるものが調査区東半に分布する。調査区南東部ではSK02・06～09が一部重複して密集しており、これらは炭や焼土を含む地層と砂礫やシルト偽礫が互層で埋まる廃棄土壌と考えられる。また、調査区中央で検出したSK10も検出面での規模が東西5.7m、南北2.1m、深さ1.0mと大型で、埋土上半に水漬きのシルト層が厚く堆積していることから、水溜りとして利用されたと考えられる。これらの大型土壌とは別に、調査区中央には一辺2m前後の方形もしくは円形の土壌SK11・12・28・30が分布する。埋土の特徴からいずれも廃棄土壌と考えられるもので、豊臣期の敷地境とした柱列西側でこれと平行するように分布することから、この時期にも豊臣期の敷地境が踏襲され、その西隣の範囲がゴミ捨て場に利用されていた可能性がある。

次いで、当該期の主な遺構出土遺物を報告する(図11～13)。

21～27はSK30から出土した。21～25は肥前磁器で、21～24は染付、25は青磁である。21は碗で、高台内には「清製」の銘を施す。22は蓋物で、高台内には「太明」の銘を施す。23・24は皿である。23は輪花で、崩れた柳文を施す。24は雄雉の文様を施す。25は三脚を有する皿である。26は丹波焼の播鉢で、口縁部は断面三角形を呈する。27は土師器皿で、灯明皿として使用している。以上は17世紀中～後葉に属する。このほか、SK30からは骨・貝が少量出土している。

28～39はSK10から出土した。28は中国産青花の皿で、漳州窯産である。29は中国産青花の皿で蛇の目状高台を有し、景德鎮産である。30～32は肥前磁器の染付である。30は碗、31・32は皿である。33～35は肥前陶器である。33は高台に鉄錆を塗布する碗である。34・35は呉器手の碗で、34はSK11出土遺物と接合している。36は軟質施軸陶器の鬘水入れである。比較的大型で、器高が高い。37は信楽焼とみられる播鉢である。38は土師器皿で、内面は底部と体部との境にナデによる圏線が巡る。39は土師器焙烙である。以上は17世紀中～後葉に属する。

40～46はSK11から出土した。40は中国産青花の皿で、景德鎮産である。41～43は肥前磁器である。

41は染付碗で、高台内に「宣明年製」銘を有する。42は染付の小杯である。43は白磁で、香炉ないしは線香立とみられる。内面は無軸である。44は肥前陶器の蓋である。45は京焼の碗で、体部を窪ませ、内面には鉄絵で葉文を施す。高台内には「清水」の刻印を有する。46は丹波焼の甕である。以上は17世紀中～後葉に属する。

47・48はSK07から出土した。47は肥前磁器の染付碗で、外面には草花文を施す。48は肥前陶器の摺鉢である。以上は47が17世紀末葉、48は17世紀前半に属し、前者が遺構の時期を示すものである。

49・50はSK49から出土した。49は中国産青花の皿で、人物山水文を描く。景徳鎮産である。50は肥前磁器の染付皿で、高台内には「大明成化年製」銘を施す。以上は49が17世紀前半に遡るものであるが、50は17世紀後葉に下るもので、遺構の時期は後者の年代であろう。

51・52はSK63から出土した。51は肥前磁器の白磁碗である。52は土師器羽釜で、大和型羽釜の系譜を引くものであろう。器壁は厚く、口縁端部は短く外反する。以上は17世紀後葉に属するものであろう。

53～57はSK52から出土した。53～55は肥前磁器である。53は色絵染付の碗である。底部内面には菊文を施す。54は染付碗で一重網手文を施す。55は色絵染付の輪花皿である。高台内には「福」銘を有

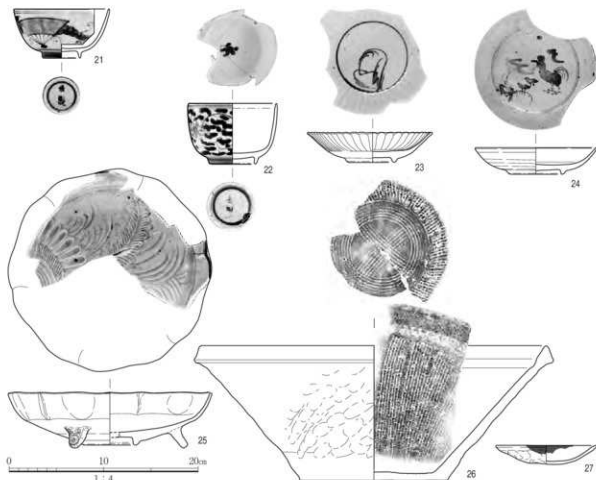


図11 徳川期遺物実測図(1)  
SK30(21～27)

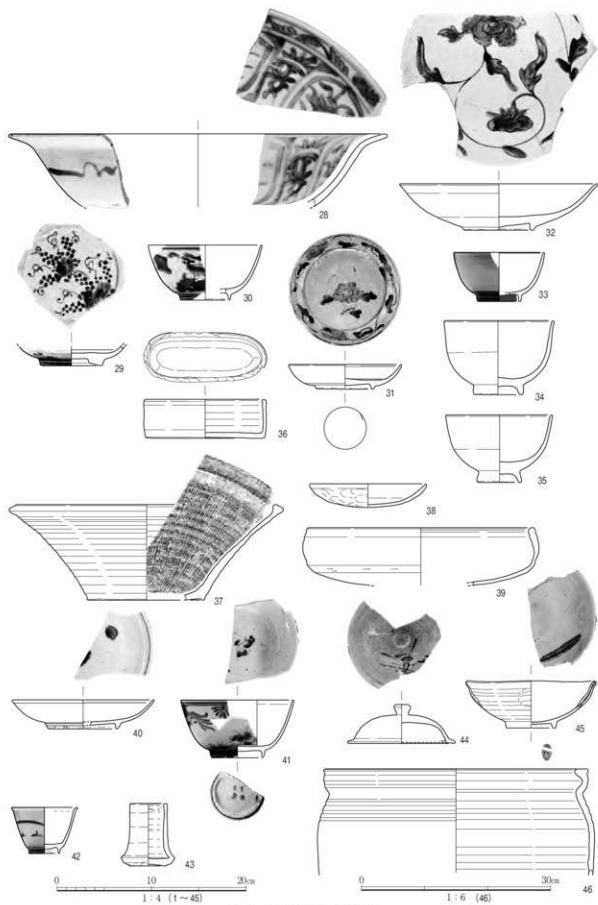


图12 德川期遺物実測図(2)  
SK10(28~39), SK11(40~46)

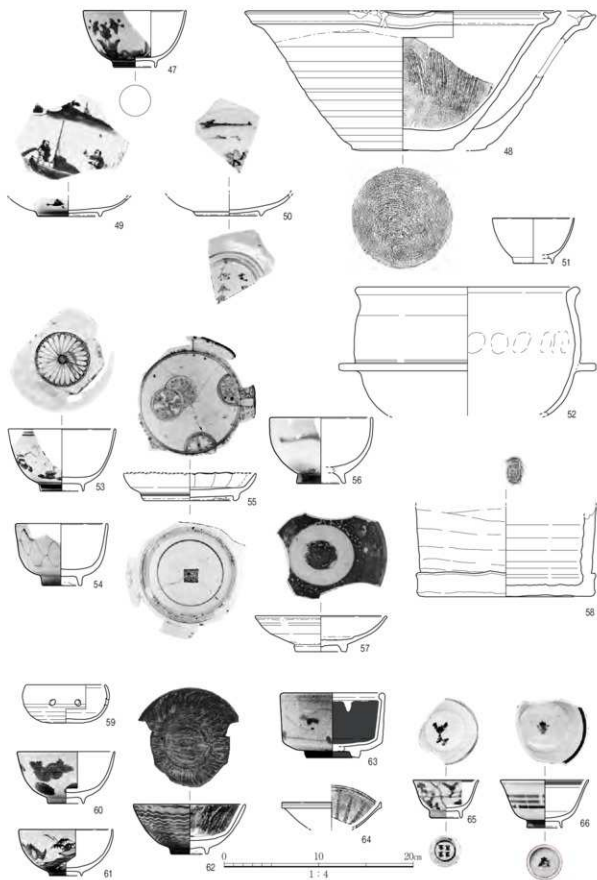


图13 徳川期遺物実測図(3)

SK07(47・48)、SK49(49・50)、SK63(51・52)、SK52(53~57)、SK80(58)、SK46(59)、SE47(60~64)、SK24(65・66)



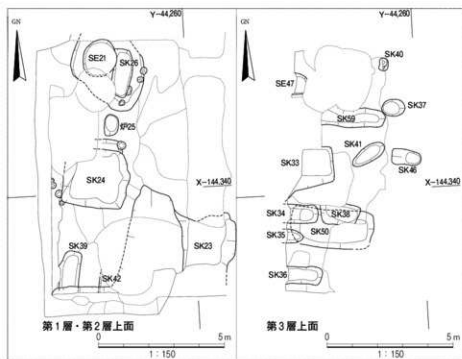


図14 調査区南西隅第1～3層上面検出遺構平面図

する。56は肥前陶器の碗で、外面には緑色釉で文様を施す。57は肥前陶器の皿で、緑色釉を施し、底部内面を蛇の目釉剥ぎする。以上は17世紀後半に属する。このほか、SK52からは上述した車輪文当てをもつ須恵器大甕片16が出土している。

#### ・18世紀

18世紀代の遺構は、調査区南西隅の第3層上面で検出した遺構(図14)および、第7層上面で検出したSK15・SK27・SK80がある(図8)。調査区南西隅の第3層上面で検出した遺構は小型の土壇が多く、南部に主軸を東西にとる土壇が密集し(SK33～36・38・50)、いずれも廃棄土壇と考えられる。この他、北部では井戸SE47を検出した。また、第7層上面で検出した遺構のうち、SK15・27は調査区西半に分布する廃棄土壇で、前時期までの敷地境のゴミ捨て場を踏襲する位置にある。SK80は調査区東部のSK08の上層で確認した、瓦・焼土を廃棄した土壇で、深さは20cm前後遺存していた。

次いで、当該期の遺構出土遺物のうち、特徴的なものを報告する(図13)。

58はSK80から出土した備前焼の鉢で、底部内面には判読不能の刻印を有する。相伴する遺物は18世紀前～中葉の年代を示す。

59はSK46から出土した土師器の鉢で、底部外面を中心に丁寧にヘラケズリを施す。体部中位の2箇所に穿孔を有する。相伴遺物は18世紀前葉のものである。

60～64はSE47から出土した。60・61は肥前磁器の染付碗である。60は外面にコンニャク印判による施文を有する。61は半球形の碗である。62は肥前陶器の刷毛目碗である。63は肥前陶胎染付の火入れである。64は備前焼の餌摺鉢である。以上は18世紀前半に属する。

#### ・19世紀

19世紀の遺構は、調査区南西隅の第1層および第2層上面で検出した遺構と(図14)、第7層上面で

検出したSE01・SK17・31がある(図8)。調査区南西隅の第1層上面で検出した遺構はSE21と炉25と小穴群がある。SE21は第1層で埋まるSK26の上から掘られており、前時期のSE47と隣接している。南隣にはこれを切る近代の井戸が、さらに南側には豊臣期のSE77があり、この場所に豊臣期以降、継続して井戸が掘られたことを示している。炉25は平面形が東西0.8m、南北0.6mの小判形で、検出面からの深さが10cmと浅い。壁は被熱により赤色化しており、炉内には炭が詰まっていた。同所で第2層上面検出遺構は、第1層で埋まるSK23・24・26と、焼けた瓦と焼土・炭を多く含むSK39・42がある。SK23は東上半が現代の攪乱によって削平されていたが、西側の掘込み面からの深さが1.3mもあり、その上にも盛り上げ埋土の最大厚は2.0mにおよぶ。SK24は一辺2.5m、深さ0.8mの方形土塋である。SK26は、下半に東西1.9m、南北0.8m、深さ0.4mの竅穴を掘り、途中で雛段状の平坦面をつくる土塋で、下半の土塋内には木屑が集積しており、雛段より上は第1層で埋めていた。掘込み面からの深さは1.8mある。

第7層上面で検出した当該期の遺構のうち、調査区西半のSK17・31は第1層を埋土とするもので、調査区東端のSE01は埋土下半に19世紀前半の遺物が、上半には明治期の遺物が出土しており、最終的に埋められたのは近代である。SE01の西側には遺物が出土しないため時期が不明であるがSE79をSK06の下で確認しており、上述したSE21と同様、同じ場所を長期間井戸に使用していたことを示唆している。

当該期の出土遺物のうち、SK24から出土した65・66を報告する(図13)。65は中国産青花の小杯で、外面には雲芝文を施す。66は関西系磁器ないしは瀬戸美濃焼磁器の染付端碗で、外面には八卦文を施す。以上は19世紀前半に属する。

### 3)まとめ

今回の調査では、地層・遺構の遺存状態は良くないものの、当地域の歴史復元の材料となる各時期の知見を得ることができた。以下、調査成果を列挙する。

1、天満砂州を構成する基盤礫層である第7層の観察から、砂州の堆積環境と地形の形成に関する情報を得ることができた。第7層を堆積させた古流向は北から南を基調とし、第7a～7c層の堆積相から当時の砂州上には複数の網状流路が流れており、これらが最終的に埋まってロープ東・中央間の低地が形成されたと判断される。

2、弥生時代中期前半の遺構・遺物を検出し、北西側の同心町遺跡を中心としたロープ東に展開する弥生時代中期の人間活動が今回の調査地まで及んでいたことが判明した。また、遺物相からは淀川水系や大阪湾を介した紀伊地域との交流を行っており、森小路遺跡をはじめとした淀川下流域の遺跡群と密接な関係を有していたことが推測された。

3、第6層および徳川期の遺構からは、少数であるが7世紀代の須恵器・土師器が出土した。また、7・8世紀のある段階には、第6層の遺構の上半を風成の第5層が覆い、その初期には生痕が顕著に見られた。この時期、ロープ間低地が潮の影響を受ける環境にあったことを示しているが、風成層が堆積することから湿潤な環境にあったのではなく、周囲には裸地が広がっていたとみることができる。

その後、第4層の存在から8世紀後半～9世紀初頭には調査地は生産域になったことが推測できる。

4、豊臣期の敷地境とみられる南北柱列・溝を検出した。また、断片的ではあるがゴミ穴や井戸の偏在からその後の徳川期にも豊臣期の町割りが踏襲されていた、というこれまでの指摘を追認することができた。

#### 註)

(1)第7層の堆積環境については、大阪市立自然史博物館の中条武司氏に現地でご教示を得た。

#### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001、『平成11年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』：「株式会社大京による建設工事に伴う東天満1丁目所在遺跡発掘調査(HX99-1)報告書」
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』：「平岡英一氏による建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ01-1)報告書」
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』：「桜宮地区埋蔵文化財調査(天満1丁目所在遺跡発掘調査(TW08-1)報告書」
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』：「北区東天満一丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(HX11-1)報告書」
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』：「北区天満橋一丁目における建設工事に伴う天満橋1丁目所在遺跡発掘調査(TW12-1)報告書」
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』：「北区天満橋一丁目12-2における建設工事に伴う天満橋1丁目遺跡C地点発掘調査(TW15-1)報告書」
- 大阪市文化財協会2001、『森小路遺跡発掘調査報告』I
- 趙哲済・中条武司2017、『大阪沿岸低地における古地理の変遷—「上町科研」以降の研究—』：「ヒストリア」第264号、pp.3-23



北区中崎西二丁目5における建設工事に伴う  
中崎町遺跡B地点発掘調査(NZ17-1)報告書

調査個所 大阪市北区中崎西2丁目5  
調査面積 48㎡  
調査期間 平成30年1月15日～1月18日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明、平山裕之

## 1) 調査に至る経緯と経過

中崎町遺跡は上町台地北端より北西側に広がる天満砂堆上に立地する。平成21年度に新発見の遺跡として、NZ09-2次調査地で初めて本格的な発掘調査が行われた[大阪文化財研究所2011a]。この調査では弥生時代終末期～古墳時代前期の土器のほか、徳川～明治期の井戸・溝・区画の欄列・土壌などが見つかったが、特に平安時代の火葬墓3基が発見され、うち1基の蔵骨器に讃岐地方から搬入された須恵器壺が使用されていたことから、土器流通の面からも注目された。その後はNZ09-2次調査地から北東200mでNZ11-1次試掘調査が行われたのみであり[大阪文化財研究所2011b]、今回は本遺跡での2件目の本格的な発掘調査となる。

今回の調査地はNZ09-2次調査地から南西150mにあり、JR大阪駅から北東800mに当る。大阪市教育委員会による試掘調査では地表下約0.65m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出され、中崎町遺跡B地点として発掘調査を行うこととなった。

調査は平成30年1月15日に開始した。調査区は調査地の東北部で南北8m、東西6mの48㎡を設定し、重機によって後述の第3層上面までを掘削して遺構を検出し、写真・図面などの記録を取りながら掘削を進め、1月18日に現地における調査を終了した。

本文で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪府デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

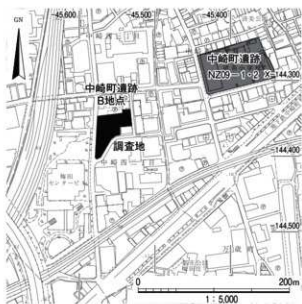


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

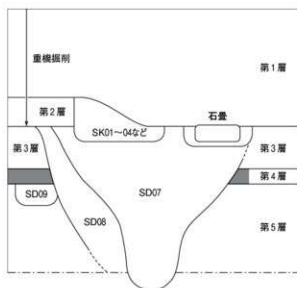


図3 地層と遺構の関係図

i) 層序(図3・4)

調査区の現況地形は、およそTP+1.1m～1.4mで東側がわずかに低い。

第1層：黒褐色(10YR3/1)砂礫質シルト層で、層厚85cm以内の現代整地層である。

第2層：黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒～中粒砂層で、層厚25cm程度の近世土層である。調査区の地層断面観察により、本層上面からSK01～04の18世紀代とみられる遺構が掘り込まれていることを確認した。

第3層：オリブ褐色(2.5Y4/3)細礫質中粒砂層で、層厚40cm程度の整地層である。本層

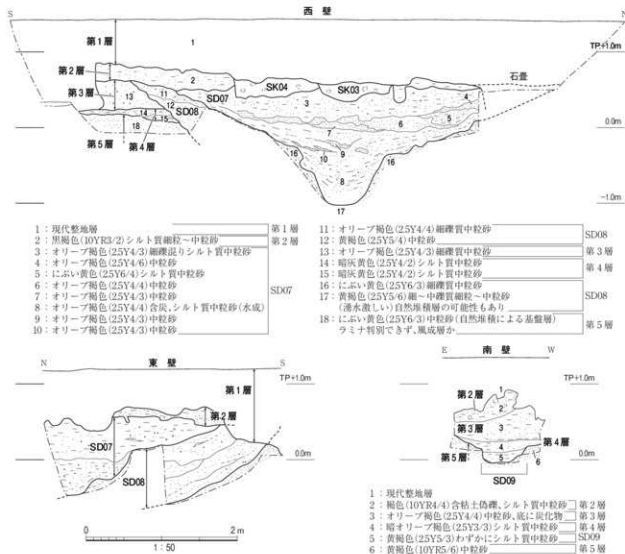


図4 調査区地層断面図



上面でSD07など17世紀代の遺構を検出した。

第4層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層で、層厚20cm以下の古土壌である。出土遺物はない。

第5層：にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂層で、層厚80cm以上を確認した。淘汰は悪くラミナは確認できない。本調査地における基盤層である。本層上面でSD09を検出したが出土遺物はなく、時期は不明である。

## ii) 遺構と遺物(図5～7)

本調査では第5層上面・第3層上面・第2層上面で遺構が検出された。以下に下位の層準から記述する。

SD09 第5層上面の調査区南部で検出された幅0.55m、深さ0.30mの溝であるが、北側はSD08などで壊れており、長さ0.80mを確認した。方位はN25° Wである。埋土はわずかにシルト質の黄褐色

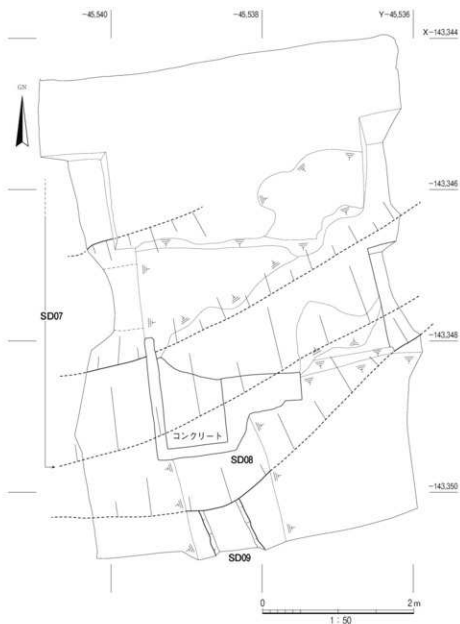


図5 第5層上面・第3層上面遺構平面図

(2.5Y5/3)中粒砂層で、滯水の痕跡は確認できなかった。出土遺物はない。

**SD08** 第3層上面で検出された。遺構上端の方位が後述のSD07にほぼ平行する溝と考えられる遺構で、概ね北東-南西方向に延びているが、攪乱やSD07などで壊されており、南側の遺構上端のごく一部を確認できたのみである。埋土の上部はオリーブ褐色(2.5Y4/4)細礫質中粒砂層ないし黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂層で、下部にはぶい黄色(2.5Y6/3)細礫質中粒砂層を主体とするが湧水が激しく、底は未確認である。出土遺物はない。

**SD07** 第3層上面で検出された。概ね北東-南西方向に延びている溝である。北側の上端は現代の石畳で壊されているため幅は未確認であるが、底の中心で北へ折り返すと4.5~5.0m程度の幅に復元される。深さは1.60mで、底からおよそ0.7~1.0mの高さで幅1.5m程が急な立上がりとなり、それより上部は緩やかになっている。埋土の下部は炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂層

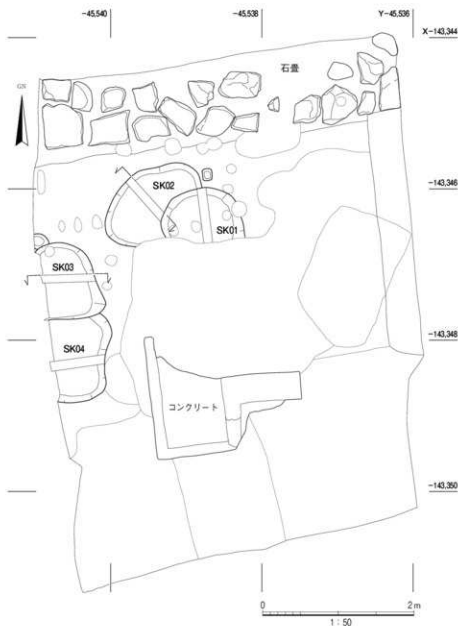


図6 第2層上面遺構平面図(北部石畳は現代に属す)



図7 遺構断面図

を主体とし、オリブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂の薄層が挟在する水成層である。上部はオリブ褐色(2.5Y4/3)細礫混りシルト質中粒砂層ないしオリブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂層などを主体としている。非常に幅の広い溝であるが、基盤層が中粒砂主体で崩れやすく、湧水の影響で幅が広がったことも考慮する必要がある。出土遺物には須恵器1のほか、土師器2、陶磁器3～6などがある。1は古代の須恵器杯Bである。2は土師器焙烙である。3は備前焼播鉢で、掘り目は口縁に対して垂直につけられた17世紀中葉のものである。5・6は肥前陶器の溝縁皿である。4は肥前磁器の色絵碗で、底部内面に花文を描くが、剥落して痕のみが残っている。これらのうち、古代の須恵器は遊離資料であり、他の近世資料は徳川初期の5・6とそれより新しい2～4に分けられる。SD07の時期は17世紀中～後葉の2～4に求められ、それより古い5・6をSD08の時期とする可能性が考えられよう。

SK01～04は第2層上面から掘り込まれた土坑である。このうちSK02・03について記述する。

SK02は平面が長さ1.45m、幅0.85mの楕円形となり、深さは0.05mである。埋土はオリブ褐色(2.5YR4/6)細礫や炭化物の混じる極細粒～細粒砂層で、灰色シルトの偽礫を含む埋められた地層である。

SK03は平面が南北1.0m、東西0.7m以上で、深さは0.15mに近い。埋土はSK02と同一である。

また、SK01・02も近似する規模で埋土も同じである。出土遺物にはSK03の土師器や肥前磁器青磁染付碗片がある。図化していないが17世紀中葉のもので、下位のSD07に包含されていた可能性が高いため、第2層上面遺構の時期は次項の18世紀代の遺物より新しいこと以上には詳細不明である。

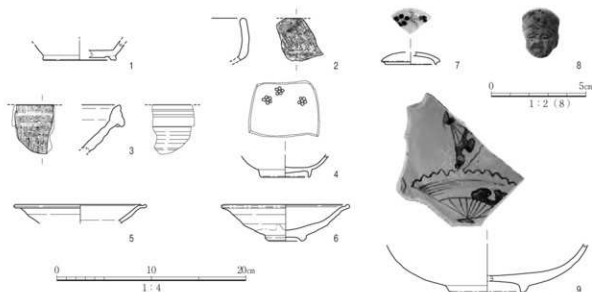


図8 出土遺物実測図

SD07(1～6)、第3層上面精査中(7～9)

第3層上面の精査中に、肥前磁器7・9やミニチュア土製品8などが出土した。7は染付蓋で外面に草花文を描いている。8は人面の芥子面子で長さ2.6cmである。これらは18世紀代のものであろう。9は染付皿で内面に扇子を描く17世紀中葉以降のものである。

### 3)まとめ

中崎町遺跡において2例目となる本調査では、2時期の溝が重なって検出され、古いSD08は徳川初期に遡る可能性が認められた。これらの溝の性格は、より広範囲の調査結果から土地の利用状況を踏まえて解明していく必要がある。また、遊離資料とはいえ古代の遺物も出土するなど、以前の調査地と近接する時代の発見もあった。

一方、平安時代の火葬墓に対応する時代の地層は確定できなかったが、本調査地で第4層とした古土壌やその下位で検出された時期不詳のSD09は近世より古いと考えられ、今後の周辺域での調査が進むことで対応関係が明らかとなることが期待される。

### 参考文献

大阪文化財研究所2011a、「中崎町遺跡発掘調査報告」、pp.1-31

大阪文化財研究所2011b、「北区中崎二丁目における埋蔵文化財試掘調査(NZ11-1)報告書」、pp.1-2

北区西天満三丁目59-1における建設工事に伴う  
天神橋遺跡発掘調査(TJ17-1)報告書

調査個所 大阪市北区西天満3丁目59-1  
調査面積 160㎡  
調査期間 平成29年4月10日～5月9日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、南秀雄

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は旧淀川本流の大川北岸で、堺筋が通る難波橋の北詰から北東130m、1598(慶長3)年に開削された旧天満堀川から西70mに位置する(図1)。

大川北岸は、淀川の沖積作用による三角州の発達により陸化していった。弥生時代後期(1～2世紀)には天神橋北詰まで三角州が延び、堅穴住居などの遺構の存在から、5世紀頃には天満橋の北東側から天神橋の北西側まで陸化していたことがわかる[趙哲済2017]。周辺の大川北岸には8世紀に東大寺の新羅江庄が置かれた。大化改新のブレンであった僧旻が没した安曇寺も7～14世紀の間、大川岸にあった可能性が高い(京都市安祥寺蔵の1306(嘉元4)年銅鐘の「拱津渡辺安曇寺」銘)。天神橋筋は7～8世紀に存在した計画古道という説があり[足利健亮1978]、783(延暦2)年に西成郡の江北に新設された駅屋が、堀江橋(現天神橋の場所に比定)の北側にある可能性が言われている[大阪市1988]。天神橋筋に東接する天満天神社周辺は大川北岸の微高地で、8世紀前後の銭・墨書土器・瓦が出土しており、上記のいくつかの施設などが候補として想定される。

国家的港津であった難波津を引き継いだ渡辺津は、調査地から東にかけての大川南北岸にあった。渡辺津は9世紀中頃に拱津国府の港として出発し、11世紀には源平合戦等で活躍する渡辺党が本拠を置いた。また同じ頃、朝廷の物品を調達する大江御厨がこの地にあった。11世紀末には、東大寺再建のための木材等の中継地として東大寺の別所が置かれた。これらに関する施設は、大川南岸を主に北岸にどれくらいあったかは不明だが、文献史料からは渡辺党の館・寺院(氏寺薬師堂など)、大江御厨の官舎、東大寺別所の倉庫(木屋敷)や浄土堂等が存在したことがわかる。さらに11世紀末までに創建された天満天神社には小規模な門前町があった。渡辺津は瀬戸内と京を結ぶ港として14～15世紀頃

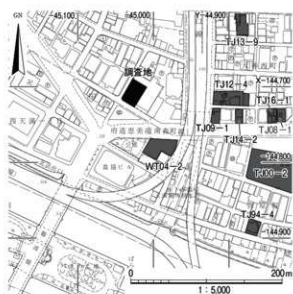


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

まではそうとうに栄えたが、以降は堺に比べてしだいにその地位を減じ、範囲は大川南岸に限られていったと推測する。というのは、天満地域の発掘調査では、豊臣秀吉が大坂城下町の建設のために招致(1585年)した天満本願寺寺内町地の層の直下で、多くの場所で畠などが見つかるためである。「私心記」(蓮如の末子順興寺実徳の日記)1533(天文2)年9月の記事では蹴鞠の場、1570(元亀元)年の織田信長と大坂本願寺・三好三人衆との合戦では信長の陣所として、「天満森」と表現されていることは、16世紀代の田圃化したようすと合致する。

大川南の船場地域は、1598(慶長3)年に現在の姿に繋がる城下町として大々的に整備されたことが、多くの発掘調査でわかっている。調査地のある大川北岸で天満堀川より西の地域は、それより城下町としての開発が一段階遅れると推定されている。しかしながら、少なくとも17世紀前半には、調査地西にある肥前鍋島家蔵屋敷(現高等裁判所敷地)・対馬宗家蔵屋敷など、現在の町割に繋がる開発が施行された。調査地点は、上記のような様々な歴史の変遷を発掘調査によって明らかにできる場所に含まれる。

周辺でもっとも成果があがった南東200mのTJ00-2次調査では、11~14世紀頃の多量の遺物が出土し、14世紀後半の屋敷の堀や井戸が検出された[大阪市文化財協会2002]。その北ではTJ08-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]の11・12世紀の井戸や土壇など、同様の時期の遺物がまんべんなく見つっている。また天満堀川の東に近接した調査地点では、堀川掘削の排土層が広がっていた。

本調査は大阪市教育委員会の試掘を受け、土置き場の確保のため、敷地北東の長さ16m、幅10mを対象にした(図2)。17世紀後半の明瞭な遺構面である第3a層上面までを重機で掘削し、それ以下を順次調査した。掘削深度が3mを越えたため、第9~10層以下は安全を期し、約6m×2mのトレンチによって自然堆積層である第12層まで調査した。GPS測量を行ったが成果が芳しくなく、本報告では1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

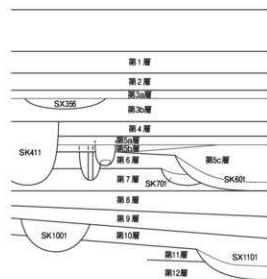


図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現地表の標高はTP+3.0~3.2mで、地表から深さ約0.7mまでは攪乱されていた。

第1層：シルト偽礫混り暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層の盛土で、最大層厚45cmである。

第2層：にぶい黄橙色(10YR7/3)中粒~粗粒砂層の盛土で層厚は35~50cmである。本層から掘られた遺構には焼土が入る。第1~2層は18~19世紀前半の間と推測する。

第3層：薄い整地層の第3a層と盛土の第3b層から



なる。第3a層は明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂質シルト層で層厚5~10cm、第3b層は褐色(10YR4/4)シルト質中粒~粗粒砂層で層厚20~35cmである。第3層は17世紀中葉~後葉の地層である。第3a層上面・第3b層上面とも遺構面で、第3b層上面には瓦敷の排水施設SX356などがあった。第3b層からは、九州産と推定される二重高台の陶器挿鉢46が出土した(図11)。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層の盛土で最大層厚40cmである。第4層からは肥前陶器碗41と肥前磁器染付の碗42が出土した。第4層は1615年以降の17世紀前半である。第4層上面には穴蔵SK411などがあった。

第5層：調査区北部では第5a~5c層に分かれる整地層である。第5a層は、偽礫混りの暗褐色(10YR3/3)中粒~粗粒砂質シルト層で層厚は10~20cmである。第5b層は、黄褐色(2.5Y5/6)シルト質細粒砂層で層厚は5~8cmである。第5c層はSK601の周辺に分布し、SK601は第5c層で埋められる。

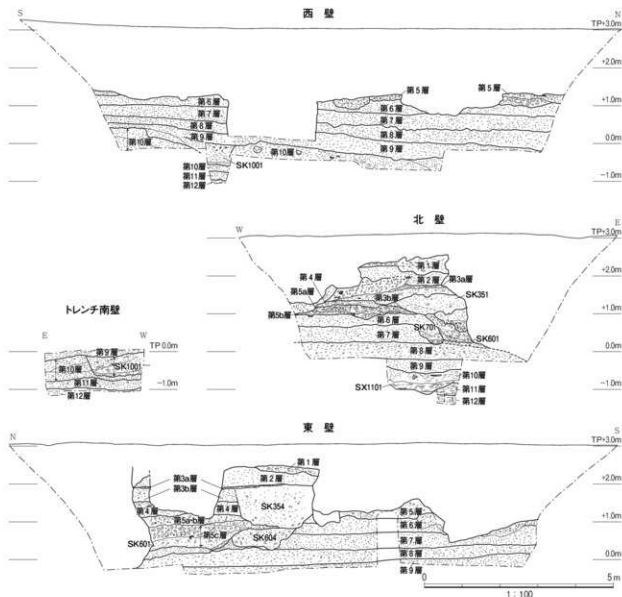


図4 西壁・北壁・東壁地層断面図

暗灰黄色(2.5Y5/3)シルト偽礫を主体とし、最大層厚70cmである。第5層は、瀬戸美濃焼小皿38、肥前陶器皿39、中国産青花皿40が出土し、豊臣後期(1598～1615年)である。第5層段階にはSA561・562などがあり、現在と同方向の屋敷割となっていたことがわかる。

第6層：黄褐色(2.5Y5/6)シルト質細粒砂層で層厚は25～40cmである。畠の作土である。第6層上面には豊臣後期のSK601があった。第6～7層は極端に遺物が少ないが、第6層は上下の地層との関係から豊臣前期(1580～1598年)以前の16世紀頃と推定する。

第7層：褐色(10YR4/4)シルト質細粒～中粒砂層で層厚は25～50cmである。畠の作土で、上面は南西から北東へ低くなる。本層は下層との関係で15世紀頃と推測する。

第8層：黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルト層で層厚は20～50cmである。全体に南西から北東へ傾き厚くなる。第8～10層では時期幅のある多くの遺物が出土した。第8層は13世紀後半～14世紀と推測される。上面では東で北に約10°振る東西の耕作痕が認められた。方向は現敷地と大きく異なり、推定条里に近い。

第9層：黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂層で層厚は15～50cmである。南西から北東へ傾く。13世紀前半頃と推測される。

第10層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂層や灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂層からなり、最大層厚60cmである。第10層は12世紀と推測される。本層上面でSK1001を検出した。

第11層：黄褐色(2.5Y5/4)中粒～粗粒砂の水成層で、植物擾乱によりシルト偽礫が混じる。層厚は20～30cmである。遺物は出土していない。本層上面でSX1101を検出した。

第12層：明黄褐色(10YR6/6)極粗粒砂の水成層で、層厚は25cm以上である。遺物は出土していない。

## ii) 遺構と遺物

### a. 中世の遺構と遺物(図5～7)

**第11層上面** トレンチ北端でSX1101を検出した。SX1101は東へ深くなる窪みで、深さは0.4mである。下部は黒褐色(2.5Y3/1)シルト・中粒砂の水成層で一部に偽礫が混じり、上部は第10層で埋まる。後の天満堀川は砂堆の後背湿地などを利用して掘られた可能性があり、SX1101は東へ落ちる自然地形かもしれない。SX1101からは緑軸陶器碗1、瓦器碗2、土師器羽釜3、東播系須恵器鉢4、平瓦30が出土した(図6・7)。2は尾上編年のⅡ-2～Ⅱ-3期で12世紀中葉[尾上実1985・森島康雄1992]、3は摂津C型羽釜で10～11世紀[菅原正明1987・福島正和2001]、4は森田編年の第Ⅰ期第2段階前後で11世紀後葉～12世紀前葉頃[森田稔1995・松本彩2012]であろう。SX1101は12世紀中頃には埋まり、この時期に、30等の瓦の出土から近くに瓦を使用した建物があった。

遺構ではないが、トレンチ東壁の浅い落ちから18に図示したような須恵器甕片が集中して出土した。また、トレンチの南の第10層中で長さ20～40cmの花崗岩などの自然石が出土した。石の用途は不明だが、被熱していた。

**第10層上面** 調査区南西にSK1001があった。SK1001は長さ2.5m、幅1.8m以上、深さ0.55～0.90mである。平面ではうまく検出できず、トレンチ断面で把握した。埋土は、底近くが黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂層、他が黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルト層で、被熱した灰白色シルト層を

狭在し炭片が入る(図4)。SK1001からは、土師器皿5・6、同碗7、黑色土器A類碗8・A類鉢9、東播系須恵器碗10、山茶碗11が出土した(図6)。5は12世紀代、6と9は長原遺跡の鈴木編年のB-II-2期で、10世紀～11世紀前半であろう[鈴木秀典1983]。7・8も6・9と同様の時期であろう。10は森田編年の第II期第1段階前後で12世紀第3四半期まで[松本彩2012]、11は藤沢編年の第4～5型式で12世紀中葉～後半[藤澤良祐他1993]と推定される。

SX1101・SK1001ともさほどの時期差はなく12世紀代の遺構である。今回は当該期の遺構に対する十分な調査はできていない。調査区では第10～8層が南西に向かって高くなっており、大川北岸の自然堤防の影響と考えられる。調査区から南西の、より大川岸に近い自然堤防上が立地環境が良く、現地地表

下2～3mの深いところに12世紀やそれを前後する時期の遺構が密に広がっている可能性が高い。

b. 第10～8層出土の遺物(図6・7)

第10～8層は明確に区分して発掘できたわけではない。以下に出土遺物について記し、地層の年代推定の根拠と、調査区周辺に分布する遺構の時期の傾向を示す。

12～18は第10～9層出土である。すべて中央のトレンチ出土で、主体は第10層にある。12は土師器皿で、回転台でつくられ底はヘラ切りされている。13は黑色土器A類碗、14はB類碗である。14の内面には十字形のミガキがある。これらは10世紀頃のものであろう。15～17は瓦器で、皿15と碗16・17がある。16は尾上編年のII-3～III-1期、17はIII-2～III-3期で、17がもっとも新しく12世紀末～13世紀前葉である。

19～23は第9～8層出土である。19は土師器皿で、6と同様に鈴木編年のB-II-2期である。20は摂津C型羽釜である。これらは10～11世紀のものである。21は近江産の緑軸陶器碗、22は東海産の須恵器壺底部で底は糸切りである。23は瓦質土器の火鉢である。

24～27、31・32は第8層出土である。24はコースター状の土師器皿、25は瓦器皿である。26は瓦質羽釜で、14世紀頃のものである。27は常滑焼甕の口縁部である。31・32は軒平瓦である。

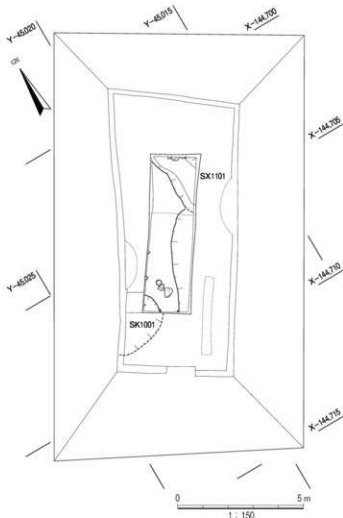


図5 第11～10層上面遺構平面図

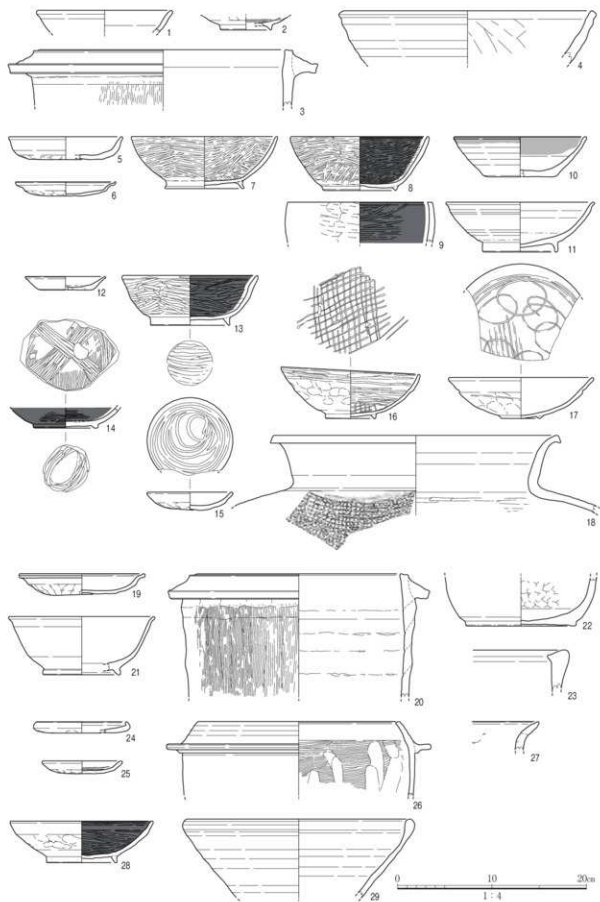


图6 出土遗物实测图(1)

SX1101(1~4)、SK1001(5~11)、第10~9层(12~18)、  
第9~8层(19~23)、第8层(24~27)、第8层上部~7层(28·29)

28・29は第8層上部～第7層の出土である。28は黒色土器A類碗、29は京都篠窯産須恵器の鉢で、いずれも地層の年代より古い10～11世紀のものである。

以上をSX1101・SK1001の年代とともに整理すると、第10層がSX1101と近い12世紀、第9層が、SK1001の時期と瓦器碗17から13世紀前半頃と推測される。第8層は13世紀後半から、26の瓦質羽釜が示す14世紀代と推測される。出土遺物はこれより古いものを多数含み、周辺で想定される遺構の時期は10～12世紀を中心とすると考えられる。

写真1は輸入磁器を抽出したものである。48～50は白磁で、皿48・壺49・碗50がある。51～54は青磁碗で、同安窯系51・52と龍泉窯系53・54がある。55は青白磁の合子である。51・52・54はやや古く、他は12世紀後半～13世紀末頃であろう。

c. 16世紀～17世紀初(～1615年)の遺構と遺物(図8・9・11)

**第7～6層上面** 第7層上面遺構にSK701がある。SK701は第6層上面のSK601に壊され西屑のみが残る。南北3m以上、深さ0.58mである。埋土は、下から粗粒砂混り暗黄褐色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂層、にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂層で、上半は第6層で埋まる。位置、深さとなだらかな屑の形状の類似から、SK601と同様の機能を有した可能性がある。出土遺物はないが、第6層との関係から16世紀代の遺構であろう。

第6層上面ではSK601・602・604、SP603を検出した。SK601は南北4.3m以上、東西2.6m以上、深さ0.85mである。第5c層により短い時間で埋められている(図9断面図参照)。SK601からは土師器壺蓋33、丹波焼播鉢34、肥前陶器皿35・碗36、瀬戸美濃焼志野向付37が出土した。SK601は豊臣後期である。市内の低地帯の中世後半の類似の遺構から、耕作に係わる水溜の可能性はある。SK601周辺のSK602・604、SP603は、いずれも

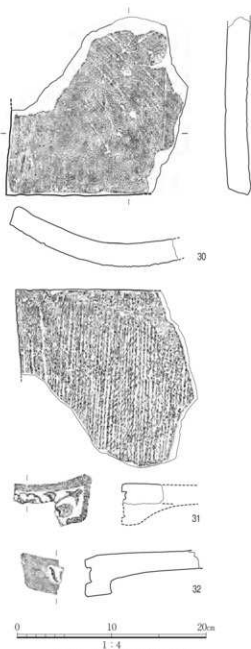


図7 出土遺物実測図(2)  
SX1101(30)、第8層(31・32)

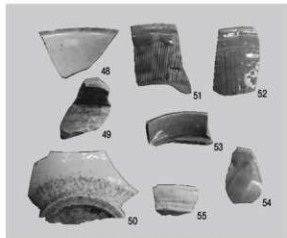


写真1 各層出土の中国産磁器  
第9層(50・52)、第8層(48・51・53)、  
第7層以上(49・54・55)

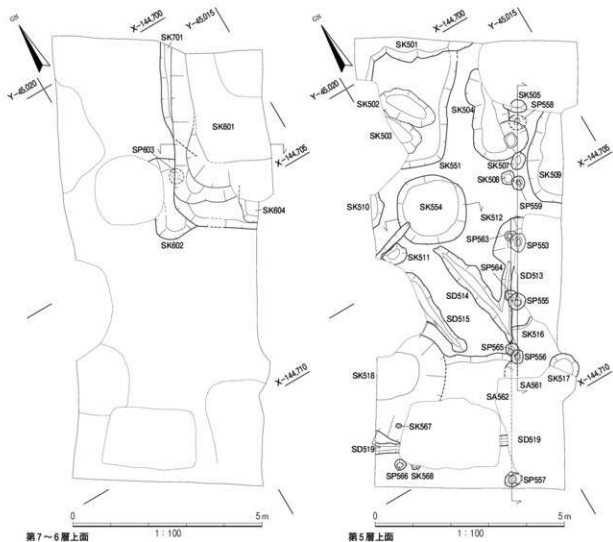


図8 16世紀～17世紀初(～1615年)の遺構平面図

SK601より古い遺構である。

第5層上面 豊臣後期の遺構群で、主なものを以下に記す。SA561・562は、現在の敷地割と同方向の北で東に30°振る塼である。同じ場所でSA562からSA561へ造り替えられ、敷地割が固定化していたことがわかる。SA562は南端のSP557まで含めると長さ6.64m(4間分)以上、柱間は1.66mである。確実なSP563～565の間では柱間1.50mである。掘立柱で、柱痕跡は約0.1mである。SA561は長さ6.10m(4間分)で、柱間は1.53mである。掘立柱で、いずれも掘形の底に石を敷いている。

中央にあったSD513～515・519は、埋土(黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂)が類似する溝で、深さは0.05～0.15mである。北で西に5～10°振るSD514・515は、畝の畝間溝の可能性がある。一方、SD513・519はSA561・562と同方向である。豊臣期より前の北で西に振る条里地割と、現代に繋がる豊臣後期以降の敷地割が混在し、過渡的なようすを示していると考えられる。

中央部のSK554は直径1.80～1.95m、深さ0.40mである(埋土は図9参照)。また南西にあるSK518は長さ2.85m、幅2m内外、深さ0.62mである(埋土は図9参照)。遺物の出土状況などからごみ穴の類ではない。

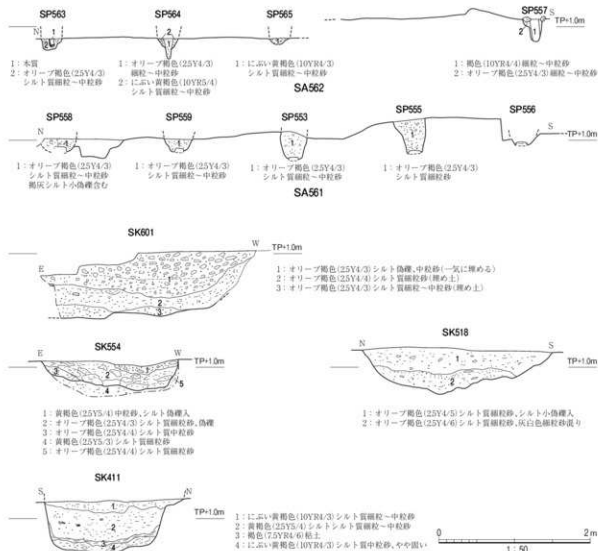


図9 遺構断面図

d. 17世紀(1615年~)の遺構と遺物(図9~11)

**第4層上面** 17世紀中頃と推定される遺構群で、主なものを以下に記す。調査区南にあるSK411は長方形で、長さ2.35m、幅1.85m、深さ0.68mである(埋土は図9参照)。穴蔵と推定される。SK411からは肥前磁器染付碗43・44と、肥前磁器青磁の合子45が出土した。また、SK411の北東にあるSX409は円形に赤変しており、竈の痕跡であろう。

**第3b層上面** 17世紀後半と推定される遺構群で、主なものを以下に記す。SX356は直径1.0~1.15m、深さ0.1m未満の土壌で、西にSD357が取り付けられている(図版2頁下)。加工した石2個を混じえ瓦が敷かれていた。排水のための施設であろう。このほかに第3a層上面遺構出土の丹波焼把手付鉢47を図示した。47は灰落しに転用されている。

3)まとめ

調査地では12世紀代の遺構やそれを前後する時期の多くの遺物が出土した。当該地の地層と周辺の地形から推測すると、冒頭に記した各種の歴史事象に関係する遺構は、調査地の南にある大川の自

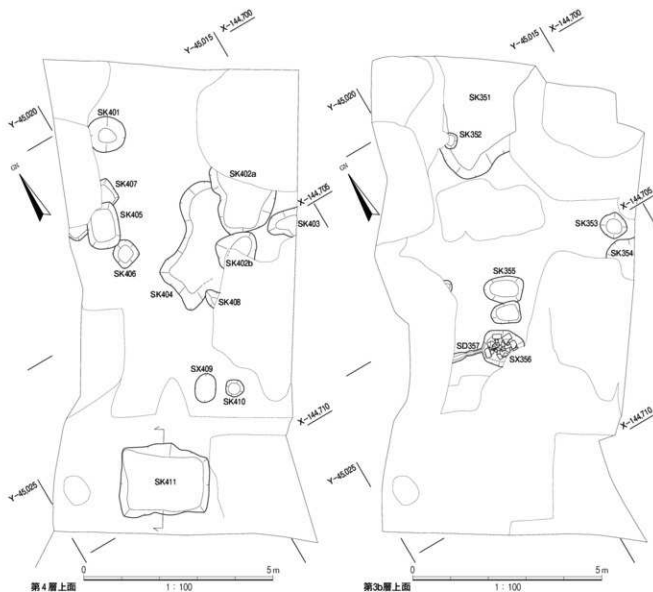


図10 17世紀(1615年～)の遺構平面図

然堤防上を中心に、TJ00-2次調査から西側などの東西に広がっていた可能性が考えられる。難波橋の北詰周辺も有力で、今後の埋蔵文化財の調査計画で考慮しようと思われる。

・今回の調査地では、現在の町割に繋がる開発の画期は豊臣後期にあった。また、古代末から中世の繁栄から戦国期に高地になり、次に城下町として開発される過程を層位と遺構の変遷により辿ることができた。

#### 参考文献

- 足利健亮1978、「難波京から有馬温泉を指した計画古道」：藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究』上、大明堂、pp.109-118
- 大阪市1988、「新修大阪市史」第1巻、pp.794-797
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「天神橋遺跡発掘調査(TJ08-1)報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.11-20



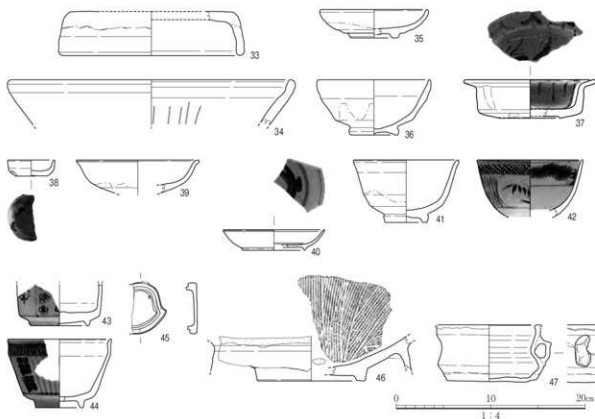


図11 出土遺物実測図(3)

SK601(33~37)、第5層(38~40)、第4層(41・42)、SK411(43~45)、第3b層(46)、第3a層上面遺構(47)

大阪市文化財協会2002、「第XII章 天神橋遺跡の調査 第1節 TJ00-2次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』、pp.181-190

尾上実1985、「大阪南部の中世土器-和泉型瓦器碗-」：『中近世土器の基礎研究』、pp.13-21

菅原正明1987、「畿内における土釜の製作と流通」：奈良国立文化財研究所編『文化財論叢』、pp.725-758

鈴木秀典1983、「長原遺跡における9~11世紀の土師器・黒色土器の器種構成」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.231-237

趙哲済2017、「大阪沿岸低地における古地理の変遷、その最新情報」：『難波宮下層遺跡と上町台地北端部の開発』発表要旨集大阪歴史学会現地検討会、pp.1-12

福島正和2001、「摂津C型羽釜考」：大阪文化財調査研究センター編『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』、pp.132-137

藤澤良祐他1993、瀬戸市埋蔵文化財センター編『東海の中世窯-生産技術の交流と展開-』、pp.18-19、50-64

松本彰2012、「11世紀~13世紀における播磨の須恵器-鉢の生産について-」：『中近世土器の基礎研究』24、pp.37-51

森島康雄1992、「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」：『大和の中世土器』Ⅱ、pp.113-127

森田稔1995、「中世須恵器」：『概説 中世の土器・須恵器』、真陽社



北区西天満四丁目180における建設工事に伴う  
天神橋遺跡発掘調査(TJ17-2)報告書

調査個所 大阪市北区西天満4丁目180  
調査面積 112㎡  
調査期間 平成29年4月17日～4月28日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、松本啓子

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は弥生時代～近世の集落遺跡である天神橋遺跡の西辺部に位置する(図1)。調査地の東約200mのWT05-1次調査では17世紀中頃の、また、南東約250mのTJ11-2次調査では中世の遺構・遺物が出土した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。南約200mの地点では、堂島川北岸に並ぶ江戸時代の蔵屋敷群の中でも有力藩の佐賀藩蔵屋敷が調査され(OS90-75次・SH12-1次調査)、船入遺構や鍋島焼などが良好な状態で検出された[大阪市文化財協会1991、大阪文化財研究所2012]。

平成29年2月22日の大阪市教育委員会による試掘調査で、地表下2.1m以下に本格的な発掘調査が必要な近世以前の遺構面と遺物包含層が発見されたため、こうした地層の年代や、遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史の変遷の基礎資料を得ることを目的として調査を行うこととなった。

調査は平成29年4月17日より開始した。南北8m、東西7mの調査区を東西2箇所に設けて(図2)、近代・現代の地層を重機で除去し、第1層以下の地層と遺構を人力によって掘削した。その途中、適宜に写真撮影・実測図の作成などの記録保存を行い、遺物の捕集に努めた。平成29年4月28日に現地におけるすべての作業を終えて撤収し、調査を完了した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づくものである。また、標高はTP値(東京湾平均海面値)で、 $TP \pm \text{〇m}$ と記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4、図版1上・3上)

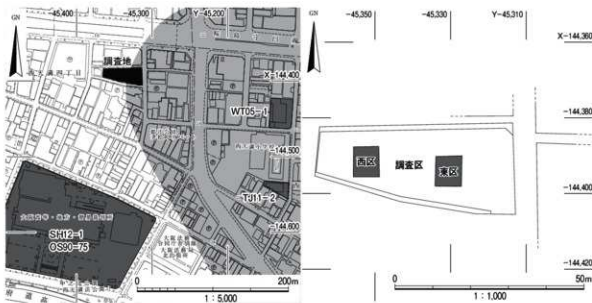


図1 調査地位置図

図2 調査区配置図

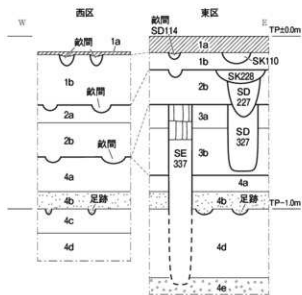


図3 地層と遺構の関係図

調査地の現況地形は平坦で、地表面の標高はTP+2 m前後であった。東西二つの調査区は直接繋がっていないので、TP 0m～-1.5mの間で確認した両区の地層を、各層の岩相と標高、出土遺物の時期から、以下の4層に分類した。

第1層：火災後の整地層である第1a層と、18世紀末から19世紀初頭の作土層の第1b層に分けた。

第1a層は、東区では灰黄褐色(10YR5/2)炭・焼土・細粒砂混り砂質シルト層で、東区の西壁際と東壁際に分布していた。層厚は西壁際で22 cm、東壁際は5 cm未満であった。

西区の第1a層は、層厚が2～3 cmの暗褐色(10YR3/4)炭・焼土・細粒砂混り粘土～シルト質粘土層で、西区全面に分布していた。

第1b層は、東区では最大層厚20 cmの暗灰黄色(5Y4/1)炭・焼土混りシルト質砂を主体とし、西区では最大層厚40 cmの黒褐色(2.5Y3/1)炭・焼土・礫混り砂質シルトを主体としていた。両区とも本層上面で第1a層で覆われる畝間を検出した。

東区第1a層出土の肥前磁器段重の破片や、西区第1b層上面の畝間SD105出土の瀬戸美濃焼磁器の小片から、第1a層は19世紀の火災後の整地層と考えられる。第1b層からは18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土した。

第2層：18世紀前半の作土層で、西区では第2a層と第2b層に分かれるが、東区では第2b層のみ堆積していた。

西区の第2a層は、最大層厚が30 cmの灰黄色(2.5Y4/1)炭・細粒砂・マンガン・酸化鉄が混じる粘土質シルト層からなる。

西区の第2b層は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂・礫混りシルトを主体とし、最大層厚は35 cmである。東区の第2b層は、黄灰色(2.5Y5/1)炭・礫混り粘土質シルトを主体とし、最大層厚は30 cmである。

第2a・2b層とも18世紀前半の遺物が出土した。西区第2a層上面で、第1b層で埋まる畝間を検出し、東区第2b層上面で、土窟SK228・区画溝SD227を検出した。

第3層：東区のみに見られた中世末～近世初頭の遺物を包含する整地層で、第3a・3b層に分けた。第3a層はにぶい黄色(2.5Y6/3)炭・焼土・粘土・礫混り砂質シルト層で、最大層厚は25 cmある。

第3b層はにぶい黄色(2.5Y6/4)粘土・礫混り細粒砂を主体とし、東側から土を投入して斜面を嵩上げしている。最大層厚は80 cmになる。

第3a層から青花や肥前陶器、第3b層から瓦器碗と青花といった豊臣後期までの遺物が出土したが、本層上面で検出した井戸SE337と区画溝SD327、これに平行・直交する溝SD331～333などの遺構は18世紀前半のものであるので、ひとまず本層は、16世紀末の豊臣後期以降、18世紀前半までのいず

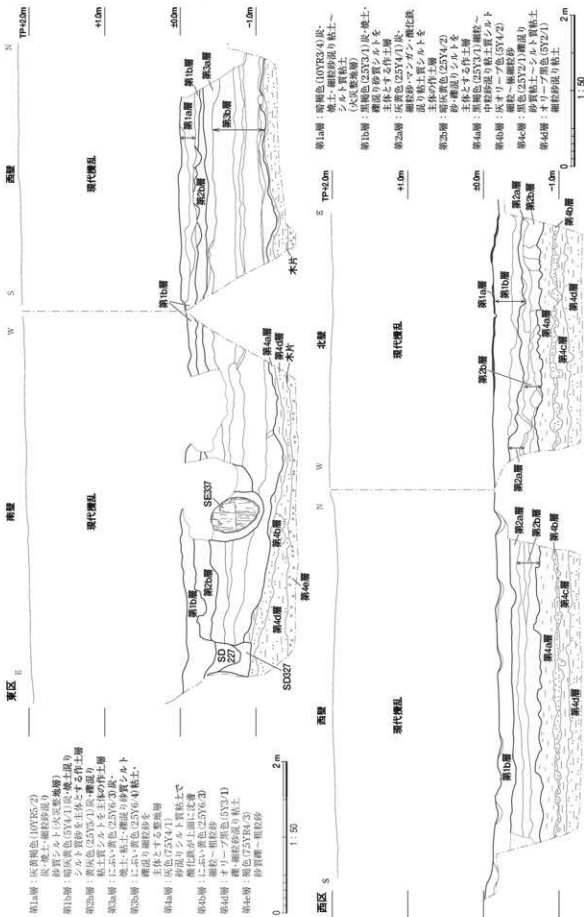


図4 地層断面図

れかの時期の整地層と考えておく。

第4層:水成層で、第4a～4e層の5層に分けた。このうち上部の第4a～4d層は湿地の堆積層である。

第4a層は、東区では灰色(7.5Y4/1)砂混りシルト質粘土層で酸化鉄が上面に沈着する。最大層厚は14cmである。西区では黒褐色(2.5Y3/1)細粒～中粒砂混り粘土質シルト層で、最大層厚は30cmある。西区第4a層上面には第2b層下面の畝間の痕跡が残る。

西区の第4a層から平瓦と箸が出土した。

第4b層は、東区ではにぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～粗粒砂層で、最大層厚は20cmである。西区では灰オリーブ色(5Y4/2)細粒～極細粒砂層で、最大層厚は20cmである。両区とも全域に分布する。

第4c層は、西区で見られた地層で、東区では見られなかった。黒色(2.5Y2/1)礫混り砂質粘土～シルト質粘土層で、最大層厚は30cmである。本層上面で第4b層で埋まる偶蹄類や人の足跡が多数検出された。

第4d層は、東区で最大層厚は45cmのオリーブ黒色(5Y3/1)礫・細粒砂混り粘土層、西区でオリーブ黒色(5Y2/1)細粒砂混り粘土層である。西区の掘削は本層中までで、本層は30cm以上の層厚がある。トレンチ掘削の際、東区の第4d層から土師器の破片が出土し、西区の第4d層から平安時代の黒色土器の破片が出土した。

東区の第4d層上面で第4b層で埋まる偶蹄類や人の足跡と浅い溝が検出された。

第4e層は東区で確認した地層で、褐色(7.5YR4/3)砂質礫～粗粒砂層である。層厚は15cm以上で、湧水がひどく、本層以下の地層は確認していない。

## ii) 遺構と遺物(図5)

### a. 中世以前(図5・6、図版1中・下、3中)

西区第4c層上面はTP-1.0mの深さで平坦になっており、全域で足跡が検出された。

東区第4d層上面は東側がTP-1.0m、西側がTP-1.1mで、西側がやや低くなっていて、調査区の中央部から南壁の南西隅に向かって溝状に浅い窪みが検出され、その周辺に足跡とみられる窪みが検出された。

両調査区ともこれらの足跡や窪みは第4b層の砂で埋まり、その上に湿地の粘土層(第4a層)が堆積していた。足跡や窪みからの遺物はないが、西区第4d層から内黒の黒色土器片、東区第4d層から土師器片、西区第4a層から箸と平瓦片が出土し、その上の第3b層から中世末期の遺物が出土していることから、中世でも終わり頃の足跡や窪みの可能性が高いと思われる。

また、第4a層は中世末期以前の地層であるが、西区の第4a層の上面では、直上に堆積する第2b層で埋まる浅い溝状の窪みが検出された(図6、図版2上)。第2b層の耕作痕跡であろう。

### b. 近世(図7～9・12、図版2中、3下、4)

東区の第3a層上面(図7、図版3下)で、18世紀前半の溝と井戸、小穴を検出した。

溝SD327は調査区の東端で見つかった。幅0.4～0.5m、深さ約0.5mの南北方向の溝で、溝の側壁を垂直に、底面を平らに掘っている。水の流れた痕跡はなく、暗黄灰色(2.5Y5/2)細粒砂で埋められていた。この溝は第2a層上面でも同じ位置で掘り直して踏襲されている(図版4中)。



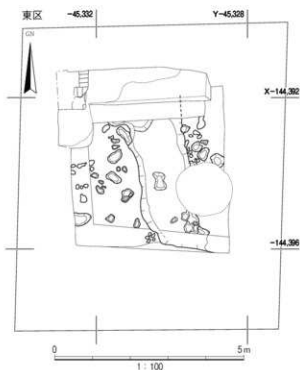


図5 東区第4d層上面

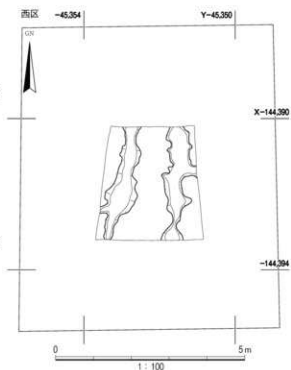


図6 西区第4a層上面・第2b層下面遺構平面図

また、この第3a層上面で幅0.3m、深さ5cmほどの浅い溝SD331・333がSD327に直角に取りつき、SD327の西肩から0.9~1.0m離れたところに幅0.1m、深さ2~3cmのSD332が平行して掘られている。SD331・333の埋土は暗黄灰色(2.5Y4/2)炭・焼土・細粒砂混りのシルトで、SD332の埋土はオリブ褐色(2.5Y4/3)炭・細粒砂混りのシルトである。

第2a層上面にSD327を踏襲した溝があることや、第3a層上面の溝の配置から、SD327は土地区画の溝と考えられる。

SD327から18世紀前半の遺物が出土し、図12に土師器焙烙6、京焼平碗9、肥前磁器染付碗10と染付小杯13を示した。9は高台内に「清水」のスタンプがあり、10は「大明年製」の銘款がある。

このほか、第3a層上面では桶の底を抜いて2段以上を積んで井戸側にしたSE337が見つかった(図版4上)。SE337の掘形は直径約0.6mの円形で、掘形の埋土はにぶい黄橙色(10YR6/4)粘土・焼土・礫混りシルト質砂である。この掘形の西側にもうひとつの掘形があり、SE337は掘り直しが行われたことがわかる。直径45cmの桶を利用した井戸側は掘り直した時に設置したものである。古い方の掘形はにぶい黄色(2.5Y6/3)

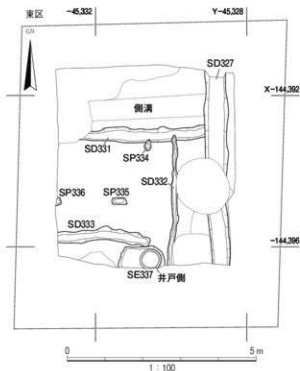


図7 東区第3a層上面遺構平面図

シルト・礫混りの細粒砂で埋められていた。SE337は南壁際にあるため、安全を期して完掘していない。新旧の掘形からの遺物はなく、井戸側内から18世紀前半の遺物が出土した。

東区の第2b層上面(図8、図版4下)で18世紀前半の溝・土壇・小穴を検出した。

SD227は第3a層上面のSD327を踏襲して同じ位置に設置された区画溝である。幅約0.5m、深さ0.5mで、断面がU字形の溝で、黄灰色(2.5Y4/1)礫・木片混りのシルト質細粒砂で埋まっており、18世紀前半の遺物が出土した。

SD227の上に土壇SK228が掘られていた。東西約1.1m、南北約2.0m、深さ約0.2mの隅丸長方形の土壇で、埋土は褐灰色(10YR5/1)炭・焼土混り砂質シルトで、18世紀前半～中頃の遺物が出土した。

図12に肥前磁器染付碗11と鉢12を示した。どちらも蔓草のような同じタッチの草花文が描かれ、高台内には文字かどうかはわからないが、同じ銘款がある。18世紀前半～中頃のものと思われる。

西区の第2a層上面(図9、図版2中)で18世紀代の耕作痕跡を検出した。

耕作痕跡は、幅0.3～0.6m、深さ3～10cmの浅い溝SD215・216・220や、長さ1.3m、短径0.9m、深さ7cmの土壇SK218、直径0.1～0.2mの小穴などである。埋土はSD215が黒褐色(2.5Y3/1)炭・焼土・礫混り砂質シルトで、他は暗灰黄色(2.5Y5/2)炭・焼土・粘土混り細粒砂質シルトである。

SD216から18世紀前半の遺物が出土したほか、SD215からは18世紀後半の遺物が出土したので、この面の耕作は18世紀後半まで行われたものと考えられる。

#### c. 近世末期(図10～12、図版2下)

東区と西区の第1b層上面で18世紀末～19世紀代の土壇や溝を検出した。

東区の第1b層上面(図10)で見つかったSD112～115・130は畝間の溝で、東西方向のSD114・

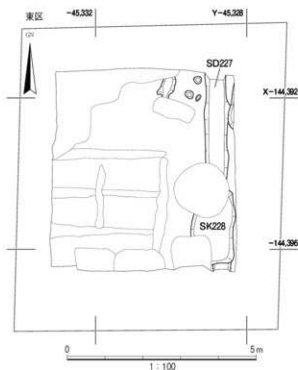


図8 東区第2b層上面遺構平面図

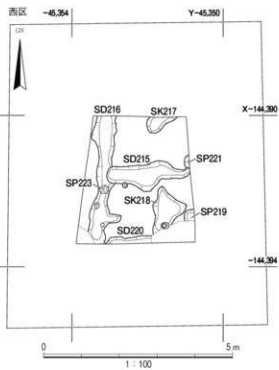


図9 西区第2a層上面遺構平面図

115・130と南北方向のSD112・113があり、東西方向のものが南北方向の溝に先行する。埋土は黄灰色(2.5Y6/1)炭・焼土・細粒砂混り砂質シルトで、機能時に堆積したものである。SD114から18世紀末～19世紀初頭の遺物とともに銅製の切羽17が出土した。刀の鐔や鞘口の飾り金具である。

また、東区第1b層上面のSK110は長径約1.2m、短径約0.4m、深さ約0.5mの平面長方形の土壇で、褐色(10YR4/1)礫・炭・焼土混り粗粒砂で埋まっていた。図12にSK110出土の肥前磁器染付鉢14・青磁染付碗15・蛇の目凹形高台をもつ染付輪花皿16を図示した。これらは18世紀末～19世紀初頭までのものである。

西区の第1b層上面(図11)では東西方向の畝間の溝SD101～106が約0.9mの等間隔で配置されている。埋土は黄灰色(10YR7/3)にぶい黄橙色中粒～粗粒砂で、SD105から瀬戸美濃焼磁器片が出土しているので、これらは19世紀の耕作溝と考えられ、東区の第1b層の遺構より新しい。

#### d. 各層の遺物(図12)

各層の出土遺物のうち、東区第3b層の中世後半の瓦器椀1と豊臣期の中国産青花皿4、東区第3a層の豊臣後期の肥前陶器小碗2と碁笥底の底部3を示した。これらが第3層出土の遺物のすべてで、これらから豊臣後期が第3層の時期の上限と考えた。東区第2b層出土のミニチュア土人形の仏像18は18世紀前半の遺物とともに出土したものである。また、西区の第1b層上面で掘削した側溝から出土した中国産青花皿5、京焼の破片7・8は、中国産青花皿5が本調査では西区に見られなかった第3層由来のものとの可能性があり、京焼の破片7は乾山風の絵付けを施し、8は上絵で緑と赤で絵付けをしていて、ともに18世紀前半の上手の製品で、第2層由来のものとの可能性がある。

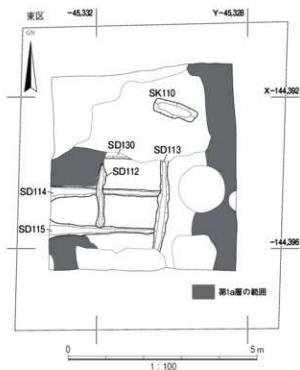


図10 東区第1層上面遺構平面図

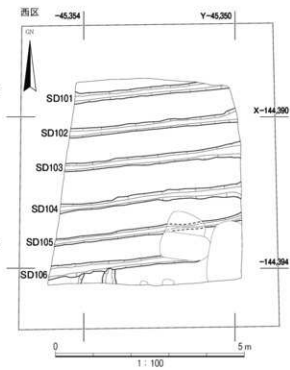


図11 西区第1b層上面遺構平面図

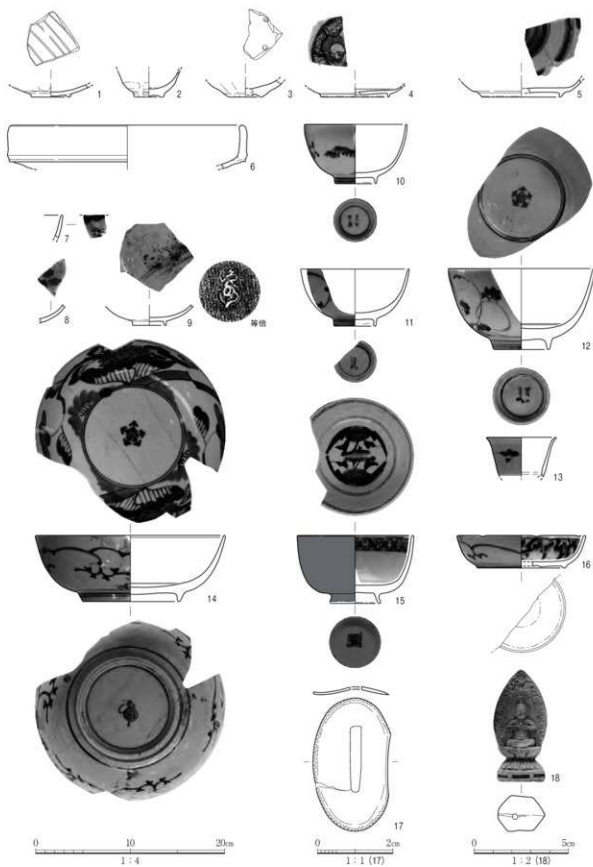


图12 出土遗物实测图

东区第3b层(1·4)、东区第3a层(2·3)、西区第1层以下(5·7·8)、东区第2b层(18)、东区SD327(6·9·10·13)、东区SK228(11·12)、东区SK110(14~16)、东区SD114(17)

### 3) まとめ

今回の調査では中世から近世末までの遺構・遺物を検出した。この結果をもとに土地利用の様子を概観すると、まず、調査地周辺が安定した陸地となったのは、東区に第3層の整地がなされた時点で、豊臣後期まで遡る可能性があるが、豊臣後期の遺構は見つかっていない。西区では第3層の整地がなく、この時点はまだ湿地であったと考えられる。確実な生活面と考えられるのは東区の第3層上面からで、18世紀前半までには区画溝が設置された。その後、東西両区に作土層の第2層や第1b層が堆積し、耕作地として19世紀初頭頃まで利用されたのである。

今回の調査では建物などの居住にかかわる遺構は見られなかったが、近辺に存在する可能性が高く、調査地の南にある江戸時代の蔵屋敷群との関係も含め、今回の調査はこの地域の歴史的景観を復元する手掛かりのひとつになった。

#### 引用参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「西天満3丁目所在遺跡発掘調査(WT05-1)報告書」：「平成17年度  
大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.3-8
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「天神橋遺跡発掘調査(TJ11-2)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵  
地発掘調査報告書(2011)」、pp.51-60
- 大阪市文化財協会1991、「旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構調査報告」、pp.1-36
- 大阪文化財研究所2012、「佐賀蔵屋敷跡発掘調査報告」



北区天神橋一丁目16-12における建設工事に伴う  
天神橋遺跡発掘調査(TJ17-3)報告書

調査個所 大阪市北区天神橋1丁目16-12  
調査面積 約81㎡  
調査期間 平成29年6月5日～平成29年6月9日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工・平田洋司



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は天満天神社(大阪天満宮)の南側、正門より約70m東に位置する。当地には江戸時代末創業とされる料亭「相生楼」が存在し、また、敷地南端付近には川端康成の生家があったとも伝えられている。天神橋遺跡の東部に当たる天満天神社周辺は天満地域の中で最も標高が高く、調査地北東約100mのTJ01-1・10-1次調査では、TP+2.0~2.5mで古代から中世に形成された古土壌と古代の溝・土壌などの遺構のほか、墨書土器・瓦などの遺物が確認されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。また、両調査地では豊臣期の整地層のほか、豊臣~徳川期の遺構・遺物も検出されている。南西約120mのTJ16-5次調査では中世の作土層のほか、豊臣期の整地層、豊臣後期~徳川初期の鍛冶工房に関連する遺構・遺物が確認されている[大阪文化財研究所2017]。

今回の調査地では大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下2.3m以下で近世以前の遺構面・遺物包含層が検出されたことから、調査を実施することとなった。教育委員会の指示に基づき、敷地北部に東西9m、南北9m、81㎡の調査区を設定し、平成29年6月5日より調査を開始した。重機による掘削は後述の第3層までとし、以下は人力による掘削とした。また、第4層以深については調査深度が深くなることから、安全のため四周に犬走りをつけてその内部で掘削を行った。途中、適宜遺構検出・掘削、図面作成、写真撮影を行い調査を進め、平成29年6月9日、機材類の撤収を行い現地における調査を完了した。

基準点はMagelan社製ProMark3によって測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

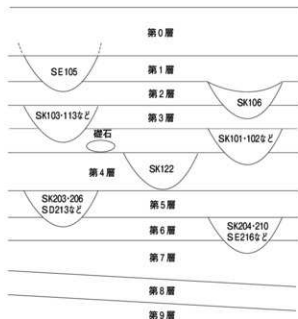


図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4、図版上)

調査地の現況地形はTP+5.4~5.6mとほぼ平坦である。調査では部分的な掘削を含めて、現地表下4.0mまでの地層を確認した。

第0層：現代整地層および攪乱である。層厚は約120cmである。

第1層：上部は黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂、下部はシルト偽礫を含む黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粗粒砂からなる整地層である。層厚は最も厚い部分で80cmである。18世紀後半以降の整地層である。

第2層：オリブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗

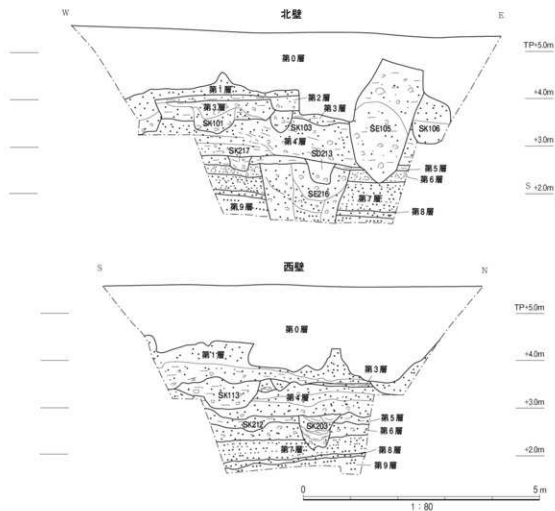


図4 地層断面図

粒砂からなる整地層で層厚は10cmである。18世紀中葉以降の整地層である。

第3層：粗粒砂質シルトからなる整地層で、残りの良好な西北部では上部のシルト偽礫を多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト(第3a層)、下部の炭・シルト偽礫を多く含む黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂質シルト(第3b層)に細分することができた。各層の上面に生活面が認められる。層厚は最大40cmである。それぞれの遺構面の出土遺物から第3a層は18世紀中葉、第3b層は18世紀前葉の整地層と考えられる。

第4層：黒色(10YR2/2)シルト質中粒～粗粒砂、暗オリーブ褐色(5Y4/1)シルト質粗粒砂などからなる整地層でシルト偽礫・炭を含む。層厚は60～100cmである。西から東へと客土した様子が観察できた。西半では水平に近い複数の整地層からなるが、東半ではこれらの整地層はいずれも薄くなり、瓦片を多く含む整地によって一度に水平にされていることから、東半の整地はやや遅れる可能性がある。出土遺物や上面の遺構の年代から17世紀末葉の整地層と考えられる。

第5層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂からなる整地層で層厚は10～20cmである。上部の第4層と一括して除去したため、出土遺物の特定はできないが、本層より新旧の遺構の時期関係から17世紀後葉の整地層と考えられる。

第6層：シルト偽礫を多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂からなる整地層で、層厚は20～30cmである。出土遺物は多くないが、豊臣期に遡る可能性がある。

第7層：暗褐色(10YR3/4)中粒～粗粒砂で、層厚は30～60cmである。第8・9層が斜面に再堆積したものであろう。出土遺物は多くないが、中世にかけて形成されたと推定できる。

第8層：シルトを少量含む暗褐色(10YR3/3)中粒～粗粒砂で、層厚は10～15cmである。第9層が擾乱を受けたものである。8～9世紀代の遺物を含む。

第9層：褐色(10YR4/4)粗粒砂からなる河成層で、層厚は40cm以上である。遺物は出土しなかった。

#### ii) 遺構と遺物(図5～8、図版中・下)

遺構検出作業は第4・6・8・9層上面で行った。以下おもなものについて記す。

第9層上面では遺構は検出されなかった。第9層上面の地形は調査区北西端でTP+2.0m、南東端でTP+1.5mと北西から南東へと下がる斜面となっていた。第9層が土壌化した第8層からの出土遺物には、土師器・須恵器・製塩土器・瓦片がある。1～4は土師器で、1・2は皿、3は鉢、4は甕である。5～8は須恵器で、5・6は杯蓋、7は杯、8は壺である。ほかの出土遺物と合わせ第9層の年代は8～9世紀代に位置づけられる。

第8層上面および第7層上面では遺構は検出されなかった。第7層からは古代の土師器・須恵器のほか13世紀代の瓦器片などが出土したが遺物の包含は極めて少ない。須恵器稜皿9を図示した。

これらのことから調査地は古代には斜面に当っており、地形と過去の調査成果と合わせるのと北側の高い部分に集落が存在したと考えられ、この斜面は中世にかけて徐々に平坦になっていったと推定される。

第7層を覆う整地層である第6層出土遺物には備前焼播鉢10のほか瀬戸美濃焼片があり、豊臣期の整地層の可能性が高い。

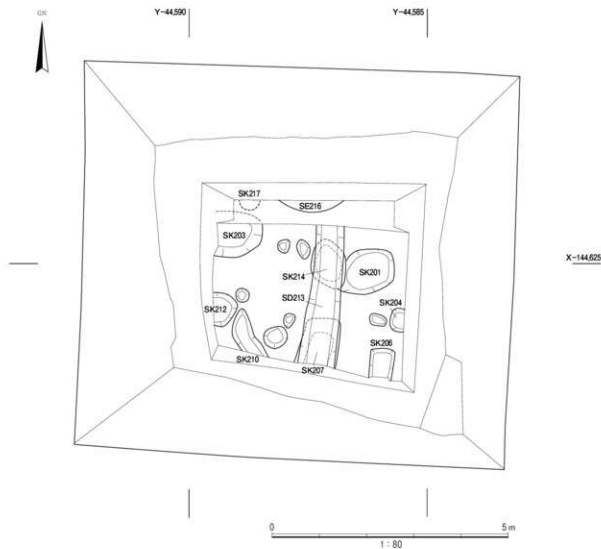


図5 第5・6層上面の遺構

第6層上面では、土壌・井戸などを検出した。ただし、調査当初は整地層である第5層を認識しておらず、本来は第5層上面の遺構も同一面で検出することとなった。第5・6層上面検出遺構として合わせ図示し、地層断面の観察や埋土によって分けることを試みる。

第6層上面の遺構にはSK204・210・212のほか断面でのみ検出したSE216・SK217がある。

**SK204** 調査区東端で検出した直径0.5m、深さ0.1mの土壌である。埋土は整地層である第6層である。土師器皿片が出土したが詳細な時期は不明である。

**SK212** 調査区西端で検出した直径0.7m、深さ0.1mの土壌である。埋土は整地層である第6層である。出土遺物はない。

**SK210** 調査区南端で検出した深さ0.2mの不整形の土壌である。埋土は粗粒砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

**SE216** 調査区の北壁で確認した直径1.9m以上、深さ1.2m以上の井戸である。遺物は出土しなかった。

このほか、調査区全域で検出した直径0.3~0.5mの平面形が円形で、深さ0.1m前後の小土壌につい

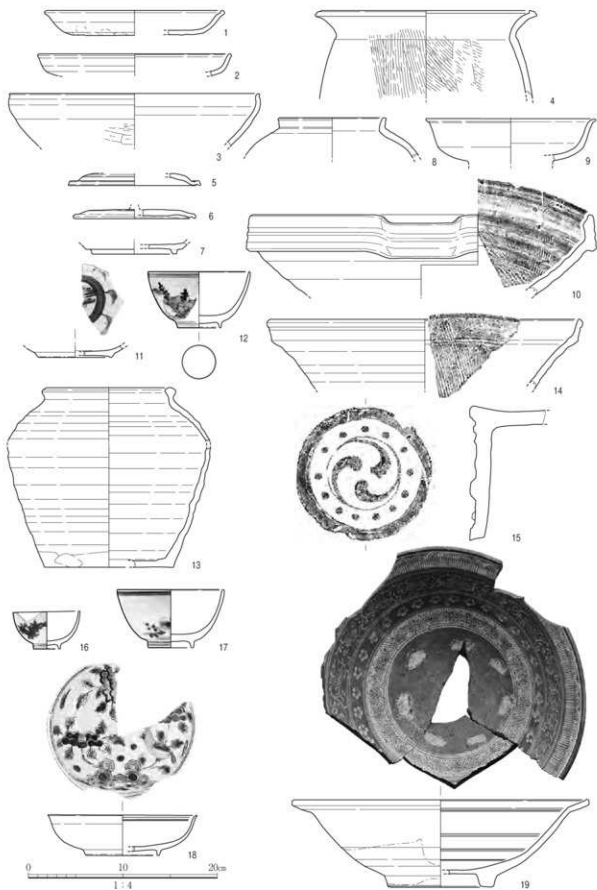


图6 出土遺物実測図(1)

第8層(1~8)、第7層(9)、第6層(10)、SK214(11~15)、第4層(16~19)

でも埋土が第5層に類似していたことから、第6層上面の遺構の可能性はある。

第5層上面の遺構にはSK203・206・207・214・SD213がある。

**SK203** 調査区西北で検出した南北幅0.8m、深さ0.7mの土壌である。埋土は炭層と人為の埋戻し土の互層である。土師器・備前焼・肥前磁器片が出土した。

**SK214** 南北1.0m、東西0.7mの平面形が楕円形で、深さは0.8mの土壌である。埋土には炭とシルト偽礫を多く含む。土師器・瓦質土器・備前焼・肥前陶磁器・中国産青花・瓦片などが出土した。11は中国産青花皿である。高台内は露胎である。12は肥前磁器碗である。13は丹波焼壺、14は胎土に白色砂粒を多く含む信楽焼と考えられる播鉢である。15は巴文軒丸瓦である。これらの出土遺物は17世紀後葉に位置付けられよう。

**SK207** 東西0.8m、南北1.0m以上の平面形が方形の土壌で、南は調査区外へ続く。深さは0.8mであり、埋土は炭を少量含むシルトである。土師器片が出土した。

**SK206** 東西0.5m、南北1.0m以上の平面形が方形の土壌で、南は調査区外へ続く。深さは0.6mであり、埋土には炭とシルト偽礫を多く含む。軟質施軸陶器・肥前陶磁器など17世紀後葉の遺物が出土した。

**SD213** 幅0.6～0.7m、深さ0.4mの南北方向の溝である。SK207・214より新しい。遺物は出土しなかった。

上記のように第5層上面の遺構には南北あるいは東西方向に主軸を持つ、比較的大型のゴミ穴と考えられる土壌が多いことが指摘できる。時期のわかる遺物はいずれも17世紀後葉であることからベースとなる整地層の第5層はその直前の時期である可能性が高い。

第5層上面の遺構が廃絶したのは厚さ60～100cmにも及ぶ第4層の整地が行われる。第4層からは土師器・瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼・肥前陶磁器のほか、多くの瓦片が出土した。16・17は肥前磁器碗で16の文様はコンニャク印判による。18は肥前磁器色絵皿で、内面に花鳥文を配する。19は肥前陶器三島手の鉢で内底面には7個の砂目痕がある。出土遺物の多くは17世紀末葉の特徴を示すが、最上部からの出土遺物には18世紀初頭に降る遺物も含まれる。ただし、18世紀代以降の遺物については後述のSK122など第4層上面の遺構との年代観と逆転することから、上部の遺構の掘り残しなど混入の可能性が高く、第4層の時期を17世紀末葉と考えておきたい。

第4層上面では多くの遺構を検出した。第4層上面まで機械で掘削を行ったため、上位の遺構も含まれる。一括して図示し、ここでは主要なものを記す。

**礎石** 第4層上面にて4個の礎石を確認した。礎石1を除いては原位置より動いているため、建物などの詳細は不明である。

**SK122** 調査区中央で検出した東西0.9m、南北1.2m、深さ0.3mの土壌である。埋土は炭・シルト偽礫を多く含むシルト質中粒砂と中粒砂の互層でゴミ穴としての機能が考えられる。切合い関係にある遺構の中でもっとも先行する。土師器・備前焼・丹波焼・肥前陶磁器などが出土した。20は肥前磁器碗で、高台内には「大明年製」の字款がある。21は肥前陶磁器碗、22は肥前陶磁器徳利で暗褐色の釉が掛かる。23は土師器播鉢である。24は産地不明の播鉢で、被熱のため多孔質となっている。これら

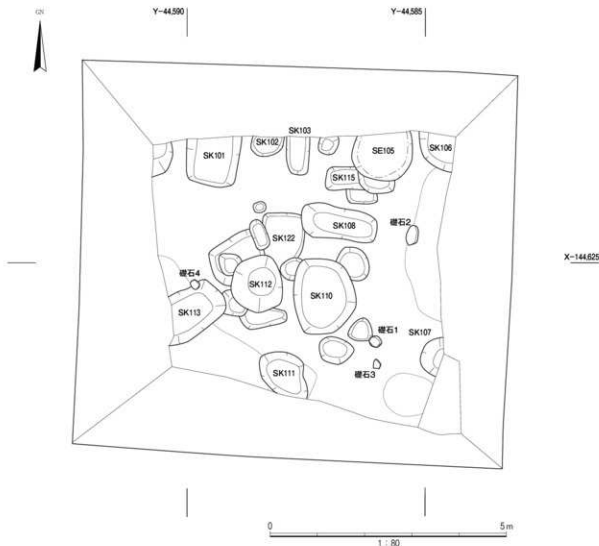


図7 第4層上面以降の遺構

の出土遺物は17世紀末葉に位置付けられることから、ベースとなる第4層の時期を17世紀末葉と推定した。

**SK101** 調査地北部で検出した東西1.0m、南北1.0m以上、深さは0.5mの土壌で、第3b層の上面に遺構面がある。土師器・瀬戸美濃焼・肥前磁器のほか瓦片が出土した。18世紀前葉に位置付けられる。

**SK102** 調査地北端で検出した直径0.4mの平面形が円形の土壌である。第3b層の上面に遺構面がある。土師器・備前焼・丹波焼・肥前磁器など18世紀前葉の遺物が出土した。**SK101・102**から第3b層は18世紀前葉までに位置付けられる。

**SK108** 東西1.6m、南北0.6mの平面形が隅丸方形の土壌で、深さは0.7mである。埋土は炭を多く含むシルト質中粒砂である。多量の瓦片のほか、貝・漆喰片・土師器・備前焼・肥前陶磁器などが出土し、ゴミ穴として使用されたことがわかる。25は肥前陶器皿で内面に鉄絵を施す。内定面は蛇の目軸剥ぎである。26は肥前磁器碗、27は肥前磁器鉢で内底面に五弁花を配する。28は関西系陶器平碗で緑色の上絵付を施すが多くは剥落している。29は堺播鉢で片口内面に刻印が施されている。これらの出土遺物は18世紀前葉に位置付けられる。

SK115 東西0.9m以上、南北0.5mの平面形が方形の土壌で、深さは0.2mである。瀬戸美濃焼・丹波焼・肥前磁器・関西系陶器碗など18世紀前～中葉の遺物が出土した。

SK111 調査区南端で検出した東西1.2m以上、南北0.9mの土壌である。深さは0.5mで底部は平坦である。土師器・肥前陶磁器片など18世紀前葉の遺物が出土した。

SK113 調査区西南で検出した東西1.5m以上、南北1.0mの平面形が隅丸方形の土壌で、深さは0.6mである。第3a層上面に遺構面がある。土師器・備前焼・丹波焼・肥前陶磁器・関西系陶器・瓦片などが出土した。30・31は肥前磁器碗である。32は関西系陶器碗で褐色の上絵付が施されている。これらの遺物は18世紀中葉に位置づけられる。このことからベースとなる第3a層の時期は18世紀中葉と考えられよう。

SK103 調査区北端で検出した東西0.5m、南北0.8m以上の平面形が隅丸方形の土壌で、深さは0.4mである。埋土は炭を含むシルト質中粒砂である。第3a層上面に遺構面がある。土師器・肥前陶器・軟質施釉陶器のほか瓦片が出土した。

SK112 直径1.1m、深さ0.5mの平面形が円形の土壌で、底部は平坦である。切合い関係にある遺構の中でもっとも新しい。また、重機掘削の段階で遺構が認識できており、第3層より上位に遺構面があることは明らかである。少量の肥前磁器片のほか、軟質施釉陶器ミニチュア土釜が出土したが詳細な時期は不明である。

SK110 SK112の東で検出した南北1.5m、東西1.3mの平面形が楕円形の土壌である。深さは0.5mで底部は平坦である。切合い関係にある遺構の中でもっとも新しい。SK112同様、重機掘削の段階で遺構が認識できた。砥石片が出土したのみであり、詳細な時期は不明である。

SK106 調査区東北端で検出した。直径1.0m程度の平面形が円形と想定される深さ1.0m以上の土壌である。埋土上半は第1層の整地層である。肥前陶磁器片が出土したが時期は不明である。

SE105 調査区東北で検出した直径1.2m、深さ2.5m以上の井戸である。第1層より新しい。多量の瓦片のほか丹波焼・瀬戸美濃焼・肥前陶磁器などが出土した。18世紀後葉以降である。

上記のように第4層上面にて一括して遺構検出作業を行ったが、第4層上面に伴う遺構は17世紀末葉、第3b層の整地の時期は18世紀前葉、第3a層の整地の時期は18世紀中葉、第2層の整地の時期は不明であるが、第1層の整地の時期は18世紀後葉に年代の一端があると推定できる。

### 3)まとめ

今回の調査は小面積ながら大阪天満宮近辺における変遷の一端を知ることができた。河川の堆積によって遅くとも奈良時代には調査地は陸化し、斜面が形成された。居住には向かないものの一定量の遺物の存在から奈良時代から平安時代には高所側に集落があったことが推定できる。その後、中世まではあまり積極的に利用された形跡は認められないが、豊臣後期には整地が施され、開発が行われた可能性がある。17世紀後葉になると遺構・遺物量は増大し、以後途絶えることなく調査地は居住域として利用される。17世紀末葉と考えられる第4層の厚い整地は1mにも及び、周辺の景観を一変したものと推測される。整地の方向からは大阪天満宮から周辺に向けてと推測でき、天満宮と参道を結ぶ



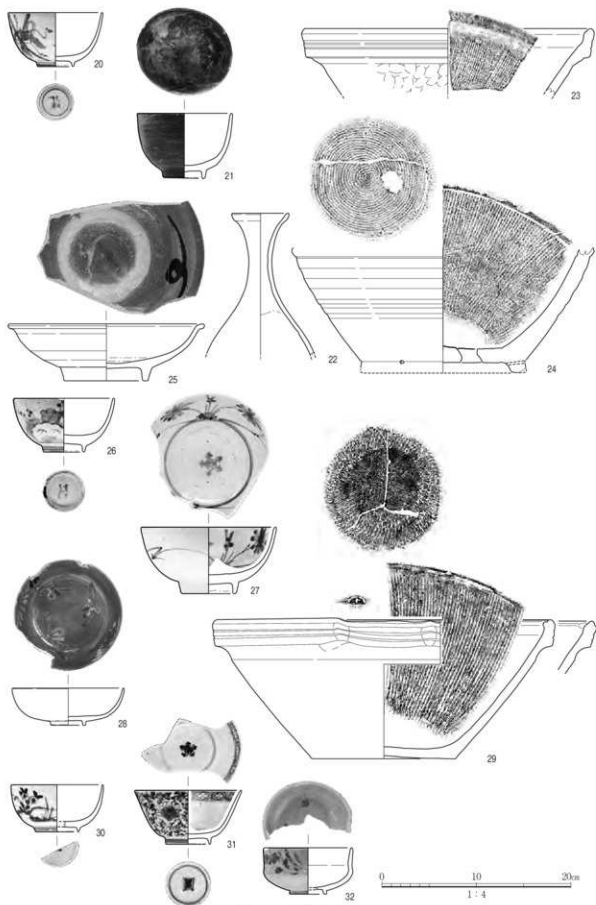


图8 出土遗物实测图(2)

SK122(20~24)、SK108(25~29)、SK113(30~32)

ラインを広い面とすべく整地したとも考えられる。この整地に伴って、18世紀以降の遺構・遺物はさらに増加していることから、調査地周辺における画期のひとつとすることができよう。

今回の調査地を含めた天神橋遺跡では弥生時代から近世まで、いずれの時代においても重要な成果があがっている。調査対象とすべき遺構面も多く、掘削深度も深くに及び、調査が困難な遺跡のひとつではあるが、より多くの情報を蓄積できるよう調査を行っていく必要がある。

#### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財協会2003、「天神橋遺跡発掘調査(TJ01-1)報告書」：「平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.9-12

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「北区天満四丁目における建設事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ10-1)報告書」：「平成22年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)」、pp.37-46

大阪文化財研究所2017、「北区天神橋一丁目13-22における建設事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ16-5)報告書」

北区天満一丁目28-1・28-7・28-3における建設工事に伴う  
天満本願寺跡発掘調査(TN17-1)報告書

調査個所 大阪市北区天満1丁目28-1・28-7・28-3  
調査面積 30㎡  
調査期間 平成29年5月29日～6月1日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、松本啓子

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地のある天満は、天正13(1585)年の天満本願寺と寺内町の建設によって大きく発展した場所であるが、古くは古代の東大寺新羅江庄があったとされる場所で、また中世前半には大川の港津であった波辺の津とともに栄えた場所と推定されており、中世後半には天満天神社(天満宮)の門前町として賑わっていた。

調査地は天満本願寺跡の推定範囲の西部に位置し、調査地の西には天満橋筋が通る(図1)。近隣では多くの調査が行われおり、中でも調査地の北東約300mの大阪造幣局構内の調査では、豊臣前期の城下町や江戸時代の武家屋敷など、各時期の遺構・整地層が見つかり、下位の地層や遺構面ではこれらに先行する古代・中世の遺構・遺物も検出された(TN93-3・95-3・96-1・97-1・01-1・06-1・07-3次調査)。これらの成果はそれぞれ「天満本願寺跡発掘調査報告」I～VIIとして報告書を刊行した[大阪市文化財協会1995・1997・1998a・1998b・2003・2008・2010]。これ以外の場所でも多くの調査が行われ、各時期の様相がより明らかになってきている。

平成29年4月18日に大阪市教育委員会が試掘調査を行なったところ、本地点においても地表面下2.3m以下で、近世以前の遺構面と遺物包含層が確認されたため、本調査を実施することとなった。調査は図2のとおり東西6m、南北5mの調査区を設定し、平成29年5月29日より開始した。地表面下2.3mの深さまでは重機によって掘削し、以下を人力によって精査し、写真・図面等の記録をとった。6月1日に現地における掘削や記録などの作業を終え、器材類を撤収して調査を完了した。

なお、本報告の平面図に示す方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪デジタル地図にあてはめて得た世界測地系座標の座標北で、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±0mと記した。



図1 調査地位置図

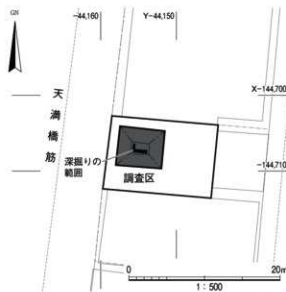


図2 調査区配置図

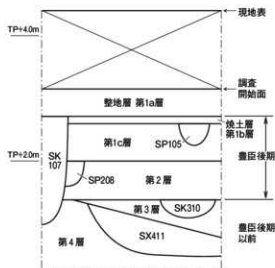


図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4・9、図版上)

調査地の現況地形は平坦で、地表面の標高はTP+4.4m前後であった。各層の岩相から、以下の4層に分類した。

第1層は、火災後の整地層である第1a層と焼土層の第1b層、豊臣後期の整地層の第1c層に細分した。

第1a層は、黄褐色(2.5Y5/3)炭・焼土・細粒砂混りシルト質粘土～粘土質シルト層で、調査区全域に分布していた。層厚は10cmであった。

第1b層は、黒褐色(10YR3/2)炭・焼土混り砂質シルトの焼土層で、最大層厚は10cmである。調査区

の中央から南西部に分布する。本層から土師器や備前焼、瀬戸美濃焼陶器、壁などの豊臣後期の遺物が出土した。これらのうち、瀬戸美濃焼陶器志野の輪花皿2と底部3を図9に図示した。上面で豊臣後期の遺物が出土した土壌SK107が見つかったことで、本層が大坂ノ陣の焼土の可能性が考えられた。

第1c層は、オリブ褐色(2.5Y4/3)礫混りシルト質粘土を主体とする整地層で、上面は生活面で火災に遭っている。第1c層の層厚は8～18cmで調査区全域に分布し、固く締っていた。本層上面で小穴SP105が見つかった。本層から肥前陶器が出土した。

第2層：豊臣後期の整地層で、層厚が5～12cmの固く締った黄灰色(2.5Y6/1)礫混り粘土質粗粒砂層である。調査区全域に分布する。本層上面で小穴SP208が見つかった。本層から瀬戸美濃焼陶器の志野焼とみられる口縁部の破片1が出土した。

第3層：黄灰色(2.5Y6/1)粗粒砂混りシルトを主体とする整地層で、最大層厚は12cmである。調査区西半に分布する。遺物は出土していないが豊臣後期以前の整地層である。本層は上記の第1c・2層ほどは締っておらず、生活面は削平されたものとみられるが、上面で土壌SK310が見つかった。

第4層：調査区全域に分布する層厚70cm以上の厚い整地層で、黄灰色(2.5Y6/1)砂と灰白色(10YR7/1)シルトの互層である。本層から遺物は出土しなかったため、整地の時期は豊臣後期以前としかわからないが、周辺調査の成果からみて、天正13(1585)年の天満本願寺と寺内町の建設による整地に遡る可能性が考えられた。調査区南端の本層上面で不整形な掘込みSX411が見つかった。調査区外へと続いたため、これが土壌であるのか別の整地層であるのかはわからなかった。

### ii) 遺構と遺物(図5～9、図版中・下)

今回の調査では、豊臣後期以前の遺構面が2面と、豊臣後期の遺構面3面が見つかった。

豊臣後期以前の遺構面は、第4層上面と第3層上面である。

第4層上面(図5)では、層序でも述べたように、調査区の南壁際で、土壌が第4層の後で第3層の前に行った整地層と考えられるSX411が見つかった。東西約1.0m以上、南北約0.4m以上の掘込みで、調査区の南へと広がっている。検出できた部分で深さは約0.4mあり、埋土は灰黄色(2.5Y7/2)礫混り

粗粒～中粒砂である。遺物は出土していない。

第3層上面(図6、図版中)では、SK310が見つかった。東西0.9m、南北0.6m以上、深さ約0.2mの土壌である。平面は楕円形で、断面は浅い碗状になっている。土壌の形状に沿って黒色(2.5Y2/1)粗粒砂混りシルト質細粒砂層が堆積し、その上は灰黄色(2.5Y6/2)炭混り粘土質粗粒～細粒砂で埋っていた。遺物は出土していない。

豊臣後期の遺構面は、第2層上面と第1c層上面、その上の第1b層上面である。

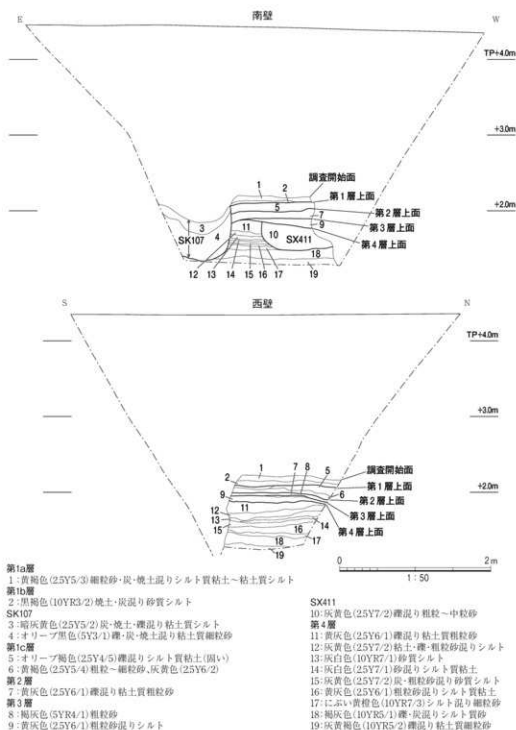


図4 南壁・西壁地層断面図

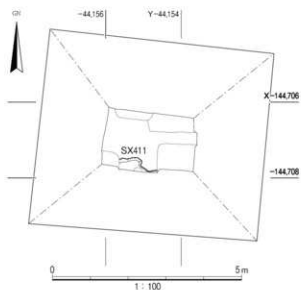


図5 第4層上面遺構平面図

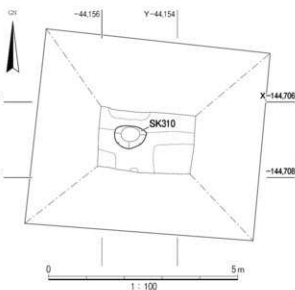


図6 第3層上面遺構平面図

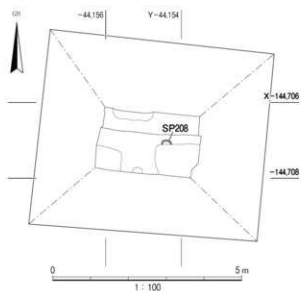


図7 第2層上面遺構平面図

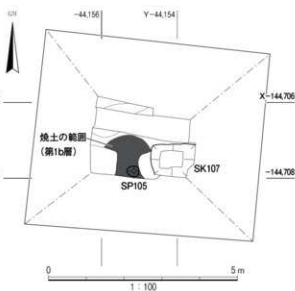


図8 第1b・1c層上面遺構平面図

第2層上面(図7、図版下)では、SP208が見つかった。東西約0.3m、南北0.1m以上の平面が円形の小穴で、深さは約0.1mである。埋土は灰黄褐色(10YR6/2)礫・シルト混り細粒砂である。柱穴か礎石の抜取穴の可能性があり、調査区内では対になるものは見つからなかった。遺物は出土していない。

第1c層上面(図8・9)ではSP105が、また第1c層の上に堆積する第1b層の焼土の上でSK107が見つかった。

第1c層上面は火災に遭っており、SP105は火災の焼土(第1b層)の下で見つかった。直径約0.3mの小穴で、深さは約0.4mである。埋土はふい黄橙色(10YR6/4)粘土・礫・細粒砂混り砂質シルトである。第2層上面のSP208に規模や形状が似ており、柱穴か礎石の抜取穴の可能性があり。調査区内で対になる遺構は見つかっていない。丹波焼の破片が出土した。



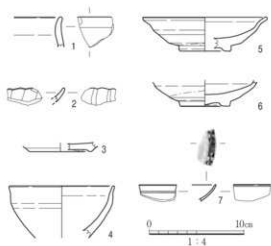


図9 出土遺物実測図

第2層(1)、第1b層(2・3)、SK107(4～7)

様なものが出土した。これらは豊臣後期のもので、図9に瀬戸美濃焼陶器天目碗4、肥前陶器の折縁皿5と皿底部6、青花口縁部7を図示した。

### 3) まとめ

今回の調査では、豊臣後期の生活面とその上面で大坂ノ陣とみられる焼土層を検出した。また、下位層で豊臣後期以前の比較的厚い整地層も検出した。今回の調査は面積が大きくないので、各遺構の性格はつかめなかったが、時代の定点となる可能性がある地層を確認できたことは、このあたり一帯の歴史的景観を復元するための手がかりになると思われる。今後の調査と合わせてさらなる検討を行いたい。

#### 引用参考文献

- 大阪市文化財協会1995、「天満本願寺跡発掘調査報告」I
- 大阪市文化財協会1997、「天満本願寺跡発掘調査報告」II
- 大阪市文化財協会1998a、「天満本願寺跡発掘調査報告」III
- 大阪市文化財協会1998b、「天満本願寺跡発掘調査報告」IV
- 大阪市文化財協会2003、「天満本願寺跡発掘調査報告」V
- 大阪市文化財協会2008、「天満本願寺跡発掘調査報告」VI
- 大阪市文化財協会2010、「天満本願寺跡発掘調査報告」VII



福島区福島五丁目52-1 他における建設工事に伴う  
福島5丁目所在遺跡発掘調査(FK17-1)報告書

調査個所 大阪市福島区福島5丁目52-1他  
調査面積 468㎡  
調査期間 平成30年1月9日～3月8日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、積山 洋

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は標高-0.4m前後の低湿地に位置する新発見の遺跡である(図1)。この地の北方100m余には近世大和田街道が西北西に向かって走り、南方約600mには堂島川が南西に流れ、その両岸には近世諸藩の蔵屋敷跡が展開している。

当該地において、大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、地表下約1.7m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたことにより、東西36m・南北13mの規模で発掘調査を実施することとなった。調査地は東西二区に分割し、西区での調査を終えたのち、東区の調査を実施した(図2)。両区とも機械掘削の深度は約1mであった。調査期間は頭書にあげたとおりである。調査期間中、大阪市立自然史博物館の中条武司氏をはじめ地質学の専門家を招き、後述する第8層などについてのご教示を賜った。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5・9)

第0層：現代の攪乱層である。TP-0.5m前後の現地表面から0.5～1.2mほどの厚さがあり、さらに深いところもある。

第1層：現代の盛土層である。

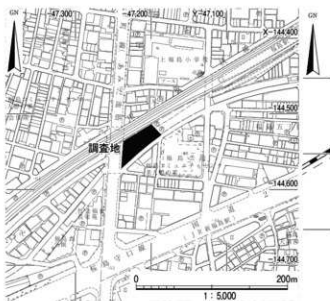


図1 調査地位置図

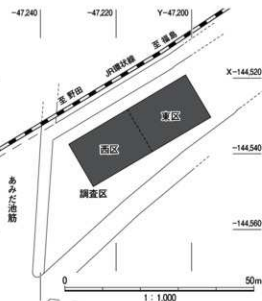


図2 調査区配置図



図3 地層と遺構の関係図

第2層：現代の盛土層である。第1層と合わせた厚さは最大70cm程度であった。

第3層：本層以下は人力で掘り下げた。調査区全域に分布する暗灰黄色砂混りシルトで、作土層である。厚さは最大20cm余であった。第3層からは年代のわかる遺物の出土がほとんどないが、近世～近代とみられる。

第4層：オリープ黒色砂混りシルトで、第3層より砂の含有は少ない。作土層とみられる。調査区全域に分布し、厚さは平均して10cmほどである。やはり遺物の出土はないが、近世かとみられる。

第5層：第5a層は灰オリープ色細粒砂混りシルトで、厚さは最大で約30cmであるが、平均は10cm以下である。これも作土層とみられる。本層の下で、東区東端の一部にのみ分布する第5b層は黄褐色シルトに暗灰黄色中～粗粒砂が混じる整地層であり、最大層厚は約15cmである。ここから15世紀後半頃の瓦質土器羽釜10と17世紀前半とみられる肥前陶器皿11が出土した。第5b層の年代は17世紀の前半とみられ、第5a層も、それからさほど降らないとみられる。

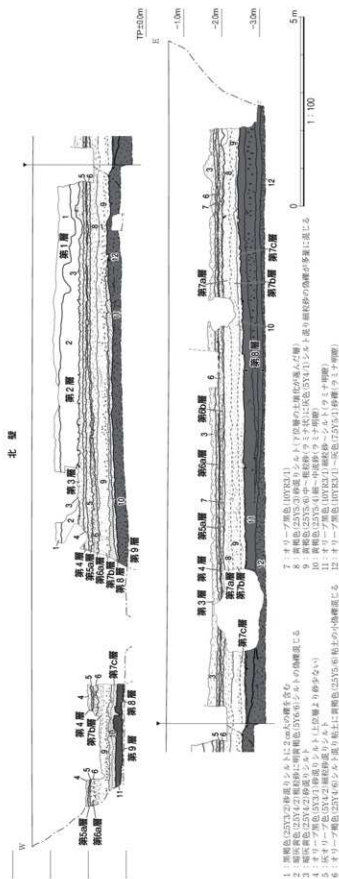


図4 北壁地層断面図

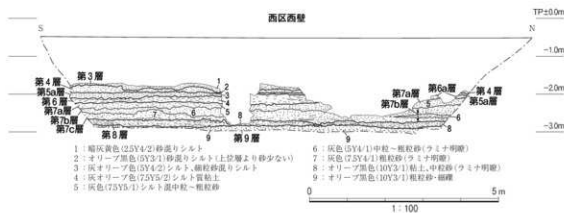


図5 西区西壁地層断面図

第6層：2層に分かれる。第6a層はオリーブ褐色～灰オリーブ色シルト質粘土で黄褐色粘土の小偽礫が混じる盛土ないし整地層である。厚さは5～15cmほどである。本層から出土した遺物は中国産磁器と国産の土器類がある。前者では16世紀後半頃の青花皿4、白磁皿7などがあり、後者では15世紀の備前焼播鉢6、13世紀の瓦器碗8・東播系須恵器こね鉢9のほか、土師器の管状土鍾5、15世紀後半頃の瓦質土器播鉢3などがあり、かなり年代幅がある。本層の年代は最新の中国産磁器が示す16世紀後半頃と考えられる。第6b層は暗灰黄色シルトで、層厚は5cm以下、主に東区に分布していた。

第7層：黄褐色の砂礫層で、層厚は最大60cmにおよぶ水成層である。本層は洪水による一連の地層であるが、その中にシルト混り細粒砂の偽礫が多量に混じる堆積が見られた(第7b層)。特に西区に顕著であった。これはかなり強い水流で上流から流されてきたものとみられる。第7b層から土師器甕2が出土した。この土器はおおむね7世紀後半～8世紀のものであり、この大規模な洪水の年代もその頃と考えられる。

第8層：オリーブ黒色細粒砂～シルトの水成層で、ラミナが明瞭にみられた。また上面にはヒトの足跡や無数のサンドパイプがみられた。最大層厚は60cm余である。地質学の専門家によると、本層は潮間帯(干潟)の堆積である。布留式土器の口縁部細片1が出土し、本層の年代は古墳時代とみられる。

第9層：今回の調査で検出した最下層にあたる本層はオリーブ黒色～灰色の砂礫層で、やはり水成層である。層厚は50cm以上である。年代がわかる遺物は出土しなかった。

#### ii) 遺構と遺物(図6～8)

##### 第6層上面

SD12 調査区東端で部分的に検出された東への落込みであるが、後述の南北溝SD11の直

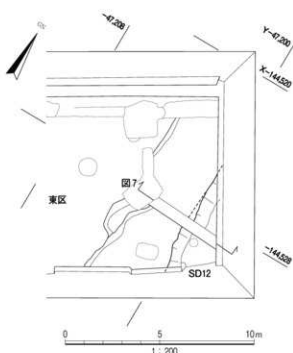


図6 第6層上面の遺構平面図

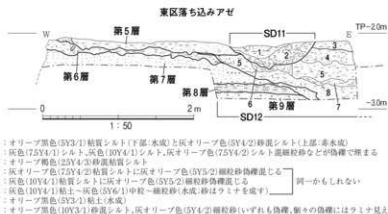


図7 東区東端地層断面図

下にあるので、これも南北溝と考える。SD12は、東西幅1.8m以上で、深さ0.6m以上である(図6)。第6層の盛土の上から掘り込まれ、埋まったのち第5層に覆われていた(図7)。

#### 第5層上面

**SD11** SD12が埋まったのち第5層の上面から掘り込まれた南北溝である。幅110cm以上、深さは30cm以上の規模である。埋土は二層に別れ、その上層から肥前陶器や肥前磁器が出土している。年代は17世紀後半以降である。

#### 第5層下面

**小溝群** 東区にて南北方向の浅い小溝が多数検出された。耕作に伴う溝群である。一部は第6層上面で検出したが、おおむね第5層下面に位置づけられる。

#### 第5～3層関連遺構

西区では土壇・小土壇が散在して検出された。年代等は不明であるが、第5層から第3層に伴うも

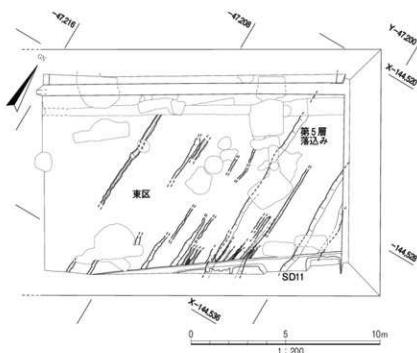


図8 第5層上面・下面の遺構平面図



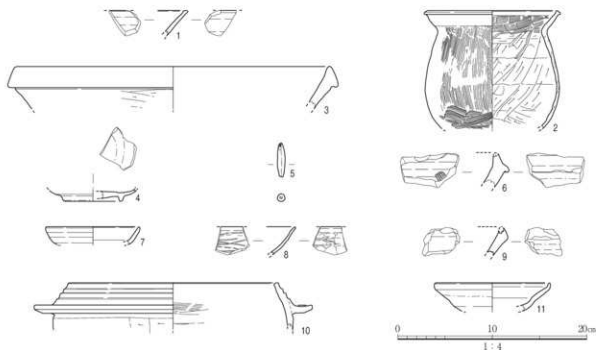


図9 出土遺物実測図

のとみられる(図版1上)。

### 3) まとめ

今回の調査では、当地が陸化していく様相をとらえることができた。第9層は水面下(おそらく海面下)で形成されており、第8層(古墳時代)では干潟の様相を呈していた。第7層(7世紀後半～8世紀)に大規模な洪水がこの上を覆い、陸化したとみられる。

その後の経過としては、第6層(16世紀後半頃)に当地に人の手が入って整地されるとともに、規模の大きな南北溝が通された。第5層(近世)以後もこの南北溝は同位置で継承されるとともに、周囲は耕作地となっていた。

以上の変遷を把握できたことが、今回の調査の大きな成果である。

ところで、当地の北東約600mに位置する中津5丁目所在遺跡の調査(CT17-2次)では、近世段階とみられる南北溝SD02が検出されている。この溝は幅1.8m前後で残存した深さは0.3mと、今回のSD11・12の規模に近似する。この地に条里制地割があったとしても、その方位が不明なのでSD02との東西距離は不明である(正方位であったと仮定した場合、東西距離は約620m)。SD11・12とCT17-2のSD02が単純に条里の坪境溝であるといえるわけではないが、今後の資料の蓄積によっては、再検討されるべきであろう。

引き続き、今後も調査を重ね、資料が増加することが期待される。

### 引用・参考文献

大阪文化財研究所2018、「北区中津五丁目4-10・4-7における建設事に伴う埋蔵文化財発掘調査(CT17-2)報告書」



中央区南本町四丁目 1 - 1 ・ 1 - 4 における建設工事に伴う  
南本町 4 丁目所在遺跡発掘調査(MX17- 1) 報告書

調査個所 大阪市中央区南本町4丁目1-1・1-4  
調査面積 500㎡  
調査期間 平成29年7月4日～10月10日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、絹川一徳

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西方の大坂低地[趙哲済2006]に当る。新発見の遺跡であり、南本町4丁目所在遺跡と命名された。1600(慶長5)年頃に開削が始まり、1620(元和6)年に完成したとされる西横堀川は調査地の西側に道路を隔てて接している(図1)。一帯は近世の大坂城下町において東西を渡辺筋と西横堀川、南北を南本町通りと唐物町通りに挟まれた地区にあたり、1679(延宝7)年の『懐中難波すゝめ』によると、西横堀川に沿った町々には火鉢・灯芯・履物・小間物・荒物などを扱った商家が集住していたとされる[今井修平1989]。調査区から西100mで、西横堀川を挟んだ対岸の西区西本町1丁目で行われたUT08-1次調査では、大坂冬ノ陣で被災した礎石建物や土壌などの豊臣後期の遺構をはじめ、徳川期にかけて複数時期の生活面が検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。また、調査地から東300mで、大坂城下町跡の南西部にあたるOJ95-8次調査では、古墳時代初頭に遡る土器が出土し、豊臣期から徳川期にかけての複数の遺構面が見つかった[大阪市文化財協会2004]。

調査地では平成29年3月21日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、地表下約2.1m以下の深さで近世～中世とみられる遺構面と遺物包含層が検出された。このため、当該地の地層の堆積状況や遺構・遺物の年代や包含状況などを明らかにするため、本格的な発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成29年7月4日に着手した。東西25m×南北20mで500㎡の調査区を設け、重機掘削を開始した(図2)。発掘排土を場内に仮置きしなければならなかったことから、合計3回の反転掘りによって調査を進めた。まず、調査区の東半部1/2から調査を開始し、9月1日にこの部分の調査を

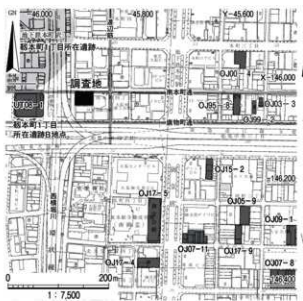


図1 調査地の位置

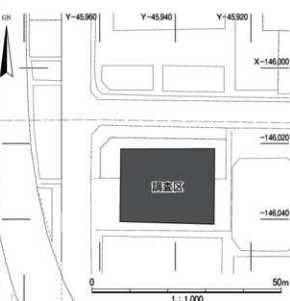


図2 調査区の配置図

完了し埋め戻した。続いて9月4日から西南部1/4の区画に着手して9月30日に完了し、同日から残余の西北部1/4の区画に着手した。10月10日に現地で必要な発掘作業をすべて終わらせて調査を完了した。

なお、発掘現場の基準点はMagellan社製ProMark3で測位を行い、本報告書で用いた方位と座標値は世界測地系座標(平均直角座標系第Ⅵ座標系)を基準にしている。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±0mと記した。また、本報告の出土遺物にかかる記載は大阪文化財研究所調査課学芸員小田本富慈美が行った。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5・図版1)

調査地一帯はほぼ平坦であり、現在の標高はTP+1.3m前後である。現代盛土である第0層以下、第8層までの地層を確認することができた。

第0層：褐色(10YR4/4)粘土混りシルト質中粒砂層で現代盛土である。旧建物の解体工事の際に生じたコンクリート片などの瓦礫を多量に含む。解体工事の攪乱は調査区の広範囲に及んでおり、西半と北東部分が大きく削平されていた。西半で層厚は70～200cm、特に北東部は第1～7層までが失われていたため、層厚は320cmに及ぶ。

第1層：上部は太平洋戦争時の被災による炭や焼土・焼礫、粘土の偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)粘土混り細粒砂質シルト、下部はオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土混りシルト質極細粒砂、オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘土混り極細粒砂質シルトの盛土で構成される近世後半～近代の地層である。部分的ではあるが、戦災を受けた上部の盛土面を層厚10～20cmでいぶ黄色(2.5Y6/3)細粒～中粒砂の整地土が凹みを埋めるように覆っていた。これが戦後の旧地表面にあたる。第1層はおもに調査区の南東部で認められ、それ以外の場所では削平を受けていた。南東部で最大20cm程度の層厚があった。

第2層：18世紀前～後葉の盛土層で、第2-1層と第2-2層の2つの盛土単位に区分することができた。いずれも南半部で認められ、北半は現代の攪乱によって削平されていた。

第2-1層は炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土混り極細粒砂質シルトの盛土層で、層厚は最大25

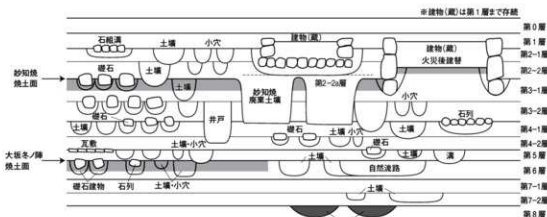


図3 地層と遺構の関係図

cmであった。本層上面で礎石建物や溝・土壇・小穴などの遺構を検出した。18世紀前～後葉の陶磁器等を含む。

第2-2層は炭・焼土・焼礫を多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂質シルトまたはふい黄褐色(10YR4/3)粘土混りシルト質細粒砂からなる盛土層である。第2-2層の盛土が行われる過程で形成された遺構として、1724(享保9)年の妙知焼の後片付けのために、火災で生じた焼礫や焼土・焼壁を多量の瓦や陶磁器片とともに廃棄した大型土壇を多数検出した。この遺構の検出面を第2-2a層上面とする。廃棄された遺物は多様であり、多くは被熱していた。妙知焼とはほぼ同時期の18世紀前葉の遺物を含む。

第3層:上面が妙知焼(1724年)の火災の際に地表面であった盛土層で、第3-1・3-2層に細分できた。上面が妙知焼の焼土面となる第3-1層は、炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土混りシルト質極細粒砂と灰白色(2.5Y8/1)シルト質細粒砂からなる盛土層で、上面が被熱によって著しく硬化しているところがあった。西半部で層厚20～30cmであるが、南東部では石垣などが構築されたため、周辺の地面よりやや高く整地され、層厚は50～80cmであった。本層上面で礎石建物・石垣、溝・土壇・小穴などの遺構を多数検出した。18世紀前葉で妙知焼直前の時期の陶磁器等を多く含む。

第3-2層は、西半部が炭・焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)または灰白色(2.5Y8/1)極細粒砂混り粘土質シルトの盛土層で、層厚は15～25cm、南東部が細礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質細粒砂と褐色(10YR4/4)シルト質極細粒砂～シルト質細粒砂からなる盛土層で層厚は60cm程度であった。本層上面で礎石建物・石垣、井戸・溝・土壇・小穴などの遺構を検出した。17世紀末～18世紀初頭の陶磁器等を含む。

第4層:調査区の西半部で厚く堆積しており、第4-1・4-2層に細分できたが、南東部では第4-1層は薄く断片的な堆積となり、第4-2層の上面を第3-2層の盛土が直接覆っているところもあった。

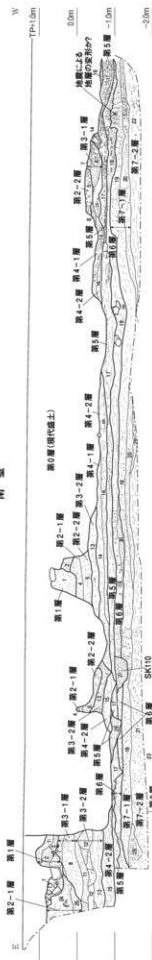
第4-1層は炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土混りシルト質極細粒砂の盛土層で層厚20cm程度であった。調査地の西側を中心に礎石建物・石列、溝・土壇・小穴などの遺構を検出した。17世紀前葉～後葉の陶磁器等を多く含む。

第4-2層は黄褐色(2.5Y5/4)シルト混り細粒砂と粘土の偽礫を含む褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂からなる盛土層で、層厚は20～40cmであった。本層上面で礎石列等の遺構を検出した。17世紀前葉～中葉の陶磁器等を含む。

第5層:径2～3cmのシルト質粘土の偽礫と細礫を含む黄褐色(2.5Y5/6)粘土混り細粒砂質シルトの盛土層である。層厚は10～20cmであった。本層と下位の第6層は、土壌の暗色が強く、砂礫と粘土が混じった盛土ではほぼ共通しているが、第4層以上はおもに砂質が優勢で均質な盛土であり、両者は盛土の方法や採取地が大きく異なっている。調査区の西端部では踏み締めにより地層の上面が硬化している部分が認められた。本層上面で瓦敷や礎石建物、井戸・溝・土壇・小穴などの遺構を検出した。17世紀前葉で徳川初期に属する陶磁器等を含む。

第6層:本層の上面は大坂冬ノ陣の焼土面で、一部で地層上面の硬化が認められた。炭を多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土混りシルト質細粒砂で、層厚は30cm程度であった。踏み締めによる旧地

南壁



- 1. 灰や砂土・礫層を含む腐植色(25Y5.3/3)粘土混り細粒砂質シルト(第1層)
- 2. 下部はオリーブ褐色(25Y4.3/3)粘土混りシルト質細粒砂質シルト(第1層)
- 3. オリーブ褐色(25Y4.6/6)粘土混り細粒砂質シルト(第1層)
- 4. 灰を含むオリーブ褐色(25Y4.2/3)粘土混り細粒砂質シルト(第2-1層)
- 5. 灰を含むオリーブ褐色(25Y4.2/3)粘土混り細粒砂質シルト(第2-2層)
- 6. 粘土質腐植色(10YR4.2/3)粘土混りシルト質細粒砂質シルト(第3-1層)
- 7. 灰を含むオリーブ褐色(2.5Y4.7/3)粘土混りシルト質細粒砂質(第3-1層)
- 8. 灰を含む(2.5Y4.8/1)シルト質細粒砂質(第3-1層)
- 9. 灰・礫土を含むオリーブ褐色(25Y4.4/4)細粒砂混り粘土質シルト(第3-2層)
- 10. 灰・礫土を含むオリーブ褐色(1)細粒砂混り粘土質シルト(第3-2層)
- 11. 黄褐色(細粒を含む)オリーブ褐色(25Y4.6/1)シルト質細粒砂(第3-2層)
- 12. 腐植色(10YR4.4/1)シルト質細粒砂(第3-2層)
- 13. 腐植色(10YR4.4/1)シルト質細粒砂(第3-2層)
- 14. 灰を含むオリーブ褐色(25Y4.4/4)粘土混りシルト質細粒砂(第4-1層)
- 15. 腐植色(2.5Y5.4/1)粘土混り細粒砂(第4-2層)
- 16. 粘土の腐植を含む腐植色(10YR4.4/4)シルト質細粒砂(第4-2層)
- 17. 灰・2mmのシルト質腐植を含む腐植色(2.5Y5.6/6)粘土混り細粒砂質シルト(第5層)
- 18. 灰を含むオリーブ褐色(25Y4.2/3)粘土混りシルト質細粒砂(第6層)
- 19. 細粒を含む腐植色(25Y4.2/3)粘土混り細粒砂・細粒砂質シルト(第7-1層)
- 20. 腐植色(10YR4.2/3)粘土混り細粒砂質シルト(第7-1層)
- 21. 粘土質腐植色(10YR4.2/3)粘土混り細粒砂質シルト(第7-2層)
- 22. 粘土の腐植を含む灰色(2.5Y4.1)粘土混りシルト質細粒砂(第7-2層)
- 23. オリーブ褐色(2.5Y4.1)粘土混りシルト質腐植・砂質質シルト(第8層)
- 24. 灰・礫土層を多く含む腐植色(10YR4.6/6)粘土混りシルト質細粒砂(第2-1層相当)
- 25. 腐植色(10YR4.6/6)粘土・灰・粘土混りシルト質細粒砂(第2-1層相当)
- 26. 腐植色(2.5Y4.4/4)細粒砂質シルト(7)礫層上・第3層上(第2層相当)
- 27. 腐植色(2.5Y4.4/4)細粒砂質シルト(第2層相当)
- 28. 腐植色(2.5Y4.2/3)粘土混り細粒砂質シルト(第2-2層)
- 29. 腐植色(2.5Y4.1)細粒砂混り粘土質シルト(第7-2層相当) 本成層上部の落石・礫土と若潮が関係する
- 30. 灰を含む腐植色(2.5Y4.2/3)粘土混り細粒砂質シルト(第7-2層)
- 31. 粘土質腐植色(10YR4.5/1)水成質シルト質細粒砂(第6層相当)



図4 南壁地層断面図





表面の硬化が認められた場所では、シルト質細粒砂が薄くラミナ状に堆積していた。下部は径2～3 cmのシルト質粘土の偽礫が含まれ、砂質が優勢となる。調査区の西半部では本層上面で礎石建物、溝・土壟・小穴などを検出したが、南東部ではわずかに土壟を検出したのみで、低所に自然流路が形成された状況が認められた。本層からは豊臣後期の遺物が出土した。

第7層：調査区の全域で認められた盛土層であるが、上部の盛土とは岩相が異なり、泥状で水分を多く含むため地層のしまりが緩い。第7-1～2層に細分できた。

第7-1層は細礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土混り細粒砂～細粒砂質シルトと黄灰色(2.5Y4/1)砂礫混り粘土質シルトからなる盛土層で、層厚は20～50cmであった。

第7-2層は東半がにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土混り極細粒砂質シルト、西半が粘土の偽礫を含む灰色(5Y4/1)粘土混りシルト質砂礫の盛土層である。北東部を中心として、本層下部で下位の水成堆積層が、盛土などにより人為的に大きく擾乱を受けている状況がみられた。層厚は30～40cmであった。

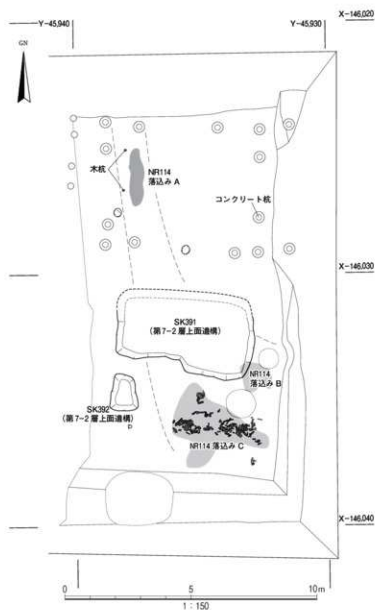


図6 第8層上面・第7-2層上面遺構平面図

第8層：調査区全体で認められたオリーブ褐色(2.5Y4/1)粘土混りシルト質砂礫～砂礫質シルトの水成層で、層厚は30cm以上であった。本層上面において、局所的に自然流路が滞留した落込み部分があり、黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂混り粘土質シルトが堆積していた。この落込みからは多数の木製品や陶磁器等が出土した。豊臣後期の遺物である。

ii) 遺構と遺物(図6～16)

a. NR114遺物密集部(図6・7、図版5)

調査区の東半部において、第8層上面で自然流路NR114の滞留とみられる落込みを3箇所検出した(図6)。NR114は断片的に残されていたため、流路そのものの痕跡や水流の方向などは明確に捉えることができなかったが、いずれも同じNR114の水流によって形成されたものと考えられる。落込みの埋土も共通しており、黒褐色のシ

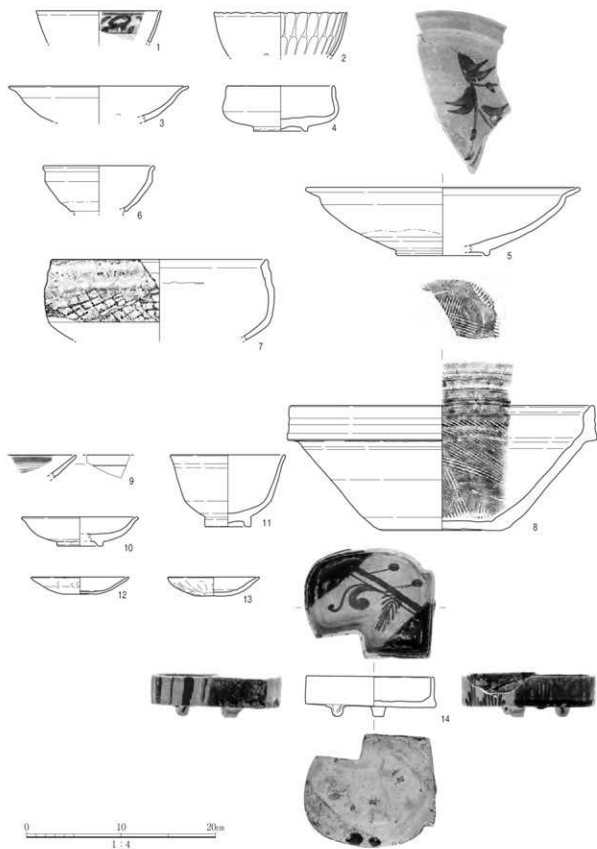


图7 第8層上面・第6層上面遺構出土遺物実測図  
 第8層NR114落込みC木製品罐(1～8)、第6層上面SK110(13・14)、SK112(9～12)

ルト質細粒～中粒砂が充填していた。落込みからは炭化した木片や流木のほか、多数の木製品や陶磁器・土師器類が密集した状態で出土した。陶磁器・土師器類は中国産青花碗、肥前陶器、瀬戸美濃焼天目碗、備前焼播鉢、土師器焙烙など、木製品は漆器椀、桶、曲物、下駄、箸のほか、杭、柱や建具などの建築部材片などが認められた(図版2・5)。また、漆器椀をはじめとする木製品は水流による摩耗をほとんど受けておらず、播鉢や焙烙などの重量がある土器類も少なくないことから、これらの遺物は大半がこの場所かすぐ近くで直接廃棄されたものとみられる。このような生活に関係する多数の遺物の存在は、居住地が近傍にあったことを窺わせる。

図7におもな出土遺物を掲出した。いずれもNR114の落込みCから出土した。1・2は中国産青花の碗である。いずれも器壁は薄く、景德鎮産であろう。2は型押しにより整形している。3～5は肥前陶器の皿である。釉の色調は明オリーブ灰色を呈し、胎土には黒色砂粒を多く含む。内面には目跡をわずかに残す。4は体部が内湾気味に立ち上がる。5は鉄絵で草花文を施す。6は瀬戸美濃焼の天目碗である。7は土師器焙烙で外面には格子状タタキを施す。8は備前焼の播鉢である。これらはいずれも豊臣後期に属する遺物である。

b. 第7-2層上面遺構(図6)

調査区の東半部において、第7-2層上面で不整形な土壌SK391・392を検出した(図6)。SK391は深さ0.20m前後、SK392は深さ0.25m前後で、いずれも整地後に掘り込まれたものとみられる。

c. 第6層上面遺構(図7・8・12・図版2)

調査区の西端部において、第6層上面で大坂冬ノ陣の焼土面とみられる地表面を検出した(図8)。一部は炭を多く含む地面が硬化していた。上面で土壌や小穴とともに、組み合う可能性がある礎石列を複数確認した。南北方向に4列、東西方向に6列で、礎石建物としてSB01・02、塀とみられる礎石列SA03が認められた。SB01は南北方向に長い建物とみられ、東西方向の柱間隔が2.0m、南北方向の柱間隔は3.0mを基本として、より狭く区画した2.0mと1.0mの組み合わせがある。この建物と同じ方向で南へ3.0m離れた位置にSB02を設定したが、両者は同一の建物の可能性もある。いずれにせよ建物の柱間隔は、東西が2.0m、南北が3.0mを原則としていることが分かる。さらに、SB01・02の東端列から東へ2.5m隔てて南北方向の礎石列SA03を検出したが、周囲に現代のコンクリート杭列による攪乱があったため、SB01・02に付設したものか、別の建物となるのか判断ができなかった。

そのほか、調査区西半部ではSK359から石塔の一部が出土した(図8)。長さ39.5cm、幅20.0cm、奥行き17.5cmの花崗岩製の角柱で、側面の上部はほかの部材を組み合わせるための溝が穿たれていた。正面には梵字で大日如来の種子(パーン)が刻まれている。

一方、調査区の南東側では冬ノ陣の焼土面は認められなかった。土壌SK110・112・113を検出したが、西半部とは異なり遺構の分布は非常に希薄で、東半部は整地は行われたものの積極的に利用されていなかったようである(図8)。土壌SK110・112・113もおそらく整地に伴って掘り込まれたものとみられる。東南部では土地利用が進まないまま、この盛土面の上面を削るように自然流路NR111が形成されている。NR111は西半部で検出された冬ノ陣の焼土面よりも新しい自然流路である。

図7・12に主な出土遺物を掲出した。SK110からは14の瀬戸美濃焼で青織部の向付と土師器皿の13

が出土した(図7)。14は半環足を3箇所に付ける。文様は吊るし柿であろう。13は灯明皿として使用している。内面には底部と体部との境に圏線が巡る。いずれも豊臣後期に属する。

SK112からは9~12が出土した(図7)。9は中国漳州窯産の青花皿、10・11は肥前陶器の皿と碗、12は土師器皿で、灯明皿として使用している。以上は豊臣後期に属する。

SK110・112・113より新しいNR111からは15~18が出土した(図12)。15は中国景德鎮産青花の輪花皿で、底部外面には圏線を有する。16は中国漳州窯産青花の碗である。17は瀬戸美濃焼で志野の碗

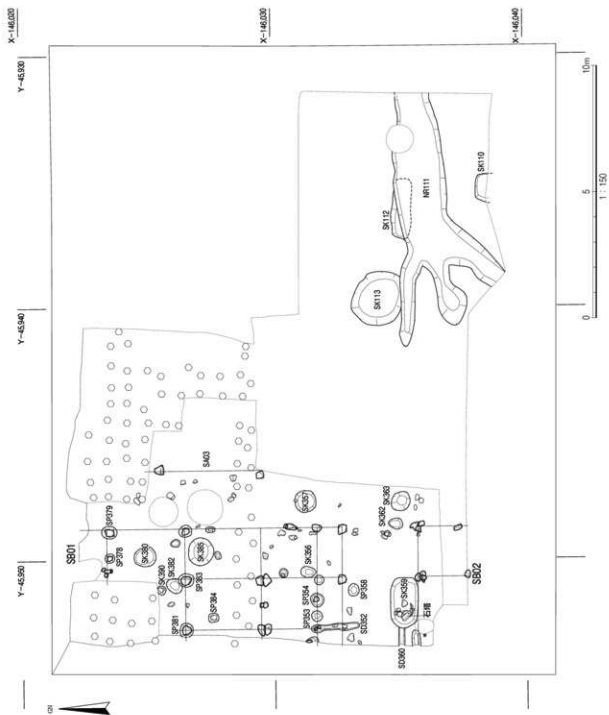


図8 第6層上面遺構平面図



うな礎石を検出したが、礎石が組み合う遺構は認められなかった。東西方向のSD101は幅1.10m、深さ0.05m前後の溝で、東側へ調査区外に延びる。同じ東西方向のライン上にはSK348・349が認められたが、これらを削平された溝の残存部分とみるなら、SD101は土地を南北に区画した地境の溝であった可能性がある。第5層は徳川初期の地層であるが、本層より上位の第4層以後では、ほぼこの位置で東西方向に地割りの境界を示す礎石列や石垣が、後々まで継続して形成されることから、南北方向に建物を配置していた豊臣後期の第6層上面遺構の状況とは異なる。となれば、第6層上面の豊臣後期と第5層上面の徳川初期の間で地割りの区画に大きな変化があったことになる。

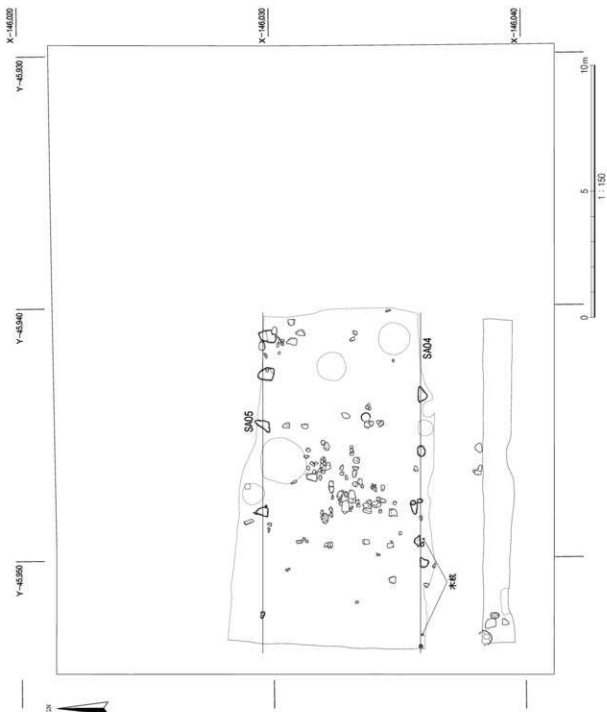


図10 第4-2層上面検出遺構平面図

図12におもな出土遺物を掲出した。SK346からは19・24が出土した。19は中国漳州窯産青花の碗である。焼成はあまい。24は肥前陶器の皿で、内面には砂目跡が見られる。SK349からは20・23・25・26が出土した。20は瀬戸美濃焼の天目碗である。21・22・25は肥前陶器である。21・22は碗、25は皿である。26はいわゆる朝鮮唐津の壺で、外面には鉄軸と葦灰軸を打掛ける。体部下半には塗土を施す。23は土師器皿で、底部外面は糸切している。

e. 第4-2層上面遺構(図10)

調査区の西半部で礎石とみられる礎石が多数出土したが、一部を除き、大半が原位置を保っていない(図10)。遺構として検出したのは塀とみられる礎石列SA04・05である。SA04は、下位の第5層上面で検出したSD101とほぼ同じ位置で並行する。このラインが後々まで地割りの境界となったことは、この遺構面で明らかであろう。さらにこの礎石列から北へ6.2m隔てて並行するSA05を検出したが、これらが建物かそれに伴う遺構なのかは明らかにできなかった。

f. 第4-1層上面遺構(図11・12・図版3)

土壌、溝、小穴などととも礎石列や石列を検出した(図11)。調査区東半部では、地割りの境界を示すために拳大の河原石を並べた石列を伴う溝SD98とそれに並行するように礎石列SA06と同じライン上に位置するSD81を検出した。SD81は幅0.50m、深さ0.05mであった。調査区の西半部では、東半部で見つかった地割りの境界を示すSD98の石列の東西ラインから北へ2.2m隔てて、礎石建物SB07・SB08と石垣状の石列SA09を検出した。いくつかの礎石が失われているため、これらの建物の規模については十分に復元できなかった。

SK333からは27・30が出土した(図12)。27は肥前磁器で外面青磁の碗である。外面には花文を印刻する。28は肥前陶器で内野山系の碗である。29は肥前陶器の皿である。30は丹波焼の鉢で、摺目は5条を1単位とする。焼成は堅緻である。以上は17世紀中～後葉に属する。

g. 第3-2層上面遺構(図13・15・図版3・4)

引き続き本層上面においても地割り境界を示す東西ライン上に礎石列のSA10を検出した(図13)。この段階からは調査区を東西に二分するような地割りが認められるようになる。すなわち、東半部においては布掘り(SD79)と根石を伴う石垣SX11が築かれる。また、SA10のラインから北へ1.0m隔てて礎石列SA13と礎石建物SB14が認められた。SA13は屋敷地を囲った塀の可能性もある。その内部には、3個の花崗岩の自然石を並べた敷石を伴う井戸SE51が認められる。また、SP65・67・68とほか1石の南北に組み合う礎石の配置は、この井戸を利用するための建物または門扉等の施設があったことを窺わせる。

調査区の西半部では、SA10から北へ2.0m隔ててSB15が、北へ1.2m隔ててSB16がそれぞれ検出された(図13)。SB15は東西幅が5.0mで、さらに両側から2.0mの間隔で内側に南北方向に礎石が並ぶ。SB16は東西幅5.0m以上で、東端から西へ1.0m、2.0m、1.0mの間隔で南北方向の礎石列があり、南端から3.7mと4.5mの位置に東西方向の礎石列が認められた。

第3-2層上面では、それまでの南北を区画する地割りの境界ラインが固定化され、石垣等も構築されるようになる。同時に、SB14とSB15の間で建物配置にずれが認められ、東側ではSX11のような



石垣が築かれるなど、敷地の東西に二分する区画が見れるようになる。さらに、SB16は下層の礎石建物とは異なり、かなり大きな礎石が利用されていた。一般の商家の建物とも考えられるが、近傍に北御堂(本願寺津村別院)が存在することから、寺院に関連する建物であった可能性も指摘しておきたい。

SK62からは肥前磁器31~34が出土した(図15)。31は染付皿で、底部内面にコンニャク印判による五弁文を施す。32は染付碗で、外面には丸文を施す。33は染付猪口で、口縁外面には雨降文を施す。34は白磁の蓋物で、小型の壺状を呈する。内面には灰褐色の付着物がある。これらは17世紀末葉~18



図11 第4-1層上面検出遺構平面図

世紀初頭のものである。

h. 第3-1層上面遺構(図14・15・図版4)

第3-1層上面は1724(享保9)年の妙知焼の焼土面である。上面では妙知焼の被災遺構を検出することができた(図14)。調査区の東半部のSX12が、石垣の一部を積み増すかたちで継続して利用されており、地割の境界となっている。西半部ではこの石垣の端面に一致するラインで礎石列SA17が認め

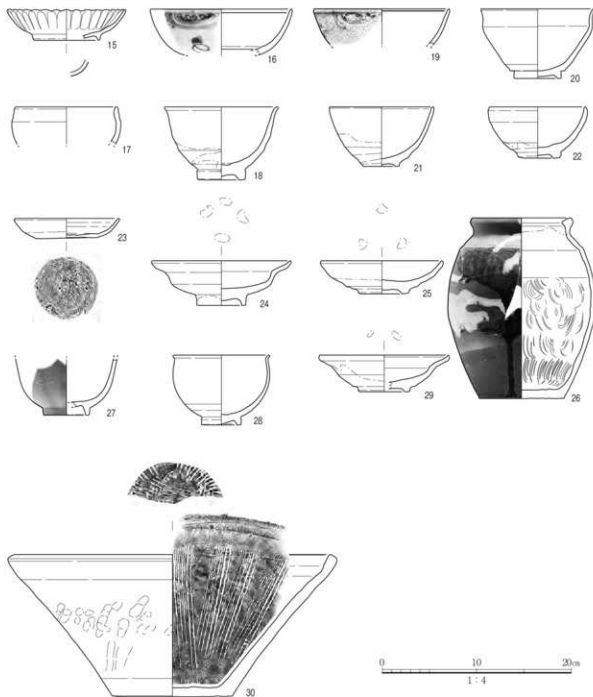


図12 第6層上面・第5層・第4-1層上面検出遺構出土遺物実測図  
 第6層上面NR111(15-18)、第5層上面SK346(19・24)、第5層上面SK349(20-23・25・26)、  
 第4-1層上面SK333(27-30)

られ、この時期には東半は地割りか石垣で区画され、西半は同じライン上を礎石列で区画している。この地割りの境界に並行するように北側でSD44・286を検出した。SD44・286は東西方向の同一の溝で、幅0.25m、深さ0.03～0.05mである。板材を凹形に組み合わせた木桶が敷かれており、妙知焼の火災により完全に炭化していた。SX12と北側の建物群の間に空間があり、これを道路とするなら、木桶の溝は道路の側溝とみられる。SD44に直交するSD43においても同様に炭化した木桶が確認された。なお、これらの木桶に蓋板を被せていたかどうかは確認できなかった。

調査区の南東端では石垣を建物基礎としたSB18が出土した(図14)。蔵とみられる。SB18は周囲の

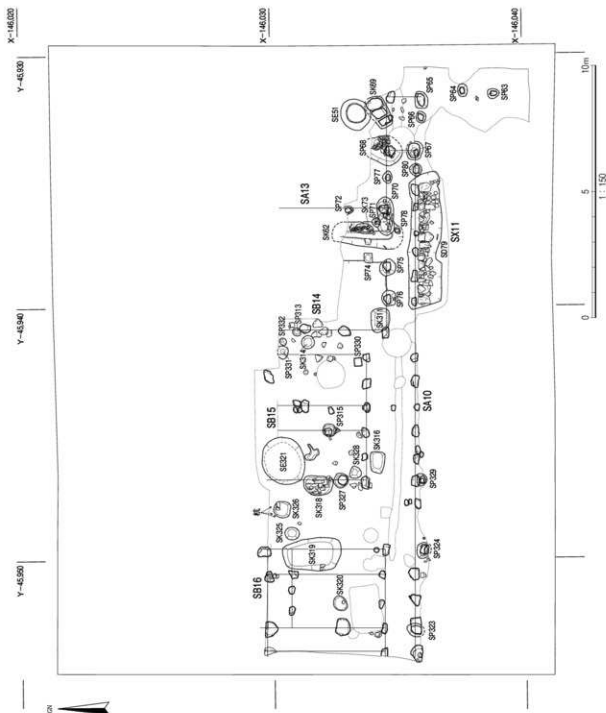


図13 第3-2層上面遺構平面図

地表面より土台が高く、建物基礎となった部分は第3-1層に相当する盛土を厚くしており、それをコの字に囲むように石垣を構築して建物基礎としている。

調査区の西端部では、木桶が敷かれたSD286に切られるかたちで砂利・消石灰・にがりを練り混ぜた三和土とみられる硬化面が認められた。礎石列とはは接するように分布していることから、土間や通路として丁寧に敷き土を行ったものと思われる。礎石建物SB19は一部の礎石が失われていたが、格子状にくまなく礎石を配置した総柱建物で、礎石の間隔は1.0mであった。この建物の南西側で見つかったSK310は、径0.70m、深さ0.40mの円形の土坑で、周囲には4個の礎石が配置されていた。さ

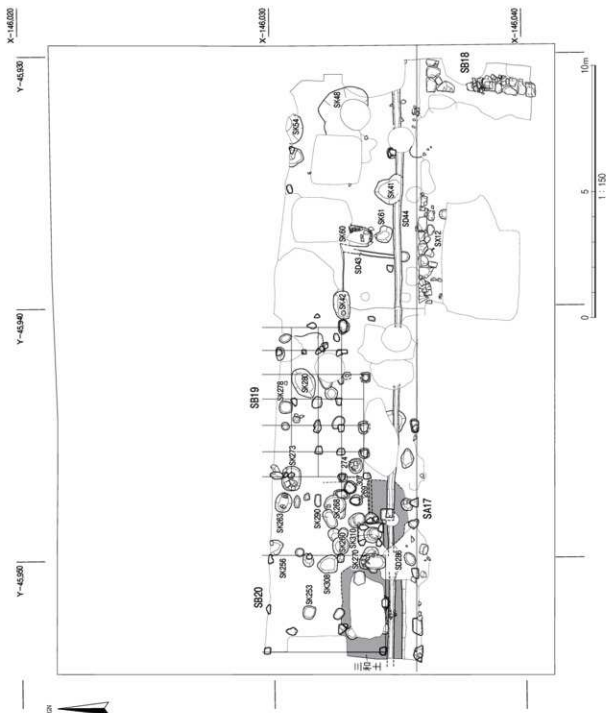


図14 第3-1層上面遺構平面図

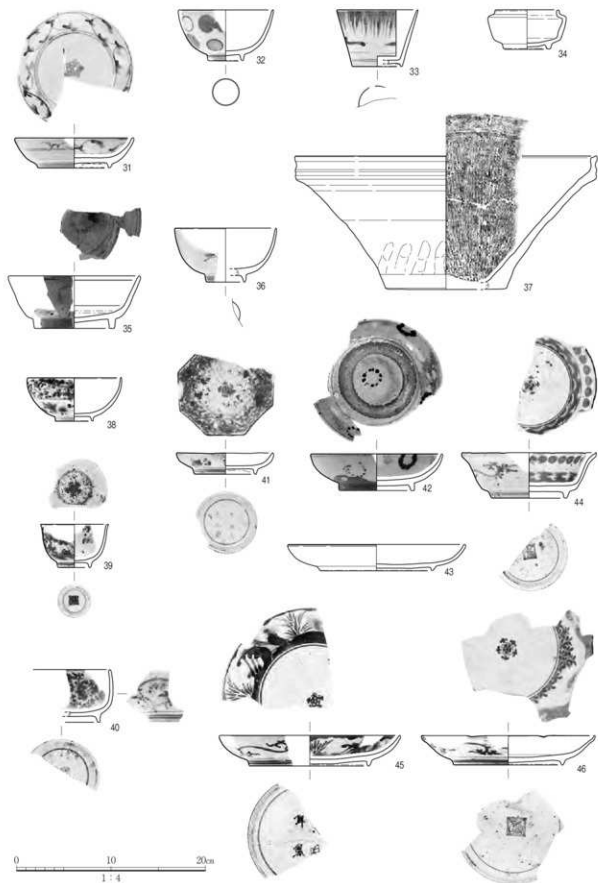


图15 第3-2層上面・第3-1層上面・第2-2a層上面遺構出土遺物実測図  
 第3-2層上面SK62(31~34)、第3-1層上面SD286(35~37)、  
 第2-2a層上面SK40(38・42・43・45)、SK41(39・40・41・44・46)

らにその外側を方形に板材で囲んでいることから、もとは土壌を覆う建物があったとみられ、調査時には認められなかったものの、本来は土壌に甕か桶が埋置されていたものとみられる。

そのほか調査区西端部で礎石建物SB20を検出した。東西4.0m、南北4.5mで礎石間隔は2.0mとみられるが、礎石のいくつかが移動して失われており、正確な規模は不明であった。

SD286からは35～37が出土した(図15)。35はベトナム産陶器印判手深皿で、体部内外面および底部内面に鉄絵印判文様を施す。36は肥前磁器の染付碗である。37は信楽焼の播鉢である。35が17世紀

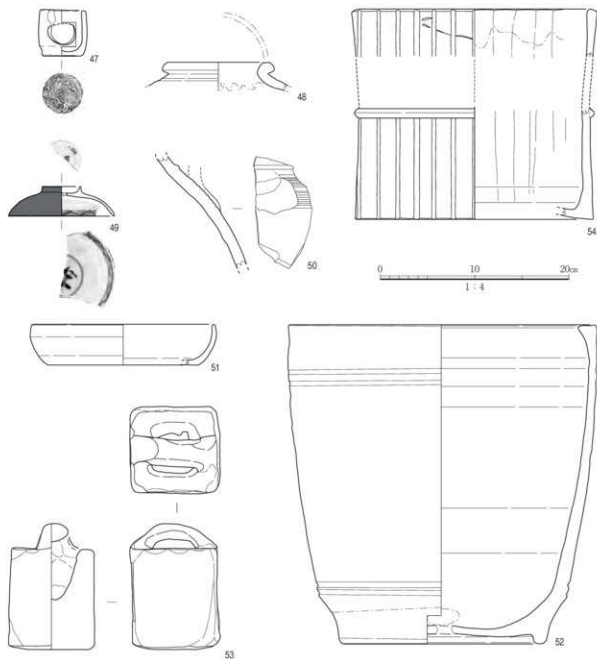


図16 第2-2a層上面・第2-1層上面遺構出土遺物実測図  
第2-2a層SK47(48・50)、SK245(52)、SK237(47・49・51・53)、第2-1層上面SB21(54)

中～後葉、ほかは17世紀末～18世紀初頭に属する。

i. 第2-2a層上面遺構(図15-17)

第2-2層は妙知焼の後片付けを行う過程で形成された盛土で、盛土が行われる過程で掘り込まれた方形または不整形な大型土塋を多数検出した(図17)。この検出面を第2-2a層とする。これらの土塋の深さは0.50～0.90mで、土塋内に妙知焼で被災した多量の陶磁器や瓦、炭化材・焼壁・焼土が廃棄されていた。土塋を掘削した際の揚土を新たな盛土として敷き拡げた天地返しが行われていたものとみられる。

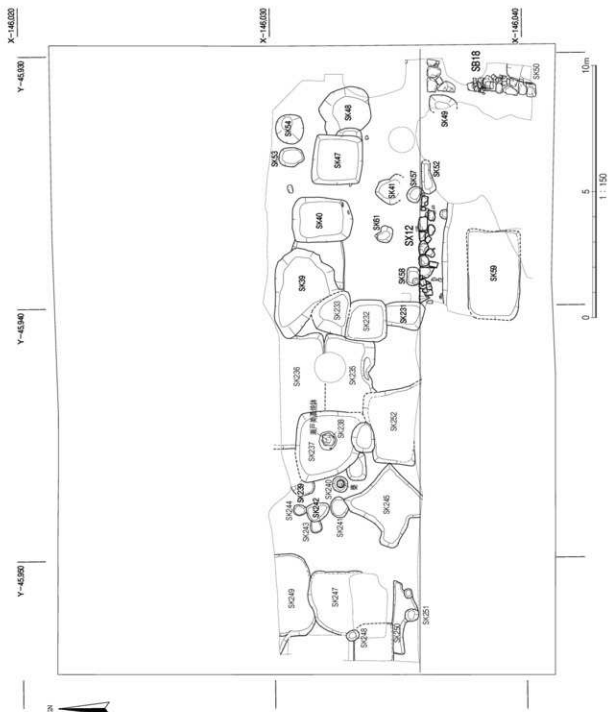


図17 第2-2a層上面遺構平面図

各土壙からは図15・16の遺物が出土した。SK40からは38・42・43・45が出土した。38・43・45は肥前磁器である。38は染付碗で、体部は半球形を呈する。43は皿で、口紅を施す。本来色絵を施していたとみられるが、被熱のため文様は失われている。45は染付皿である。42は瀬戸美濃焼で、鉄絵を施す皿である。底部内面を蛇の目軸剥ぎしている。ベトナム産の印判手深皿を模したものであろう。これらは18世紀前～中葉に属する。SK41からは39・41・44・46が出土した。39～41・44・46は肥前磁器の染付である。39は小碗である。41は平面が八角形を呈する皿である。40は鉢とみられ、被熱のため歪んでいる。44も鉢である。46は輪花の皿である。これらはいずれも被熱しており、各器形それ

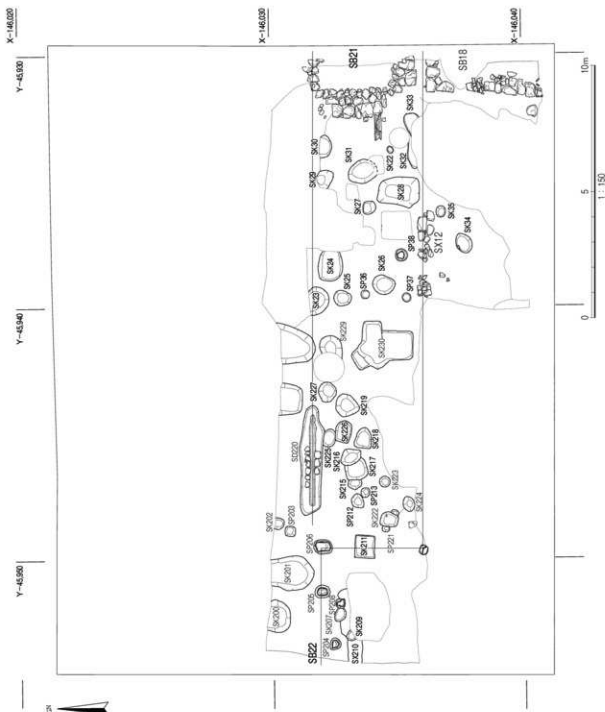


図18 第2-1層上面遺構平面図



ぞれ10個体以上が認められる。組物で保有されていたものが、火災に遭ったため廃棄されたのであろう。底部内面に手描き五弁花文を施し、高台内に「福」字銘を有するものが多く、遺物の時期は17世紀末～18世紀初頭に属する。SK47からは48・50が出土した。48は外面および口縁部内面に黒褐色釉を施す壺で、口縁部は短く屈曲し、口縁部上端には重ね焼きの痕跡を有する。同様の壺は四天王寺旧境内跡でも出土しており、四耳壺であろう[大阪市文化財協会1996]。中国南方産の可能性ある。50はタイ産の焼締陶器四耳壺で、被熱している。メナムノイ窯産であろう。これらは17世紀前半以前に属するもので、伝世されたものが火災に遭い、廃棄されたとみられる。

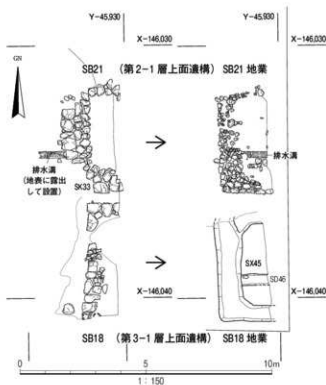


図19 SB18・SB21の地業平面図

SK245からは52の瀬戸美濃焼の鉢が出土した。『瀬戸市史』では半胴と分類されるものである[瀬戸市史編纂委員会1998]。口縁部付近と底部近くの外面には凹線を巡らす。内外面には鉄釉を施す。底部には孔を開けて、植木鉢として使用している。17世紀末～18世紀前半に属するものであろう。

SK237からは47・49・51・53が出土した。47は土師器のミニチュア焔炉である。49は肥前磁器の青磁染付蓋である。天井部には「富貴長春」銘を有するものであろう。51は土師器の鉢で、轆轤によりナデ整形している。底部付近の体部外面にはヘラケズリを施し、底部外面は不調整である。胎土は精良で砂粒をわずかに含む。53は土製の錘である。同様な錘は、中之島蔵屋敷跡NX06-2[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]で出土している。以上は18世紀前半に属する。

そのほかSK238からも前述した52と同一器形の瀬戸美濃焼鉢(植木鉢に転用)が出土している。そのほか、本層で検出した土壌からは、妙知焼で被熱した金属製品なども出土している(図版5) j. 第2-1層上面遺構(図16・18・19・図版4)

本層上面では、引き続き石垣のSX12と蔵とみられるSB18が認められた。これらに加えて、調査地の東端部でSB18に並んで北側に石垣を建物基礎としたSB21を検出した(図18)。同じく蔵とみられる。SB21の地業はSB18とは異なり、拳大の礫を敷いて中央に排水溝を設けていた(図19)。地業の石敷きからは54の丹波焼で桶を模した形の容器が出土した(図16)。体部の中央にタガとなる凸帯を貼り付ける。外面には灰釉を施す。底部外面には目跡が残る。

本層上面においては基本的に地割りの変更はなく、それらに並行する礎石列SB22や石組溝SD220を検出した(図18)。

k. 各層出土の遺物(図20～22)

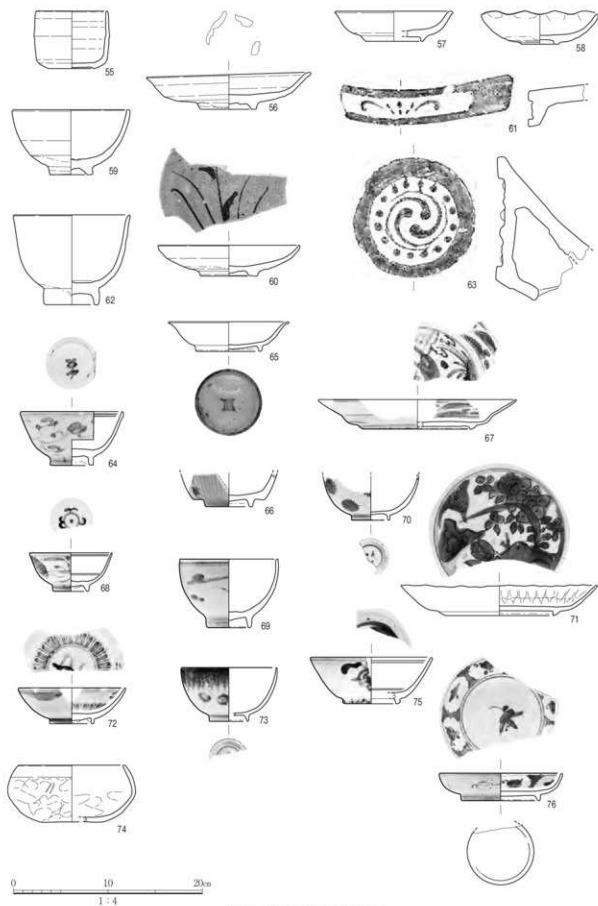


图20 各層出土遺物実測図(1)

第8層(56)、第7~8層(58·61)、第7層(55·57·59·60)、第6層(62~65)、  
第5層(66)、第4~1層(67~69)、第3~2層(70~76)

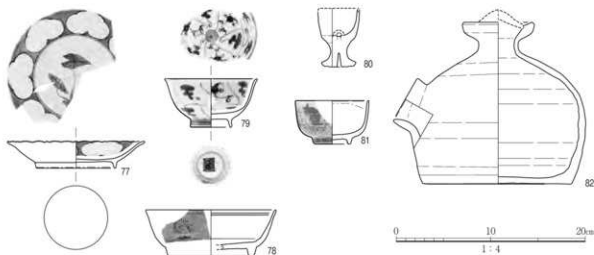


図21 各層出土遺物実測図(2)  
第3-2層(82)、第2-2層(77・80・81)、第2-1層(78)、第1層(79)

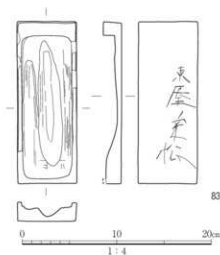


図22 第2-2層出土実測図

第8層(東半) 56は肥前陶器の皿である。器壁は厚く、胎土には黒色砂粒を多く含む。

第7～8層(西半) 58は肥前陶器ないしは上野高取焼の皿で、分厚い藁灰釉を施し、口縁部は輪花に作る。分厚い灰釉を施す。61は唐草文軒平瓦である。以上は豊臣後期とみられる。

第7層(西半) 55は瀬戸美濃焼で黄瀬戸の向付である。57は瀬戸美濃焼で志野の皿である。59・60は肥前陶器である。59は碗、60は鉄絵で草文を施す皿である。これらも豊臣後期に属する。

第6層(西半) 62は肥前陶器の碗で底部中央を窪ませている。63は三巴文の烏袷瓦である。64・65は中国産青花である。64は漳州窯産の碗である。65は景德鎮窯産の皿で、漆継痕跡を有する。これらも豊臣後期に属する。

第5層(東半) 66は肥前磁器の染付碗で、底部と体部との屈曲は明瞭である。外面には鎊を施し、「寿福」の文字を施す。17世紀前葉であろう。

第4-1層(西半) 67・68は中国産青花である。67は景德鎮窯産の皿、68は漳州窯産の小碗である。69は肥前磁器の染付碗である。以上は17世紀前～中葉に属する。

第3-2層(西半) 71・72・75は中国産青花である。71は景德鎮産の皿で、体部は型で整形し、口縁部を輪花状に作る。75は福建産とみられる碗である。73は肥前磁器の染付碗で、口縁部外面には雨降文を施す。74は土師器で鉢とみられる。体部下半から底部にかけては粗いエビオサエで仕上げる。76は肥前磁器の染付皿である。82は丹波焼の尿瓶で、宝珠形の把手を有するものであろう。底部外面には目跡を有する。以上は中国産青花のように17世紀中葉以前に遡るものもあるが、多くは17世紀後葉～末に属する。

第3-2層(東半) 70は肥前磁器の染付碗で、コンニャク印判による施文を有する。高台内には「大明年製」銘がある。18世紀初頭であろう。

第2-2層 77は肥前磁器の染付皿で、口縁部内面には型押しによる施文がある。81は肥前磁器の染付蓋物で、コンニャク印判による施文がある。これらは被熱しており、18世紀初頭に属する。80は軟

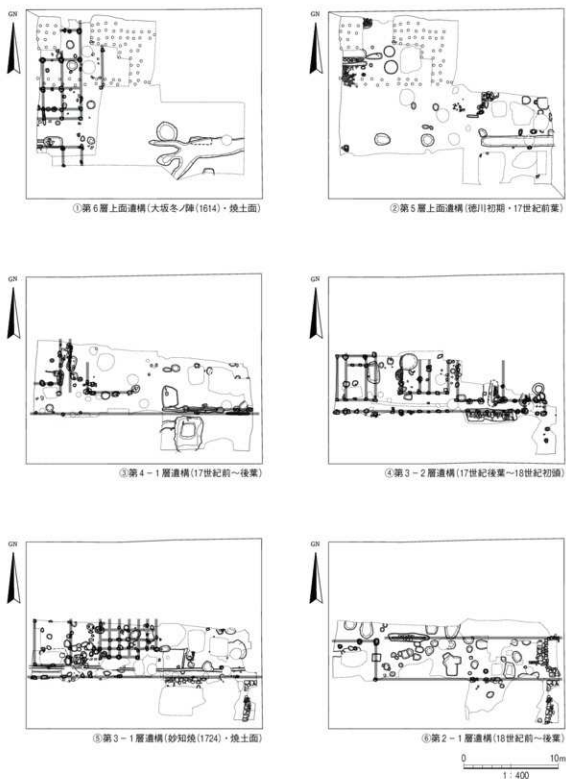


図23 礎石建物・礎石列および地割の変遷

質施軸陶器の台付乗燭で、透明釉を施し、底部には穴を有する。83は石製碗で、底には「京屋ノ(采カ)松」の刻書が見られる(図22)。陸部は使用のため、深く窪んでいる。

第2-1層(西半) 78はベトナム産陶器で鉄絵印判を施す深皿である。同様のベトナム産陶器は、少なくとも5個体以上認められ、組物で保有したものを廃棄したとみられる。

第1層 79は中国産青花の端反碗で、内外面には曇芝文を施す。底部内面中央には多重圏線状の文様を施す。18世紀後半のものであろう。そのほか第1層からは牛をかたどった土人形なども出土している(図版5)

### 3)まとめ

今回の調査では、豊臣後期から徳川期にかけての複数時期の生活面とそれに伴う遺構を検出した。大坂城下町跡の南西部とその周辺は、これまでの調査事例が少なく、考古学的な発見と成果はあまり知られていない。今回、その土地利用の変遷を詳細に捕らえることができた(図23)。調査地で本格的な土地利用が始まったのは豊臣後期からである。第8層上面の落込みで見つかった多量の木製品や陶磁器類の存在は、近辺に商業地のような大きな集落があったことを窺わせる。大坂冬ノ陣の段階には、南北方向の建物が建ち並ぶ屋敷地があったようである。その後、本格的な整地が行われる過程で、地割りのラインは南北方向から東西方向に切り替わる。この地割りは、現代に至るまで変更されることはなかった。また、調査地では、17世紀後葉～18世紀初頭にかなり規模の大きな建物があったことが明らかとなった。そして妙知焼以降は、東西に長い短冊状に区切られた敷地の奥に蔵が設置されており、近世大坂城下町の一般的な商家のような屋敷地へと変化したようである。

今後、調査地周辺の発掘調査が進展すれば、町割りの成立と西横堀川の開削との関係、さらにそこに居住した人々の具体的な職種や階層といった情報も得られるものと思われる。いっそうの調査成果の蓄積を期待したい。

### 参考文献

- 池田研2010、「豊臣氏大坂城下町さらに拡がる!」、(財)大阪市文化財協会編「華火」145号
- 今井修平1989、「第4章第七節工業の展開」：新修大阪史編集委員会編「新修大阪史」第3巻、pp.802-823
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「埋蔵文化財発掘調査(NX06-2)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)」、pp.21-50
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「西本町1丁目所在遺跡B地点発掘調査報告(UT08-1)」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告(2008)」、pp.279-281
- 大阪市文化財協会1996、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告Ⅰ」
- 大阪市文化財協会2004、「大坂城下町跡Ⅱ」
- 瀬戸市史編纂委員会1998、「瀬戸市史」陶磁史編六
- 道哲済2006、「船場・道修町、その土地の成り立ちに迫る」：道修町資料保存会編「第13回道修町文化講演会」、p.9
- 直木孝次郎・森杉友監修1986、「大阪府の地名」平凡社、pp.383・519-120



中央区今橋一丁目39-1における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-1)報告書

調査個所 大阪市中央区今橋1丁目39-1  
調査面積 324㎡  
調査期間 平成29年4月10日～6月19日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、今橋通南に面し、東横堀川と堺筋に挟まれた今橋一丁目に位置する。今橋の架橋は豊臣期に廻り、東横堀川を越えて城下町へ降る道は今橋通と呼ばれていた。この今橋通と南側の高麗橋通を表として、間の浮世小路を挟む南北両側は、豊臣期の城下町建設でも上町城下町の島町と並ぶ初期に計画されたものと推測されている[松尾信裕2004]。徳川期には、平野屋五兵衛(現開平小学校)や天王寺屋五兵衛(開平小学校から道を隔てた西向かい)などの両替商が軒を連ね、「天五に平五」と称される代表的な豪商の拠点となっていた場所である。

既往の調査では高麗橋通より南で調査が多く、豊臣期から徳川初期にかかる城下町や魚市場などの町屋の開発と変遷を知る重要な成果を得ているが[大阪市文化財協会2004]、今橋町周辺に限ると調査例は少ない。本調査地の東に接してAZ90-2次調査[大阪市文化財協会2004]が、北80mほどではOJ96-13次調査が行われ[大阪市文化財協会1999]、豊臣後期の遺構が2時期確認されており、前者では上位が大坂冬ノ陣の被災面とされている。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約1.4m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。今回の調査は、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史の変遷の基礎資料を得ることを目的に実施した。

発掘調査は平成29年4月10日から開始した。調査地の全体に近い東西12m×南北27mの調査区を設定するため、調査区を3つに区切って残土置場を確保した。調査は北区から開始し、後述の第4層上面までを重機で掘削し、以後、遺構の掘削と写真・図面による記録作業や出土遺物の取上げなどを行っ

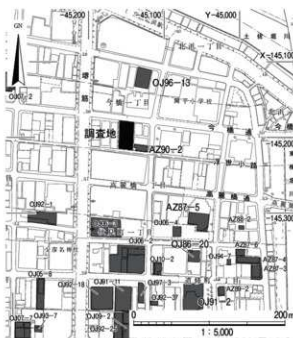


図1 調査地位置図

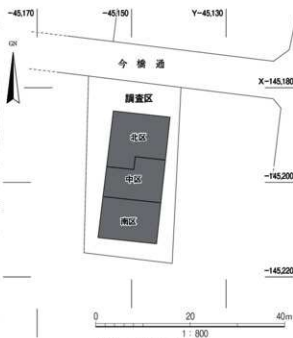


図2 調査区配置図

て豊臣後期の遺構面まで調査した。順次、中区・南区で繰り返し、同年6月19日に現地における調査を終了した。

本報告で用いた方位はMagellan社製ProMark3により基準点を測位し、世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記した。

なお、本報告の出土遺物に関する記述は調査課学芸員小田木富慈美が行った。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～6)

調査地の現況地形はTP+4.1m程度で概ね平坦である。

本調査地では、現代から古代まで大別して12層を確認した。第3層までは重機により掘削し、①第4層上面、②第5層上面、③第6b層上面、④第6c1・6c2層上面、⑤第7層上面、⑥第9a層上面、⑦第9b層上面、⑧第10・11層上面で平面的な発掘調査を行ったが、層単によって調査区の一部にとどまったものがある。

第1層：コンクリート片やガラス、金属の廃棄物などを多く含む現代の整地層である。

	第1層	整地層	現代
	第2層	整地層	近代
	第3層	古土壌・整地層の互層	18～19世紀
	第4層	古土壌	17世紀後葉～末
	第5層	整地層	17世紀後葉
	第6a層	整地層	17世紀中～後葉
	第6b層	古土壌	17世紀前半
	第6c1層	整地層	17世紀前半
	第6c2層	整地層	17世紀前半
	第6d層	整地層	徳川初期
	第7層	整地層	徳川初期
	第8層	灰層(原位置)	大坂ノ陣
	第9a層	水漬～整地	豊臣後期
	第9b層	整地層	豊臣後期
	第10層	整地層	豊臣後期
	第11層	古土壌	中世～豊臣期
	第12層	古土壌	古代以降

図3 地層と遺構の関係図

第2層：レンガや金属片などを多く含む近代の整地層である。

第3層：暗褐色(10YR3/3)中粒砂層を主体とする層厚60～100cmの整地層で、焼土層が3枚以上狭  
在し、火災によるものかは不明である。  
第4層上面の遺構から本層は18～19世紀と推定される。

第4層：暗褐色(10YR3/4)含炭、シルト質中粒砂層で、層厚30cm程度の古土壌で、17世紀後葉～末に当る。上面で第3層で覆われた礎石建物などや、第3層以上から掘削された遺構多数を検出した。

第5層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫質極粗粒砂層で、層厚60～90cmの整地層である。17世紀後葉である。本層の上面で第4層から掘削された石組穴蔵などの遺構を検出した。

第6層：6a～6d層に分けられた。

第6a層はにぶい黄褐色(10YR4/3)含シルト偽礫、粗粒砂質シルト層である。層厚25cm程度の整地層で、17世紀中～後葉に当る。

第6b層は明黄褐色(2.5Y6/6)含シルト偽礫、シルト質粗粒～極粗粒砂層で、層厚25cmの古土壌である。17世紀前半で、上面で礎石建物などを検出した。

第6c層はさらに2層に細分された。6c1層はにぶい黄褐色(10YR4/3)含炭、細礫質粗粒砂層で層厚は50cmである。基底に焼土偽礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂層シルトが堆積しており、火災の片付けによる整地の可能性がある。6c2層は黄褐色(10YR5/6)含シルト偽礫、シルト質粗粒砂層で層厚20～65cmである。第6c層は17世紀前半の整地層で、それぞれの

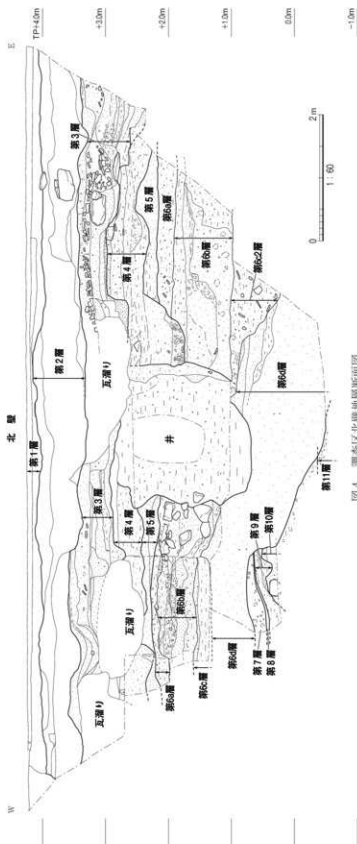


図4 調査区北端地層断面図

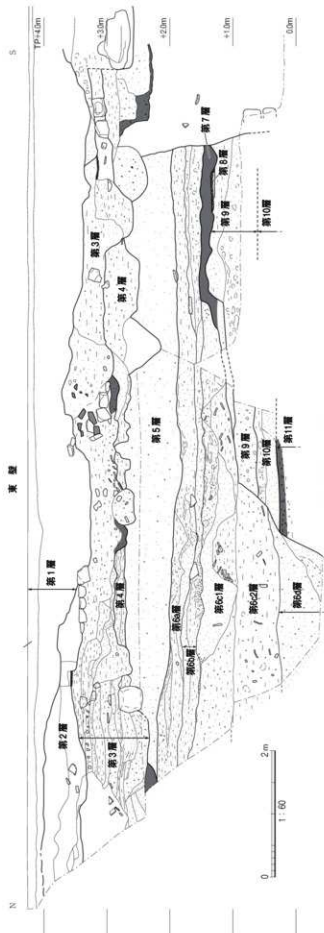
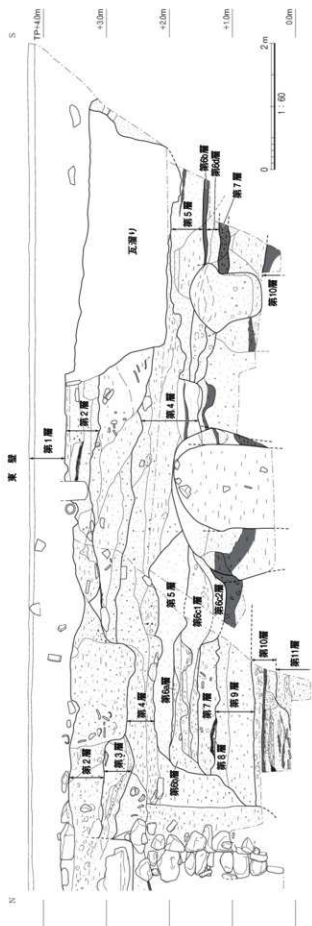


図5 調査区東部地層断面図

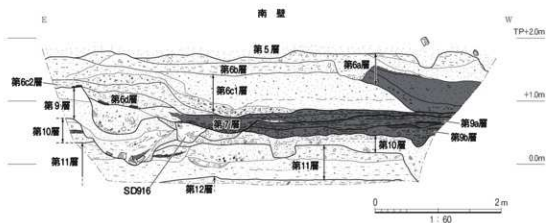


図6 中区南壁地層断面図

上面で遺構を検出した。

第6d層はふい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層の整地層で、層厚25cmである。徳川初期に当る。

第7層：黒褐色(10YR3/2)含炭・焼土偽礫、細粒～中粒砂層で、層厚5～15cmである。大坂冬ノ陣の被災面を覆った徳川初期の整地層である。上面で少数の遺構を検出した。

第8層：大坂冬ノ陣で堆積した炭層で、調査区の一部に認められた。層厚10cm以内である。

第9層：上下2層に細分される。9a層は黒色(10YR2/1)含炭・木材・灰白色細粒砂質シルト偽礫、極細粒砂質シルト層で、調査区西部の低地に堆積した層厚10～20cmの地層である。整地層であるが、炭化物ラミナが認められることから部分的に水漬きで堆積している。9b層は9a層の下位では灰黄褐色(10YR4/2)含炭・焼土偽礫、シルト質粗粒砂層で、調査区東部の当該地表面の高い部分ではふい黄褐色(10YR5/3)細礫質粗粒砂層の整地層である。層厚は低い部分で15cm、高い部分で70cm程度である。出土遺物から豊臣後期の地層であり、上面は大坂冬ノ陣直前に当る。

第10層：灰黄色(2.5Y6/2)含黄褐色シルト偽礫シルト質細粒～中粒砂層の整地層で、層厚15～20cmである。豊臣後期に当る。中区南壁断面で上面の遺構を確認したほか、南区の上面でSK1001を検出した。

第11層：上部は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質中粒砂層、下部は中～細礫混りシルト質粗粒砂層に細分される古土壌で、層厚60cm弱である。中世～豊臣前期であろう。南区の上面でSK1101を検出した。

第12層：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質極細粒砂層の古土壌で、層厚10cm以上を確認した。奈良時代の土師器1が出土し、古代にさかのぼる地層であろう。

## ii) 遺構と遺物(図7～26、図版)

### a. 豊臣前期以前の遺物(図12)

出土遺物は古代～近世にわたるが、豊臣前期以前は少量で、遺物包含層ないし後世の遺構に混入したものである。1は第12層出土の土師器甕で、口縁端部は肥厚する。奈良時代のものであろう。第6層から出土した2は7世紀後半、3は8世紀中葉～後半の須惠器杯蓋である。4は第10層出土の瓦器皿で、13世紀代であろう。5・6は第11層出土の土師器皿で、豊臣前期であろう。7は第7層から出土した中国産青花皿で、豊臣前期以前の形態である。

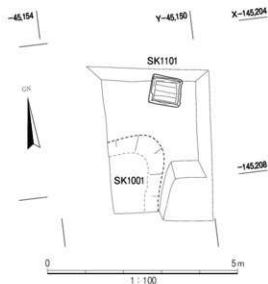


図7 第10・11層上面遺構(南区のみ)平面図

そのため水溜と考えられる。柵の方位は $N-18^{\circ}-E$ で東へ振っている。出土遺物はないが豊臣後期の整地層である第10層に覆われるため、同時期を下限とする遺構と捉えておく。

第10層上面のSK1001は東西1.1m以上、深さ0.8m以上でオリープ褐色(2.5Y4/4)含シルト偽礫、シルト質細粒砂で埋められていた。豊臣期に属する中国産青花碗・小杯のほか、土師器皿・須恵器壺・円筒埴輪が出土した。15は土師器皿で、口縁部外面は軽くナデを施す。15~16世紀代のものであろう。

第10層出土遺物には8・9がある。8は中国産白磁輪花皿である。9は口縁部が外反し、鉄絵を施

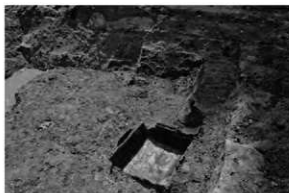


写真1 南区 第10・11層上面遺構掘削状況(北東から)

b. 第10・11層上面遺構(豊臣後期① 図7・12・13、写真1)

本層準では南区のみ平面的な調査を行い、第11層上面でSK1101を検出した。内部に東西0.75m、南北0.60m、高さ0.35mの柵を板組した土場で、底板があ

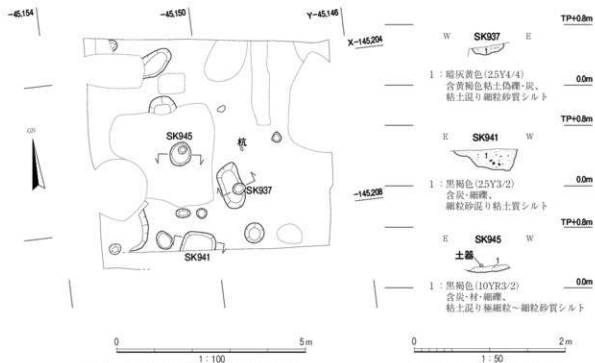


図8 第9b層上面遺構(南区のみ)平面図



図9 第9b層上面遺構断面図

す肥前陶器の皿である。

c. 第9b層上面遺構(豊臣後期)  
② 図8・9)

本層準も南区のみ平面的な調査を行い、以下をはじめとする土壌を検出した。

SK937は南北1.2m、東西0.75m、深さ0.1mで埋土は暗灰黄色(2.5Y4/4)含黄褐色粘土偽礫・炭、粘土混り細粒砂質シルトである。SK941は東西0.8m、深さ0.3mで、埋土は黒褐色(2.5Y3/2)含炭・細礫、細粒砂混り粘土質シルトである。SK945は南北0.60m、東西0.55m、深さ0.1mで、埋土は黒褐色(10YR3/2)含炭・材・細礫、粘土混り極細粒～細粒砂質シルトである。これらからは図化していないが土師器、瀬戸美濃焼・瀬戸美濃焼志野、肥前陶器、中国産磁器など豊臣後期の遺物が出土している。

d. 第9a層・第8層上面遺構(豊臣後期)③大坂冬ノ陣 図10～13・18、写真2～7)

本層準の上面が大坂ノ陣の被災面である。調査区東部で第9b層の盛土による高まりが造成される特徴があり、これ以降徳川期にかけて数次にわたり造成が繰り返される嘴矢となる。そのほか礎石建物、板組溝、土壌など多数の遺構を検出した。

SX915は調査区東部から西部

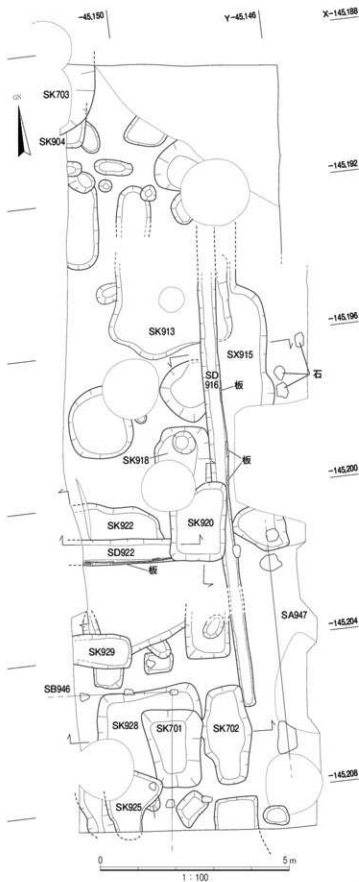


図10 第8・9層(豊臣後期～大坂冬ノ陣)上面遺構平面図

にかけての段差に当り、その西裾に南北溝SD916が形成されている。

SD916は幅0.4mの掘形にほぼいっぴいの幅で板を組んだ溝である。長さ13m弱を確認した。方位はN-2°-Eである。東側の高い造成範囲を区画するもので、ここが敷地境であった可能性もある。出土遺物には中国産青花・肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼・土師器・瓦質土器などがある。16~20は中国産青花である。16は碗で、外面には梅花文を施す。17~20は皿である。17は底部内部に「寿」字を書くもので、同様の皿は他遺構からも出土している。18は漳州窯産である。19は景德鎮産で、本願寺期に遡るものである。20は漳州窯産で、中央に猿とみられる文様を描く。口縁部は緩やかに外反する。21は肥前陶器の碗で筒状を呈する。22は瀬戸美濃焼で鉄絵を施す志野の向付である。

SD922(SK922)は幅0.5mの溝で、SD916の西にあってN-85°-Wの方位でほぼ直交している。交差点付近がSK920で確認できないが、SD916と同様に板組であり同時に存在したものであろう。板は南側のみを確認した。西へ低くなっているため、SD916から西側へ排水するための溝と考えられる。北側がやや窪んでおりSK922としたが、一連の遺構である。出土遺物には中国産陶磁器・朝鮮半島産磁器・東南亚細陶器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・備前焼・土師器・瓦・金属製品・銭・貝・骨が出土した。23は中国産白磁で端反の皿である。24は中国産青花で、景德鎮産の芙蓉手皿である。25は朝鮮半島産白磁の碗である。26・27は瀬戸美濃焼の灰軸皿である。28・29は備前焼の茶入と壺である。28の底には窯印がある。このほか中国産青花や肥前陶器の破片を加工した面子状の製品124~128が出土している(写真7)。

確実な礎石建物は1棟が見つかった。SB946は調査区南部にあり、東西2間で2.6m以上、南北は



写真2 中区SD916板組溝(北西から)



写真3 中区SD916板組溝断面(北から)



写真4 中区SD922板組溝(東から)



写真5 中区SD922板組溝断面(東から)



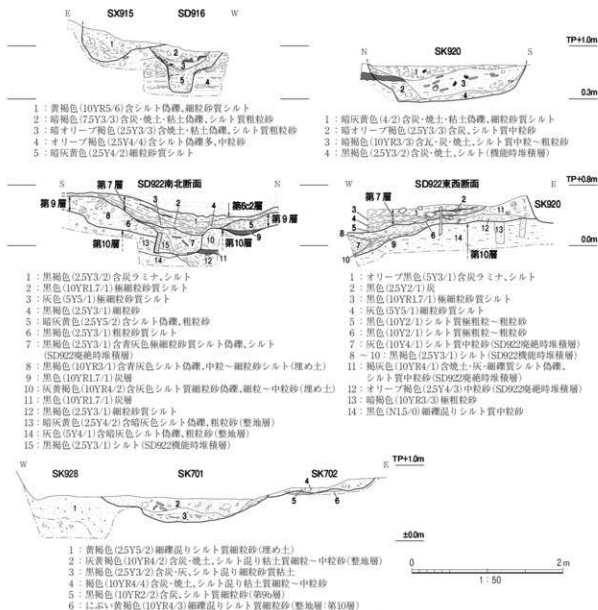


図11 第8・9層上面遺構断面図

SK701で確認できないが推定2間で3.2m以上となる。方位はN-6°8'-Eである。SK928の埋没後に建てられている。敷地の中でも低地の湿潤な場所に建てられており、礎石も20cm前後の小型であることから住居ではない簡易の建物と考えられる。一方、SD916を挟んで東側にはSA947が見つかった。建物と断定することはできないが、整地によって嵩上げた東側においてSD916に平行し、礎石もSB946より大きいため建物であった可能性がある。また、SK915の東に接しても礎石の可能性のある石が3個見つかったが、柱列として組合うか判断できなかった。

そのほか、おもな土壌を記述する。SK918はSD916の西に接してSK920よりも先行する土壌である。東西、南北ともに1.5m以上となる。出土遺物には中国産青花・瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼・肥前陶器・土師器・瓦などがある。30は中国産青花の碗底部で、内面には花文を施す。31は肥前陶器の碗である。このほかに景德鎮の窯道具とみられる磁器の円盤122が出土した(写真6)。なお、第8層からはこれと同様な窯道具123が出土している(写真6)。片面には墨書で西洋の中世絵画に見られる太陽

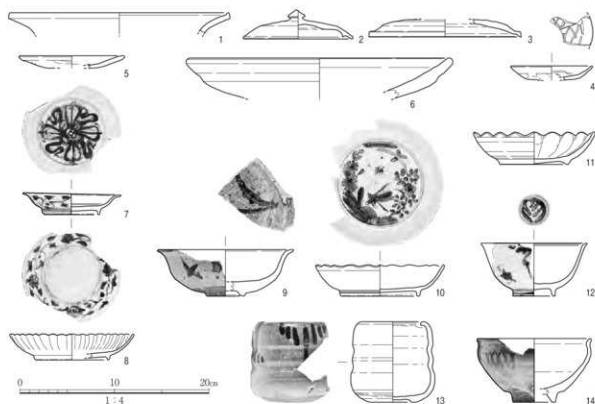


図12 豊臣後期以前の遺物実測図

第12層(1)、第11層(5・6)、第10層(4・8・9)、第9層および第9層上面精査(10~13)、  
第8層(14)、第7層(7)、第6層(2・3)

に類似した顔を描く。景徳鎮の窯道具は中央体育館地域での出土例がある[大阪市文化財協会1992]。

SK920は南北2.1m、東西1.5m、深さ0.5mで、埋土の底には機能時堆積層である炭や焼土を含むシルト層がある。大阪冬ノ陣による被災以前に、当地では炭や焼土が捨てられていたことがわかる。

SK928は調査区南部にあり、東西2.9m、南北2.5m以上、深さ0.8m以上で、黄褐色細礫混りシルト質細粒砂で埋められていた。出土遺物には中国産青花・備前焼・肥前陶器・土師器・瓦のほか、陶磁器片を加工した面子状土製品がある。32は中国産青花の皿で、高台内に銭を模したとみられる「天下太平」文を記す。同様の遺物は一乗谷朝倉氏遺跡でも見られ、本願寺期のものであろう。33・34は肥前陶器の皿である。



写真6 景徳鎮窯道具  
SK918(122)、第8層(123)

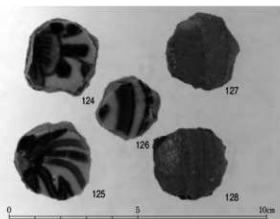


写真7 陶磁器加工面子  
SD922(124~128)

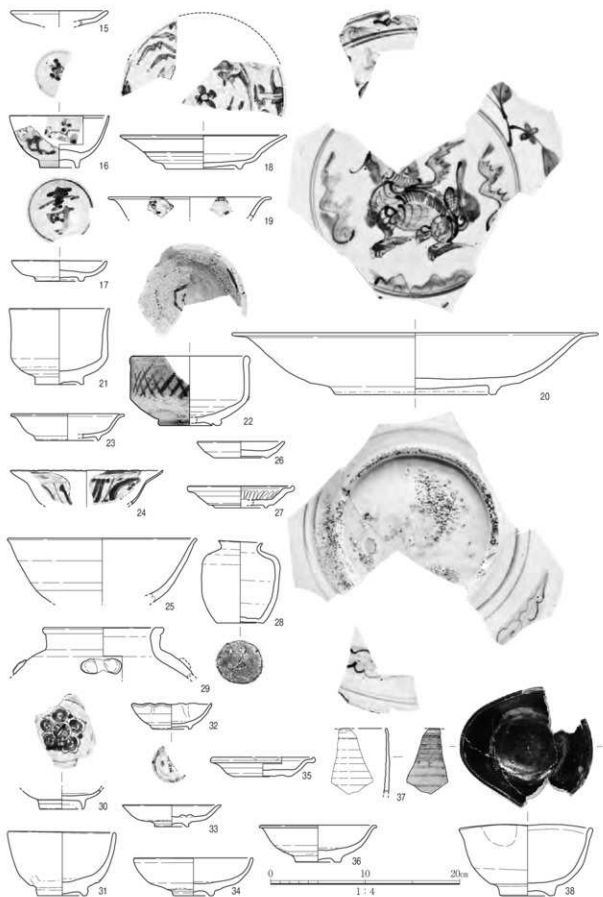


図13 豊臣後期の遺構出土遺物(第9層上面)実測図

SK1001(15)、SD916(16~22)、SD922(23~29)、SK918(30・31)、SK928(32~34)、SK925(35・36)、SK929(37・38)

SK925は調査区南端にあり、SK928より新しい。東西1.5m、南北1.6m以上、深さ0.15mで、埋土は炭を多く含む黒褐色細粒砂質シルトである。瀬戸美濃焼・肥前陶器・土師器・瓦・砥石・骨が出土した。35は瀬戸美濃焼の灰軸折縁皿である。36は肥前陶器の皿である。

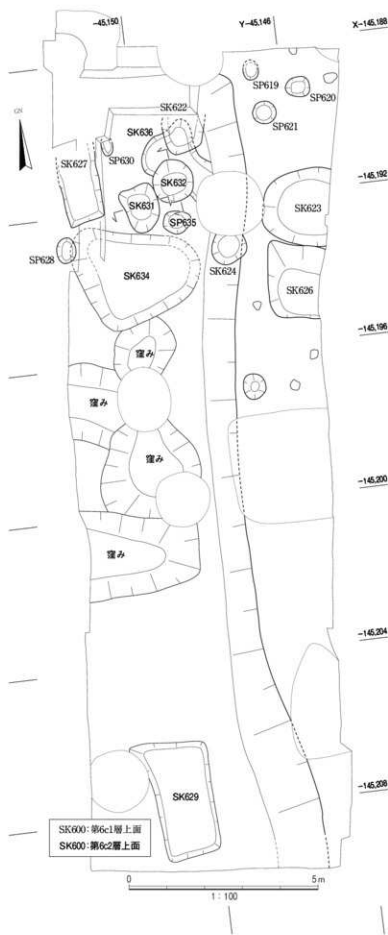
SK929はSB946の北に接する。東西1.6m以上、南北0.9m、深さ0.15mで、埋土は炭を多く含む黒褐色細粒砂質シルトである。出土遺物には、中国産青花のほか、瀬戸美濃焼志野・織部、肥前陶器・備前焼・丹波焼・軟質施軸陶器がある。37は瀬戸美濃焼の青織部軸を施す向付である。38は軟質施軸陶器で、黒褐色軸を全面に施す碗である。口縁部を歪ませている。

これらのほか、第9層および他の遺構から出土した特徴的な遺物に以下のものがある。

10～13は第9層の上面精査および掘削中に出土した。10は中国産青花の皿で、景德鎮産である。内面には型押し文様が見ら



図14 第7層(大坂ノ陣片付け整地層)上面遺構平面・断面図



れる。11は瀬戸美濃焼で志野菊皿である。12は中国産青花の碗で、漳州窯産である。13は肥前陶器の香炉とみられる。14は第8層から出土した肥前陶器の碗で、外面には鉄絵を施す。また、図示しえなかったが第9層上面で検出したSK904・913からは、ベトナム産陶器の長胴瓶が出土している。

このほか、第8層上面遺構にSK701～703がある。これらの埋土は第7層で徳川期に入りが大坂ノ陣直後に形成された遺構として本項目で記述する。

SK701・702は調査区南部に東西に並ぶ土場で、南北2.0～2.6m、東西1.3～1.6m程度、深さ0.15～0.30m程度である。SK703は調査区西北部にある土場で、平面形は南北1.9m以上、深さは0.25m程度である。

第7層からは中国産青花47、



- 1: 黒褐色(10YR3/1)含炭ラミナ少とシルト質中粒～粗粒砂
- 2: 黒色(10YR2/1)含炭ラミナ、わずかにシルト質中粒～粗粒砂ラミナの互層
- 3: 黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質粘土



- 1: 黒色(2.5Y2/1)含炭、砂質シルト偽礫、少しシルト質中粒～粗粒砂
- 2: 黒色(2.5Y2/1)含シルト偽礫、炭およびシルト質中粒～粗粒砂ラミナの互層
- 3: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)含炭ラミナ・砂質粘土偽礫、砂質シルト

図15 第6c1・6c2層上面遺構平面・断面図

肥前陶器48などが出土している(図18)。47は口縁部が端反となる碗、48は皿で底部内面に砂目跡が残る。

e. 第7層上面遺構(徳川初期 図14)

大坂ノ陣後に整地を行っているが、前代からの西に低くなる段差は吸収できずに、南北に延びる2段として残っている。この段階の遺構には調査区北端の土壌およびSX705、南端のSK671がある。

SX705は北西-南東方向の落込みで、第6d層に相当する砂で埋没する。深さは1.25mである。大型の遺構とみられるが、全体の形状や広がりについては不明である。

SK671は直径1.5m程度の平面形が円形となる土壌で、深さは0.4m程度、埋土は偽礫の混じる加工時形成層の上位に暗

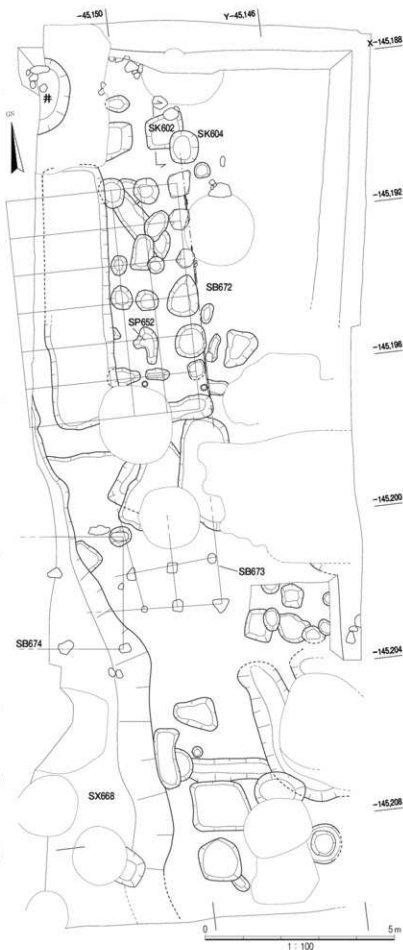


図16 第6b層上面遺構平面・断面図

褐色中粒～粗粒砂ないしシルト質細粒砂が堆積している。

f. 第6c1・6c2層上面遺構(17世紀前半 図15)

第6c層では、東部に6c2層の整地による高い地形が形成され、低い地形と両方の平坦面で遺構が形

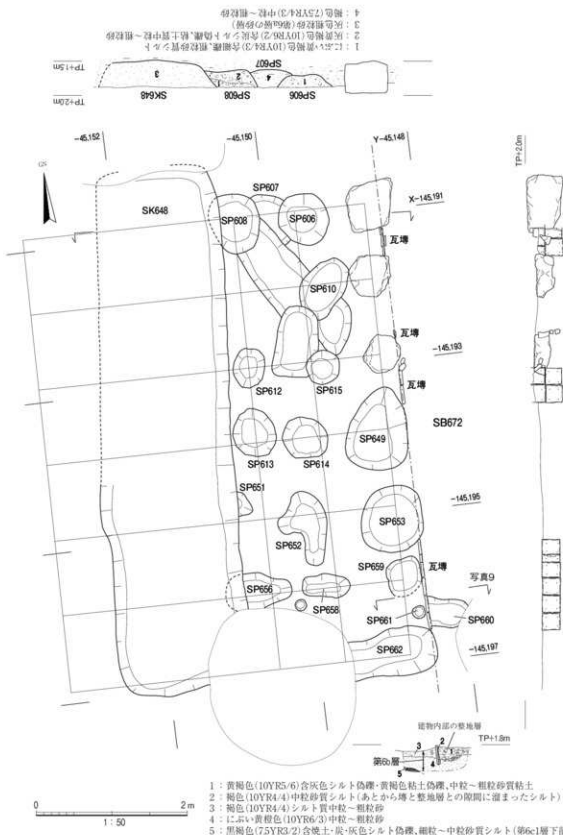


図17 SB672実測図



写真8 北・中区 SP653(SB672)断面(西から)



写真9 北・中区 SB672埴列と整地層断面(北から)

成される。また、低い平坦地の中央部付近では、掘削によるとは言い難い緩やかな凹凸のある地表面となり、第6c1層で埋没している。その後、低い地形を埋めて平坦な地形を形成した整地層が第6c1層である。上面で検出した遺構にはSK623・626などがある。

g. 第6b層上面遺構(17世紀前半 図16～18、写真8～10)

第6c1・6c2層の堆積後に、上部で形成された古土壌が第6b層である。前代から続いてきた調査地東部の南北に延びる高低差の段は西部へ移ってSX668となり、方位も北-8°-Wと西へ大きく振れるようになる。検出された遺構には礎石建物、土塋などがある。

SB672は本調査地で確認されたもっとも大きな礎石建物で、礎石も他の建物に比して格段に大きい。東側柱の北3箇所礎石が残り、その南は抜き穴が4箇所あって、6間で6.3mに推定される。方位はN-1°-Eである。東側柱列では、先に礎石を据えてその間に瓦質の塼を1段ないし上下2段に密着させて立て、建物の内側に粗粒砂質粘土を盛っている。掘形はなく、外側を先に固定しているであろう。塼は土留の役割を果たしている。東西は北側柱列で2箇所の抜き穴が確認できるが、その西にはSK648があって確認できない。SK648は幅1.8m程度、長さ7.0m、深さ0.35mの南北に長い土塋で、第6a層の砂で埋められていた。SB672の柱列と並行し、長さも概ね一致することから、SK648はSB672に関係する遺構の可能性が高い。SB672が総柱の蔵とすると、その内部にSK648のような長大な土塋を設ける例として備前焼大甕を並べた例が散見される(註1)。ただしSK648は浅く、仮に大甕などを設置すると口縁部がかなり高い位置になること、南北両端が側柱と同じ位置まで延びているため屋内施設として矛盾することなどの問題がある。一方で、埋設したものが大甕とは限らず、大甕としても床を高くすれば注ぎや汲出しの作業も可能かもしれない。また、蔵の廃絶時の抜き穴と考えれば側柱に達することも説明でき、現時点では類例を調査する必要があるが、甕蔵の可能性を指摘することとしたい。なお、東柱の抜き穴であるSP652から肥前磁器・瀬戸美濃焼・土師器が出土し、うち46は瀬戸美濃焼志野の向付で内面に鉄絵で文様を描く。



写真10 中区 SB673・674(南から)



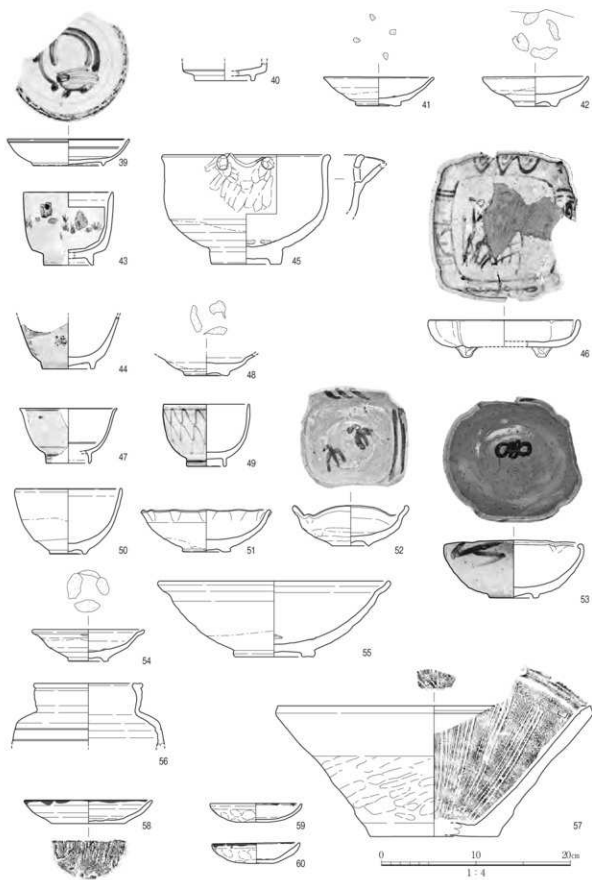


图18 徳川期の遺物実測図(1)

SK602(39~42)、SX668(43~45)、SP652(46)、第7層(47・48)、第6層(49~60)

SB673はSB672の南側にある。東西2間、南北1間を検出した。東側柱列がSB672と同じ方位となるが、西側は歪みが大きく、住居などの用途ではない可能性がある。

SB674は方位がN-7°-Eで前後の時期の他の遺構と合致しないため、この組合せで建物となるか確実でない。礎石はSX668の埋没後に据えられている。

SX668は先述のとおり西へ低くなる段差であり、第6a層で埋められていた。出土遺物には中国産磁

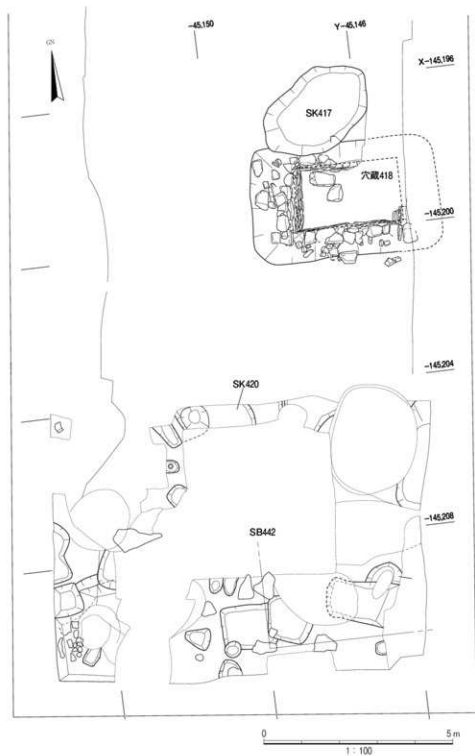


図19 第5層上面遺構(中・南区のみ)平面図(17世紀中～後葉)

器・肥前磁器・備前焼・丹波焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・土師器・砥石・金属製品・骨がある。43は中国産磁器で、色絵の碗である。綠色軸で草花文を上絵付する。44は肥前磁器の染付碗である。外面には福字を描く。45は肥前陶器の片口である。

そのほか、本層に関連するおもな遺物を記す。SK602からは中国産青花・朝鮮半島産白磁・肥前磁器・

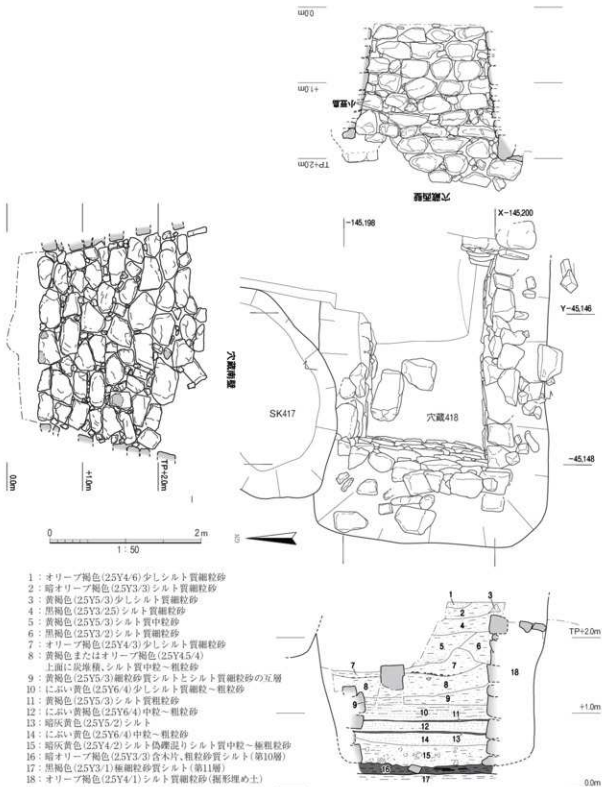


図20 穴蔵418実測図

肥前陶器・備前焼・瓦・砥石・金属製品が出土した。このうち39は中国産青花の皿で、内面に兩龍文を施す。40は肥前磁器の碗で、筒形を呈する初期のものである。41・42は肥前陶器の皿である。また、第6層から出土した50～55は肥前陶器である。50は碗である。51～53は向付で、52・53は鉄絵を施す。54・55は皿である。56はベトナム産陶器の長胴瓶である。57は丹波焼の搦鉢で、摺目は5条一単位である。58～60は土師器皿である。58の底部には糸切痕がある。なお、49は一重網手文を施す肥前磁器の碗で、やや新しい1630～50年代とみられるため、上位の遺構から混入した可能性がある。

h. 第5層上面遺構(17世紀中～後葉 図19～21、写真11～13)

本調査区では第6a層および第5層の整地を経て、敷地全体が平坦化している。第5層の上面では、第5層上部に形成された古土壌である第4層を埋土とする遺構群を調査した。平面的な調査は中区と南区で行い、中区では穴蔵418・SK417のみを調査し、南区では礎石建物や土壌が見つかった。

SB442は調査区南部にある。建物の東南角のみが残っており、全体の規模は不明であるが、比較的大型の礎石を使用する。方位は正方位に揃えている。

穴蔵418は東西3.8m以上、南北3.1mの掘形に、人頭大の川原石を8～10段程度積上げた穴蔵である。検出面からの深さは2.2mである。石垣の目地は細かな割石と粗粒砂質シルトを詰めて密封していた。石垣の大部分は亜円礫で、石材の多くは桃色のカリ長石の目立つ粗粒黒雲母の細礫やbiotの目立たない粗粒～細礫や優白質細礫もあり、これらは小豆島のものに類似している。これ以外にGabbroないしGranodioriteが認められた。底は第9層まで掘削され、土間のままであったようである。地下水は現状では湧いておらず、壁面にその痕跡もない。北東角から北壁と東壁の石材が抜取られて現存しないが、他の壁面には地下へ降りる箇所が見当たらないため、入口を設けたとすればこの場所と考えられる。地上の構造は不明であるが、石垣はほぼ正方位に揃え、SB442と一致している。

穴蔵内部の埋土から出土した遺物には、中国産磁器・肥前磁器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・備前焼・土師器・瓦質土器・金属製品・ミニチュア土製品などがある。72・73は中国産青花で、漳州窯産である。口縁部は外反し、底部内面には崩れた花文を施す。同様の青花碗は、長崎県興善町遺跡SK126で寛文3(1663)年の火災に伴うとされる資料の中に認められる[長崎市教育委員会2007]。74～79は肥前磁器で、74～77は染付である。74・75は碗で、いずれも高台内には「福」字款が見られる。76・77



写真11 金属製品(1)

穴蔵418(113)、SK417(115)、SK094(114)

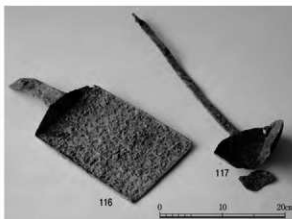


写真12 金属製品(2)

SK417(116)、第5層(117)

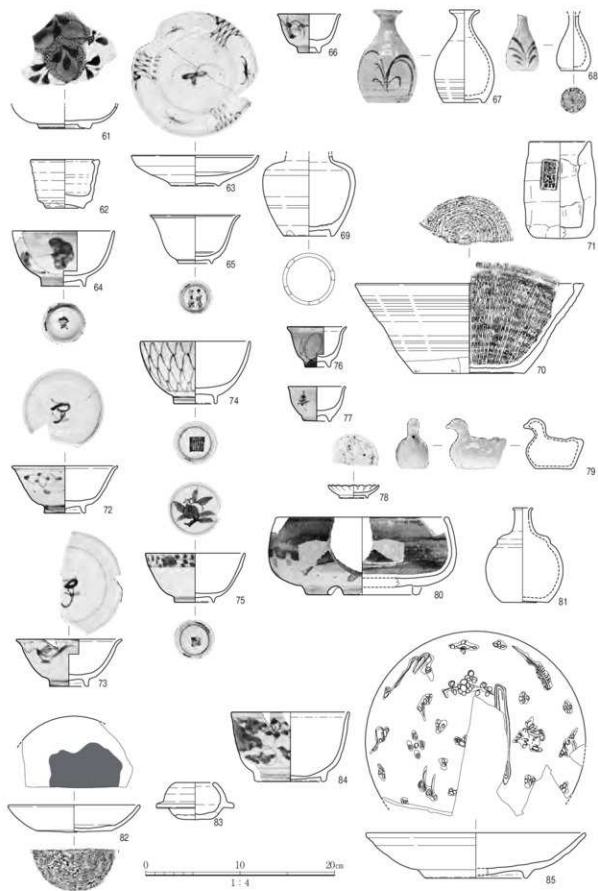


図21 徳川期の遺物実測図(2)

SK417(61~71)、穴蔵418(72~83)、SK404(84)、SE413付近(85)

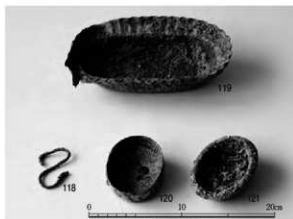


写真13 金属製品(3)

SK420(118)、穴蔵418(119~121)

は小杯で、77は「寿」字文を施す。78は色絵の小皿である。79は白磁で水鳥形の水滴である。80は肥前陶器の鉢で、釣窓風の赤色・銅緑色の釉がかかる。高台には袢りを入れる。81は備前焼の徳利である。82は土師器皿で、底部は糸切する。調整は丁寧に内面中央を黒変させており、内曇皿の系譜に属する。83は瓦質土器でミニチュアの羽釜である。このほか出土品には銅製品も多く見られ、銚子113、引手金具119、用途不明金具120・121などがある(写真11・13)。

SK417は穴蔵418の北に接する大型の土壇で、東西2.8m、南北2.3m、深さ0.8mである。穴蔵418の掘形の一部を壊している。

出土遺物には中国産青花・肥前磁器・備前焼・丹波焼・瀬戸美濃焼・土師器・瓦質土器・金属製品などがある。61は中国産青花の鉢とみられ、底部内面に柘榴文様を施す。62~68は肥前磁器である。62は青磁の香炉である。63~68は染付である。63は皿である。64は碗で、高台内に字款を有する。65は小杯で、高台内には「大明成化年製」銘が見られる。66は草花文を施す小杯である。67・68は徳利で、68はミニチュア品である。69は肥前陶器の壺である。70は丹波焼の播鉢で、口縁部端部が内側へ肥厚する。71は土師器焼塩壺である。外面には長方形枠内に「天下一擧ミなど藤左衛門」の刻印を有する。このほか、銅製鉢115(写真11)、鉦金116(写真12)が出土した。なお、115の蓋とみられる114がSK094から出土しているが、下位の穴蔵418の蔵内埋土から混入したものである(写真11)。以上は17世紀中~後葉に属する。

SK417と穴蔵418は銅製品など出土遺物に類似性が認められ、穴蔵418の廃絶に続けてSK417が不用品の廃棄穴とされたと考えられる。

このほか特徴的な遺物として、SK420からS字状の銅製品118が出土した(写真13)。また、第5層からは銅製の杓子117が出土している(写真12)。

#### i. 第4層上面遺構(17世紀末~18世紀 図22~26、写真14~16)

本層単では礎石建物や井戸、溝、土壇を多数検出した。第3層以上の複数層単の遺構が含まれている。



写真14 北区SB197(南から)



写真15 北区SD018(南から)

礎石建物は調査区北部のSB197が復元された。そのほかにも礎石とみられる石材が調査区東北部で出土しているが、復元には至っていない。

井戸は調査区北部・中央部・南部に数基ずつ近接して見つかった。北部では井戸にほど近い位置に埋甕や埋桶があり、便所と考えられることから、井戸は飲用ではないのかもしれない。また、火災後の焼け瓦などの廃棄土壌も北部・中央部・南部でそれぞれ数基が見つかった。これらは敷地

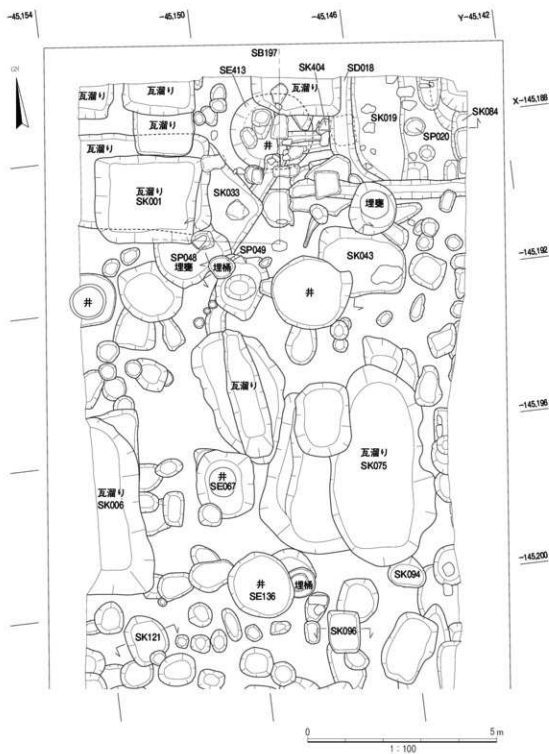


図22 第4層上面遺構平面図(北部)

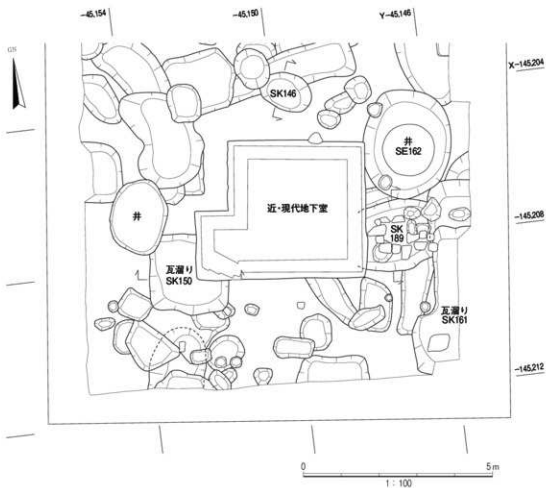


図23 第4層上面遺構平面図(南部)

内における土地の利用状況に対応したものであろう。

SB197は調査区北端で南北2間以上、東西1間以上を確認した(写真14)。方位はN-7°-Eである。周囲の平面が方形となる瓦溜りや溝の方位も一致しており、前代とは敷地内における方位が変化したとみられる。下位に井戸SE413があり、その廃絶後に建てられている。

SD018は調査区北部の南北溝で、幅0.7m程度で南部が東側に湾曲している(写真15)。埋土は銅粒・鉱滓を含む黒色極粗粒砂層で何らかの金属加工に係る遺構の可能性があるが、他にそれを示唆する遺構・遺物はない。

SP048・SP049は甕ないし桶を埋設した遺構である。SP048は瀬戸系の甕を天地逆に埋めているが、底部を欠いている。SP049は直径55cmの桶を埋めている。これらは便所に利用されたものであろう。

SK189は調査区南部にあり、掘形内に割石を四角に組んだ遺構である。一辺は0.65mで、検出された石は1段であるが、本来はもっと積まれていた可能性がある。石組の底には漆喰を充填させており、開所枠で漏水を防ぐためのものであろう。固化していないが、掘形からは18世紀初の遺物が出土している。

また、調査区南部のSK096・121・146の断面図を示した。これらのように、多くの土壌は若干の炭を含む土で埋められており、ゴミ穴として掘られたものと考えられる。



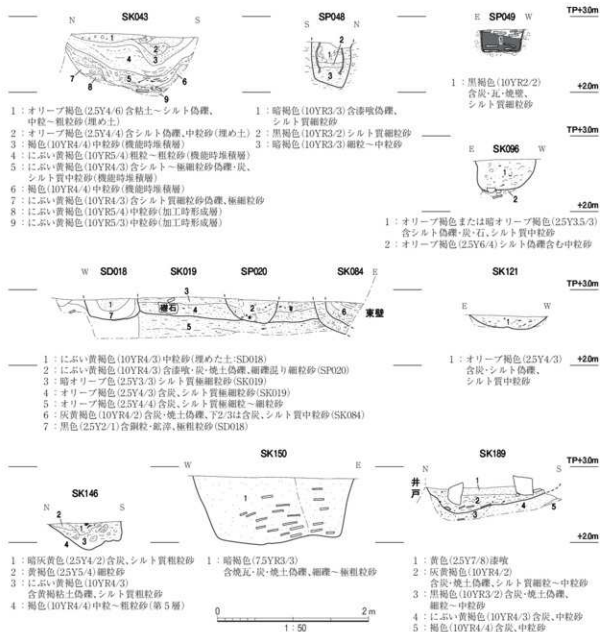


図24 第4層上面遺構断面図

そのほか、以下に特徴的な遺物が出土した遺構について記述する。

SK006(瓦溜り)は調査区中央西にあり、南北4.7m、深さ1.2mである。大量の瓦のほか、中国産陶磁器・ベトナム産青花・肥前磁器・信楽焼・丹波焼・肥前陶器・骨製品・硯が出土した。これらのほとんどが被熱しており、火災後の片付けで廃棄されたものであろう。86は中国産磁器で五彩とみられる皿である。口縁部内面には呉須の墨弾きで梅花文を施す。底部内面には色絵を施すが、被熱のため文様は不明である。87は中国産青花の小壺で、外面には「福建兒童 府願春橋 上好合香 不悟□□・・・」の文字が書かれる。88・89はベトナム産印判手の皿である。90は紫泥で急須の蓋とみられる。六角形を呈し、上部には花文を施す。中国宜興産であろう。91・92は肥前磁器の染付皿である。93は硯片で、紫黒色を呈し、裏面に「上上吉□」の刻字がある。以上のうち、86の中国産青花皿、88・89のベトナム産皿、91・92の肥前磁器皿は少なくともそれぞれ5個体以上出土しており、被熱が著しいことが

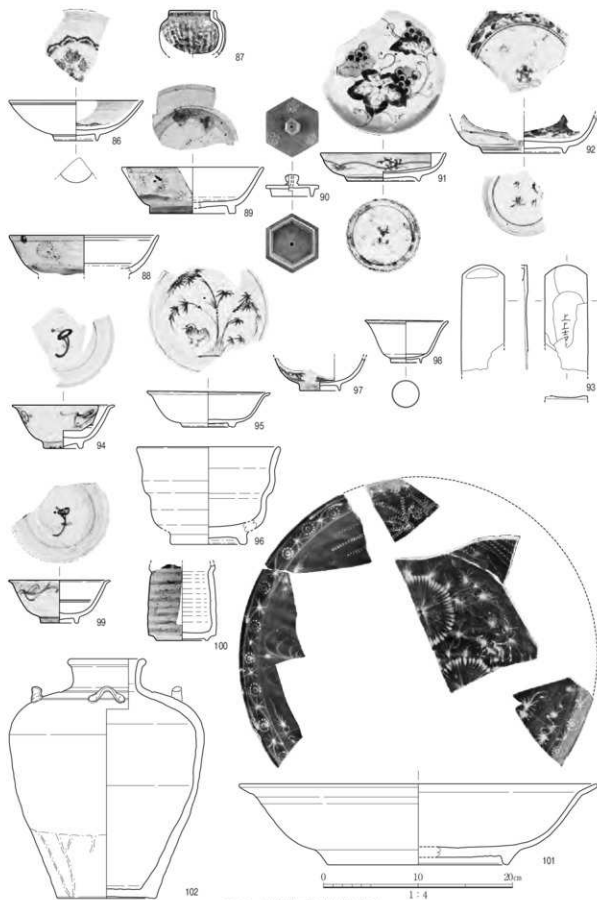


図25 徳川期の遺物実測図(3)

SK006(86~93), SK075(94~98), SK033(99・100), SK033・SK001・SE067(101), SK043(102)

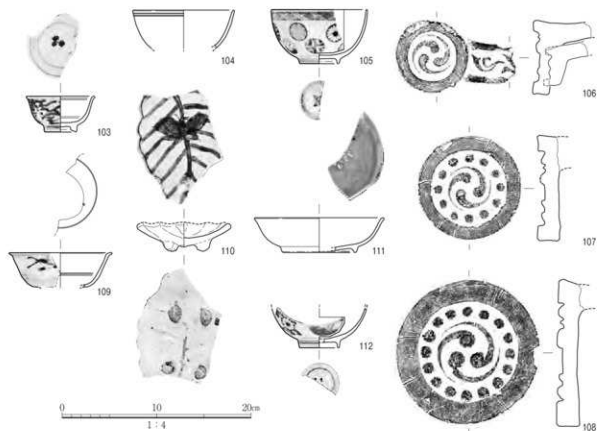


図26 徳川期の遺物実測図(4)

SK150(103-108)、第4層上部(109・110)、第4層上面精査中(111)、第3層または第4層最上部(112)

ら、本来組物で保管されたものが火災に遭い一括投棄されたと考えられる。その年代は、肥前磁器より18世紀前葉と考えられ、妙知焼に伴う資料の可能性もある。このほか、黒基石129～134が出土した(写真16)

SK075(瓦溜り)は調査区中央東にあり、南北5.3m、東西2.8m、深さ1.3mである。SK006と同様に被熱した大量の瓦とともに、中国産磁器・肥前磁器・肥前陶器・備前焼・瀬戸美濃焼・瓦質土器のほか、多数の土師器皿、金属製品、基石が出土した。94は中国産青花の碗で、漳州窯産である。底部内面には崩れた花文を施す。同一器形・文様の碗は、穴蔵418出土の72・73でも出土しており、SK075は位置が重なるため、調査時に混入した可能性があるが、後述するSK033や第4層上部でも出土しており、本来組物で所有されたものが随時破棄された状況が窺える。95は中国産青花の皿で、景德鎮産である。内面には笹と鳥の文様を雑に描く。96は中国産青磁の鉢で、体部が屈曲する。97・98は肥前磁器の染付である。97は碗で、コンニャク印判による施文を有する。98は口縁部が広がる小杯である。以上は中国産磁器など17世紀中葉以前のものを含むが、最も新しいも

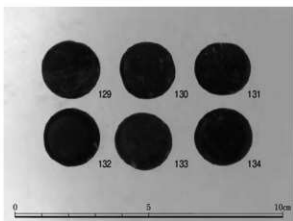


写真16 黒基石  
SK006(129-134)

のは18世紀前葉に属し、SK006と同時期とみられる。

SK033は調査区北部にあり、中国産磁器・肥前磁器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・丹波焼・備前焼・土師器・瓦・金属製品・骨が出土した。99は中国産青花の碗で、漳州窯産である。先述の94と同一文様・器形である。100は瀬戸美濃焼で青織部軸を施す向付である。101は本遺構およびSK001(瓦溜り)・SE067掘形から破片が出土した中国漳州窯産磁器で、藍地白花鮮花手の皿である。同様の皿はこれまで江戸・堺・京都・金沢での出土例はあるが[関西近世考古学研究会2016]、大坂では初例となる。

SK043は調査区北部にあり、東西2.3m、南北2.0m、深さ0.8mの土壌である。埋土の状況から開口期間が長く順次埋められていったようである。出土遺物には朝鮮半島産白磁・肥前磁器・肥前陶器・信楽焼・土師器などがある。102は信楽焼とみられる四耳壺で、いわゆる茶壺の形態であるが、腰白ではない。胎土には長石を多く含む。体部上半には褐色釉を施す。肥前磁器から17世紀後半の遺構である。

SK150(瓦溜り)は調査区南部にあり一辺が2.1mの方形となる土壌である。中国産磁器・肥前磁器・肥前陶器・関西系陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・土師器・瓦質土器・瓦が出土した。103は中国産青花の小杯で、外面には唐草文を施し、底部内面には花文が見られる。104・105は肥前磁器の碗である。106は軒棧瓦、107・108は三巴文軒瓦である。以上は18世紀前半に属する。

SK404・409からは中国漳州窯産青花の蓋物84、SK411・412・SE413付近からは中国漳州窯産色絵の皿85が出土した。これらは17世紀中～後葉に遡るが第4層の遺物が混入したものであろう。

また、第4層上部および第4層上面精査中に109～111が出土した。109は中国漳州窯産青花の碗で、73・74・94・99と同一文様、同一器形である。110は中国古染付の向付で、木の葉型を呈し、蝶の文様を施す。同様の向付はもう一個体出土している。111は中国産青磁の皿で、中央にイチチンで花の文様を施す。景徳鎮産であろう。以上は17世紀前～中葉に属し、第4層の年代としてやや古い資料である。第4層最上部からは肥前磁器の染付碗112が出土した。高台内には「大明年製」銘を施す。17世紀末であろう。第4層の年代を示す資料であり、上面遺構の年代の上限となる。

### 3)まとめ

本調査地では豊臣後期から徳川期にかけて、16世紀末～18世紀代の遺構を調査した。豊臣後期では少なくとも3時期の遺構面が確認され、これまでの周辺地の調査結果よりさらに細かな変遷がたどれることが判明した。徳川期では6期が確認されたが、豊臣期から調査地内で繰り返された高まりの造成と整地による平坦化をたどることで、城下町が西に向かって嵩上げされ拡大していった経緯を知る資料を得ることができた。これらはこれまでの城下町に対する理解を補足・補強するものといえよう。

一方、この調査ではいくつか課題が残っている。一つは溝や建物の方位の変化から街区の成立を検証することである。豊臣期から第5層上面遺構の17世紀後葉ごろまでは北でわずかに東へ振るかはほぼ正方位に揃えているのに対し、それ以後になってより明確に東へ振っており、現在の町割りに一致するようになる。このことはOJ96-13次調査で考えられてきたように、現代の街区方位が豊臣後期に遡るとするこれまでの知見と一致していない。今後の周辺地での調査で検証していく必要がある。も

う一つは、今橋一丁目付近は元禄6(1693)年に遡る水帳が残されており、17世紀末の街区絵図に示される町の様子と発掘調査の成果との比較であり、この点についても周辺の調査を含めて行っていく必要がある。

註1) 備前大甕を液体貯蔵施設として埋設した例として大坂城下町跡における豊臣後期のものがあり、6～8基の大甕を1～3列設置するため、長大な土壌を掘削している。甕は屑まで埋設していたとされ、地中で温度を一定に保つためと考えられよう。

・OS86-20次:SK613(布掘り:6×2列):豊臣後期[大阪市文化財協会2004]

・AZ87-5次:SK621(布掘り:8×3列):豊臣後期[大阪市文化財協会2004]

・OJ91-2次:SB604(布掘り:6×1列+桶1基):豊臣後期

#### 引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、「大坂城下町跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1997年度—』,pp.86-91

大阪市文化財協会2004、「OS86-20次およびAZ87-5・90-2次の調査」,『大坂城下町跡Ⅱ』,pp.43-112

関西近世考古学研究会2016,『関西近世考古学研究 歴史資料としての近世貿易陶磁』24

松尾信裕2004,「大坂城下町の町割」:『大坂城下町跡Ⅱ』,大阪市文化財協会,pp.357-364

長崎市教育委員会2007,『興善町遺跡』



中央区高麗橋四丁目16-3における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-2)報告書

調査個所 大阪市中央区高麗橋4丁目16-3  
調査面積 70㎡  
調査期間 平成29年4月18日～4月21日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、大庭重信



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の西部、1598(慶長3)年に成立した豊臣期船場の西端とされる心斎橋筋よりも西側、1600(慶長5)年に工事を着手し、1620(元和6)年に完成したとされる西横堀川(現在の阪神高速道路部分)よりも東側に位置している(図1)。周辺では、調査地の北東約140mでIB05-1次調査、南側約160mでOJ08-2次調査が行われており、IB05-1次調査では豊臣後期の礎石建物の一部や敷地境に復元された柱穴列が、OJ08-2次調査では武家屋敷の可能性がある豊臣後期の東西18m以上、南北9m以上的大型礎石建物がそれぞれ見つかっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006・2010]。こうしたことから、西横堀川の開削とこれによって揚がる土砂を用いた造成により船場以西の開発が進み、豊臣期には慶長3年から5年の間に大坂に集まってきた全国の大名の武家屋敷の用地に充てられ、1619(元和5)年に徳川幕府直轄地になるのを契機に西横堀川の開削工事が再開され、これによって市街地開発が一挙に進んでいったことが推定されている[松尾信裕2017]。

大阪市教育委員会が行った試掘調査によって、地表下約2.1m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出され、これを受けて調査を実施することとなった。事業者側が地表下2.1m前後までを重機により掘削した後、平成29年4月18日より調査に着手した。調査中は湧水がひどく、攪乱部分や側溝を利用して排水を行いつつ、層位毎に掘下げ、適宜、遺構・地層の平面・断面図の作成、写真撮影による記録を行った。4月21日には一部深掘りによって第4層以下の地層の観察・記録を行い、同日に現地での調査を完了した。

本報告で用いた水準値はTP値(東京湾平均海面値)で、本文・図中では $TP \pm \text{〇m}$ と表記した。また、方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座

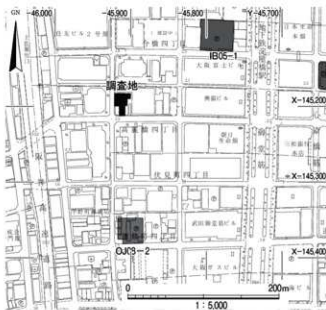


図1 調査地位置図

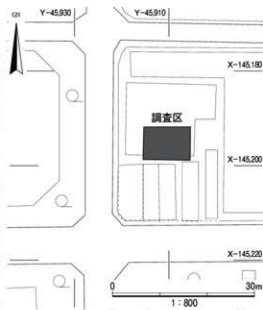


図2 調査区配置図

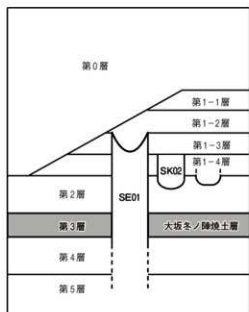


図3 地層と遺構の関係図

第0層：地表面の下はバラスを多く含む現代の盛土層(第0層)が180～220cmあり、これより下のTP-2.4mまでの地層を第1～5層に区分した(図3・4)。

第1層は現代盛土造成時に攪乱を大きく受けており、部分的に遺存していた調査区南西隅で第1-1～1-4層に細分した。

第1-1層：上部がオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂、下部が黒褐色(2.5Y4/3)の炭・焼土からなる整地層である。層厚は最大で25cmある。調査区南西端にのみ遺存していた。

第1-2層：黄褐色(2.5Y4/1)中粒～粗粒砂からなる整地層である。層厚は10cmある。調査区南部にのみ遺存していた。

第1-3層：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒～粗粒砂からなる整地層で、焼土偽礫を含む。層厚は10cmある。調査区には全域に分布し、本層上面でSE01を検出した。

第1-4層：灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂からなる整地層で、焼土偽礫を含む。層厚は10cm未満で、調査区南西隅に分布していた。本層上面でSK02を検出したほか、本層内から掘られた浅い土壌を複数確認した。

SE01・SK02から出土した遺物の年代観から、第1-1・2層は近代、第1-3層は幕末頃～近代、第1-4層は17世紀後半の時期と考えられる。

第2層：灰白色(5Y8/1)中粒～粗粒砂からなる整地層で、層厚は30cmある。地層の時期を示すもの



図4 調査区南壁地層断面図

標に基づき、座標北を基準にした。

## 2)調査の結果

### i)層序

調査地の現況は平坦で、地表面の標高はTP+1.6mである。

地表面の下はバラスを多く含む現代の盛土層(第0層)が180～220cmあり、これより下のTP-2.4mまでの地層を第1～5層に区分した(図3・4)。

第1層は現代盛土造成時に攪乱を大きく受けており、部分的に遺存していた調査区南西隅で第1-1～1-4層に細分した。

第1-1層：上部がオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂、

下部が黒褐色(2.5Y4/3)の炭・焼土からなる整地層である。層厚は最大で25cmある。調査区南西端にのみ遺存していた。

第1-2層：黄褐色(2.5Y4/1)中粒～粗粒砂からなる整地層である。層厚は10cmある。調査区南部にのみ遺存していた。

第1-3層：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒～粗粒砂からなる整地層で、焼土偽礫を含む。層厚は10cmある。調査区には全域に分布し、本層上面でSE01を検出した。

第1-4層：灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂からなる整地層で、焼土偽礫を含む。層厚は10cm未満で、調査区南西隅に分布していた。本層上面でSK02を検出したほか、本層内から掘られた浅い土壌を複数確認した。

SE01・SK02から出土した遺物の年代観から、第1-1・2層は近代、第1-3層は幕末頃～近代、第1-4層は17世紀後半の時期と考えられる。

第2層：灰白色(5Y8/1)中粒～粗粒砂からなる整地層で、層厚は30cmある。地層の時期を示すもの

第3層：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒～粗粒砂からなる整地層で、焼土偽礫を含む。層厚は10cmある。調査区には全域に分布し、本層上面でSE01を検出した。

第4層：灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂からなる整地層で、焼土偽礫を含む。層厚は10cm未満で、調査区南西隅に分布していた。本層上面でSK02を検出したほか、本層内から掘られた浅い土壌を複数確認した。

SE01・SK02から出土した遺物の年代観から、第1-1・2層は近代、第1-3層は幕末頃～近代、第1-4層は17世紀後半の時期と考えられる。

第5層：灰白色(5Y8/1)中粒～粗粒砂からなる整地層で、層厚は30cmある。地層の時期を示すもの

ではないが、8世紀の須恵器杯7が出土した(図7)。上下の地層の年代から、本層は元和年間に再開された西横堀川の開削工事に伴う盛土の可能性がある。

第3層：褐色(7.5YR4/3)の焼土層で、層厚は最大50cmで、西半で薄くなる。焼土層直上にオリブ灰色(2.5GY5/1)シルトの薄層が覆っていた。上面の標高はTP-0.9m前後である。出土遺物の年代から大坂冬ノ陣に伴う焼土層と判断される。

第4層：極細粒砂偽礫を含むオリブ灰色(10Y5/2)ないしはオリブ褐色(10Y5/2)中粒～粗粒砂からなる整地層である。層厚約70cmあり、上下に区分でき、調査区西端で下部層上面が約40cm高くなり、上部層によって東側の低い部分を埋めていた。大坂冬ノ陣に伴う焼土層のベースにあり、砂を主体とすることから、1600(慶長5)年に着工された西横堀川の開削で生じた土砂を盛った可能性がある。遺物は出土していない。

第5層：上部が浅黄色(2.5Y7/3)極細～細粒砂、下部がにがい黄色(2.5Y6/3)シルト質極細粒砂からなる湿地性堆積層で、層厚は60cmまで確認した。上部は生物擾乱を受けていた。本層下部から時期不詳の土師器細片が出土した。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第3層上面(図5)

第3層からは中国漳州窯産青花皿8・小杯9・白磁皿10や、朝鮮半島産白磁皿11などが出土し(図7)、

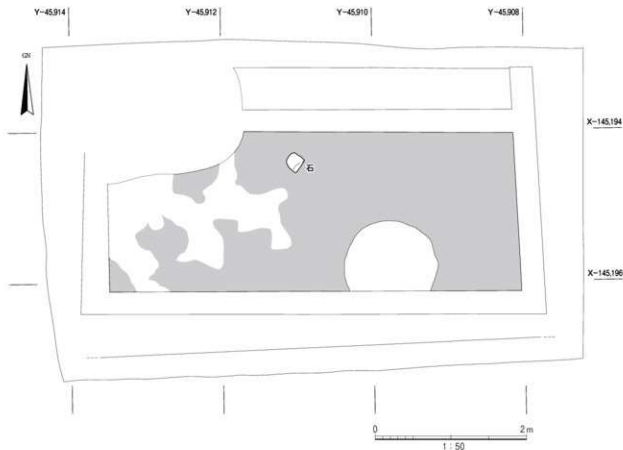


図5 第3層上面焼土分布状況(トーンは焼土分布範囲)

本層は大坂冬ノ陣に伴う焼土層と判断される。焼土はTP-0.9~1.4mの間に分布し、調査区東部で厚く、西部で薄くなり、西端には分布していなかった。現地では被熱したものではなく、他所から投棄されたものと考えられる。大型の石が1点出土したが、これも現地に据えられた礎石ではない。第4層上面では遺構は確認されず、大坂冬ノ陣直前の段階にはこの場所は空閑地であったようである。

b. 第1-3層上面および第1-4層上・下面(図6)

SE01 調査区南部の第1-3層上面で検出した円形の井戸で、直径1.2mあり、底は確認していない。井戸内の上半は第1-2層で埋まっており、下半の埋土は黒褐色シルト質細粒~中粒砂で、陶磁器類が多く出土した。出土遺物は1~6を図化した(図7)。1は肥前磁器上絵碗、2は関西系陶器碗、3は瀬戸美濃焼磁器染付小杯、4は肥前磁器染付碗、5は関西系陶器水滴、6は大谷焼の可能性がある漫瓶で、4が18世紀後葉、それ以外が19世紀の幕末から近代初頭にかけてのもので、SE01は近代初頭に廃絶したと判断される。

SK02 調査区南西端の第1-4層上面で検出した東西0.5m、南北0.5m以上、深さ0.2mの土塼で、九瓦・平瓦片のほか17世紀後半代とみられる肥前陶器および中国産青花片が出土した。SK02の周辺では第1-4層内から掘られた複数の浅い土塼を下面で検出し、SK02を囲むような方形の輪郭をもつものもあり、関連する遺構の可能性があるが、詳細は不明である。第1-4層と上位の第1-3層とは時期差が大きく、徳川期以降の地層・遺構の多くは削平されたと考えられる。

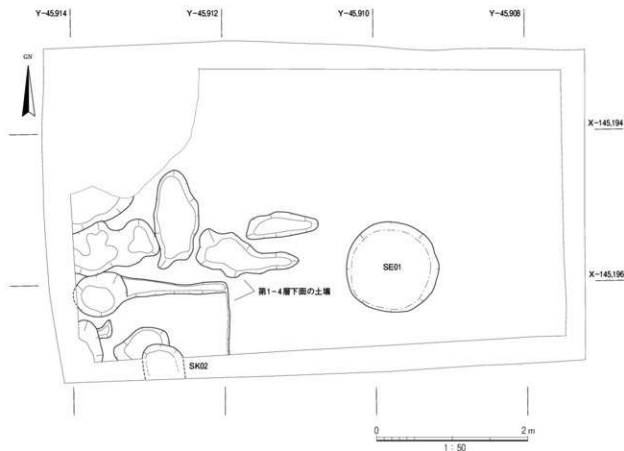


図6 第1-3層上面および第1-4層上面・下面遺構

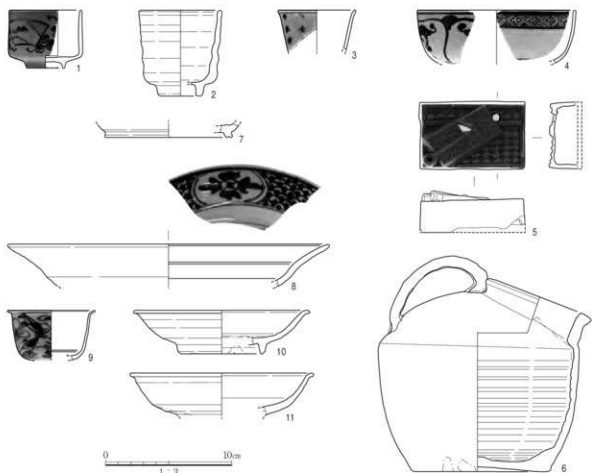


図7 出土遺物実測図  
SE01(1～6)、第2層(7)、第3層(8～11)

### 3)まとめ

徳川期以降の地層・遺構は大きく削平されており、ほとんど遺存していなかったが、TP-0.9～1.4mの間で大坂冬ノ陣に伴う焼土層を確認した。また、焼土層の下・上位には砂を主体とした整地層があり、それぞれ大坂冬ノ陣前後の西横堀川の開削工事で生じた土砂を用いた可能性が指摘でき、大坂城下町の豊臣期船場以西への拡大を示す層的な情報を得ることができた。

### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「今橋4丁目所在遺跡発掘調査報告書(B05-1)報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「中央区道修町四丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(OJ08-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』
- 松尾信裕2017、「近世における大阪市街地の拡大」：『共同研究成果報告書11』、大阪歴史博物館



中央区北久宝寺町一丁目21他における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-3)報告書

調査個所 大阪市中央区北久宝寺町1丁目21他  
調査面積 50㎡  
調査期間 平成29年4月24日～5月1日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、大庭重信



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の南東部、北久宝寺町通に面した南側に位置している(図1)。1本南の南久宝寺町通付近が1598~1599(慶長3~4)年に開発された豊臣期船場の南端と推定されており、豊臣期から徳川期にかけての城下町の南への拡大過程の解明は、一帯の調査の重要な目的の一つである。

周辺の調査成果をみると、北久宝寺町通を挟んだ本調査地北側のOJ12-8次調査では、豊臣後期には耕作地として利用され、以後に踏襲される町屋の敷地割が17世紀中葉に成立していた。また、西側の敷地では刀鍛冶に用いられたとみられる長方形の箱型の鍛冶炉や、輪羽口や鉞滓が多く出土する土壌が見つかっており、17世紀中葉から18世紀中葉にかけて鍛冶生産が行われていたと考えられる[大阪文化財研究所2014]。この北側のOJ08-1次調査では、敷地割が豊臣期に成立した可能性が指摘されており[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]、北側ほど開発が早い。一方、調査地南西側では豊臣期の明確な遺構は検出されておらず、遺構が増加するのは17世紀中葉以降であり、OJ11-4次調査では17世紀末の廃棄土壌から多数のベトナム産陶器が、BR10-2次調査では18世紀代とみられる遺構から墨作りに用いた土師器油煙受皿が出土するなど、町人の生業や性格に関わる特殊遺物が出土する点で注目される[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013a・b]。

大阪市教育委員会が行った試掘調査により、地表下約2.6m以下の深さで近世以前の遺構面・遺物包含層が検出されたことから、発掘調査を実施することとなった。本体工事のための土留め及び杭工事が完了したのち、4月24日より調査に着手した。まず、敷地の西部に東西5m、南北10mの調査区を設け(図2)、地表下約2.5mまでを重機により掘削した。以下、人力により遺構の検出・記録作業を行い、5月1日に現地での調査を完了した。



図1 調査地位置図

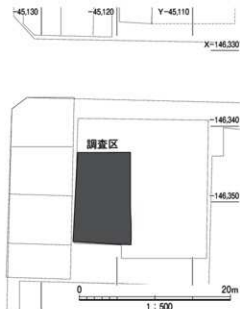


図2 調査区配置図

本報告で用いた方位は、現地記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP+〇mとした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地内はほぼ平坦であり、標高はTP+4.6m前後である。層厚約2.5mの現代盛土を第0層とし、以下の地層は調査区南壁断面を基に第1～4層に区分した。

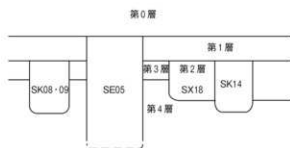


図3 地層と遺構の関係図

第1層：黒褐色(10YR2/3)シルト・中粒砂の互層からなる整地層で、現代に削平を受けており、層厚は調査区西端で10cm残存していた。本層より上から掘り込まれたSE05や、本層よりも下位のSK08から17世紀後葉の遺物が出土することから、整地の時期は17世紀後葉と判断される。

第2層：調査区北西部に分布する大型の掘込みSX18の埋土を第2層とする。下半は炭を含む灰黄褐色(10YR6/2)細粒～中粒砂、上半は炭・焼土を多く含む灰褐色(5YR4/2)細粒～中粒砂からなる。層厚は最大で100cmある。上半から豊臣後期に位置づけられる陶磁器類や土師器・瓦が出土した。

第3層：黄褐色(2.5Y5/6)細粒～粗粒砂からなる古土壌で、層厚は30cmある。土師器細片が1点出土した。本層上面の標高はTP+2.2mである。

第4層：灰白色(2.5Y8/2)細粒砂からなる難波砂州の堆積層で、層厚は50cmまで確認した。

### ii) 遺構と遺物(図4～7)

調査区内には現代の攪乱が多く、遺構もほぼ全域に分布していたため、遺構の検出作業は第2層ないしは第3層の上面で行った。検出した遺構は出土遺物から豊臣後期～徳川初期、徳川期の17世紀中葉～末、18世紀以降の3時期に大別できる。以下、主な遺構・遺物を報告する。

#### a. 豊臣後期～徳川初期

**SX18** 調査区北西部で検出した掘込みで、北半は東肩が南北に直線に延び、南半は逆L字状に南・東肩が折れ曲がる。PC杭が打設されているため確認できなかったが、調査区外に広がる規模の大きな掘込みの可能性がある。埋土は第2層で、上半の焼土を多く含む地層から中国産青花・肥前陶器・備前焼・土師器・瓦が出土し、1・2を図化した。1は肥前陶器の皿である。2は中国産青花の皿で、漳州窯産であろう。

**SK14** 調査区北西部の西壁沿いで検出した大型の土壇で、南北2.5m以上、東西1.5m以上、深さは90cmある。炭や焼土を含む細粒砂や細粒砂質シルトがレンズ状に堆積し、南肩付近には貝殻が集積しており、廃棄土壇と考えられる。SX18と重複し、これより新しい。

出土遺物は3～12を図化した。3は土師器皿である。体部内面にはナデによる圏線を有する。4～





図5 SK06断面図

9は肥前陶器である。4は小杯、5・6は碗、7は鉄絵を施す皿、8は口縁部が輪状になる皿、9は鉄絵を施す向付である。10は丹波焼播鉢である。11・12は輪羽口である。11は外径が5～7cm程度の小型品である。12は外径が8～9cm以上になるとみられる。輪羽口のほかに鉾澤も出土している。

SK10 SK14の東隣で検出した楕円形土壌で、SE02・03に一部破壊されている。直径1.0～1.2m、深さ40cmあり、埋土中には炭・焼土が含まれていた。

出土遺物は13～16を図化した。13は土師器皿である。底部はわずかに窪む。14は土師器焼塩壺である。口縁部がすぼまる形態である。15は中国産白磁の皿で、口縁部は外反する。16は肥前陶器碗である。

当該期の遺構は、以上のSX18・SK14・10の3基であり、調査区の北部に分布する。SK14から出土した狭い間隔の五本掘目をもつ10は徳川初期に下るものであるが、それ以外は豊臣後期の様相と変わらない。重複関係からSK14より古いSX18は豊臣後期に遡る可能性があるが、鍔層となる大坂冬ノ陣の焼土層を介在していないため、徳川初期に下る可能性も残されている。また、SK14からは輪羽口や鉾澤が出土しており、以後に継続する鍛冶生産が徳川初期に開始されたと考えられる。

#### b. 17世紀中葉～末

SK06 調査区南東部で検出した南北に細長い大型土壌である。南北長7.5m、東西幅1.0m以上あり、深さは最大で1.0mある。炭・焼土・鉾澤・輪羽口を多く含み、複数回にわたってこれらが放棄されていた(図5)。鍛冶作業に伴う廃棄土壌であろう。

出土遺物は17～23を図化した。17は中国産青花の碗で、景徳鎮産である。18～20は肥前磁器の染付である。18・19は碗、20は皿である。21は瀬戸美濃焼で黄瀬戸の皿である。内面には草花文を施すとみられる。22は軟質施軸陶器で鳩の人形である。23は小型の埴場である。内底面に緑青の錆が付着し、内面上半は融解して黒色化している(註)。以上は17世紀中～後葉に属する。

SK01 調査区北部で検出した長方形土壌で、東西1.6m以上、南北1.0m、深さ80cmあり、垂直に掘り込まれていた。埋土はほぼ炭・焼土で占められ、輪羽口や鉾澤が多く出土した。また、砂粒を多く含み、輪羽口と共通する胎土の焼土も多く出土した。表面に鉾澤が付着し、これと直交する面に輪羽口の装着痕が認められることから、輪羽口の先を炉に固定し保護するための粘土と考えられる(写真1)。厚さは6cm程度である。

出土遺物は24～30を図化した。24～26は肥前磁器の染付である。24・25は碗、26は皿である。27は肥前陶器の碗である。28は丹波焼の壺で、鉄漿壺として使用している。29は丹波焼の播鉢である。30は信楽焼の播鉢で、当該期の大坂では類例が少ない。以上は17世紀末に属する。

SE05 調査区中央の西壁沿いで検出した井戸で、掘形が直径2.6mと大きく、井戸側は直径0.7mあ

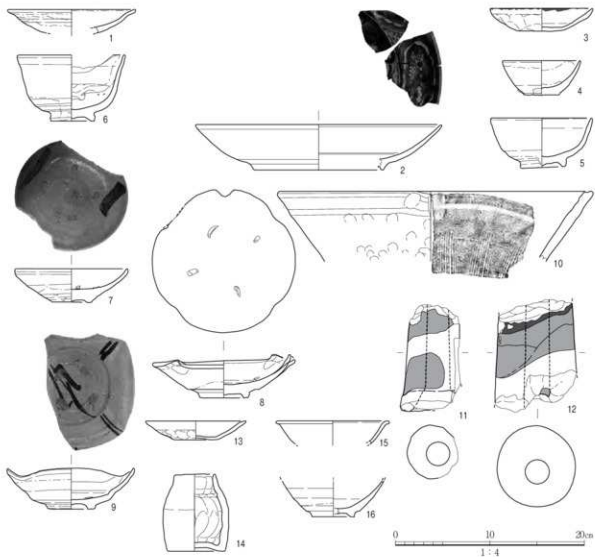


図6 出土遺物実測図

SK10(13～16)、SK14(3～12)、SX18(1・2)

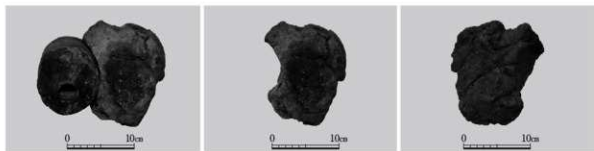


写真1 SK01から出土した襦羽口の保護粘土(左:襦羽口を装着させた復元、中:表面、右:裏面)

る。深さは1.0mまで確認した。井戸側内の上半に鉾滓をまとめて投棄していた。

出土遺物は31・32を図化した。31は肥前磁器の染付碗である。17世紀後葉であろう。32はベトナム産陶器で染付を施す皿である。底部内面は蛇の目状に釉剥ぎする。類例は17世紀前半の資料に見ら

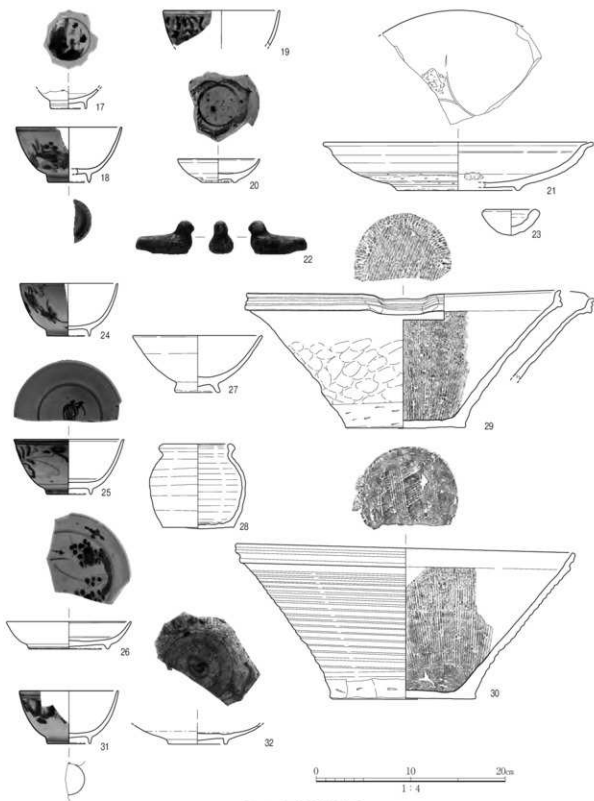


図7 出土遺物実測図

SK01(24~30)、SE05(31・32)、SK06(17~23)

れる。

SE16 SE05の東隣で検出した井戸で、上半は現代の攪乱によって大きく失われており、攪乱下で直径0.9mの輪郭を確認した。深さは0.6mまで確認した。出土遺物から17世紀中～後葉のものと考えられる。

このほか、調査区南部のSK07～09・15・17、調査区中央のSK11～13といった小規模な土壌も当該期に属すると考えられ、SK15からは17世紀中葉、SK08からは17世紀後葉の陶磁器類が出土した。また、SK08・12からは輪羽口が出土した。当該期の遺構からは鍛冶関連遺物が最も多く出土し、付近に金属加工を行う工房があったと考えられる。

#### c. 18世紀以降

SE02 調査区北部で検出した井戸で、直径1.1mあり、深さは80cmまで確認した。漆喰片を含む黄灰色の砂で埋められていた。出土遺物から18世紀前半のものと考えられる。

SE03 SE02の南隣で検出した井戸で、直径1.4mあり、深さは110cmまで確認した。漆喰片や瓦片を多く含む砂質土で埋められていた。出土遺物から18世紀後半のものと考えられる。

SE04 SE03の東隣で検出した井戸で、東側が現代の攪乱で破壊されていたが、復元すると直径約1.4mになる。19世紀代の遺物が出土し、この時期まで下るものであろう。

以上、18世紀以降の遺構は、深く掘られた井戸のみが遺存しており、SE02→SE03→SE04の順で同じ場所に井戸を掘りなおしていた。これらの遺構には焼土や鍛冶関連遺物が出土せず、前時期までとは敷地の利用が変化したと考えられる。

### 3) まとめ

輪羽口や鉾滓を多く含む徳川期の土壌を検出し、北側のOJ12-8次調査地と一連の鍛冶を中心とした金属加工を行う工房が一带に存在していたと考えられる。OJ12-8次調査の成果と比較すると、今回の調査成果によって金属加工生産の開始が徳川初期に遡ることが判明し、また北久宝寺通を挟んだ北側では18世紀中葉まで継続するのに対し、南側では18世紀以降継続せずに敷地の利用が変化していた可能性がある。また、豊臣後期に遡る可能性のある遺構が検出されたが、この地域における豊臣期の開発の具体的なあり方は、今後の調査の蓄積が必要である。

#### 註

堀場内面の付着物を測定したところ、多量の銅と少量の鉛・錫を検出した。分析にはOlympus社製ハンドヘルド型蛍光X線分析計VAN TAを用いて非破壊で行った。

#### 参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ08-1)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013a、「大坂城下町跡発掘調査(OJ11-4)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包

藏地発掘調査報告書(2011)】

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013b,「大坂城下町跡発掘調査(BR10-2)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包

藏地発掘調査報告書(2011)】

大阪文化財研究所2014,「大坂城下町跡Ⅲ」



中央区北久宝寺四丁目 1-10における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-4)報告書

調査個所 中央区北久宝寺4丁目1-10  
調査面積 240㎡  
調査期間 平成29年5月29日～7月6日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、南 秀雄

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、大阪城の西南西約2kmにある東本願寺難波御坊(南御堂)の南1街区目で、御堂筋に面した敷地である(図1)。1890年や1931年の地図では、大坂城下町の一般の南北方向の屋敷割と異なり、この街区は南北道に間口を開いた東西方向の屋敷割となっている。御堂筋の拡幅を勘案すると、南北の背割は敷地内の東寄りあたりと推定される。

最新の古地理復元によれば、調査地付近は古代前期(奈良時代～平安時代前期)には陸化していたと考えられる[趙哲吉・中条武司2017]。中世後期には完全に陸化し、「津村」という村落があった。津村の中心は北に偏し、調査地点は村はずれ辺りの可能性がある([趙ほか2014]の古地理図4)。調査地周辺の最大の画期は、慶長3(1598)年の豊臣秀吉による大坂城三ノ丸の築城とこれに伴う船場城下町の造成である。

現在の埋蔵文化財包蔵地の大坂城下町跡の西限は、北御堂(西本願寺津村御坊)と南御堂を結ぶラインとなっている。北御堂は、天満にあった本願寺が京都へ移転した後、大坂の樓の岸に建立されたが、慶長2(1597)年に津村に移されたと伝わる。南御堂は、本願寺が東西に分かれた後の文禄4(1595)年に西成郡渡辺に再興され、慶長3(1598)年に現在地に移転したという。二つの御堂は船場城下町の西端を明示し、同時に旧集落である津村と新造の城下町との境界を表わしていた。また周辺には浄土宗寺院が集められ、さながら寺町のような空間を形成していたとされるが、これらは元和年間(下寺町をはじめとする上町台地側の寺町に移転した[豆谷浩之・南秀雄2015])。

周辺では、今回の調査の直後に行った南御堂のOJ17-5次調査で、立派な建物遺構が発見されている。また、北東80mのOJ07-11次調査では、御堂筋に近い側でわずかに豊臣期の遺構が見られ、



図1 調査地位置図

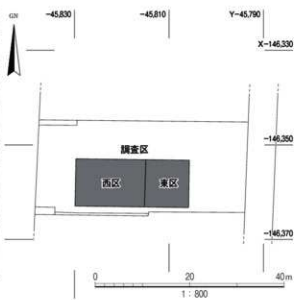


図2 調査区位置図

本格的な開発は肥前磁器が含まれる徳川期であった。それ以降の敷地割は一貫して南北方向であった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。北東200mのOJ15-2次調査では、中世～豊臣期にかけて南北に方位を揃えた溝が繰り返し掘削されていたが、豊臣期の町屋や大坂冬ノ陣の焼土層は確認されていない[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。

本調査は大阪市教育委員会の試掘を受け、敷地南西の東西24m、幅10mを対象にした(図2)。まず西側の約15mの間(西区)を6月19日まで調査し、反転して残り9m(東区)を発掘した。調査は第1層上面より開始し、自然堆積層の第7層上面から第6層中まで行った。本報告では1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP±〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現地表の標高はTP+2.6~2.7mで、TP+2.0m弱に第2次世界大戦時と推定される焼土層が広がっていた。地表下1.3~1.4mの残存状況の良い地層から層名を付した。

第1層：オリブ黒色(5Y3/1)シルト・中粒～粗粒砂層で、西側では薄層を重ねた整地層がある。層厚は15~35cmである。本層上に焼土層が分布するところがあり、上面は火災で被災したと推定される。第1層からは中国産青花皿37、同漳州窯の褐釉餅花手大皿38、肥前磁器染付碗39が出土した(14頁の図13)。37・38は17世紀前半である。他の遺物も勘案して、第1層は18世紀前葉と推定される。

第2層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト・中粒～粗粒砂層で、西側では薄層を重ねた整地層がある。層厚は10~30cmである。上面は遺構面である。第2層からは肥前磁器染付の仏飯具22、碗23・24が出土した(9頁の図9)。第2層は17世紀末～18世紀初と推定される。

第3層：暗灰黄色(10YR6/2)シルト・中粒～粗粒砂層で層厚は10~25cmである。東端では、下層の暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂層の畠作土と、上層のにおい黄褐色(10YR4/3)シルト・シルト質中粒砂層の整地層から成る。上面は遺構面である。第3層からは肥前磁器染付碗19・20が出土した(図9)。第3層は17世紀後葉と推定される。

第4層：暗オリブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒砂層で層厚は8~20cmである。上面に僅かな礎石があり、SK401などを検出した。東区ではオリブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒～中粒砂層の畠作土となり、本層上面で畝間溝、第3層下面で耕作痕を検出した。第4層からは中国産青花猪口11、肥前陶器碗12、肥前磁器染付碗13・14、同青磁皿15、同染付皿16・17、鬼瓦18が出土した(図9)。第4層は17世紀中葉と推定される。

第5層：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質中粒砂層で層厚は10~25cmである。上面の遺構は希薄で、建物の

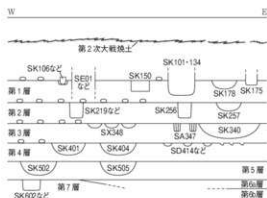


図3 地層と遺構の関係図

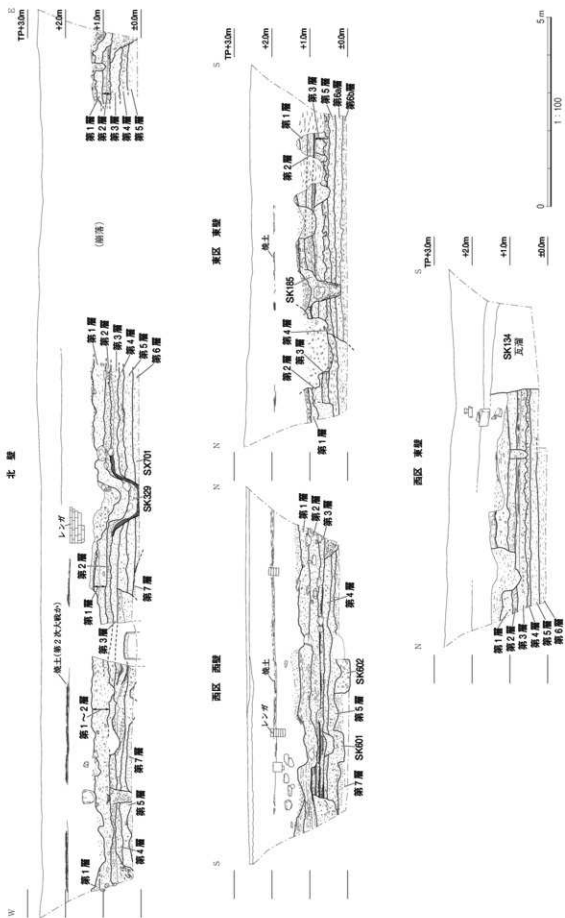


図4 地層断面図

痕跡はなく、SK505などを検出した。東区には遺構がなかった。図6の7の肥前磁器碗は第5層、中国漳州窯産青花鉢6は第6～5層出土である。第5層は17世紀前半の徳川期である。

第6層：東端では、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒～粗粒砂層で層厚10～20cmの第6a層と、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層で層厚20cm以上の第6b層に分かれる。第6a層は畠作土である。第6a層は豊臣期の可能性があり、第6b層は大坂本願寺期に遡ると推測する。第6層からは瓦器椀1、土師器皿2、中国産青磁碗3、備前焼播鉢4が出土した(図6)。

第7層：黄褐色(10YR5/6)中粒砂層で層厚は40cm以上である。自然堆積層で遺物は出土していない。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第7・6層上面(～17世紀前半)の遺構と遺物(図5・6)

SX701・702は第7層上面の不定形な窪みである。SX702は深さ0.15m以上で、南側は掘っていない。

SX701はほぼ調査区の3分の2を覆っていた。西区の北半のみで掘削し、深さ0.3m以上である。

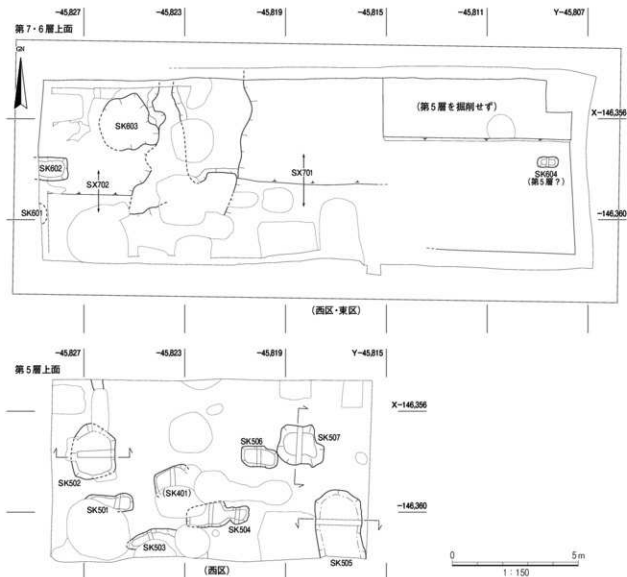


図5 第5層上面および第7・6層上面遺構平面図

第6層を埋土とし、東区では上部が作土化していた(第6a層)。第7層で形成された砂州の低いところが中世段階から埋められ、豊臣期頃は畠として利用されていたと推測される。

西壁際のSK601は直径約0.8m、深さ0.25mで、第5層で埋まる。その北のSK602は長さ1.2m以上、幅0.90m、深さ0.40mで、埋土は偽籾入りの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒～極粗粒砂である。SK603は直径2.2m前後で、深さは0.2m以上である。SK603からは17世紀前半の丹波焼播鉢5(図6)が出土した。東端のSK604は長さ0.80m、幅0.40m、深さ0.20mである。埋土は炭化物を含む黒色(2.5Y2/1)シルト質粗粒砂であった。SK604は第5層の遺構の可能性がある。

調査地点では豊臣期と徳川期の境が明確でなく、城下町造成に伴う豊臣期の地層や大坂ノ陣の焼土層はなかった。南御堂の南隣街区でも、御堂筋に面しない側は豊臣期には町場化されていなかったと推定される。

#### b. 第5層上面(17世紀中葉)の遺構と遺物(図5・6・8)

遺構は西側南北道に近い側に分布し、東区では確実に第5層上面で検出した遺構はない。SK401は第4層上面遺構の掘り残しである。浅い遺構以外は、湧水のため底は確認できていない。

SK501は長さ1.9m、幅0.75m、深さ0.35mである。SK502は長さ2.20m、幅1.75m、深さ0.35m以上である(断面などは図8)。SK503は長さ2m以上、幅1.1m以上、深さ0.20mである。肥前磁器染付碗8(図6)が出土し、SK503は17世紀中葉でも新しい。SK504は長さ2.45m、幅約1m、深さ0.35m以上である。SK505は長さ2.7m以上、幅1.85m、深さ0.45m以上で、埋土に本調査地点の整地層特有の灰泥りのシルト層を含む(図8)。SK506は長さ1.45m、幅0.80m、深さ0.15mである。SK507は長さ1.85m、幅1.55m、深さ0.40mで、底に炭が溜まっていた(図8)。SK507からは肥前磁器白磁碗9、同染付碗10が出土した。

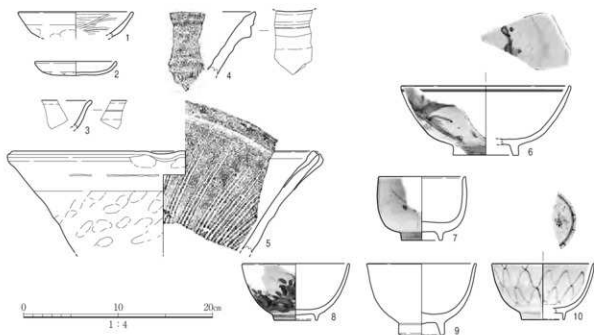


図6 出土遺物実測図(1)

第6層(1～4)、第6～5層(6)、第5層(7)、SK603(5)、SK503(8)、SK507(9・10)

第5層上面では礎石や柱穴など、建物に関する遺構はなかった。しかし、検出した土壌は現街区方向と類似した東西(SK501・504・506)や南北(SK505)に長いものが占め、この段階には以降と同じ方向の屋敷割で利用されていたと考えられる。

c. 第4層上面(17世紀中～後葉)の遺構と遺物(図7～9)

数は少ないが、西4分の1程度に礎石があり、南北道に面した狭い範囲に建物があったと推測される。調査区の東3分の1は畝であった。

SK401は長さ2.05m、幅1.50m、深さ0.5m以上で、埋土下層は整地層と似た地層であった(図8)。SK404は長さ1.35m、幅約1.2m、深さ0.25mである。埋土は、底に炭層があり、その上は灰オリーブ色(5Y6/2)細粒～中粒砂であった。SK405は深さ0.20mの円形で、SK406は一部のみ残存していた。それらの南東のSK407は深さ0.20mである。SK408は径0.55～0.75mの楕円形で、深さ0.40mである。埋土は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒～粗粒砂であった。SK409は長さ2m以上、幅0.8m前後、深さ0.4m以上で、埋土は焼土偽礫混り黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトである。SK411は直径0.70～0.80mの円形で、深さは0.40mであった。埋土はSK408と類似する暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒～粗粒砂であった。SK410・412は浅い小土壌である。

調査区の東には畝の遺構があった。畝間溝と考えられる平行した東西溝SD413～417と、鋸がささった跡と推測される耕作痕の集積からなる。畝密には耕作痕は第3層下面の遺構となる。SD413～417の間隔は芯々で1.05～1.15mである。SD414で長さ7.8m以上、幅0.15～0.45m、深さ0.02～0.03mであった。いずれも農具の痕跡により平面形に凸凹がある。溝はSD416以南で不分明になり、その場所には多数の耕作痕が残っていた。耕作痕は、東側が直線的な半月形のものが多く、分布から作業者は東西方向に動きながら鋸を打ち下ろしたと推定される。鋸の刃幅は20cm以内と推測される。

この畝遺構から以下の3点が言える。一つは、畝の方向からも、第4層上面段階の屋敷割は筋に間口を開く東西方向であったと推定できる。鯉の寝床のような敷地では、敷地の長軸方向に畝を立てるのが合理的である。二点目は、第4層上面段階では建物が立て込まず、敷地の奥は畝をつくるほどの空きがあった。三点目は、調査区では第4層上面～第1層上面の間、敷地境が動いていない可能性がある。図7左図の矢印は、第3層上面や第2層上面の遺構配置から推定した敷地境の位置であるが、これは、畝間溝がはっきりとしている場所と耕作痕が集積している場所の境になる。この違いや、SK404・407・408の南端がそろって、このラインを跨ぐ土壌がないことが、敷地境を推定する根拠である。

d. 第3層上面(17世紀後葉)の遺構と遺物(図7～9)

第3層上面から上層は遺構が多く、主な遺構を抽出して報告する。調査区中央を東西に並ぶ土壌と中央南のSD323との境、その東のSA347の北端などが合致しており、上下の遺構面から推定される屋敷境と合わせ、図7右図の矢印の位置に敷地境が推定できる。以下の記述は敷地ごとに行う。

北の敷地では間口に近い西側にSB346があった。SB346は長さ2.9m(1.5間)以上で、北側へ展開したと推測される。SB346の東にはSK311があった。SK311は深さ0.25m前後で、土壌でなく盛土の違いかもしれない。SK311からは輪花の肥前磁器染付皿21(図9)が出土した。SB346の東には円形





の土壌群SX348がある。東の2列(SK320・318・315・SK402(第4層上面で調査)、SK319・317・314・332)は比較的きれいに並ぶが、西の一群(SK316・333・330・331)はやや不規則である。深さは0.1~0.35mと浅く、確実に断面で確認したSK317で0.20mであった(図8)。この種の遺構で可能性があるのは、並置した埋壙を抜いた跡がある。SX348の奥(東)にはSK329がある。SK329は長さ1.9m以上、幅1.80m、深さ0.75m以上で、礎石に使われた石なども捨てられ、第1層上面でも窪みとして残っていた。埋土は第3層上部と似たオリープ黒色(5Y3/2)シルト層が底にあり、その上にオリープ黒色(5Y3/1)シルト質中粒~粗粒砂層があった。ごみ穴の類であろう。

SK329の南にある、SK328の西半窪み・SK403(第4層上面で調査)・SK327・SK334は、埋壙群の可能性を有するSX348と共通した特徴を見せる。深さが0.2~0.35mで、SK328西半窪みとSK403は、

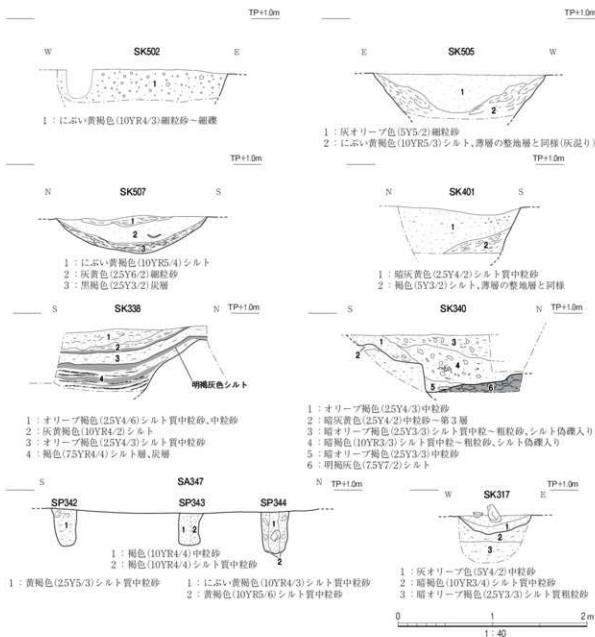


図8 遺構断面図(1)

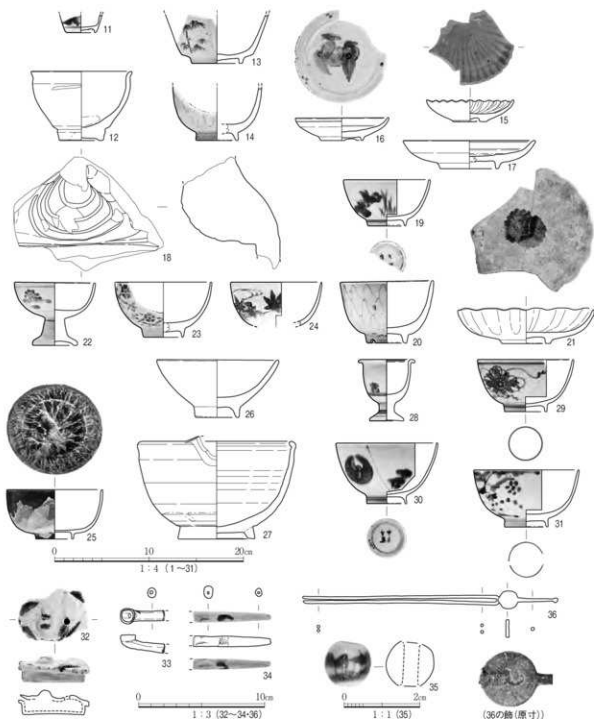


図9 出土遺物実測図(2)

第4層(11~18)、第3層(19・20)、SK311(21)、第2層(22~24)、SK219(25~31)、  
SK203(32)、SK232(34)、SK263(35)、SK159(33)、第1層より上(36)

埋土がシルト偽礫混りオリブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂で共通する。4つの土壌は一連の遺構の可能性  
がある。SK334より奥は庭となり、大きな土壌SK340があった。SK340は長さ4.6m以上、幅2m以上、  
深さ0.65m以上である。埋土は、下層が明褐色(7.5YR7/2)シルト偽礫層、上層がシルト偽礫混り  
暗褐色(10YR3/3)シルト質中粒~粗粒砂層などであった(図8)。これもごみ穴であろう。北敷地では  
奥に大きな穴を掘ってごみを処理していた。

南の敷地では、SB346と約2mの間隔をおいてSB345がある。SB345は長さ2.9m(1.5間)以上に西に延び、南へ展開したと推測される。SB345の北に接して埋桶SK335があった。SK335は底板が残り、直径0.60mである。SD323はL字形の溝で、建物を囲むか、雨落ち溝のようなものである。深さは0.05～0.15mであった。SD323から3.3mの空間をおいて、奥に掘立柱のSA347があった。SA347は長さ2.25m以上で、柱間は北から0.95m、1.3mである。掘形の深さは0.35～0.45m、柱痕跡は0.10mであった(図8)。SA347は屋敷内の簡便な遮蔽物で、この付近から奥はごみ穴のみがあった(SK335・336・338)。SK336は長さ1.75m、幅1.35m、深さ0.45m以上で、形態はSK338も類似する。三つの土壌は埋土が類似し、下層に炭層や褐色(7.5YR4/4)シルト層があり、上層は中粒砂層であった(図8)。

調査区は一つの敷地の間口から奥までをカバーしておらず、この段階で奥に倉があったのかはわからない。

e. 第2層上面(17世紀末～18世紀前葉)の遺構と遺物(図9～12)

土壌が跨らないこと、上下の遺構面の境界との関係から、図10矢印付近を敷地境と推定し、敷地ごとに報告する。

北敷地のSB245は今回の調査で検出したなかで最も明確な建物跡である。SB245は東西11.30m(6間)以上、南北2m以上である。図の柱筋aはきれいに礎石が並び、半間間隔のところが多い。柱筋c・d間は内側に礎石が多く、構造の違いを示すかもしれない。この部分のSK242には一辺15cmの炭化した材があり、建物と関連するかもしれない。柱筋dの東には第1層上面遺構のSB101の南北柱筋があり、これとdとの距離が柱筋c・d間に等しく、SB101はSB245と一連の建物の可能性も残る。SB245の南1mにはSA247が長さ3.42mにわたってある。SA247の礎石はSB245に比べて小振りである。ちょうど推定敷地境に当り、境の塀と復元したが、SB245と一連の建物の可能性もある。西端のSK203は南北1.00m、幅0.65m、深さ0.75mで、埋土は炭・焼土混りのオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質中粒砂などであった。ごみ穴で、SB245とSA247の間に納まる。SK203からは肥前磁器染付の水滴32が出土した(図9)。SK203の北東にあるSK212も大きさ・形態が類似し、同種のごみ穴であろう。深さは0.35mである。SB245の南に接するSK221は埋桶で、板が残り、直径0.45mであった。SB245の柱筋dの下になるSK238は下層のSK329の残存で、埋めた後に厚みのある礎石を据えSB245を建てている。

SB245の奥(東)は庭となり、主にごみ穴がある。SK255は0.15～0.20mの浅い窪みで、SK256～259・261・262はごみ穴と考えられる。SK256は長さ1.50m、幅0.75m前後の長方形で、深さ0.70mである。埋土はSK261・262とも類似する(図11)。SK257は直径1.6～1.8mの円形で、深さは0.45mである。埋土は第3層のごみ穴と類似する(図11)。SK263の浅い窪みから図9の35の肥前磁器染付の玉が出土した。珍しい遺物で、精巧な風景画が描かれている。

南敷地では西側にSB246があった。SB246は東西3.78m(2間)以上、南北2m以上で西に続く。SB245に比べると奥行きが短い。SB246の北にあるSK241は長辺0.80m、短辺0.40～0.45m、深さ0.50mの箱形で、側板が残っていた(図11)。用途は確かでないが、排水に関する施設かもしれない。

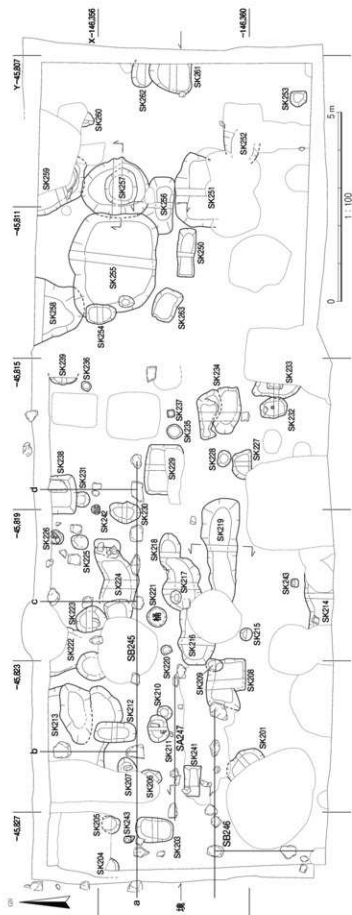


図10 第3層上面遺構平面図

SK216・217・219は、敷地方向に合わせて細長く掘られたごみ穴である。SK219は長さ2.7m以上、幅1.00m、深さ0.85m以上である(埋土は図11)。SK219からは肥前陶器碗25・26、瀬戸美濃焼の片口鉢27、肥前磁器染付の脚付き杯28、碗29～31が出土した(図9)。南敷地の奥(東)には細長方形のごみ穴SK250があった。長さ1.30m、幅0.50mで、深さ0.60mである。埋土はSK256と類似する。この他に、南敷地中央のSK232から織部風の軟質軸陶器の煙管吸口34が出土した(図9)。同種の軟質軸陶器の煙管雁首33が、SK232から北西3mにある第1層上面SK159(図12)から出している。

第3層上面と比べると、第2層上面では建物が奥側の方まで建てられた。また、SK340のような大きなごみ穴がなくなり、全体にごみ穴が小さく幅狭になり、方向を敷地に合わせる傾向が窺える。

f. 第1層上面以上(18世紀前半～)の遺構と遺物(図11～13)

本層上面では、第1層上面遺構とそれより上の遺構を同一面で調査した。遺構には、埋土に焼土片の入るもの、漆喰片の入るもの、両者が入らないもの3種があり、概ね、焼土・漆喰が入らない→焼土入り→漆喰入り、と新しくなる。第1層上面は18世紀前半の火災で被災したと推定されるが、SK101・134はそれより新しい火事整理の瓦溜で、焼土片

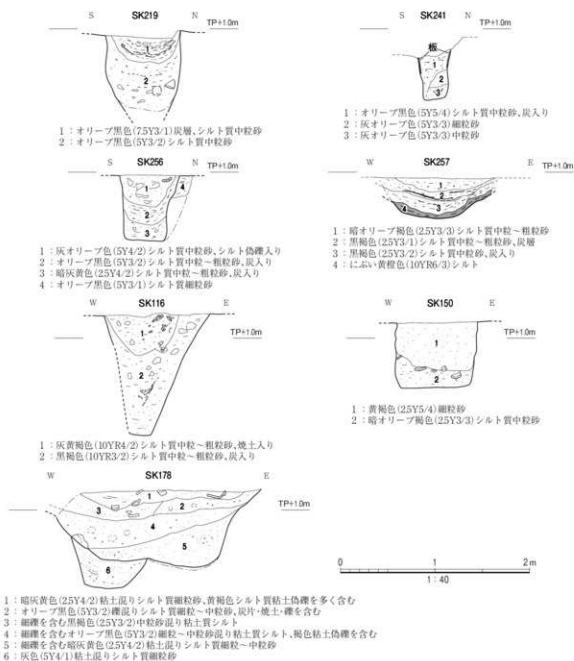


図11 遺構断面図(2)

入り遺構は複数以上の火災時のものが混在する。図12では調査時の番号を使って主要な遺構のみの番号を記し(したがって欠番がある), 明らかに上から掘られた遺構は二桁の番号となっている。網掛は、焼土も漆喰も入らず、かつ出土遺物から第1層上面の遺構の可能性の高いものである。図12の矢印は推定の敷地境で、大きな土壌などがこの線を跨がないことから、第1層上面時も下層の屋敷境が踏襲されたと考える。以下、開口に近い西から東に向けて、主な遺構を報告する。

調査区の西3分の1にSE01～06があり、いずれも第1層上面より新しい。このうちSE01は、豊島石の井戸枠の堅固な井戸である。建物や屋敷の構成上、開口からある程度の位置に井戸が設けられ、掘り直されたと考えられる。敷地を南北割と仮定すると、数多くの井戸を有する屋敷と全くない幾つかの屋敷が生じ、井戸の配置からも東西割が妥当である。井戸の周辺には水を溜める堦が据えられて

いた。SE01の西のSK106では備前焼47、肥前磁器染付碗46が出土した(図13)。18世紀前半の遺構である。その南のSK08には丹波焼壺52(図13)が据えられていた。52の底には文字と記号の墨書があった。

北西のSK116は長さ3.20m、幅1.55m、深さ1.25mで、埋土の上層に焼土が入っていた(図11)。細長く深いごみ穴で、17世紀末~18世紀前半である。埋めた後に、蓮華文様の花崗岩台座が、平らな底面を上にして礎石に転用されていた。調査区の西から中央にかけて、SK108~110・119・129・158・159などのごみ穴があった。SK110・158・159は定型化した小型のもの、他は敷地の方向に合わせて細長く、SK109は何回か掘り直されていた。SK119・129は埋土に焼土が入り、SK158・159の埋土はシルト偽礫混り暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒~中粒砂層であった。SK129から瀬戸美濃焼の孔棒の先50が出土した(図13)。SK129は18世紀前半である。また軟質施軸陶器の煙管雁首33(図9)が出土したSK159は、18世紀後半である。

北側敷地の中央にはSB101があった。前述のように一層下のSB245の一部の可能性もある。SB101と重なるSK150は長さ1.55m、幅0.90mの長方形で、深

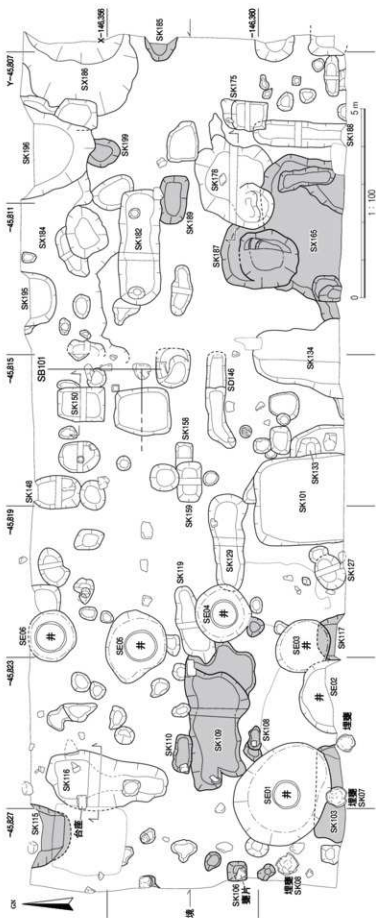


図12 第一層上面遺構平面図

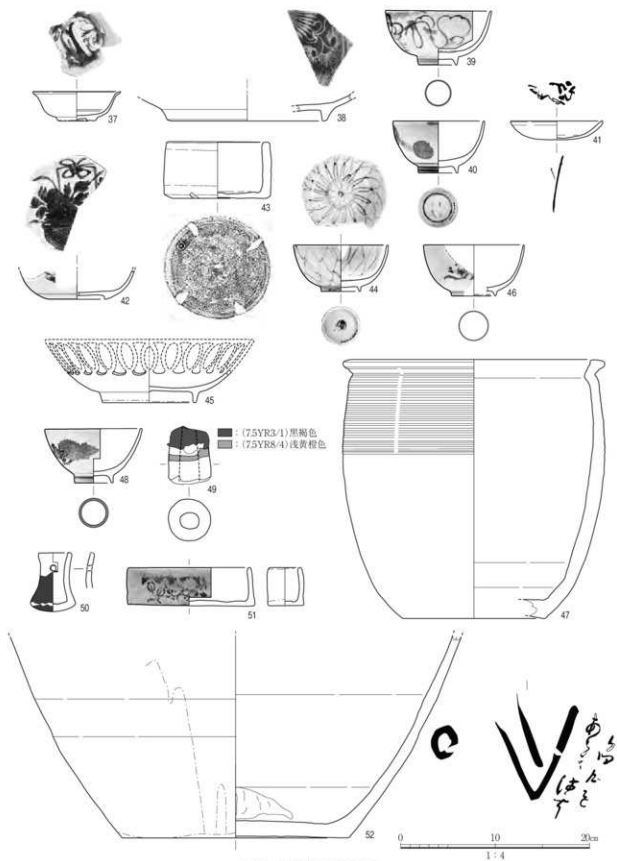


图13 出土器物实测图(3)

第1层(37~39)、SK127(40·41)、SK196((42~45)、SK106(46·47)、  
SK175(48·49)、SK129(50)、SX184(51)、SK08(52)



さ0.70mである(埋土などは図11)。形態から小型の穴蔵の可能性もある。18世紀前半の遺構である。

南敷地中央のSK101・134は第1層を覆う焼土混り地層の上面から掘られていた。焼けた瓦が充滿した、火事の後片付けの穴で、時期は18世紀中葉以降である。図9(9頁)の36の銅製の耳掻き付き簪は、SK101・134を覆う盛土から出土したもので新しい。SK101の西にあるSK127から、文字などの墨書のある土師器皿41と肥前磁器染付碗40が出土した。SK127は18世紀前葉である。



写真1 SK196出土鉦し金

調査区の東側には大きめのごみ穴SK178・196がある。SK178で径2.1~2.5m、深さ0.8~1.0mである(埋土などは図11)。SK196は底が出ず、井戸の可能性もある。SK196からは、碁笥底の中国産青花鉢42、備前焼鉢43、肥前磁器染付碗44、同白磁の透かし彫り鉢45、銅製鉦し金53(写真1)が出土した(図13)。42は古いが、SK196は17世紀末~18世紀初である。SK182は埋土に焼けた瓦が入り、SK187は細粒~中粒砂で埋まる。いずれも浅く、深さはSK182で0.25m、SK187で0.35mである。SK182は19世紀中頃で、より深いごみ穴の残存部であろう。この他にSX165・184は大きな浅い窪みで、下の遺構の影響で沈下したものかもしれない。SX184から瀬戸美濃焼の鬘水入れ51が出土した(図13)。最後に東端のSK175から肥前磁器染付碗48と輪羽口49が出土した(図13)。SK175は18世紀後半で、羽口49からみてこの時期の南敷地の生業に関連するかもしれない。

### 3)まとめ

調査区周辺が、城下町として本格的に住まわれ始めたのは17世紀中葉と推定される。調査区は最初から西側の筋に間口を開く東西の敷地割で、これが一貫して当街区の屋敷割として地図に残る明治期まで踏襲されたと考えられる。また、調査区は17世紀中葉頃~18世紀前半の間、ほぼ同じ場所で二つの屋敷地に分かれていた。

では、なぜこの街区は通常の南北割と異なるかであるが、次の理由が考えられる。南御堂は、現在もそうであるように、本堂正面は東向きである。御堂筋に面する門から入り、本堂に對面し、西を向いて拝む。西方浄土の極楽往生を第一に願う浄土真宗では、拝む方向は肝心で、阿弥陀堂や御影堂の向きはいずれも東向きである。南御堂にとって正面は、東西道の通りでなく、南北道の御堂筋となる。それに隣接する本調査地のある街区も、その影響で当初より南北道・御堂筋に間口を開く東西割になったのであろう。間口の方向は、南御堂の参拝者を当てにする商売などでは死活問題になる。

船場城下町と周辺の町割は、原則はあるが、一律ではない。個々の場所で発掘によりその淵源を調査することが、より実態に合った、豊かな都市の歴史を生むことになろう。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ07-11)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」, pp.57-84
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2017、「大坂城下町跡発掘調査(OJ15-2)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)」, pp.101-112
- 趙哲済・中条武司2017,「大阪海岸低地における古地理の変遷-「上町科研」以降の研究-」:「ヒストリア」264号, pp.3-23
- 趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014,「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」:大阪文化財研究所・大阪歴史博物館「上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型」, pp.9-22
- 豆谷浩之・南秀雄2015,「豊臣時代の大阪城下町」:大阪市立大学豊臣期大阪研究会編「秀吉と大阪 城と城下町」, 和泉書院, pp.237-264

中央区久太郎町四丁目68-5における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-5)報告書

調査個所 大阪市中央区久太郎町4丁目68-5  
調査面積 380㎡  
調査期間 平成29年7月18日～8月28日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、岡村勝行

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、大阪城の西南西約2km、御堂筋に東接する東本願寺難波別院(南御堂)の敷地北東部にあ  
る(図1)。1945年の大阪大空襲による被災以前の旧境内においては、「対面所」の東に位置する(図2)。  
周辺では、南東100mのOJ07-11次調査において、御堂筋に近い側でわずかに豊臣期の遺構が確認さ  
れ、徳川期に始まる本格的な開発以降の土地利用の変遷とともに、出土した牛馬骨の検討から、豊臣  
期から17世紀後半までの小規模な骨細工工房の存在を明らかにしている[大阪市教育委員会・大阪市  
文化財協会2010]。また、南110mのOJ17-4次調査では、17世紀中頃に始まる本格的な街場化にお  
いて、御堂筋に開口を開く東西の敷地割が一貫して継承されており、船場城下町とは異なる、南御堂  
周辺の町割りの変遷を明らかにした[大阪文化財研究所2018]。

『難波別院史』[難波別院史実行委員会編1978]から、寺院の沿革を概観する。南御堂の創建は、文  
禄4(1595)年、本願寺第12代・教如上人が大坂渡辺の地に「大谷本願寺」を建立したことに始まり、慶  
長3(1598)年に豊臣秀吉による大坂城の拡張、町制改革などのため、現在の地へと移転した。当初の  
敷地は東西47間、南北84間で、慶長8(1603)年に十五間四面の本堂の建立後、諸殿が整えられた。百  
年の月日を経て、本堂の破損が著しく、宝永2(1705)年、再建が始まった。境内の拡張整備、地盤強  
化のための盛土工事は、宝永5(1708)年1月に始まり、本堂地形の土は生玉神社の裏山などから、境  
内の砂は江戸堀・中之島・難波橋などの川砂sが当てられた、と伝わる。宝永7(1710)年、境内の整  
備工事が終わり、正徳3(1713)年、重層屋根の本堂の完成をみる。その後、順次、諸殿が整えられ、  
享保12(1727)年、23年の歳月を要して、再建工事が完了した。これらの建物は享保9(1724)年の「妙  
智焼」にも罹災を免れ、その姿は『摂津名所図会』(寛政8～10年刊行)に描かれる。大正15(1926)年、

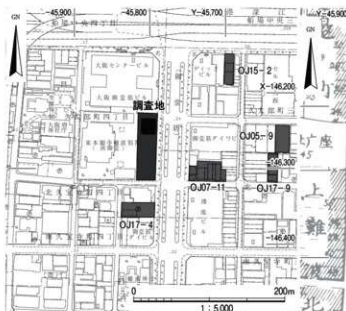


図1 調査地位置図

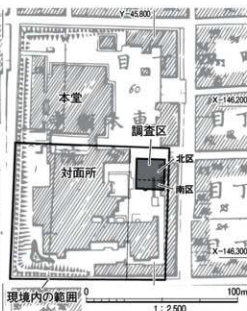


図2 調査区的位置(下図は1890年刊行「大阪実測図」)

難波別院(南御堂)と津村別院(北御堂)を結ぶ参道である御堂筋の拡幅工事が始まり、それに伴って門前の住居群が取り払われ、別院も境内地約670坪が切り取られた。昭和7(1932)年3月には難波別院における拡幅への対応工事が完了し、南御堂は名実ともに大阪のメインストリートに位置することとなった。昭和20(1945)年、第一次大阪大空襲により、本堂を含め、境内のほとんどの建物が灰燼に帰し、現在の本堂は場所を移し、昭和36(1961)年に再建されたものである。

本調査は大阪市教育委員会の試掘結果を受け、敷地北東の東西19m、南北20mを対象にした(図2)。7月18日に開始し、当初、調査区全域を一度に調査する予定であったが、南側で同時進行する解体工事の遅れにより、排土置き場を確保できず、先に南北14mについて、第2層上面から調査を開始し、第7層上面まで進めた。8月17日より、残りの6m分の調査を開始した(便宜的に前者を「北区」、後者を「南区」と呼ぶ)。従って、旧寺院の姿が最もよく保存された第4層上面の状況写真は分割されている。なお、コンクリート製の巨大な地中障害があった調査区南西隅は調査外とした。第6層以下の調査では湧水が著しく、なかでも調査区東部では遺構を良好な状態で検出することが困難であった。調査は全体については第9層上面まで行い、調査区南端の深掘によって、自然堆積層である第10層を確認した。なお、本文中の遺物記載は、当研究所学芸員小田木富慈美による。また、動物遺存体については丸山真史氏(東海大学)に分析・寄稿頂いた。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5、図版1)

現地表の標高は御堂筋側の南・北でTP+1.4～1.5mとほぼ平坦である。調査では現地表下2.6m(TP-1.1m)までの地層を確認し、10層に大別した。各層岩相は次の通りである。

第1層：旧建物の解体工事に伴う攪乱層で、層厚は70～170cmである。

第2層：黄褐色(2.5Y5/4)細粒～中粒砂層で、層厚は40～80cmである。18世紀後葉までの遺物を包含する盛土層である。上面で18世紀末～19世紀初頭のSK201～203を検出した。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂層で、層厚は10～30cmである。第2層と一連の盛土層で、18世紀後葉までの遺物を包含する。

第4層：暗灰黄色(2.5Y5/2)極細～細粒砂層で、層厚は10～15cmである。厚さ2cm前後の薄層5～6層からなる整地層で、固く締まる。17世紀末の遺物を含む。上面で礎石建物、踏石、土塀、石組溝など、旧寺院の遺構群が検出された。

第5層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト～中粒砂層で、層厚は約10cmである。厚さ3cm前後の薄層3層ほどからなる整地層で、固く締まる。上面に鉄分の沈着が顕著である。遺物は確認できなかった。上

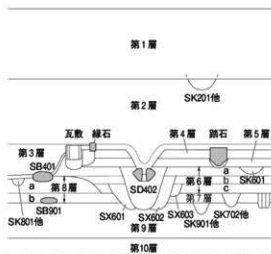


図3 地層と遺構の関係図

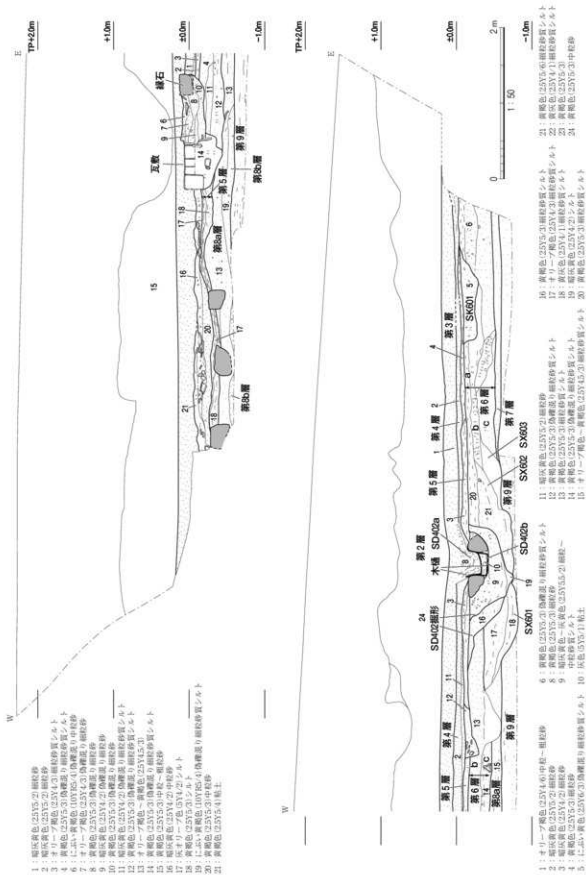


図4 北壁地層断面図





面で踏石の掘形を検出した。

第6層：偽礫を多く含む細粒砂質シルトを主体とする盛土層で、層厚は約30cmである。南北溝SD402の東部を中心に分布する。調査区北部では、概ね3層に細別される。

第6a層：シルト偽礫を多く含む黄褐色(2.5Y5/1)細粒砂シルト層で、層厚は約10cmである。SK601、SD401・402、SP422・430を検出した。

第6b層：偽礫混り黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂シルト層で、層厚は約10cmである。

第6c層：偽礫混り暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂シルト層で、層厚は約10cmである。

第7層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト層で、層厚は最大40cmである。SD402の東側に分布する。肥前磁器、丹波焼摺鉢、朝鮮半島産白磁碗17など17世紀中～後葉の遺物を含む。上面および層中で、17世紀後葉の柱穴・土溝・溝を検出した。

第8層：SB801の地盤造成に用いられた水はけの良いシルト質中粒砂を主体とする盛土層で、層厚は約40cmである。2層に細別される。

第8a層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂層で、層厚は最大30cmである。こげ茶の単色土と特徴的で、容易に識別できる。建物中心部から東と南に向けて盛土されていた。豊臣後期の肥前陶器皿のほか、7世紀末～8世紀初頭の須恵器杯B5のような古代の遺物が散見され、外部から客土されたものと考えられる。上面で17世紀中～後葉のSB801・802、SK801～809が検出された。

第8b層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒砂層で、層厚は最大15cmである。明るい茶色の単色土と特徴的で、容易に識別できる。豊臣後期の瀬戸美濃碗、肥前陶器皿のほか、古代～中世の遺物も含み、第8a層同様、外部から客土されたものと考えられる。

第9層：暗黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルト層で、層厚は最大40cmである。遺物は確認できなかった。上面で16世紀末～17世紀中葉の礎石建物SB901・土壘SK901～903を検出した。

第10層：灰黄褐色(10YR5/2)砂礫層で、層厚は25cm以上である。自然堆積層で、遺物は確認できなかった。

## ii) 遺構と遺物

遺構種別に主要な遺構を中心に記載する。

### a. 16世紀末～17世紀中葉の遺構と遺物(図6・7・10、図版2上)

第9層上面で、礎石建物、土壘を検出した。

**礎石建物** 調査区西部で直交する礎石列1と礎石列3を検出し、礎石建物の可能性があり、SB901とした。現状で南北7.0m以上、東西4.8m以上である。一辺35cm前後の礎石を用いる。礎石列1の柱間は北から2.20m、2.30m、2.15mであり、基準となる単位を見出し難い。礎石列の軸はほぼ正方位にのる。SB901の南には、礎石の可能性のある石がまばらに検出された。

**土壘** 調査区北東部でSK901・902を検出した。いずれも平面形が歪な円形を呈し、浅く、埋土は黄色粘土である。SK901は長辺1.1m、短辺1.0m、深さ0.15mで、埋土に多く炭が混じる。豊臣期と考えられる朝鮮半島産陶器の壺2が出土した。口縁部には受けがあり、蓋を伴うものであろう。内外面はタタキ調整である。SK902は長辺1.8m、短辺1.7m、深さ0.05mの不定形な浅い窪みである。

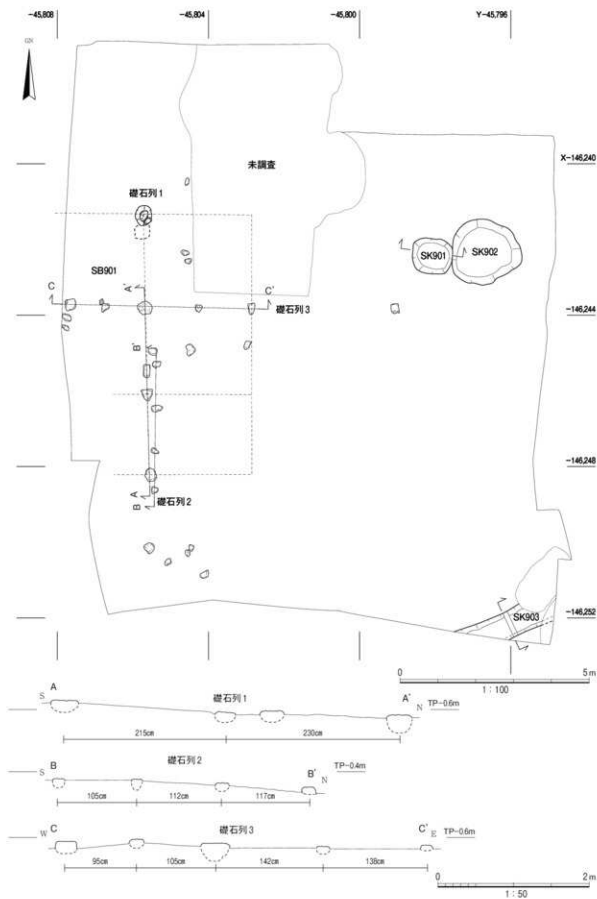


図6 第9層上面遺構平面および石列断面図

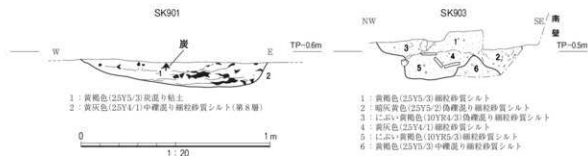


図7 第9層上面検出遺構断面図

SK903は長辺3.0m以上、幅0.7m、深さ0.30mで、瓦質土器の羽釜1が出土した。口縁部は直立し、焼成は土師質に近い。16世紀前半のものであろう。

b. 17世紀中～後葉の遺構と遺物(図8～10、図版2中・下)

調査区西部の第8層上面で、礎石建物、土壌、調査区東部の第7層上面で柱穴、土壌を検出した。

**礎石建物** 調査区西側でSB801・802を検出した。SB801の規模は、東西3.0m以上、南北7.8m以上で、北・西側はそれぞれ調査区の外まで続く。40個以上の礎石が検出されたが、第4層段階まで続く建物であり、途中、改変や追加が行われており、当初の正確な礎石の配置を明らかにすることができなかった。現状では、主柱と東柱の関係が明確でなく、平面の復元は困難であるが、東石を密に配すること、柱間一間は1.95mを単位とし、半間あるいは1/3間を基本に礎石が配置されていること、が指摘できる。SB802は南北5.8m以上で、一辺60～75cmの大型の礎石が3つ、その間に二個一對の小礎石が検出された。小礎石は西側が主柱列、東側が東柱列と考えられ、その場合、東に展開する建物となるが、調査では対応する礎石を確認できなかった。礎石の大きさからSB801に比べ、より格式の高い建物が想定される。

**柱穴** 調査区北東部の第7層上面でまともな検出された。組み合わせは明瞭でないが、SP703～705、716には柱痕跡が残る。SP703は長辺0.7m、短辺0.4m、深さ0.32m、柱痕跡の直径25cm、SP704は長辺0.8m、短辺0.4m、深さ0.23m、柱痕跡の直径0.15mである。後者から朝鮮半島産白磁の碗12、中国南方産の青花碗13が出土した。12は底部内面中央部を段状に窪ませる。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや強く外反する。SP705は長辺0.3m、短辺0.3m、深さ0.17m、柱痕跡の直径15cmである。SP707・708からはともに17世紀中葉頃の肥前磁器が出土した。SP710は長辺0.6m、短辺0.5m、深さ0.14mで、朝鮮半島産白磁の碗9、朝鮮半島産白磁とみられる皿10・11が出土した。9は高台が低く、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。10・11は器高がやや高く鉢形を呈する。口縁部は輪花となる。内外面の花卉は線刻で表している。焼成は軟質で器壁は厚い。胎土の色調は灰白色で、明緑灰～灰白色の釉を掛ける。11の高台には砂目跡が見られる。

**土壌** SK702は長辺1.3m、短辺0.6m以上、深さ0.30mの不定形な窪みで、朝鮮半島産白磁の碗6～8が出土した。いずれも軟質に焼けており、釉の色調は灰オリープ色を呈する。6は底部内面中央部を窪ませるもので、体部は内湾気味に屈曲して立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。7・8は体部から口縁部にかけて内湾する器形である。SK724は長辺1.8m、短辺1.0m、深さ0.14mで、17世紀中葉に属する備前焼の播鉢3、肥前磁器の染付小杯4が出土した。SK801は長辺2.4m、短辺1.0m、

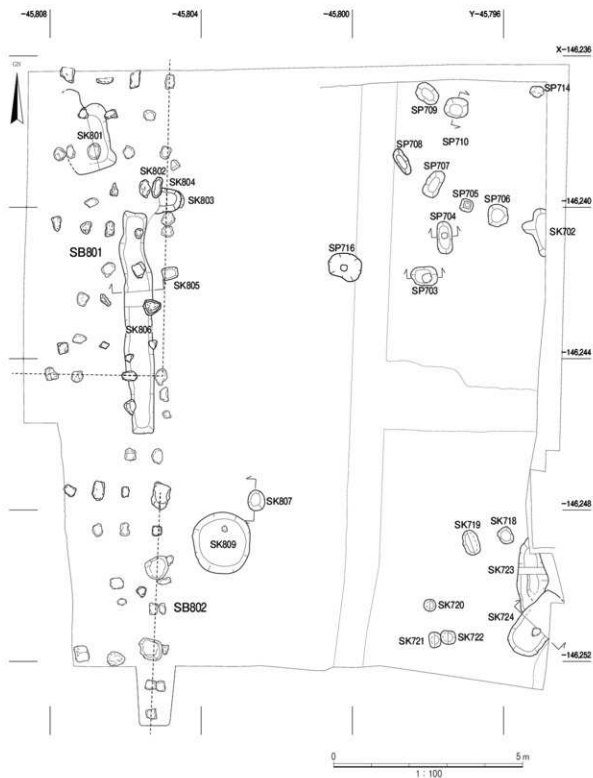


図8 第8・7層上面遺構平面図

深さ0.25m、SK806は長辺5.8m、短辺0.7m、深さ0.28mの土壇である。SK806には木枠と推定される痕跡が見られ、17世紀中葉に属する肥前陶器碗、肥前磁器香炉・碗、瀬戸天目碗などの小片が出土した。SK807は長辺0.5m、短辺0.4m、深さ0.18mで、朝鮮半島産白磁の碗14・皿15、肥前磁器の染付碗16が出土した。14の体部は屈曲して立ち上がり、15の口縁端部は内側へ屈曲する。肥前磁器から

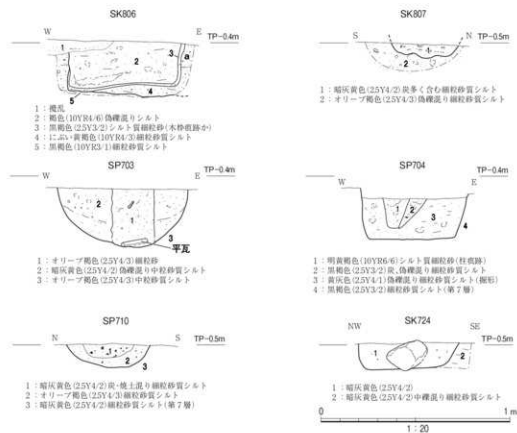


図9 第8・7層上面検出遺構断面図

みて、17世紀後葉に属すると考えられる。

### c. 18世紀初頭～後葉の遺構と遺物(図11～16、図版3～5)

第6層上面で土壌・柱穴、第4層上面で礎石建物・石組溝・踏石・扉跡などを検出した。第6層上面は一連の盛土後に、旧寺院に関わる主要遺構を構築、掘削する加工面、第4層上面は一連の地業と建物建設などが終了した段階の機能面(生活面)に相当する。

#### ・第6層上面(図4・11)

**土壌** SK601は調査区北東端で検出した瓦溜めである。長辺2.0m以上、短辺0.8m以上、深さ0.2mである。

**不明遺構** 北壁断面でSD402と同様の位置で、第6層中から掘削されたSX601～603を確認した。SX601は幅1.4m以上、深さ0.45m、SX602は幅1.5m以上、深さ0.45m、SX603は幅0.9m以上、深さ0.25mである。いずれも平面的な広がりの確認できなかったが、南に長く伸びず、SD402に先行する溝ではなく、土地造成の一工程に生じた遺構である可能性が高い。

#### ・第4層上面(図12)

礎石建物、石組溝、踏石、扉跡など、調査区全域で旧寺院に関する遺構を多数検出した。

**礎石建物** SB401は調査区西側で見つかった建物である。規模は、東西3.0m以上、南北11.8m以上で、北・西側はそれぞれ調査区の外まで続く。建物の東面では、南北方向に瓦を立て並べた遺構(瓦敷遺構とする)が検出された(図版5中)。これは地盤を固めるための地業の一種と考えられ(註1)、幅0.7

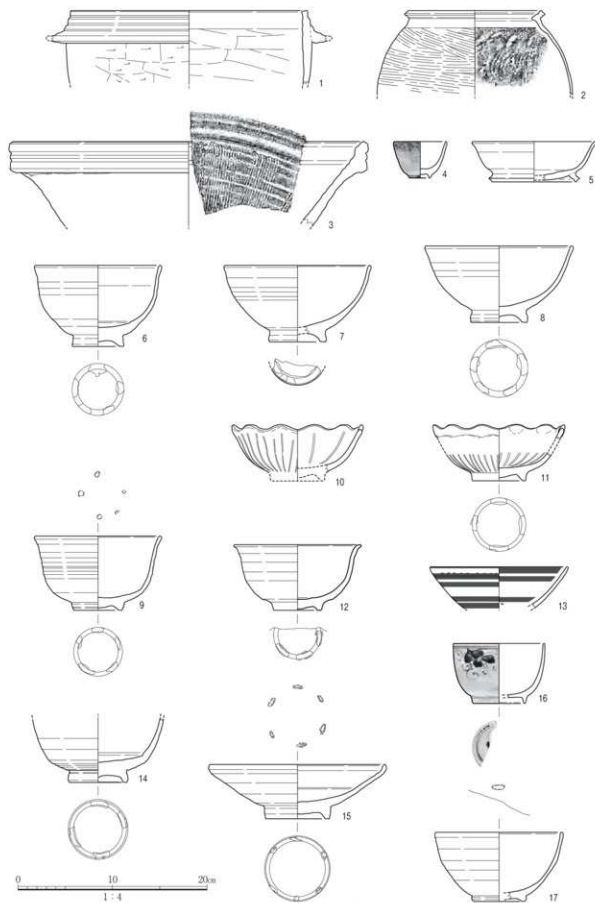


图10 出土器物实测图(1)

SK903(1), SK901(2), SK724(3·4), 第8a层(5), SK702(6~8), SP710(9~11), SP704(12·13), SK807(14~16), 第7层(17)

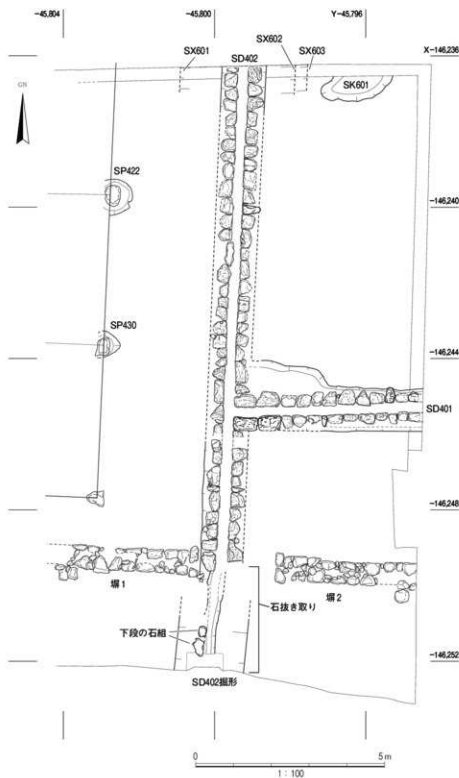


図11 第6層上面・層中遺構平面図

m前後の範囲内に、東西方向を長手として平瓦を密に立て並べ、東・西両面には見切りとなる瓦を南北方向に連続させる。非常に丁寧な作りであること、西側に対して東側の見切り瓦が二重になっていることなどから、床下などに隠れるのではなく、化粧材として露出していた可能性が考えられる。瓦敷遺構の中には、西面に沿って南北等間隔に礎石を据えた跡が5ヶ所で検出され、うち3個が遺存す

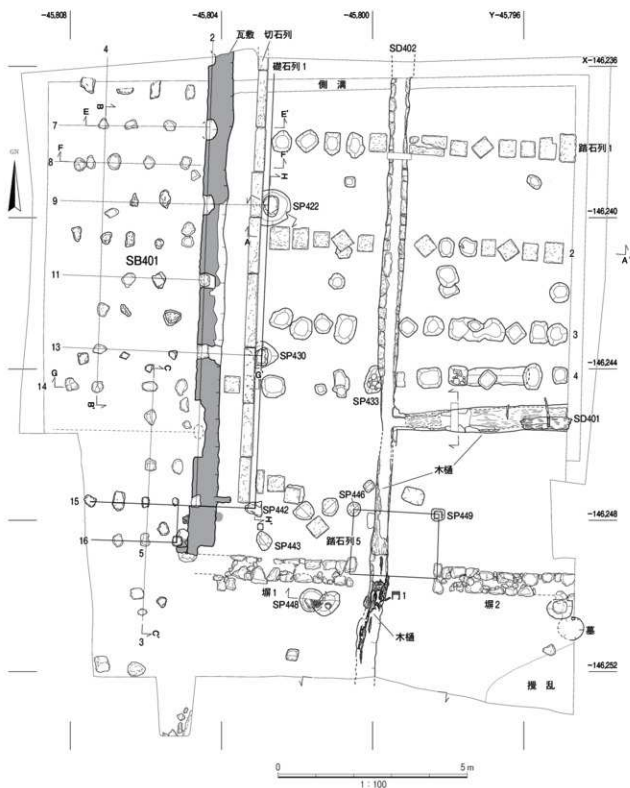
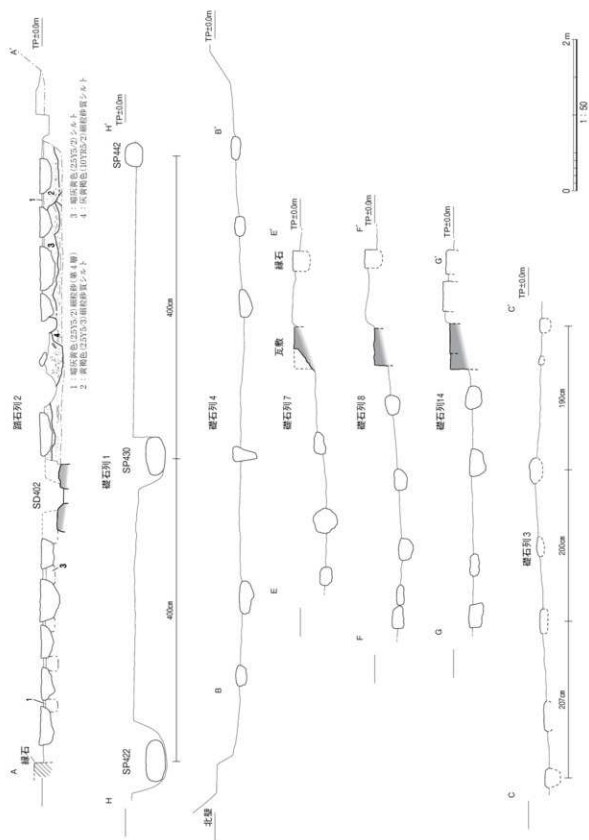


図12 第4層上面遺構平面図

る。建物の側柱列と考えられる。礎石間の距離(柱間)は195cm(6尺5寸)で、礎石の大きさは一辺40cm前後である。また、瓦敷遺構から西側は0.20~0.25mほど低く、総計50個に及ぶ礎石が検出された。床下に相当すると思われる。現状では主柱と東柱の関係が明確でなく、平面の復元は困難であるが、礎石列14を境に南北で配置に変化が見られること、柱間一間は1.95mを単位とし、半間あるいは1/3





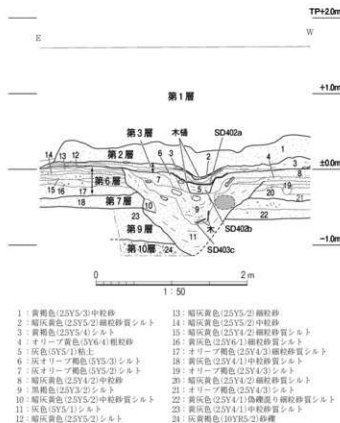


図14 SD402南壁断面図

間を基本に礎石が配置されていることが指摘できる。SB401は基本的にSB801を踏襲したものと考えられるが、少なくとも礎石列15・16を南側に付加していることが礎石の重複関係から確認できる。なお、切石列の東側に沿った礎石列2のうち、SP422・430には一辺55~60cm、厚さ0.3mの大型の礎石が用いられており、礎石列2はSB401の側柱と柱筋を揃える。

**切石列** 長さ1.20~1.95m、幅0.25~0.30m、厚さ0.25mの花崗岩製切石を使用した南北方向の切石列である。切石の東面上角には面取りが施されており、正面であることがわかる。なお、SB401との間には、黄褐色粘質土で固く丁寧に整地した幅0.6mの空間がある。このような整地は、ここが通路などに用いられたことを示す。

**踏石** SB401に向かう直線的なアプローチである踏石列1~4と、建物の東南隅に斜めに接続する踏石列5を検出した。踏石列1・2・5には踏石そのものがよく残っていたが、踏石列3・4はすべて抜き取られていた。いずれも踏石は一部を45度傾けて景色を作る四盤敷で、一辺35~55cmの正方形を基本形とした花崗岩製切石が用いられた。据付の際の栗石はSP433など一部のみで認められ、そのほかは第5層上面から掘形を作って設置された後、第4層(整地土)によって固定されていた。踏石列1・2の東側を一部拡張したが、踏石は確認できず、踏石列1~4は、今回検出された東西8m分で取まるのかも知れない。なお、このような趣向を凝らした踏石は庭園によくみられるもので、踏石及びその東側一角は庭園の一部をなしていた可能性が考えられる。

**堀** 調査区南側で土堀(練堀)あるいは築垣(築地堀)の基礎部分と考えられる堀1・2を検出した(図版4中)。幅0.8m、深さ0.5mの掘形に、一辺40~70cmの大礫を組み合わせ、最大3段、高さ0.5mが



图16 出土遗物实测图(2)

SP443(18)、SP448(20)、SB401瓦歇(21-23·28)、SK201(24-27)、第3层(19)

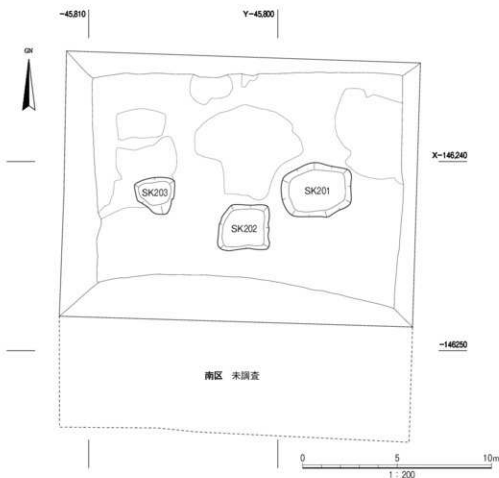


図17 第2層上面遺構平面図

残存していた。塼1は長さ4.30mで、瓦敷遺構南端に接する。塼2は3.50m以上である。二つの塼の間には長さ2.05mの開口部があり、門と考えられる。

門 塼1・2の間の開口部を門1とした。開口1間の棟門と推定され、その北1.5mにあるSP446・449は控え柱と考えられる。SP449には一辺23cmの角柱が遺存していた。なお、門の両端には2つの礎石が南北にセットで配されるが、この部分は塼1・2の端部も兼ねており、門の唐居敷を据えたほか、塼の端部を飾る貝形を設置した可能性も考えられる(註2)。

石組溝 調査区南北を貫くSD402、SD402に直角に取り付くSD401を検出した(図11・14、図版3下)。いずれも石組みの排水溝で、SD402では南部で、SD401では全体に木樋の一部が遺存していた。後者では凹を天地逆にした形の蓋が検出された(図5参照)。SD402南壁断面では「口」の字型の木樋跡が観察でき(図版1下)、SD401・402は石組みのなかに身と蓋からなる木樋を設置する暗渠構造であり、検出時には土圧で蓋板が陥没した状態であったことと考えられる。SD401の南北両端、またSD402の東端の石組みの高さにはほとんど差はなかったが、木樋底の高さは、北側で約10cm低かった。第4層上面を機能面とするSD401・402とも第6層を掘削面としており、数回にわたって作り直されていることが北壁・南壁の断面観察からうかがえる。SD402の掘形は北部では幅1.3m、深さ0.6mのU字形、南部では幅1.9m、深さ1.2mのV字形であった。両壁の間約16mの掘形の形状の変化については、石組み取り上げ後の湧水が著しく、明確にできなかった。石組みには長さ0.30～0.70mの石材の一部を

面取りした礫が使用され、幅0.30m、深さ0.30mの水路を確保するように整然と配置されていた。また、石組みは南部で一部、上下二段となっている箇所があった。下段の抜き穴も確認され、少なくとも一度作り替えられていることがわかる。また、木樋についても、少なくとも南部については二度、北部については一度作り替えが行われていた(SD402a～cとした)。SD402の掘形からは18世紀前葉の肥前磁器などが出土した。

**墓** 調査区東壁の南端近くの断面観察により、土葬墓を確認した。桶の木質部が残り、掘形の直径1.0m、深さ0.6m、桶の直径0.6m、深さ0.4mに復元された。寛永通宝1点が出土し、人骨は確認できなかった。

**そのほかの遺構出土遺物** 18はSP443から出土した肥前磁器の染付で碗蓋である。外面にはコンニャク印判による施文を有し、頂部には「大明年製」銘がある。18世紀前葉に属する。19は中国産青花の小碗で、外面には唐草文と双喜文を施文する。19世紀に属するとみられ、後世の遺物が混入したものであろう。20はSP448から出土した三巴文軒丸瓦である。珠文数は11個で、巴頭は左向きである。丸瓦部には釘孔を有する。21～23はSB401瓦敷を形成していた唐草文軒平瓦である。21・22は大型品である。28は大型の軒棧瓦で、軒丸瓦部分の中央に孔を有する。

#### d. 18世紀末～19世紀初頭の遺構と遺物(図16・17、図版5下)

第2層上面で土壌を検出した。

**土壌** SK201～203を検出した。いずれも遺構掘削面は旧建物の基礎撤去による攪乱で失われているが、炭・焼土を埋土とする廃棄土壌である。SK201は長辺3.7m、短辺3.0m、深さ0.3m、SK202は長辺2.6m、短辺2.3m、深さ0.1m、SK203は長辺2.1m、短辺2.0m、深さ0.2mである。SK201から24～27が出土した。24・25は瀬戸美濃焼陶器である。24は明黄褐色の胎釉を施す徳利で、肩部に条線が巡る。多治見市平野西窯に類例がある[瀬戸市埋蔵文化財センター2004]。25は原瓶で橋状の把手と高台を有し、黄褐色の胎釉を施す。26は軒丸瓦である。瓦当文様は八藤紋で、この文様は真宗大谷家の宗紋である。27は丸瓦で、凸面に「堺丹治権左衛門」の刻印がある。この刻印から、18世紀後半のものであることが知られる[嶋谷和彦2003]。

### 3) 大坂城下町跡OJ17-5次調査で出土した動物遺存体

丸山真史(東海大学)

#### i) 概要

大坂城下町跡の発掘調査では多数の地点で動物遺存体が出土しており、城下における魚貝類の流通、武家屋敷や町屋における食生活、艶牛馬処理と骨細工などについて明らかにされてきた。当調査では、16世紀末から17世紀後葉の遺物包含層や遺構から、動物遺存体が出土している(表1～3、写真1)。大坂城下町跡では、当該期の動物遺存体は多くないため、今回の出土例は貴重な事例であり、以下に概要を報告する。

#### ii) 種類別の特徴

イヌ 8層上面から、脛骨(右)が1点出土している。遠位端最大幅(Bd)は、22.9mmを測る。

表1 種名表  
脊椎動物門 Vertebrata

哺乳綱	Mammalia
食肉目	Carnivora
イヌ科	Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
奇蹄目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i>
偶蹄目	Artiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ	<i>Bos Taurus</i>

表2 ウマ・ウシ臼歯計測値(mm)

部位	計測	P2	P3	P4	M1	M2	M3
ウマ下顎遊離歯(左)	歯冠長	29.1	25.8	23.8	21.9	24.6	
	歯冠幅	15.7	15.1	13.7	14.0	14.3	
	歯冠高	17.6	19.4	×	30.0	×	
ウシ上顎遊離歯(右)	歯冠長			16.9	22.7	27.7	
	歯冠幅			19.5	23.1	21.6	
ウシ下顎遊離歯(左)	歯冠長	18.2	20.7		22.4	25.4	35.4
	歯冠幅	11.5	12.8		14.8	16.0	16.0

SK723から、中手骨/中足骨(左右不明)が1点出土している。SP704から、脛骨(左)が1点出土している。SK702から、顎骨から遊離した切歯1(上下左右不明)、上顎臼歯(P3/P4、左)点が1点ずつ出土している。SK802から、顎骨から遊離した下顎歯(P2~M2、左)1式、指骨(基節骨)3点、中手骨(左右不明)、脛骨(左右不明)、踵骨・距骨(右)が癒合した状態で1点出土している。第6層~7層から橈骨(右)1点、中足骨(左?)1点が出土している。橈骨の遠位端最大幅(Bd)は、62.5mmを測る。第8層から中足骨(右)1点が出土している。

ウシ SK702から、中手骨(左)1点が出土している。SK902から顎骨から遊離した下顎歯(P2P3、M1~M3)一式、顎骨から遊離した上顎歯(P4~M2)一式、顎骨から遊離した下顎臼歯(M1/M2)1点、中足骨(右2不明1)、橈骨(左)と指骨(基節骨)が1点ずつ出土している。中足骨(右)2点は、近位端最大幅(Bp)が、それぞれ40.5mm、40.1mmを測る。

ウマ/ウシ 大きく分厚いが、ウマとウシの区別がつかないものである。SP707から部位不明の破片が1点出土している。SK702から、椎骨(胸椎1、腰椎2)3点、肩甲骨(左)と大腿骨(左右不明)が1点ずつ出土している。SK902から、椎骨と肩甲骨(右)が1点ずつ、上腕骨と思われるもの1点が出土している。第6層~7層から、上腕骨(左右不明)、部位不明の破片が1点、第8層から部位不明の破片が1点が出土している。

### iii) 大坂城下町跡における牛馬利用

当調査で出土した動物遺存体の特徴は、ウマ、ウシ、あるいはそれらのいずれかが大部分を占めることである。正確ではないが、ウマの下顎遊離歯一式を並べた状態で前臼歯列長を計測したところ77.5mmを測り、日本在来の小型馬に相当する大きさと推測される。また、P2、P3、M1の歯冠高は、それぞれ17.6mm、19.4mm、30.0mmを測り、生後12年以上の老齢馬と推定される(表2)。橈骨の遠位端最大幅では、体高110cm前後と推定される。ウシ下顎臼歯一式を並べた状態で後臼歯列長を計測したところ84.2mmを測り、日本在来の口之島牛のメスに相当する大きさである。また、中足骨2点の計測値から、体高105cm前後と推定され、小型の牛と推定される。牛馬ともに体格は小型であり、さらに臼歯の咬耗は著しい老齢個体である。これらの牛馬骨は、散乱状態で出土しており、解体され、投棄されたものと考えられる。

表3 OJ17-5 動物遺存体(16世紀後半)

計測値の単位はmm					
層位名	遺構名	出土位置	種類	部位	左右
6~7層		精査北東部	ウマ	橈骨	右 Bd:62.5, SD:32.6
6~7層		精査北東部	ウマ	中足骨	左?
6~7層		精査北東部	ウマ/ウシ	上腕骨	-
6~7層		精査北東部	ウマ/ウシ	四肢骨	-
7層上面	SK702		ウシ	中手骨	左 SD:26.1
7層上面	SK702		ウマ/ウシ	肩甲骨	左
7層上面	SK702		ウマ	上顎 P3/P4	左 L:23.8, B:24.0, H:27.6
7層上面	SK702		ウマ	切歯	-
7層上面	SK702		ウマ/ウシ	胸椎	-
7層上面	SK702		ウマ/ウシ	腰椎	-
7層上面	SK702		ウマ/ウシ	腰椎	-
7層上面	SK702		ウマ/ウシ	大頰骨	-
7層上面	SP704		ウマ	脛骨	左
7層上面	SP707	西	ウマ/ウシ	不明	-
7層上面	SK723		ウマ	中手骨/中足骨	-
7層上面			ウマ/ウシ	四肢骨	-
7層上面			イヌ	脛骨	右 Bd:22.9
7層上面		精査北東部	ウマ	中足骨	右
7・9層	北側溝		ウマ/ウシ	椎骨	-
7・9層	北側溝		ウマ/ウシ	椎骨	-
9層上面	SK902		ウマ	下顎 P2-M2	左 表2参照、前臼歯列長 77.5
9層上面	SK902		ウマ	基節骨	-
9層上面	SK902		ウマ	基節骨	GL:74.7, Bp:38.7, Bd:38.7
9層上面	SK902		ウマ	基節骨	-
9層上面	SK902		ウマ	中手骨	-
9層上面	SK902		ウマ	踵骨・距骨	右 踵骨:GL98.7、加齢による集合?
9層上面	SK902		ウシ	下顎 P2P3xM1-M3	左 表2参照、後臼歯列 84.17
9層上面	SK902		ウシ	下顎 M1/M2	左 L:25.5, B:15.9
9層上面	SK902		ウシ	上顎 P4-M2	右 表2参照
9層上面	SK902		ウシ	基節骨	- GL:51.0, Bp:28.7, Bd:24.0、老齢
9層上面	SK902		ウシ	中足骨	右 Bp:40.5、若齢
9層上面	SK902		ウシ	中足骨	右 Bp:40.1、壮齢
9層上面	SK902		ウシ	中手骨	-
9層上面	SK902		ウシ	橈骨	左
9層上面	SK902		ウマ/ウシ	肩甲骨	右
9層上面	SK902		ウマ/ウシ	椎骨	中
9層上面	SK902		ウマ/ウシ	上腕骨?	-
9層上面	SK902		ウマ	脛骨	-



写真1 OJ17-5次調査で出土した牛馬骨



既存の大坂城下町跡の調査で牛馬骨が多数出土した地点は、それらの骨を素材とする骨細工を操業した工房跡と推定されている【久保和土1998、丸山真史ほか2007、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、藪田みゆきほか2017など】。牛馬骨は、鋸で切断された痕跡が残る廃材や、さらに加工が施された未成品や失敗品である。しかしながら、当資料には加工痕が見られず、骨細工の素材として利用したものではない。16世紀末～17世紀前葉の住友銅吹所跡では、骨細工に牛馬骨が利用されているが、当地では、皮や肉が利用されたかもしれないが、骨を利用することはなかったようである。また、出土部位に選択性はなく、素材として多用される腕骨、中手骨、中足骨が出土していることは、素材となる部位を他所へ持ち出すこともなかったと考えられる。

#### iv) まとめ

大坂城下町跡における既存の牛馬骨の出土例は、16世紀末以降の骨細工に関連する、加工されたものが一般的であった。しかし、当調査によって、城下町の地点によっては、牛馬骨を骨細工の素材とせずに、そのまま投棄していることが明らかになった。このような牛馬骨の投棄は、当地が16世紀末は土地開発中であったことと関連するならば、開発で使役して斃れた、あるいは近傍で斃れた牛馬を解体し、当地に投棄したことや、城下町における骨細工工房と斃牛馬処理との連携が密ではなかったことも考えられる。城下町における骨細工の規模は小さく、素材となる部位を徹底的に回収する必要がなかったということである。また、1682年に朝鮮通信使が南御堂に滞在しており、南御堂では使役用の牛馬を飼育していた可能性も考えられる。当資料は、大坂城下町の開発や朝鮮通信使の養肥施設などと牛馬利用の関係、城下町における骨細工生産体制の成立について考える契機として重要な資料といえる。今後の大坂城下町跡の調査では、16世紀後半や開発途上の地区における動物遺存体の様相が明らかになることが望まれる。

#### 4) まとめ

今回の調査で確認された最も古い建物SB901は、出土遺物は少ないものの、豊臣後期に遡る可能性が高く、南御堂の創建の時期に当たる。第2の画期は、恐らく17世紀中葉頃にある。調査区西側では客土(第8層)の上に礎石建物SB801が建てられた。また、その東では掘立柱建物が見つかり、関連遺構からは非常に珍しい朝鮮半島産白磁がまとまって出土した。『難波別院由緒記』【難波別院編1913】によると、天和2(1682)年に通信使一行が南御堂に滞在しており、その関係が目玉される。第3の画期は、17世紀末以降にあり、大きな開発の時期に当たる。調査区東部では50cmほどの盛土後、SB401が排水施設とともに整備され、その東には飛び石を配し、塀、門を備えた庭園風の空間の広がりが作られた。宝永2(1705)年の再建開始、宝永5(1708)年の境内の拡張整備、地盤強化の工事を想定させる。なお詳細な検討が必要であるが、有力な候補である。第4の画期は、この整備された空間が埋め立てられた時期で、上位の遺構の時期との関係から、18世紀後葉頃と推定される。

南御堂の旧寺院に関しては、『摂津名所図会』(1796～98年刊行)や『難波別院由緒記』などに主要建物の記述が見られ、先述したように、今回の調査区は旧境内では「対面所」の東の空地に位置する。今回検出したSB401、飛び石、塀、門を備えた庭園風の空間は、この空地の地下に存在したことになる

が、まだ、その存在は文献資料では確認できていない。また、18世紀後葉以降と考えられる埋め立て工事についても、1708年の境内の拡張、1945年の大阪大空襲からの復興のほかにも大規模な工事が見当たらないのが現状である。

今回、地表下2mで良好に保存されていた遺構群が寺院の全体、その歴史のなかでどのように位置付けられるのか、文献史料との照合など、まだ課題が残されており、今後の調査研究の進展が期待される。

## 註

- (1) 同様の遺構としては、天神橋遺跡(TJ11-3次)で検出されたSX10がある[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。土藏跡(年代の下限が17世紀中頃)と推定されているが、建物周囲に半裁した平瓦を積み重ねている。今回検出した遺構よりも簡素な形であるが、瓦を地業に用いる手法が、すでにその頃から存在したことがわかる。
- (2) 築垣及び棟門の唐居敷については、法隆寺西院子築垣及び棟門が参考となる。

## 参考文献

- 大阪文化財研究所2018、「中央区北久宝寺四丁目1-10における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ17-4)報告書」
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ07-11)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.57-84
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「大坂城下町跡発掘調査(OJ11-5)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.229-248
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「天神橋一丁目4-12-2ほか2筆における建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ11-3)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.61-77
- 久保和士1998、「住友銅吹所出土の動物遺体」「住友銅吹所跡発掘調査報告(財)大阪市文化財協会、pp.339-377
- 嶋谷和彦2003、「埴瓦の生産と流布」：『関西近世考古学研究』XI、pp.108-118
- 瀬戸市埋蔵文化財センター2004、「江戸時代の瀬戸・美濃窯」
- 難波別院編1913、「難波別院由緒記」、難波別院
- 難波別院史実行委員会編1978、「難波別院史」、難波別院
- 奈良県教育委員会編1971「重要文化財西園院客殿他二棟修理工事報告書」
- 丸山真史・松井章・黒田慶一2007、「大坂城下町跡(旧榎本町地区)出土の動物遺存体の分析」『大阪市歴史博物館紀要』第6号 大阪市歴史博物館、pp.107-120
- 森修編1980、「摂津名所図会」『日本名所風俗図会 10 大阪の巻』、角川書店
- 洪禹載(若松實訳)1989、「東鑑録 江戸時代第七次(天和二)朝鮮通信使の記録」日朝協会愛知県連合会
- 飯田みゆき・丸山真史・市川創2017、「日本橋1丁目所在遺跡出土の動物遺存体について」『大阪文化財研究所研究紀要』第18号 大阪文化財研究所、pp.45-52

中央区南船場三丁目9-1他における建設工事に伴う  
大坂城下町跡D地点発掘調査(OJ17-6)報告書

調査個所 大阪市中央区南船場3丁目9-1他  
調査面積 約126㎡  
調査期間 平成29年7月19日～7月27日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、積山 洋

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、近世の船場城下町(大坂城下町跡)の南に隣接しており、新発見の大坂城下町跡D地点に位置する。地形的には上町台地の西縁を南北に延びる難波砂州上の遺跡である(図1)。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約2.3m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前と考えられる遺構面および遺物包含層が検出されたため、本調査を実施することとなった。調査は、敷地の中央から北部にかけて東西7m・南北18mの調査区を設定して機械掘削を進めた(図2)が、近現代の攪乱層がいたる所で深く及んでおり、遺跡の残りは非常に悪かった。機械掘削ののち、人力による掘削と遺跡調査を実施したが、湧水が著しく、第2層に関わる遺構には完掘できないものもあった。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

先述したように、本調査地は遺構の残りが悪かったため、地層断面の観察が可能だったのは北端部に限られ、それもTP+1.0m以下しか残っていなかった。そのため、下記の記述は部分的な観察にとどまることを断っておく。

第0層：TP+2.85mの現地表面から深さ1.8～2m以上に及ぶ近現代の攪乱層である。

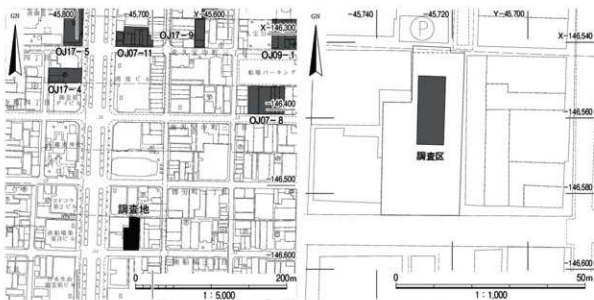


図1 調査地位置図

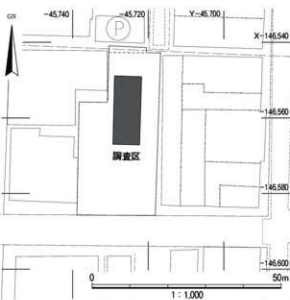


図2 調査区位置図

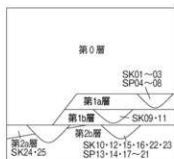


図3 地層と遺構の関係図

第1層：2層に細分される盛土層である。第1a層は主に調査区の北部に堆積していたオリープ褐色砂混りシルト層で、黄褐色シルトの偽礫や炭を多く含む。層厚は最大で15cmである。肥前磁器を含む近世の地層であるが、細かい年代を示す資料は乏しい。図6-3は埋拵鉢で、おおむね18世紀前半に位置づけられる。第1b層は暗灰黄色粗粒砂で、最大層厚は25cmを測り、北側では薄くなっていた。年代が判明する遺物は出土していない。

第2層：砂礫層であるが、これも2枚に分かれる。第2a層は灰黄褐色砂礫(第2b層に由来)にシルトの偽礫が混じる。整地層かと思われたが、湧水により層厚など十分な観察ができなかった。調査区の南部に分布しており、図4の位置では認められない。第2b層は褐色の砂礫で、自然堆積層である。ラミナが明瞭に観察された。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第2層・第1b層上面の遺構(図5)

土壌・小穴などが検出されている。北端部は他に比べて地層の残りが良く、遺構が多数見られる。それ以南も本来は多くの遺構があったものとみられる。これらの遺構は規模・形状がさまざまであるが、完掘できなかったSK25は井戸である可能性が高い。他の土壌は深さ30cm以内であった。小穴は深さ15cm以内であった。

これらのうち、南部のSK24・25は第2a層上面の遺構である。他の遺構の多くは第2a層が分布していないところで検出された。第1b層基底面または第2b層上面のいずれかに属する。SK09・11は第1b層上面の遺構である。遺物は極めて少なく、SK23から外面に瑠璃軸を施した肥前磁器碗(図6-1)が出土したのみである。この1点で年代は確定しがたいが、高台のつくりなどからみて17世紀後半代

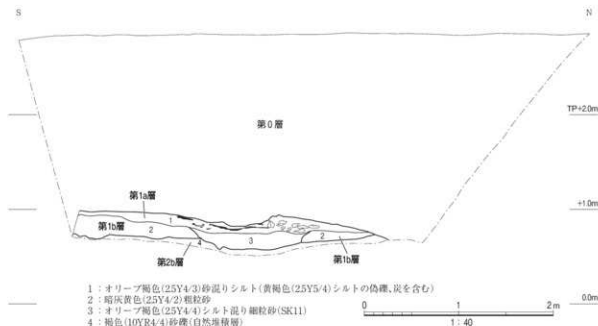


図4 西壁北端部地層断面図



図5 第1b・2層上面(左)と第1a層上面(右)遺構平面図

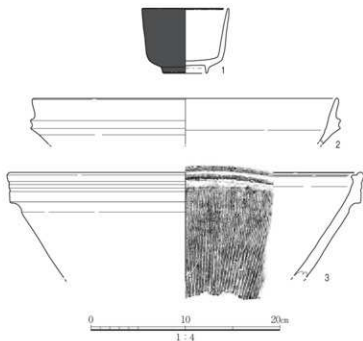


図6 出土遺物実測図  
SK23(1)、SP24(2)、第1a層(3)

### 3)まとめ

今回の調査では地層の残りが悪かったため、詳細な町家の変遷を明らかにすることはできなかった。しかしながら、近年は豊臣期の船場城下町の南方での調査事例が増えてきており、大坂冬ノ陣以後の徳川期に入ってこの地の開発が進むという様相が明らかになりつつある。今回もそうした流れを追認する結果が得られたことが成果であるといえる。今後のさらなる調査の進展が期待される。

#### 参考文献

横山洋1999、「大坂の土師質土器」：『関西近世考古学研究』Ⅶ、pp.41-53

のものと思われる。

#### b. 第1a層上面の遺構(図5)

調査区の北部で主に土壌、中央～南部で小穴類が検出された。いずれも上位層が残っていないので、本来の掘込み面は不明である。土壌はSK01が深さ約20cmであったほかは、10cm内外の深さであった。SK02は焼土で埋まっていた。小穴類は深さ数cmから15cmほどであった。やはり遺物は僅少であるが、SP04から大和産の焙烙F類(図6-2)が出土している[横山洋1999]。18世紀前半～後半といったところであろう。



中央区北久宝寺町一丁目37他における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-7)報告書

調査個所 中央区北久宝寺町1丁目37他  
調査面積 63㎡  
調査期間 平成29年8月3日～8月17日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、南久太郎町通と北久宝寺町通に挟まれた街区で、一丁目筋の東通りに面している。中央大通より南側は、豊臣後期以降の大坂城下町跡でも南端に近い場所であるが、これまでの調査で豊臣～徳川期のさまざまな遺構・遺物が見つかった。

調査地周辺のおもな調査成果には、豊臣期のものとして北130mのOJ08-1次調査地で見つかった豊臣後期の土城多数や[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]、南西300mの馬喰町遺跡にあるBR10-2次調査地の豊臣後期の遺構がある[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。ほかに当該期の開発を示唆するものとして北東30m程のOJ91-24次調査地で見つかった光徳寺の軒丸瓦があり、瓦や出土遺構は徳川期であるが、同寺は1598～1599(慶長3～4)年の「大坂町中屋敷替」時に大坂城惣構外へ移転したとされ、その移転先が同調査地付近になろう[大阪市文化財協会2004]。このように局所的な可能性が高いものの豊臣後期の城下町開発が行われていたことは確実である。

徳川期には調査地に西隣するOJ12-8次調査地で17世紀中葉の南北方向の敷地境の溝が見つかり、西側の敷地で箱型の鍛冶炉や鑄羽口・鋳滓が多数出土し、刀鍛冶が行われたと考えられている[大阪文化財研究所2014]。この調査地と北久宝寺通を挟んで南向いのOJ17-3次調査地でも鍛冶作業に伴う土城から鑄羽口や鋳滓が出土しており、徳川初期に出現し17世紀中葉～末に量を増加させている[大阪文化財研究所2017]。また、OJ08-1次調査地やBR10-1次調査地では17世紀中葉から18世紀代にかけて複数時期の遺構が確認されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。ほかBR10-2次調査地では18世紀前半の墨作り関連資料が出土し、徳川期の城下町における産業の一つを示すものとして注目される。



図1 調査地位置図

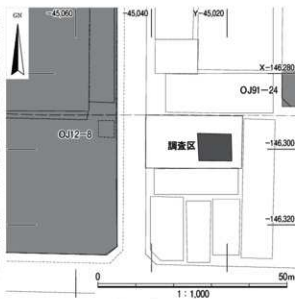


図2 調査区配置図

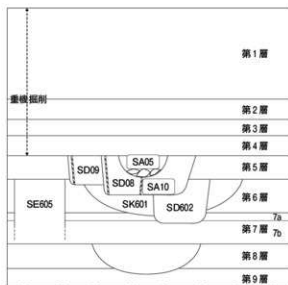


図3 地層と遺構の関係図

大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約2.2m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。今回の調査は、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史の変遷の基礎資料を得ることを目的に実施した。

発掘調査は事業者により調査地全体が地表下1.6m程度まで機械掘削された状態で、平成29年8月3日から開始した。調査地の東よりで東西9m×南北7mの調査区を設け、地表下2.0m前後の第2層まで重機により掘削した後、以下の

層準において遺構・遺物の検出と写真・図面などによる記録作業を行い、地表下3.2m程度までを調査して同年8月17日に現地における全ての作業を終了した。

なお、方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4・7)

調査区の現況地形は、およそTP+4.8~4.9mでおおむね平坦である。

第1~4層は重機で掘削したため詳細は不明である。以下、確認された地層を調査区東壁での観察を主として記述する。

第1層：最上部をコンクリートで整地された現代の整地層で、層厚は190~200cm程度である。

第2層：暗褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂層で、層厚は20~30cm程度である。調査区東壁では第3層を壊して落ち込んでおり、遺構埋土の可能性もある。

第3層：黄褐色粘土・焼土偽礫を含む褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂の整地層で、層厚は10cm程度である。

第4層：暗黄灰色粘土偽礫を含む褐色(10YR4/4)中粒~粗粒砂ないし中粒砂質シルトの整地層で、SD08に接する付近ではその掘形埋土とよく似ている。層厚は10~20cmである。

第5層：本層は調査区のはほぼ中央を東西に延びる敷地境と目される溝によって南北に区画されており、北部では細粒砂偽礫を含む黒褐色(2.5Y3/3)細礫混りシルト質細粒砂の整地層で、層厚は約10cmである。南部は黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂の整地層であるが、南壁では3層に細分され、上部が灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂およびシルト質細粒砂の互層、中部が黒褐色(2.5Y3/2)シルト質中粒砂、下部が暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒~極粗粒砂の整地層となり、層厚は25cmであった。図化していないが、17世紀末~18世紀初頭の遺物が出土している。本層上面で溝や土壌などの遺構多数を検出した。

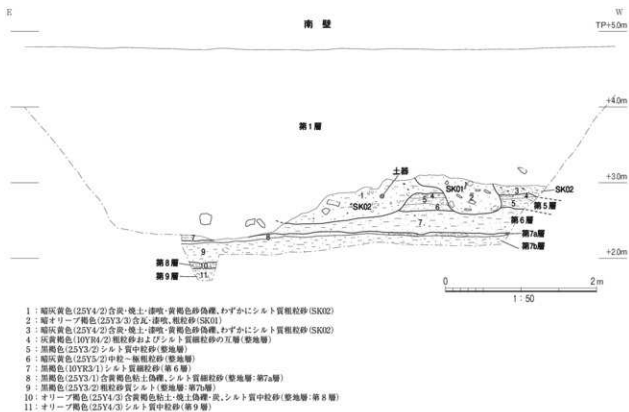
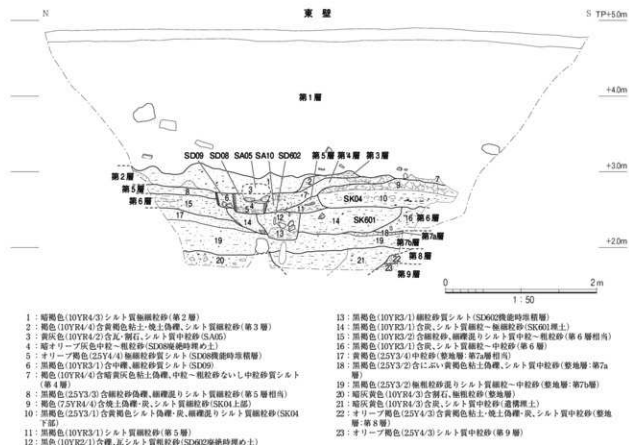


図4 調査区地層断面図

第6層：細粒砂を含む黒褐色(10YR3/2)細礫混りシルト質中粒～粗粒砂の整地層ないし炭を含む黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂の整地層で層厚は25～30cmである。本層上面でも南北に区画する溝が検出されているが、溝に先行して両方にまたぐ土壌があり、本層の形成時点では境界は存在していなかったと考えられる。本層から17世紀末～18世紀初頭にかかる肥前磁器碗1(図7)が出土しているが、上面で検出した同時期の遺構からの混入と考えられ、本層の時期は遺物の出土量が多い17世紀中葉～末と推定しておく。

第7層：上下2層に細分され、北部は第7a層が黄褐色(2.5Y3/4)中粒砂の整地層で層厚は10cm、第7b層が黒褐色(2.5Y3/2)極粗粒砂混りシルト質細粒～中粒砂の整地層で、層厚は最大40cmである。南部は第7a層がにぶい黄褐色粘土偽礫を含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質中粒砂の整地層で層厚は5cm、第7b層が黒褐色(2.5Y3/2)極粗粒砂混りシルト質細粒～中粒砂層の整地層で層厚は15cmである。因化していないが肥前磁器が出土し、17世紀前半頃と想定される徳川期の地層である。

第8層：黄褐色粘土・焼土偽礫・炭などを含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂の整地層で、層厚は約20cmである。出土遺物はなく時期は不詳である。調査区東壁の地層断面観察では、本層上面で遺構を確認したが出土遺物がないため時期を特定できなかった。

第9層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂の整地層とみられ、層厚は15cm以上を確認した。出土遺物はなく、時期は不詳である。

#### ii) 遺構と遺物(図5～7、写真図版1・2)

本調査で見つかった遺構は、第8層上面の時期不詳の1基を除いて全て徳川期のもので、確実に豊臣期に遡るものは無かった。以下、古い順に遺構・遺物を記述する。

##### a. 17世紀末～18世紀初頭の遺構(図5・7)

第6層上面で井戸・土壌・溝を検出した。第6層出土の17世紀末の遺物を上限に、第5層の18世紀初頭を下限とする遺構である。SK601やSE605は敷地境溝の可能性が高いSD602に壊されており、この時点では敷地が分割されていなかったと考えられる。

SK601は南北2.2m以上、深さ0.3m以上の土壌で、炭や黄褐色シルト質細粒砂偽礫を含む黒褐色で細礫の混じる細粒砂質シルトから極細粒砂で埋められていた。出土遺物には瀬戸美濃焼壺2や肥前磁器染付碗3など、17世紀中～後葉のものがあるが、第6層が17世紀末まで降るため、それ以降の時期となる。

SE605は東西1.6m、南北1.3mのほぼ円形の掘形に直径1.1mの井戸側を据えた井戸である。井戸側内は上部で黄褐色中粒～粗粒砂、下部で黒色細粒砂質シルト偽礫を含む褐色細粒砂で埋められていた。掘形の埋土は炭を含む灰黄褐色細礫混り細粒～中粒砂である。井戸側内の遺物はなく、掘形内からは井戸の時期に先行する17世紀後葉の肥前陶器碗や中国産青花皿に混じて18世紀前葉の肥前磁器碗が出土したが混入であろう。

SD602は幅0.55m、深さ0.35mの溝で、方位はE7°Sである。SD602以降、ほぼ同位置に繰り返し東西溝が掘削されていることから敷地境溝の可能性が高いと考えられる。ただし、城下町の一般的な敷地境は南北方向であり、先述のように西向かいのOJ12-8次調査地でもその方向で敷地境が確認

されているため、敷地内での区割りや建物に伴う施設の可能性もないわけではない。一部で機能時堆積層として炭を含む黒褐色の細粒砂質シルトないしシルト質中粒砂層が認められた。上部は廃絶時に埋めた礫や瓦を多く含む黒色シルト質粗粒砂層である。瓦は機能時堆積層の上部で出土し、特に敷き詰めた状況とは認められなかった。出土遺物には肥前磁器染付碗4～8、軟質施釉陶器の鬻水入れ9、タイ・メナムノイ窯産四耳壺11、輪羽口10などがある。17世紀中～後葉の8、17世紀末～18世紀初頭の6・7など、遺物には時間幅があるが、先述のとおり第6層の17世紀末に上限が求められる。なお、11の胴部2箇所には焼成後の穿孔がある。輪羽口は数個分がまとまって出土している。近隣のOJ12～8次・OJ17～3次調査地では徳川初期～17世紀末の鍛冶工房が判明しており、本調査地でも同時期に鍛冶作業が行われていたであろう。SD602の廃絶後に、その西部を壊す土壌が2基あるが、敷地境は第5層上面でも同じ位置に踏襲されている。

#### b. 18世紀初頭～前葉の遺構(図5・7)

第5層の18世紀初頭の遺物を上限とする。敷地境と考えられる遺構ではSD09が古く、その廃絶後にSD08、SA05が続いていた。そのほか南側の敷地にはSK01～04があった。

SD09は幅0.2m以上、深さ0.2mの溝で、方位はE2°Sである。南側はSD08に壊されているが、埋土の北側には板の痕跡が見つかっている。埋土は中礫を含む黒褐色の細粒砂質シルト層で、機能時な

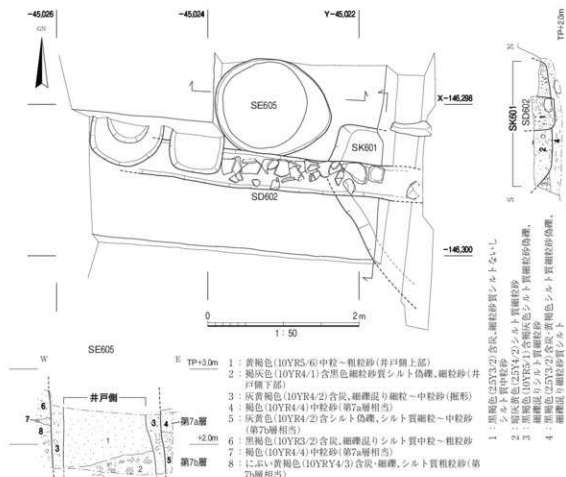


図5 第6層上面遺構平面・断面図

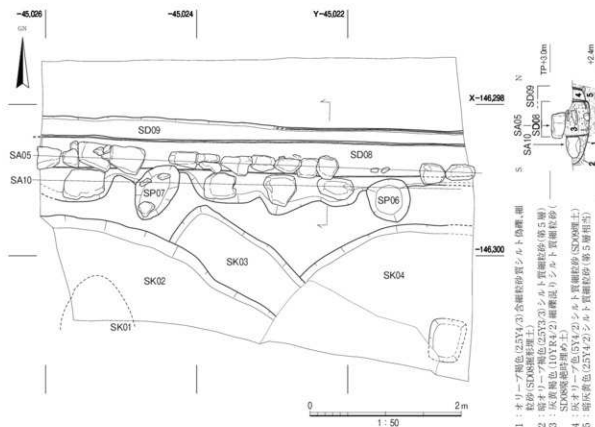


図6 第5層上面遺構平面・断面図

いし廃絶時の区別はできなかった。出土遺物には17世紀後葉の備前焼挿鉢21があるが、層準から遺構の年代は18世紀初頭以降である。

SD08は幅0.45m、深さ0.25mの溝で、方位はE1°Sである。溝の内部は板組であった。機能時堆積層はオリブ褐色の極細粒砂質シルト層で、廃絶時に埋めた地層は暗オリブ灰色中粒～粗粒砂層である。同じ掘形のなかで、南側の板に接して長さ40～50cm程度の石を並べていた(SA10)。石の上面は平らであり、芯々間で約0.75～0.8mに礎石を並べた状態と考えられることから、溝に沿って南側に塀なしし橋を構築したものであろう。SP06・07は礎石の抜取り穴である。出土遺物には肥前磁器染付碗13・花生12・青磁染付碗14などがあり、これらは17世紀末～18世紀初頭のものである。

SA05はSD08の廃絶後に割石を敷いてその上に構築された石列である。石の長さは30cm程度のものが多いが西端では50cm程度のやや大型のものとなる。方位はE-2°-Sである。礎石は北に面を揃えており、敷地境とすればSD08・SA10と同じく南側に属するものと考えられる。

このほか調査区南側にSK01～04があり、ゴミ捨て穴とみられる。これらのうちSK03からは肥前磁器染付碗15～17、肥前陶器碗18、ベトナム産陶器皿19、瀬戸美濃焼陶器鬺水入れ20などが出土した。19は見込みに印判手で鉄絵を施している。19を除いて、これらは18世紀初頭から前葉のもので、遺構の時期を示す。

### 3) まとめ

本調査地における調査成果を以下にまとめる。



豊臣期では大坂城下町跡とされる範囲の南限に近く遺構の存在が期待されたが、当該期の遺物包含層や遺構は確認できなかった。

徳川期では17世紀中葉以降の遺物を認めた。それ以降に調査地の開発が活発化する点は周辺調査と一致する状況とみられる。

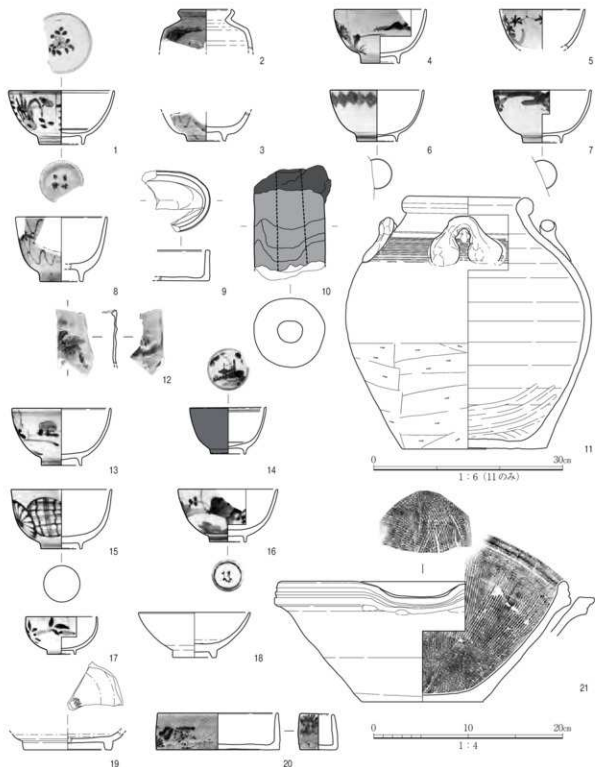


図7 出土遺物実測図

第6層(1)、SK601(2・3)、SD602(4～11)、SK03(15～20)、SD08(12～14)、SD09(21)

確認された遺構は17世紀末と18世紀初頭～前葉の2時期である。

調査区中央付近で東西に延びる溝ないし石列が繰り返して構築されており、検出した範囲は狭いものの敷地境の可能性が高い。ただし、一丁目筋を挟んだ西向かいのOJ12-8次調査地で南北方向の地基地境が確認されており、本例については今後の周辺調査で検証が必要である。

#### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ08-1)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」、pp.85-94
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「中央区南久宝寺町一丁目における建設工事に伴う馬喰町遺跡発掘調査(BR10-1)報告書」：「平成22年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)」、pp.83-94
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「馬喰町遺跡発掘調査(BR10-2)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)」、pp.145-156
- 大阪市文化財協会2004、「OJ91-24次および92-17次の調査」：「大坂城下町跡Ⅱ」、pp.327-336
- 大阪文化財研究所2014、「大坂城下町跡Ⅲ」、pp.1-38
- 大阪文化財研究所2013、「馬喰町遺跡発掘調査(BR10-2)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)」、pp.145-156
- 大阪文化財研究所2017、「中央区北久宝寺町一丁目21他における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ17-3)報告書」

中央区今橋二丁目7-1 他における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-8)報告書

調査個所 大阪市中央区今橋2丁目7-1他  
調査面積 90㎡  
調査期間 平成29年8月21日～9月1日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、今橋通北に面し、堺筋より西に広がる今橋二丁目に位置する。今橋の架橋は豊臣期に通り、東横堀川を越えて城下町へ降る道は今橋通と呼ばれていた。この今橋通と南側の高麗橋通を表として、間の浮世小路を挟む南北両側は、豊臣期の城下町建設でも上町城下町の島町と並ぶ初期に計画されたものと推測されている[松尾信裕2004]。徳川期には平野屋五兵衛(現開平小学校)や天王寺屋五兵衛(開平小学校から道を隔てた西向かい)などの両替商が軒を連ね、「天五に平五」と称される代表的な豪商の拠点となっていた場所である。

既往の調査では高麗橋通より南で調査が多く、豊臣期から徳川初期にかかる城下町や魚市場などの町屋の開発と変遷を知る重要な成果を得ているが[大阪市文化財協会2004]、今橋町周辺に限ると調査例は少ない。これまでAZ90-2次調査地[大阪市文化財協会2004]やOJ96-13次調査地[大阪市文化財協会1999]で豊臣後期の遺構が2時期確認されており、前者では上位が大坂冬ノ陣の被災面とされている。また本調査地の南東100m余のOJ17-1次調査地[大阪文化財研究所2017]では、豊臣後期で3時期以上の遺構面が確認され、城下町の成立を明らかにする資料が少しずつ増加している。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約2.9m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。今回の調査は、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史の変遷を復元する基礎資料を得ることを目的に実施した。

発掘調査は平成29年8月21日から開始した。既存の建物解体工事を避けて、調査地の北寄りに90㎡の調査区を設定し、残土置き場を確保するため東西2区に分けて反転掘りを行った。事業者により既に後述の第1層より上位が除去された状態で東区から調査を開始した。後述の第3層上面までを再度

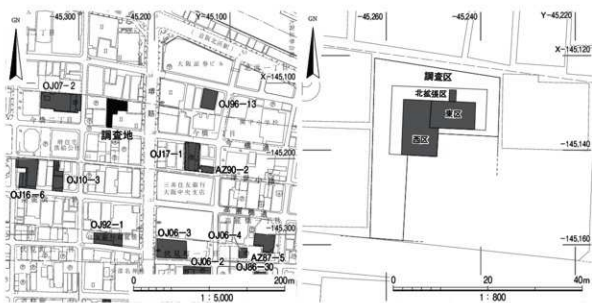


図1 調査地位置図

図2 調査区配置図

重機で掘削し、以後、遺構掘削と写真・図面による記録作業や出土遺物の取上げを行い徳川期～豊臣後期の遺構面を調査した。同年9月1日に現地における調査を終了し、機材を撤収した。

なお、方位は現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～6・11)

調査地の現況地形は東側の堺筋でTP+3.7m程度、西側の難波橋筋でTP+3.0mと西へ向って緩やかに低くなっている。

本調査地では、現代から豊臣期まで大別して9層を確認した。第1層は事業者の重機掘削による攪乱土の再堆積層で、下位の近世の整地層である第2層までを重機により掘削した。以下、①第3層上面、②第4層上面、③第5層上面、④第7層上面、⑤第8・9層上面で平面的な発掘調査を行ったが、層準によって調査区の一部にとどまったものがある。

第1層：コンクリート片やレンガなどを含む現代の攪乱層である。

第2層：灰オリーブ色(5Y5/3)ないし黄褐色(2.5Y5/4)粗粒～極粗粒砂層で、層厚は東区東部で0.15cm、西部は後述のSX417が第3層で埋められた跡の大きな凹みを埋めているため150cmに達する。肥前磁器19(図11)など17世紀半ばの遺物が出土している。なお、東区のSK09は地層断面の観察から本層より上位から掘られているが、第3層上面で一括して検出している。

第3層：黒褐色(7.5YR3/2)シルト質中粒砂ないし暗褐色(10YR3/4)シルト質細粒砂層を主体とする層厚10～50cmの整地層で、焼土の偽礫や炭を多量に含んでいる。おもに豊臣後期の遺物が出土するため、大坂冬ノ陣直後の片付けによる整地層である。上面で検出した遺構には柱穴や溝がある。

第4層：黄灰色(2.5Y4/1)ないしオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細礫混り細粒～中粒砂ないしにぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質細礫混り細粒～中粒砂層で層厚は10～30cm程度の整地層である。東区東端付近の南北溝SD501から西側のみ堆積している。上面で焼面が認められ、大坂冬ノ陣当時の生活面である。東区では第4層の上面で東西南北に並ぶ浅い小穴群があり、第3層で覆われていた。

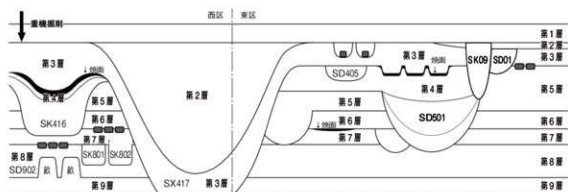


図3 地層と遺構の関係図

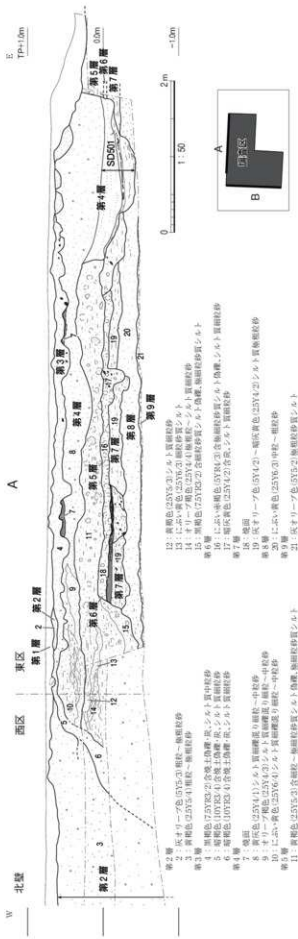


図4 調査区北壁地層断面図



図5 調査区東部地層断面図

第5層：上部は細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂ないし灰オリブ色(5Y5/3)極細粒砂質シルトで層厚10cmの整地層、下部は細粒～極細粒砂質シルト偽礫を多量に含むオリブ色(5Y5/4)シルト質細粒砂ないし灰オリブ色(2.5Y5/3)極細粒砂質シルトで層厚30cm程度の整地層である。上面では東区東端付近でSD501を、西区西南部でSK416を検出した。SD501からは軟質土軸陶器8や豊臣後期の遺物が、SK416からは瀬戸美濃焼や中国産青花が出土している。東区の平面での調査は前述の第4層上面までを全面的に行い、本層準ではSD501の北半部付近のみ、それより下位の層準は調査区北壁断面の観察を行った。西区では第5層から第6層までは一括して掘削し、豊臣後期の遺物3～7などが出土した。3は瀬戸美濃焼天目碗で、4は瀬戸美濃焼花生である。5は土師器皿で外面はユビオサエである。6は肥前陶器碗で外面の体部下半から高台は無軸である。7は瓦質土器鉢で内外面にミガキが施され、特に内面で丁寧である。

第6層：極粗粒砂質シルト偽礫を多く含むにぶい赤褐色(5YR4/3)シルト質細粒砂層の整地層で、層厚は10cm程度である。東区北壁の地層断面の観察では、SD501の西に接する部分と西区との境界付近に上面で遺構が観察されるが平面の調査は行っていない。

これより下位の 第7～9層の出土遺物は少量であり図化できない細片がほとんどのため、時代の判定は困難であることを断つたうえで、以下のように考える。

第7層：灰オリブ色(5Y4/2)ないし暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極粗粒砂層の古土壌で、東区北壁の断面では上面で焼面と遺構が観察される。西区では上面で石列SX701・703が検出されたほか、本層内から掘られたSK802から豊臣期の瀬



戸美濃焼碗を再利用した円盤状製品2や土師器細片などの遺物が出土している。土師器は口縁部外面に弱いナデで面を作る皿で、豊臣後期の様相を示すものであろう。

第8層：にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒～粗粒砂層で、層厚はおおよそ30cm以内である。下位の作土である第9層を覆う整地層である。本層からは土師器や須恵器、瓦器などの中世に遡る遺物が出土しているが、新しいものには豊臣前期の備前焼などがあり、下位の第9層が本願寺期の可能性が高いことから本層は豊臣前期の層準と推測される。瓦器などの遺物は付近に当該期の遺物包含層が存在することを示すものであろう。

第9層：細礫を含む灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質中粒～粗粒砂層を主体とする作土層で、層厚は30cm以上である。本調査地で確認した最下位の層準である。本層上面で出土した土師器皿1は本願寺期のものと考えられる。

#### ii) 遺構と遺物(図6～11、写真1～3、図版1・2)

調査で見つかった遺構は本願寺期に遡る畝、豊臣期の建物などのほか、大坂冬ノ陣の片づけを経て一部は徳川期に降る。豊臣期の遺構は地層断面で確認したものを含めて5層準に細分されるが4層準が豊臣後期に収まる。調査地点に限れば耕作地から居住空間への変化を読み取ることができる。

#### a. 第9層上面遺構(図6・11、写真1)

西区でのみ平面での調査を行った。第9層は中～細礫を含む黄褐色極粗粒砂混りシルト質中粒砂層の作土であり、西区南部で東西方向の畝を4条以上形成していた。畝幅は0.2～0.5m、高さは0.3m程度である。畝間はSD902～905で幅0.7m程度になっている。畝の東端は南北につながり、その東側は一段低くSX901とした。幅が広いため畝間ではないが、耕作に係るこれらは第8層の整地層によって埋められている。

畝間底の第9層上面で土師器皿1が出土した。細片のため口径や傾きの復元は推定であるが、口縁部外面がヨコナデによって面をなすもので、本願寺期に遡るものとみられる。

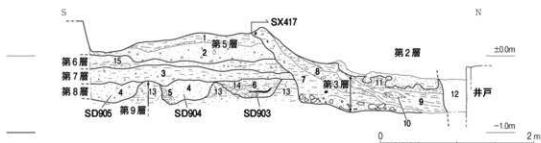
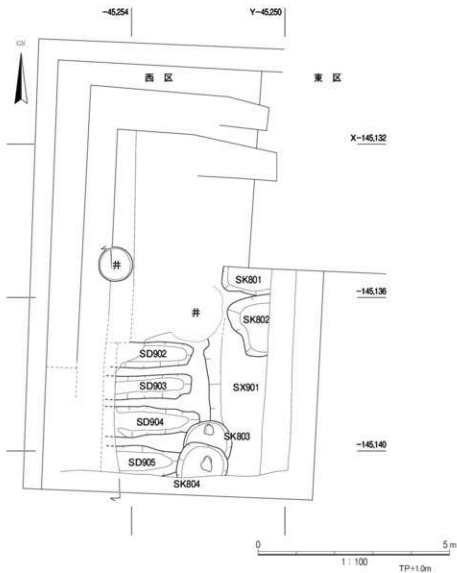
#### b. 第8層上面遺構(図6・11)

西区南部で土壌SK801～804を検出した。このうちSK802の埋土は細～中礫を含むオリーブ褐色シルト質極細粒～細粒砂層で第7層と同質である。第7層は古土壌であり、SK802は第7層内遺構となる。SK802からは瀬戸美濃焼碗の高台片を研磨した円盤状製品2のほか、図化していないが備前焼のいわゆる「らっきょう徳利」が出土している。これらは豊臣前期の遺物であり、上述のとおり第9層は本願寺期に遡る可能性が高いため、遺構の時期を豊臣前期と考えておく。

SK801・803・804はオリーブ褐色シルト質中粒砂を埋土としている。SK801は深さ0.2m、SK803は東西1.3m、深さ0.15m程度、SK804は東西1.4m、深さ0.3m程度である。SK803・804は埋土内から長さ30～40cm程度の礫が平坦面を



写真1 西区第9層上面遺構検出状況(東から)



現代井戸(断面)

12: にぶい黄褐色(10YR5/4)極粗粒砂

第3層

7: にぶい黄褐色(10YR4/3)含炭・焼土・焼礫、  
基底に焼礫・焼瓦・マトリックス極粗粒砂、シルト質細粒砂

8: 暗褐色(10YR3/4)含中～細礫・焼土、シルト質粗粒砂

9: 暗褐色(2.5Y3/1)含極粗粒砂・焼礫、極粗粒砂質シルト(水選)

10: にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質粗粒砂

11: 暗灰黄色(2.5Y5/2)極粗粒砂質シルト

第5層

1: 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂で下部は極粗粒砂

2: オリーブ色(5Y5/4)含中礫、細粒砂質シルト

第6層

15: 暗オリーブ色(5YR4/3)シルト質細粒砂

第7層

3: 黄褐色(2.5Y5/3)含中～細礫、極粗粒砂混りシルト質中粒砂

第8層

4: 淡黄色(2.5Y7/4)含細礫、細粒～中粒砂

5: 黄褐色(2.5Y5/3)13の焼礫

6: 淡黄色(2.5Y7/4)含細礫、細粒～中粒砂

14: 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂

第9層

13: 黄褐色(2.5Y5/3)含中～細礫、極粗粒砂混りシルト質中粒砂

図6 第8層上面遺構平面図・第9層上面遺構平面・断面図

上にして出土した。これらは柱穴の掘形としては大きすぎると思われ、時間差もあることから建物として組み合わせるとは考え難いが、第8層上面の段階で耕作地として利用されなくなったと考えてよいであろう。SK803ないしSK804のいずれに属するか判断できなかったが、中世に属する土師器皿・甕、須恵器甕の細片が出土している。



写真2 西区SK702断面(南から)

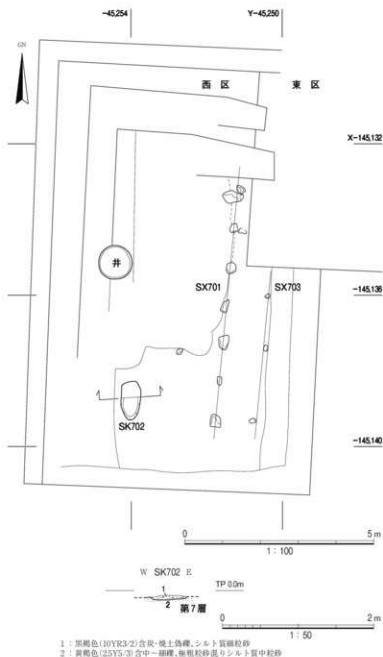
c. 第7層上面遺構(図7、写真2)

西区で石列SX701・703と土壌SK702を検出した。SX701はN5°Eの方角で7個以上の礎石が並ぶ。礎石の間隔は1.0mである。SX703はSX701の東に約1.1m離れて並行するが、礎石が小さく、間隔もSX701と一致する部分と異なる個所とがある。さらにSX701の西側1.1mにも礎石が1個見つかり、これらは礎石建物を構成した礎石とみてよかろう。広がり不明であるが、SX703が庇の可能性もあり、その場合はSX701から西側に建てられていたと考えられる。

SK702は南北1.0m、東西0.5m、深さ0.1m弱の浅い土壌で、埋土は炭や焼土偽礫を含む黒褐色シルト質細粒砂層である。周囲に明確な焼面は確認できなかったが、東区と同層準で検出されており、本層上面が火災などで被災した可能性がある。

d. 第5層上面遺構(図8・9・11、写真3)

東区では東部でSD501を検出



1: 黒褐色(10YR3/2)含炭・焼土偽礫、シルト質細粒砂  
2: 黄褐色(2.5Y5/3)含中・細礫、無炭粒砂混りシルト質中粒砂

図7 第7層上面遺構平面・断面図



写真3 東区SD501断面(北から)

した。

SD501は幅2.4m、深さ1.2m程の大型の南北溝である。埋土の断面を観察した箇所(図9：B-B')より南側は掘削していない。埋土の下部は厚さ60cm近くの水漬きによる堆積層で、上半がにぶい黄褐色中粒～粗粒砂層、下半が暗色化した極粗粒砂質シルトないしシルト層で一定期間開口していたことになる。埋土の上部は第4層によって埋められたものである。

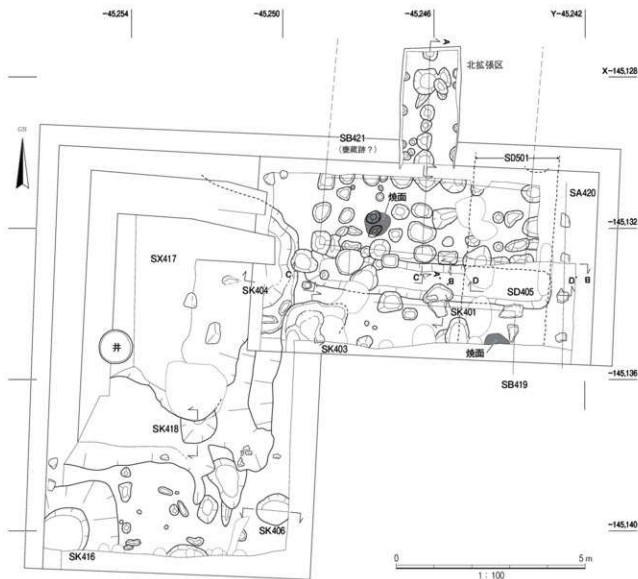


図8 第5層上面・第4層上面上面(大坂冬ノ陣)遺構平面図

SD501からは豊臣後期の遺物が出土している。それらに相伴した軟質施軸陶器8は布袋を象った水滴である。徳川期に降るものが混入した可能性も否定できないが、今後類例を検証すべき資料として掲載しておく。

SD501の東側は第5層が高く、西側は低くなっており、高低差をもって整地されていたことがわかる。西側の低い場所は第4層の客土で



写真4 北拡張区第4層上面遺構検出状況(北西から)

SD501の埋没とともに嵩上げされている。東側にはSA420の礎石が並ぶが、SD501の縁に近すぎるため、SD501が埋められて以後の築造であろう。SD501の規模から考えると、敷地境や敷地内の建物や耕作に伴う溝ではなく、より広い街区の設計や構造に係る基幹的な溝と考えることもできる。豊臣後期の段階で、このような溝で区画され、高低差をつけられた街区が造成されたことが考えられよう。

西区では西南部でSK416を検出した。東西、南北とも長さ1.7m以上、深さ0.65m程度である。埋土の下部は炭を含む暗オリーブ色細粒砂質シルトの水漬による堆積層で、上部は炭や灰色極細粒砂質シルトの偽礫を含む暗灰黄色シルト質細粒～中粒砂で埋められているが、埋まりきらずに残った凹みに東区と同じ第4層のふい黄橙色粗粒砂が客土され、その上面は火災で焼けていた。図化していないがSK416の出土遺物は瀬戸美濃焼皿や中国産青花の芙蓉手皿などである。

#### e. 第4層上面遺構(図8・9・11、写真4)

第4層の上面が大坂冬ノ陣の被災面で、検出された遺構は①冬ノ陣以前に埋没していたもの、②冬ノ陣の際に被災したもの、③冬ノ陣後の片づけ時のものの3段階に大別される。③は徳川初期に降る。

①には西区のSK406や東区のSD405がある。

SK406は東西の長さ0.85m、深さ0.25mの土塼である。埋土は暗灰黄色中粒砂層である。出土遺物には瀬戸美濃焼皿や中国産青花碗などがある。青花碗は被災した破片であるが、埋土に冬ノ陣に由来する焼土偽礫を含まないため、冬ノ陣による被災以前に埋められた土塼と考えられる。

SD405は東西6.5m、南北1.0m、深さ0.4mの東西溝である(図9:C-D)。埋土はオリーブ褐色シルト質細粒砂層ないし、極細粒砂質シルトの偽礫や炭を含むふい黄褐色中粒砂層で埋められている。上部を第3層の焼土偽礫や炭を含むSK401で壊されており、冬ノ陣以前に埋められていたことがわかる。出土遺物は図化していないが、土師器皿、瀬戸美濃焼皿、備前焼壺、中国産青花皿など豊臣後期に属する。北にSB421が接しており、その南側柱と同じ長さで並行するため、関連する遺構とも考えられるが性格は不明である。

②にはSB419・SB421(小穴群)がある。

SB419はSD405の南にある礎石建物で、第3層で埋められている。方位は北側柱でE3°Sである。

SB421はSD405の北側に同じ東西幅で並ぶ浅い小穴群で構成される。いずれも第3層で埋まっていて、柱痕跡はない。小穴の底は第4層の締まりの悪い中粒～粗粒砂の整地層内にあり、建物を支えるには脆弱であるが、礎石の抜取り穴と考えてこれをSB421とする。小穴群は拡張区よりさらに北へ

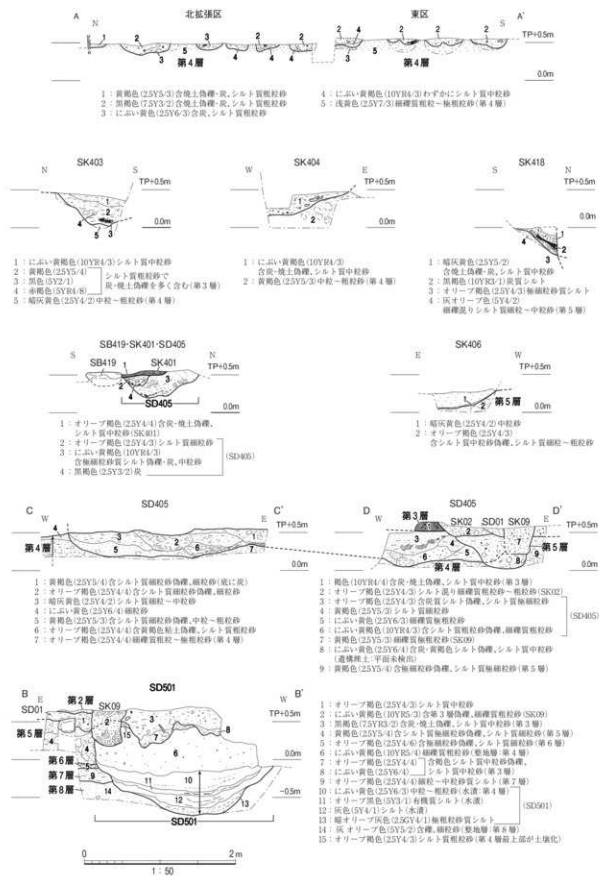


図9 第4層上面・第5層上面遺構断面図

続くとみられ(写真4)、南北長5.5m以上になる(図9:A-A')。南側柱の方位は概ねE5°Sである。内側にも第3層で埋まる同じように浅い小穴があり、間隔や径に乱れはあるが直線ないし格子状に並ぶ箇所もある。部分的に穴の表面が焼けており、冬ノ降で被災した際に開口していたと考えられる。砂に掘られた浅い小穴では長期間形を保つことは困難であったはずで、被災直前に付いた穴と考えられる。こうした小穴が並ぶ成因として、甕などの容器を建物の土間に据え、被災前に容器を避難させ、その凹んだ痕跡が焼けたものと推測する。容器を並べたとすると、いわゆる甕蔵のような用途となる。これまで大坂城下町跡で発見された甕蔵と推定されるものは、長大で深い土壌を掘って大型の甕を一列ないし複数列並べたものである(註1)。本例では独立した浅い小穴が並び同じ構造にならない

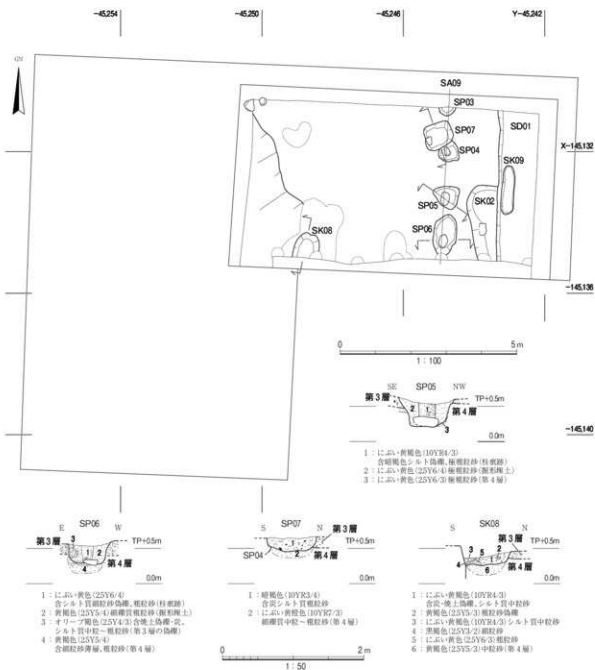


図10 第3層上面遺構平面・断面図

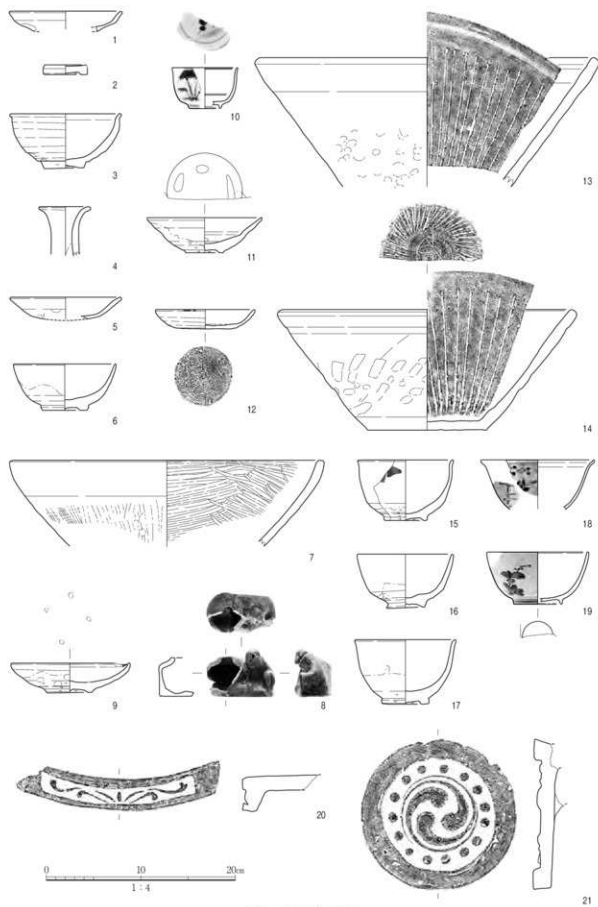


图11 出土遺物実測図

第9層(1)、SK802(2)、第5～6層(3～7)、SD501(8)、SK403(20·21)、SK418(9)、SX417(10～18)、第2層(19)



が、貯蔵する内容物によって容器やその設置構造にバリエーションがある可能性もある。SB421には、小穴群の東にあるSA420が付属する塚となる可能性がある。SA420は第5層上面に据えられているが、第4層の範囲外で第3層によって埋没するため、廃絶は小穴群と同時である。方位はN1°Eである。SD405もSB421と関連する位置や規模であり、SB421の構造が用途に係るものと考えられる。

③は被災後の焼土や炭などを片付けるために掘られたゴミ穴などで、第3層に由来する焼土・炭などを多量に含んでいる。落込みSX417や土壙多数がある。

SX417はおもに西区の北部2/3程度を占める大規模な落込みで、南北長は7.5m以上、東西長は6.0m以上、深さ1.4m以上である。東区ではSK404として一部を掘削したが、一連の遺構である。埋土は第3層であるが底は未確認で、第3層で埋まりきらなかった大きな凹みは第2層を客土して平坦地としている。冬ノ陣以前から存在していた可能性もあるが、SB421と近接するため、同時に存在することは難しいと考えられ、冬ノ陣後の掘削かもしれない。出土遺物には土師器12、丹波焼13・14、肥前陶器11・15~17、中国産磁器10・18などがある。12は皿で糸切痕があり灯明皿に転用されている。13・14は1本摺目の挿棒で13は口縁部内面に強いナデで凹線状に凹ませている。14は外面のナデに板状の工具を用いている。11は体部中央付近が屈曲する折縁皿である。15~17は碗で高台部外面から体部にかけて無軸である。15のように口径に対して高さがあり体部がやや直立する個体が含まれている。10は青花碗、18は口縁部が端反となる色絵碗で草花を描く。これらは豊臣後期から徳川初期の遺物である。

SK418はSX417の南部にあり、SX417と一連の遺構の可能性もある。東西長9.5m、深さ0.35m以上である。出土遺物には肥前陶器皿9などがあり、豊臣後期から徳川初期の遺物である。

SK403は東区西南部にあり、東西の長さ1.75m、深さ0.5mで、埋土に焼土偽礫を多く含んでいる。豊臣後期の軒丸瓦21・軒平瓦20が出土し、このことから周辺に当該期の瓦葺き建物があったと推定される。SB419やSB421はその候補となろう。

SK401はSD405中央付近の上位に掘られた浅い土壙で、東西長0.8m、南北長0.5m、深さ0.1m以下である。埋土は第3層である。

#### f. 第3層上面遺構(図10)

東区で第3層上面の調査を行った。東端にSK02を壊して浅い南北溝SD01があり、さらにより新しいSK09は第2層より上位から掘り込まれている(図9:D-D')。SD01にほぼ並行して西側に柱列SA09があり、建物の可能性もある。不定形の掘形に長さ25~35cm程度の礎石を埋めて柱を受けた柱穴で、柱間隔は1.25mである。方位はN3°Eである。これらSP03~06の埋土にはふい黄褐色粗粒砂層で、第3層の偽礫を少量含んでいる。ほか、SA09とは組まない柱穴SP07や土壙SK08などがあり、これらは17~18世紀代の徳川期の遺構である。

### 3) まとめ

本調査地ではおもに豊臣後期から徳川期にかけて、16世紀末~18世紀代の遺構を調査したが、遺物量が少ないため判定が困難であるものの、本願寺期~豊臣前期とみられる遺構もある。最も古い第9

層上面では畠作地であったが、第8層の整地作業を経て豊臣後期に入る第7層上面では礎石建物が建つ居住地へ変化したと考えられる。この時点での建物方位はN5°Eであった。こうした用途の変化が広い範囲で起こっているのか局地的なものは、周辺調査の結果を待つ。第7層上面の一部で見られた焼面が鍵層となることが期待される。

その後も整地を経て第5層上面では南北溝SD501が掘削され、滞水状態にあって一定期間機能していたことがわかった。検出した範囲は狭いが、この溝を境に西側の地表面が30cm程度低く別の敷地と考えられることなども考え合わせると、基幹的な排水路など街区の設計や構造に係るインフラの一部と考えることもできる。この点も周辺調査の例を待ちたい。

さらに豊臣後期の最後に近づいてこの溝や段差は整地によって平坦化され、豊臣後期の短期間のうちに土地の利用や街区の様相が変遷していったことがわかる。冬ノ陣直前に建てられていた建物は一種の礎蔵であったと考えられ、今後、類例が増えて貯蔵した内容物が推定できれば、豊臣後期の経済や商業に言及する資料になることも期待される。また、方位はE1～5°Sでばらつきがあるが、第7層上面の時より若干正方位に近い。こうした違いが一定範囲に及んだか否かは、同時期の遺構面でも調査地を比較する検証作業が必要である。

調査地を含む今橋通から高麗橋通にかけての一带は、豊臣氏大坂城の築造当初から城下町建設が進んだ場所として、東横堀川以西の城下町が成立した過程を考える特に重要な地域であるが、具体的な変遷をたどるためには未だ十分な資料が得られたとは言いがたく、今後の調査の蓄積が必須である。

註1) 備前大甕を液体貯蔵施設として埋設した例として大坂城下町跡における豊臣後期のものがあり、6～8基の大甕を1～3列設置するため、長大な土壘を掘削している。甕は肩まで埋設されていたとされ、地中で温度を一定に保つためと考えられよう。

・OS86-20次:SK613(布掘り:6×2列):豊臣後期[大阪市文化財協会2004]

・AZ87-5次:SK621(布掘り:8×3列):豊臣後期[大阪市文化財協会2004]

・OJ91-2次:SB604(布掘り:6×1列+桶1基):豊臣後期

#### 引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、「大坂城下町跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1997年度—』, pp.86-91

大阪市文化財協会2004、「OS86-20次およびAZ87-5・90-2次の調査」:『大坂城下町跡Ⅱ』, pp.43-112

大阪文化財研究所2017、「中央区今橋一丁目39-1における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ17-1)報告書」, pp.1-29

松尾信裕2004、「大坂城下町の町割」:『大坂城下町跡Ⅱ』, 大阪市文化財協会, pp.357-364

中央区北久宝寺三丁目 6 における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-9)報告書

調査個所 大阪市中央区北久宝寺町3丁目6  
調査面積 104㎡  
調査期間 平成29年9月6日～9月19日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、南秀雄

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大阪城の西南西約2kmにあり、心斎橋筋の東に接する街区で、南の北久宝寺町通に開口をひらく敷地である(図1)。豊臣期の船場城下町では西南の縁辺に当る。

周辺では、北に接するOJ05-9次調査で櫓や土塙などの豊臣後期の遺構が多数存在し[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]、西150mのOJ17-5次調査で、船場城下町の西を画すために1598(慶長3)年に移転した東本願寺難波別院(南御堂)の建物跡が検出された[大阪文化財研究所2018]。しかし、周囲約100mに分布するOJ05-2・07-8・07-11・09-1・12-9次のいずれの調査地点でも、豊臣期の遺構があっても希薄で、本格的な屋敷地としての利用は徳川期に入ってからであった。また、東100mのOJ09-1次調査では弥生時代末から古墳時代前期の遺構・遺物が見つかった[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。

本調査は大阪市教育委員会の試掘を受け、敷地奥側の南北13m、幅8mを対象にした(図2)。17世紀後葉の第7層上面まで重機で掘削し、それ以下を順次調査した。第9層以下は東半のみを掘削し、自然堆積層である第10層上面で遺構の有無を確認して調査を終えた。本報告では1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現地表の標高はTP+2.9mである。TP+1.8m前後まで近代以降の攪乱で、それ以下の地層に層名を



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

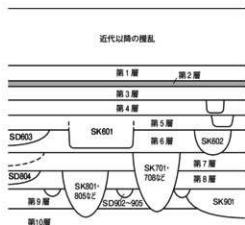


図3 地層と遺構の関係図

付した。

第1層：灰オリーブ色(5Y5/3)中粒砂層の盛土で、最大層厚20cmである。

第2層：焼土層または焼土混り中粒砂質シルト層で、層厚は5～15cmである。

第3層：オリーブ色(5Y5/4)中粒砂層やシルト偽礫混り暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂層で、層厚は10～30cmである。

第4層：オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質細粒～中粒砂層の盛土で、層厚は30～35cmである。

第5層：灰オリーブ色(7.5Y5/2)細粒～中粒砂層(東)

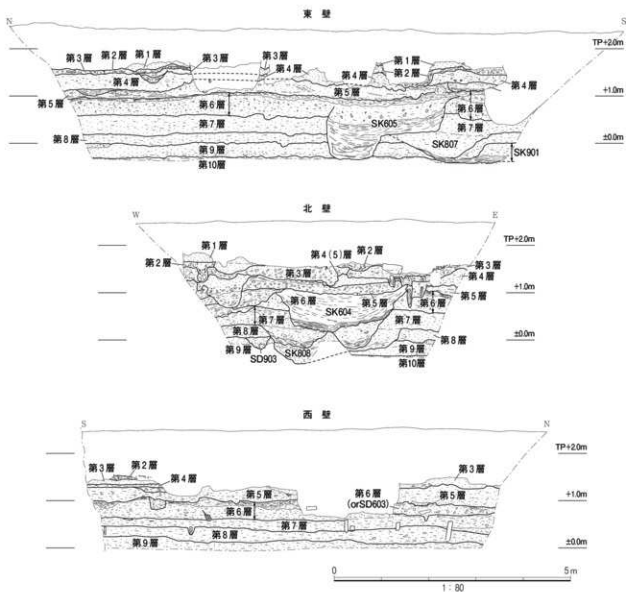


図4 地層断面図

や黒色(7.5Y2/1)シルト質中粒砂層(西)、黒褐色(2.5Y3/1)シルト偽礫層(北)の盛土で、層厚は15～40cmである。東壁の一部で本層中に細粒砂のラミナが認められ、盛土途中での背割下水などからの溢水の痕跡かもしれない。

第6層：木屑を多量に含む黒色(7.5Y2/1)細粒砂質シルト層の上層と、シルト偽礫や木屑混りのオリブ黒色(7.5Y2/2)シルト質中粒砂層・中粒砂質シルト層の下層からなる盛土である。上層は厚さ5～15cm、下層は25～40cmである。上面は地面となり、上層の木屑の混入は意図的かもしれない。17世紀後葉と推定される。本層上面でSK602・SD603を検出した。

第7層：黒色(2.5GY2/1)シルト質中粒砂層・中粒砂質シルト層の盛土で、層厚は20～45cmである。肥前磁器染付向付10・碗11、丹波焼播鉢12が出土し、第7層は17世紀中葉と推定される。本層上面でSK701・708を検出した。

第8層：オリブ黒色(5Y3/2)シルト質中粒～粗粒砂層の作土で、層厚は20～35cmである。中国産青磁碗2、土師器皿1、肥前磁器青磁碗3・染付碗4が出土し、第8層は肥前磁器出現以降の17世紀前半と推定される。本層上面でSK801・805、SD804を検出した。

第9層：オリブ黒色(7.5Y3/2)シルト質中粒砂層の作土で、時期は絞り込めないが、中世に遡る。本層上面でSD902～905を検出した。

第10層：暗オリブ灰色(5Y3/1)中粒砂の自然堆積層で、層厚は10cm以上である。上面に遺構はなく、遺物も出土していない。

## ii) 遺構と遺物

a. 第9層上面(16世紀～17世紀前半)の遺構と遺物(図5)

第9層上面で南北方向の

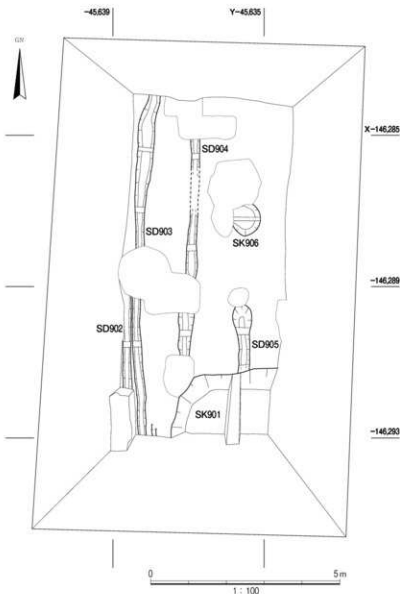


図5 第9層上面遺構平面図

SD902～905を検出した。SD905は南へ延びていた可能性がある。幅0.20～0.50m、深さ0.03～0.25mである。埋土はオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質中粒層であった。耕作に係わる溝で、畝の畝間溝の可能性もある。SD902・904・905は芯々で1.55mの等間隔で、SD903・904の間は芯々で1.3～1.4mである。豊臣期の陶磁器類は出土していないが、方向が敷地割と同じことから、船場が城下町化される1598(慶長3)年以降の可能性の方が高い。

南東部のSK901はこれらの溝より新しい土壌である。東西2.8m以上、南北2m以上で、深さ0.40mである。底に厚さ0.15mの木屑層があり、灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質中粒～粗粒砂層で埋められる。第8層の形成時期と近いと推定され、17世紀前半の遺構であろう。SK906は深さ0.10mの浅い土壌である。

b. 第8層上面(17世紀中葉)の遺構と遺物(図6～8)

西壁際に敷地境と推定されるSD804がある。これ以降、この場所に溝やその欄板を止める多数の杭があり、境が踏襲されたと考えられる。SD804は幅0.5m以上、深さ0.05～0.10mである。SD804からは朝鮮半島産白磁碗8が出土した(図8)。

第8層上面ではSK801～803・805・807・808を検出した。このうちSK801・805・808は、埋土からごみ穴と推定される。SK801は長さ1.9m、幅0.95m、深さ0.60mである。埋土に木屑とともに多量

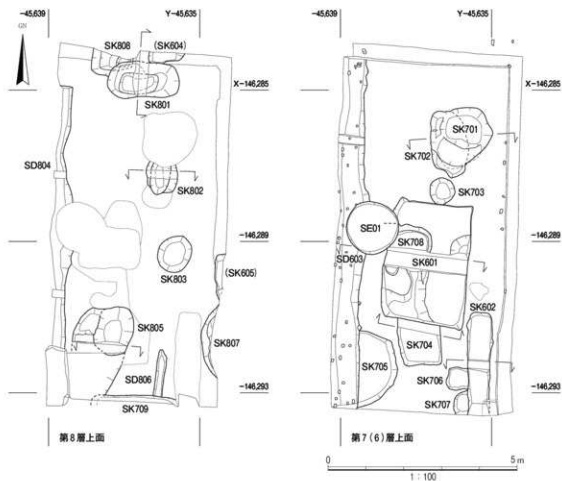


図6 第8層・第7(6)層上面遺構平面図



の貝を含んでいた(図7)。SK808はSK801に先行し、北壁断面から最大長2.5m、深さ0.70mである。SK808からは肥前磁器白磁小杯5・染付碗6、瓦質製品7(またはSK801出土)が出土した(図8)。7は瓦の可能性もあり、何かよくわからない。

SK805は長さ1.30m、幅0.95m、深さ0.65mである(埋土は図7)。肥前磁器染付碗9が出土した。

SK802は長さ0.85m以上、幅0.85m、深さ0.75mである。大きさに比べて深く、埋土にごみをほとんど含まない。SK803は深さ0.35m、SD806は深さ0.10mである。

以上の遺構は総じて17世紀中葉と推定される。

第8層上面で調査したが、壁際のSK605・709は、地層断面からそれぞれ第6層上面、第7層上面の遺構である。またSK801北の土壌は別遺構の可能性があるが、SK604の範疇とした(図4北壁図参照)。

c. 第7(6)層上面(17世紀後葉)の遺構と遺物(図6～8)

図6右の平面図は第7層上面で調査した遺構であるが、700番台は第7層上面の遺構、SK602・SD603は地層断面から第6層上面の遺構と捉えられるもの、SK601は出土遺物から第6層上面より上の地層に伴うと考えられる。

第7層上面の遺構のうち、SK701・708は深いごみ穴である。SK701は直径1.5～1.7m、深さ約1.0mである(埋土は図7)。SK701と重なるSK702は、木屑を多く含む浅い土壌である。SK701からは肥前磁器染付小杯13、碗14・15、皿16、同青磁の花生とみられる17、備前焼灯明皿18、土師器焙烙19、産地不明の土師質播鉢20が出土した(図8)。これらは17世紀中葉～後葉である。SK708は輪郭が明確でないが、東西約1.8m、南北1.1m前後、深さ1.05mである(埋土は図7)。

SK704は方形で、長さ1.25m以上、幅1.15m、深さ0.30mである(埋土は図7)。SK704からは肥前磁器染付碗21が出土した(図8)。

SK703・706・707はいずれも浅い土壌で、深さはSK703で0.30m、SK706で0.10m、SK707で0.10mであった。SK705は深さ0.20mであるが、土色の違いで遺構ではないかもしれない。SK705からは肥前磁器青磁碗22、丹波焼播鉢23が出土した(図8)。

以上の700番台の遺構の時期は17世紀後葉である。

第6層上面のSD603は、下層のSD804と同様の屋敷境の溝である。幅0.65m以上で、深さ0.2m以上である。より上面からのものも含めて多数の杭を検出した。SK602は長さ2.7m以上、幅0.55～0.65m、深さ0.35m以上である。埋土は、均質な炭と木屑であった(図7)。SD603・SK602の出土遺物は17世紀後葉のものである。

第6層上面より上から掘られたと推定されるSK601は長方形で、一辺3.15m×2.25m、深さ0.3m以上である。SK601も、SK602と同様の均質な炭・木屑で過半が埋められていた(図7)。木屑などが多い傾向は、とくに第6層前後の地層や遺構で目立ち、単に低湿で植物質のごみが残り易かったというだけでなく、木を使う生業と関係する可能性がある。SK601からは肥前陶器碗24、肥前磁器染付碗25・色絵八角皿26・染付鉢27、丹波焼の可能性のある播鉢28が出土した(図8)。SK601は18世紀前半まで降る。

なお、調査区東端の第7層上面で南北に並ぶ杭を検出したが、北壁地層断面から、第5層上面以上

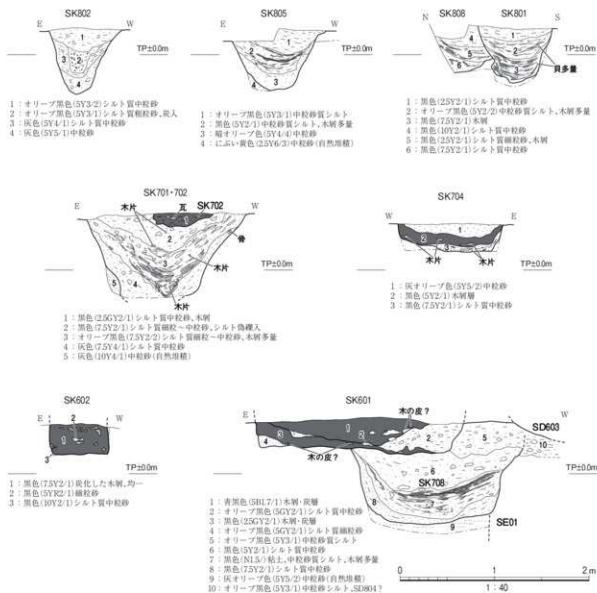


図7 遺構断面図

の同じ位置で繰り返し溝が掘られ、屋敷境になっていたと考えられる。杭はそれらの溝に伴うものである。また、SE01は明治時代以降である。

### 3) まとめ

今回の調査では、自然堆積層である第10層から17世紀後葉の遺構面までを順次、層位的に調査した。その成果を特記すれば以下になる。

・調査区には明確な豊臣期の遺構がなく、豊臣期の可能性があるのは畠に関係する溝のみであった。豊臣期には家・屋敷が未だ営まれていなかったか、通り側に建物はあっても、奥に当たる調査区は畠などとなっており、十分に利用されていなかったのであろう。

・調査区では遺構の埋土や地層に木屑や木端が多いのが特徴で、木を使う何らかの生業と関連する可能性がある。

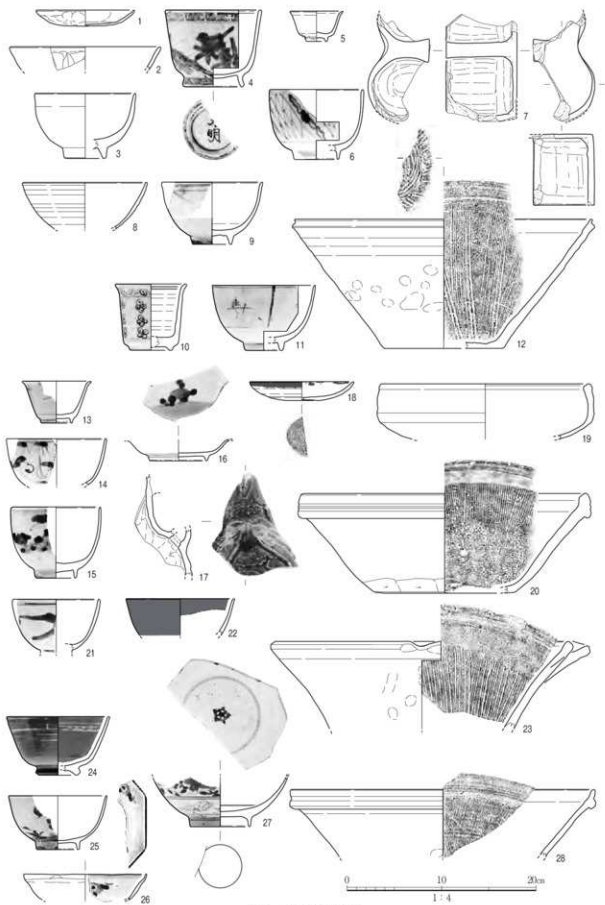


图8 出土遗物实面图

第8层(1~4)、SK808(5~7)、SD804(8)、SK805(9)、

第7层(10~12)、SK701(702含む)(13~20)、SK704(21)、SK705(22·23)、SK601(24~28)

#### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城下町跡発掘調査(OJ05-9)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.173-182
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「大坂城下町跡発掘調査(OJ09-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)』、pp.15-22
- 大阪文化財研究所2018、「中央区久太郎町四丁目68-5における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ17-5)報告書」

中央区南久宝寺町二丁目48他における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-10)報告書

調査個所 大阪市中央区南久宝寺町2丁目48他  
調査面積 48.75㎡  
調査期間 平成29年9月4日～9月6日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は堺筋から西1本目の難波橋筋が南久宝寺町通と交わる地点の北西側の敷地に当り、周辺ではこれまでの調査で豊臣～徳川期のさまざまな遺構・遺物が見つかった。特に豊臣期では1598～1599(慶長3～4)年の「大坂町中屋敷替」によって始まった船場城下町の想定最南端に位置するが、その開発と拡大の過程の解明は周辺調査での重要な目的となっている。

これまでの周辺調査では、北東380mのOJ08-1次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]で豊臣後期の土壌多数や、南東80mの馬喰町遺跡内のBR10-2次調査地[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]で同時期の遺構が見つかった。また東300m程のOJ91-24次調査地[大阪市文化財協会2004]では光徳寺の軒丸瓦が目目される。瓦や出土遺物は徳川期であるものの、同寺は大坂町中屋敷替で大坂城惣構外へ移転したとされ、その移転先がこの付近であった可能性がある。このように豊臣後期に遡る資料が見つかっているが、数は少なく具体はまだよくわかっていない。

徳川期では17世紀中葉以降に遺構・遺物が増大することが判明している。北東200mのOJ12-8次調査地[大阪文化財研究所2014]では17世紀中葉の溝を境とする西側の敷地で鍛冶の遺構と遺物が多数出土し、刀鍛冶が想定されている。その南のOJ17-3次調査地[大阪文化財研究所2017]でも鍛冶関連の遺物が出土しており、徳川初期に出現し17世紀中葉～末に増加している。また、OJ08-1次調査地やBR10-1次調査地[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]では17世紀中葉に始まり18世紀代にかけて複数時期の遺構が確認されている。そのほかBR10-2次調査地では18世紀前半の墨作り、OJ12-9次調査地[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]では17世紀末～18世紀初頭の骨細工関連遺物が出土し、徳川期の城下町における産業を示すものとして注目される。

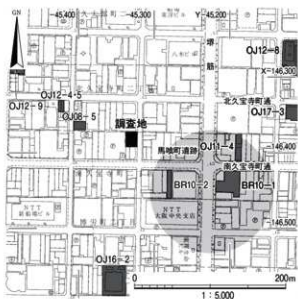


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

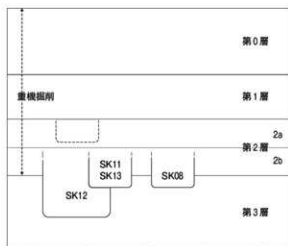


図3 地層と遺構の関係図

大阪市教育委員会が行った試掘調査で、地表下約1.8m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面が検出されたことにより、発掘調査を実施することとなった。

調査は平成29年9月4日から開始した。当初計画のとおり東西7.5m、南北6.5mの調査区を設定し、地表から1.8m下の第3層(海浜砂礫層)上面までを重機で掘削した。その後、第3層上面で遺構・遺物の検出と写真・図面などによる記録作業を行い、同年9月6日に機材を撤収し、現地における全ての作業を終了した。

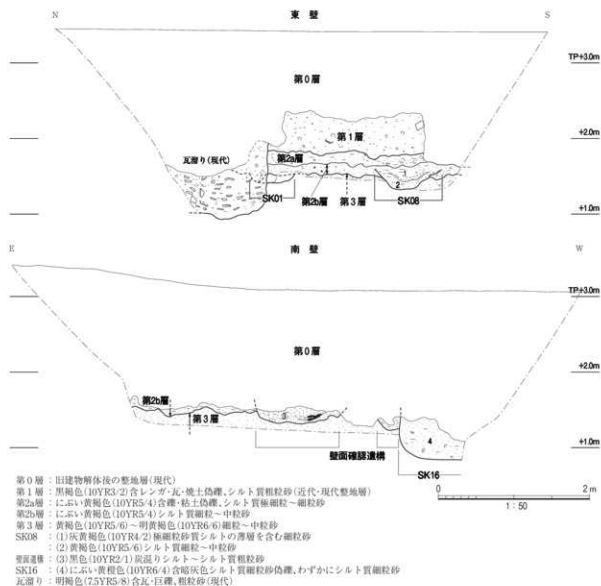


図4 調査区地層断面図



なお、方位は現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査区の現況地形は、およそTP+3.9mで西へわずかに低くなっている。

第1～2b層は重機で掘削したため詳細は不明であるが、近代・現代から豊臣後期に遡る地層とみられる。

第0層：巨礫や極粗粒砂などからなる旧建物解体時における現代の整地層で、最大層厚は190cm程度になる。

第1層：黒褐色(10YR3/2)シルト質粗粒砂層で、レンガ・瓦・焼土偽礫を多量に含む近代ないし現代の整地層である。層厚は約60cmである。

第2層は第3層の海浜砂礫層の上部が土壌化した近世の地層で上下2層に細分された。なお、重機掘削中に古式土師器6が出土した。V様式系統に属する庄内式期の甕で遊離資料である。

第2a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質極細粒～細粒砂層の古土壌であるが、東壁東部に礫や粘土偽礫を含む箇所があり、断面での観察のみであるが遺構埋土の可能性がある。層厚は20cm足らずである。下位の第2b層が豊臣後期であるため、それ以降の年代となるが、徳川期に降るかは判断できなかった。

第2b層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒～中粒砂層で、層厚は約15cmである。本層内の土壌を第3層上面で検出し、これらからは豊臣後期の遺物が出土したため、当該期の古土壌であるが、大坂ノ陣に当る層準は確認されていない。

第3層：黄褐色(10YR5/6)ないし明黄褐色(10YR6/6)細粒～中粒砂層を主体とするが、下部では細礫質粗粒砂層が認められた。層厚は約90cmを確認した。大阪海岸低地を形成する海浜砂礫層である。

### ii) 遺構と遺物(図5～7)

遺構は全て第3層上面で検出したが、壁面の観察からは第2b層内遺構と推定される。以下におもな遺構を記述する。

SK10は直径約0.7m、深さ0.3m弱の土壌で、埋土の底は第3層に類似した褐色(10YR4/4)シルト質細粒～中粒砂層で灰白色細粒砂の偽礫を含む加工時形成層である。その上位は炭の薄層を挟むにぶい黄褐色ないし暗褐色のシルト質細粒～中粒砂で埋まっている。図化していないが土師器の火入れ・壺、備前焼壺・播鉢、瀬戸美濃焼志野向付の細片が出土している。

SK11は直径約0.7m、深さ0.2m弱の土壌で、埋土の下半はシルト質炭、上半はシルト質細粒砂で炭の薄層が挟在していた。図化していないが肥前陶器碗、瓦片のほか肥前陶器片を加工した円盤が出土した。

SK12は直径約1.7m、深さ約0.8mの土壌で、SK11・13に壊されている。底に第3層の偽礫や炭を

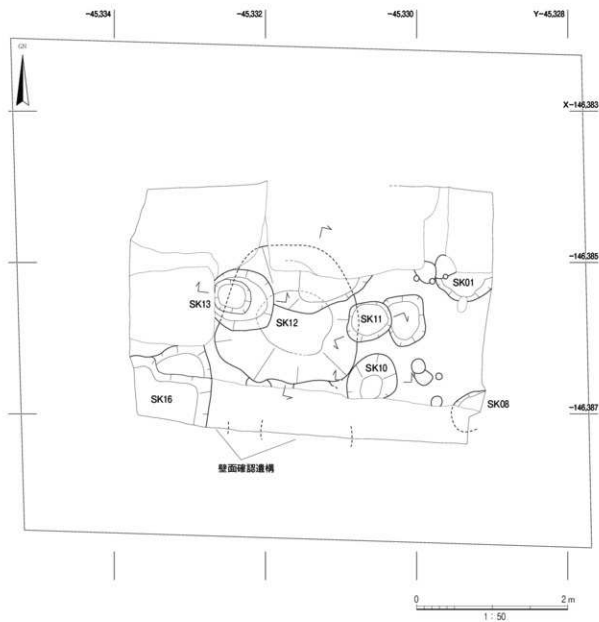


図5 第3層上面遺構平面図

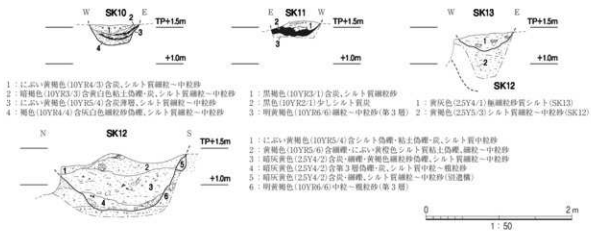


図6 遺構断面図

- 1 : 12.25+黄褐色(10YR4/3)含炭、シルト質細粒~中粒砂  
 2 : 暗褐色(10YR3/3)含黄白色粘土燻燥・炭、シルト質細粒~中粒砂  
 3 : 12.25+黄褐色(10YR5/4)含炭淨砂、シルト質細粒~中粒砂  
 4 : 褐色(10YR4/4)含灰白色細粒砂燻燥、シルト質細粒~中粒砂

- 1 : 紫褐色(10YR2/1)含炭、シルト質細粒砂  
 2 : 黑色(10YR2/1)少シルト質炭  
 3 : 明黄褐色(10YR6/6)細粒~中粒砂(第3層)

- 1 : 黄灰色(2.5Y4/1)無細粒砂質シルト(SK13)  
 2 : 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒~中粒砂(SK12)

- 1 : 12.25+黄褐色(10YR5/4)含シルト燻燥・粘土燻燥・炭、シルト質中粒砂  
 2 : 黄褐色(10YR5/6)含燻燥・12.25+黄褐色シルト質粘土燻燥、細粒~中粒砂  
 3 : 暗灰黄色(2.5Y4/2)含炭・燻燥・黄褐色細粒砂燻燥、シルト質細粒~中粒砂  
 4 : 暗灰黄色(2.5Y4/2)含炭3層燻燥・炭、シルト質中粒~粗粒砂  
 5 : 暗灰黄色(2.5Y4/2)含炭・燻燥、シルト質細粒~中粒砂(別途儀)  
 6 : 明黄褐色(10YR6/6)中粒~粗粒砂(第3層)

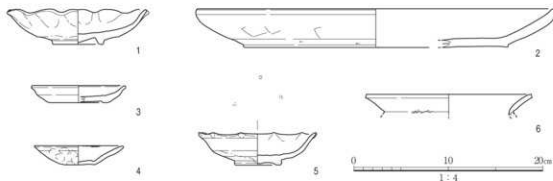


図7 出土遺物実測図

SK12(1~5)、第2層(6)

含むシルト質中粒～粗粒砂が堆積し、加工時形成層と思われる。その上位は細粒砂、シルト質粘土、シルト、粘土などの偽礫を含む地層で埋められていた。出土遺物には土師器皿・羽釜、瓦質土器火入、備前焼播鉢・壺・大甕、丹波焼大平鉢、瀬戸美濃焼皿・志野向付、肥前陶器皿・碗、中国産の白磁皿、漳州系青花碗・色絵皿や瓦などがある。土師器皿4は狭い底部から口縁へ直線的に広がる小皿で、口縁端部の外面はヨコナデで面を作るが範囲は狭く雑である。内面は底部と体部との境を強くナデで明瞭な境界をなしている。瀬戸美濃焼3は底部から口縁が短く立ち上がる浅い皿である。肥前陶器1・5は輪花皿、丹波焼2は大平鉢である。これらは豊臣後期に属する。

SK13は直径0.75m、深さ0.25mの土坑で、埋土は黄灰色(2.5Y4/1)極細粒砂質シルト層である。図化していないが、土師器皿、備前焼大甕、瀬戸美濃焼天目碗、肥前陶器碗などが出土した。

以上はいずれも豊臣後期のゴミ捨て穴で、背割に近い敷地奥で日常生活に伴う廃棄物を処理したものと考えられる。

### 3) まとめ

本調査地では大坂ノ陣に伴う焼土層は確認できなかったが、遺物相から豊臣後期の遺構と判断することができた。SK12の輸入磁器や国産陶器、瓦などをはじめとする多様な出土遺物からは、当地に城下町の中心部と大差ない町人地が存在していた可能性を示唆している。堺筋以西で南久宝寺町通に面する街区における豊臣後期の開発を示すものであり、城下町南端部への拡大過程を検討する資料となろう。

一方で、既述の通りこれまでの周辺調査では豊臣期の遺構は乏しく、開発が始まる時期が17世紀中葉の徳川期に降る傾向がある。これまでも豊臣期の縁辺域における城下町の拡大過程は一様ではなく、街区や敷地によって差があることが判明しつつあるが〔松尾信裕2015〕、当地においても同様であったことが窺える。その具体を明らかにするためには、今後とも密な発掘調査を継続する必要がある。

### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ08-1)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」、pp.85-94

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「中央区南久宝寺町一丁目における建設工事に伴う馬喰町跡発掘調査

- (BR10-1)報告書：『平成22年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、pp.83-94
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「馬吹町遺跡発掘調査(BR10-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.145-156
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「中央区北久宝寺町二丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ12-9)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』、pp.143-154
- 大阪市文化財協会2004、「OJ91-24次および92-17次の調査」：『大坂城下町跡Ⅱ』、pp.327-336
- 大阪文化財研究所2014、『大坂城下町跡Ⅲ』、pp.1-38
- 大阪文化財研究所2017、「中央区北久宝寺町一丁目21他における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ17-3)報告書」
- 松尾信裕2015、「豊臣時代の伏見城下町と大坂城下町」：『大阪歴史博物館研究紀要』13号、pp.35-45

中央区南船場二丁目 6 -25における建設工事に伴う  
南船場 2 丁目所在遺跡E地点発掘調査(OJ17-11)報告書

調査個所 大阪市中央区南船場2丁目6-25  
調査面積 約130㎡  
調査期間 平成29年10月10日～20日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、岡村勝行

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地の南船場2丁目所在遺跡E地点は、大坂城下町跡の南部、大坂城三ノ丸の造成に伴って開発された船場地区の南側に位置する(図1)。周辺では、北東70mのOJ15-4次調査では、明確な遺構は抽出できなかつたものの、大坂冬ノ陣によると考えられる焼土層の存在から、城下町の形成が豊臣後期に始まる可能性が指摘され、17世紀以降、継続した町屋の変遷が詳細に復元されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。南西約130mのOJ07-5・6調査地では、豊臣期船場城下町の推定南限を越えた位置で豊臣後期の遺構が検出されており[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]、城下町の広がりを考える上で注目される。

大阪市教育委員会により、実施された試掘調査で、地表下約2.4m以下で本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。この結果を受け、本調査は敷地南側で東西13m×南北10mの調査区を設定し(図2)、平成29年10月10日に開始した。まず重機で地表下2.4mまで掘削し、その後、下位層を人力で掘り下げた。層序に応じて、順次遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進めた。10月20日に現地における調査作業を終了し、資材・機材を撤収した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。本文中の遺物記載は、当研究所学芸員小田木富慈美による。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

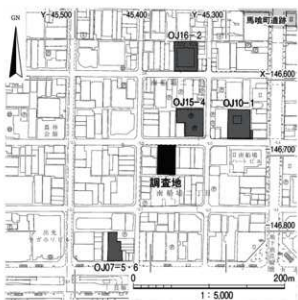


図1 調査地位置図

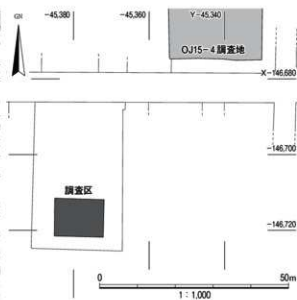


図2 調査区配置図

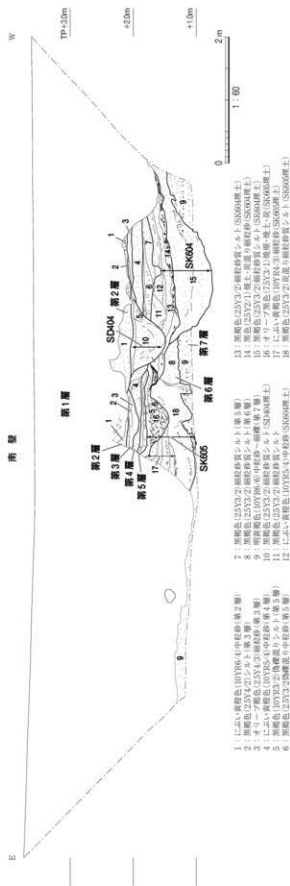


図4 南壁地層断面図

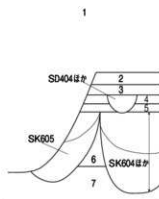


図3 地層と遺構の関係図

現地表の標高はTP+3.6~3.7mと平坦である。調査区全体に現代の攪乱が深く及び、とりわけ東半分の地層はほぼ削平されていた。現代のものを含め、地層を計7層に分類した。調査区南壁の状況から以下にそれぞれを記す。

第1層：現代の盛土・攪乱層で、層厚は110~240cmである。

第2層：にぶい黄褐色(10YR6/4)中粒砂からなる盛土層で、層厚は最大25cmである。時期判定可能な遺物は確認できなかった。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂からなる盛土層で、層厚は最大10cmである。時期判定可能な遺物は確認できなかった。

第4層：にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂からなる盛土層で、層厚は最大20cmである。時期判定可能な遺物は確認できなかった。上面は固く締まり、17世紀後葉と推定されるSD404、SP408などを検出した。

第5層：黒褐色(10YR3/2)偽凝灰シルト~にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂からなる盛土層で、層厚は15cm前後である。17世紀中葉の肥前磁器、丹波焼播鉢とともに、タイ産壺16が出土した。



第6層：黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は30cm前後である。17世紀前半に位置づけられる肥前磁器碗1・皿2が出土し、この時期の地層と考えられる。上面で17世紀中頃のSK601～606を検出した。

第7層：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂～細礫からなる自然堆積層である。層厚は20cm以上である。

ii) 遺構と遺物(図5～8)

a. 第6層上面の遺構と遺物

調査区西側で土壌群を検出した。このうちSK602～605はいずれも大型で、上層が焼土・炭・焼けた壁土を多く含む黒色細粒砂シルト、下層が黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂を埋土とする特徴が共通し、土(砂)採り穴と推定される。出土遺物からおおむね17世紀中葉に位置付けられる。

SK601 一辺0.9m、深さ30cmの土壌である。肥前磁器碗3・5、同京焼風陶器碗4、中国産青花皿6、土師器皿8、瓦、銅製金具7などが出土した。SK602を切る。

SK602 長辺3.1m、短辺1.8m以上、深さ50cmの土壌で、肥前磁器、丹波焼播鉢、土師器皿9、土師器甕10などが出土した。10は16世紀に遡る。

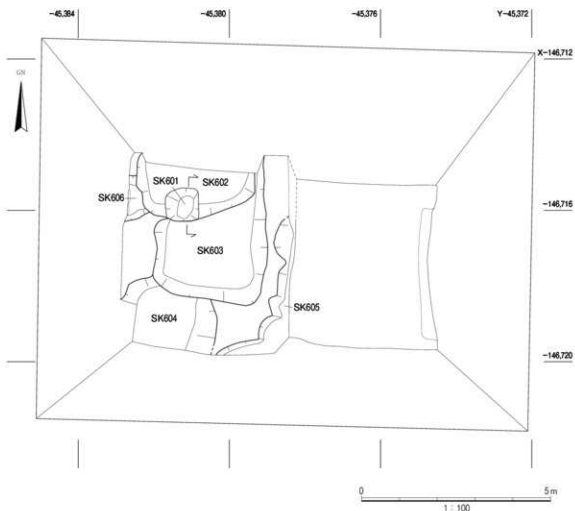


図5 第6層上面遺構平面図

SK603 長辺4.0m以上、短辺3.0m以上、深さ50cmの土壌で、肥前磁器碗14・小杯11、肥前陶器皿13、土師器皿12など17世紀中葉の遺物が出土した。

SK604 長辺2.8m、短辺2.0m以上、深さ90cmの土壌で、肥前磁器、信楽焼播鉢15などが出土した

SK605 長辺3.6m以上、短辺1.9m以上、深さ40cm以上の土壌である。

SK606 長辺1.2m以上、短辺0.8m以上、深さ90cmの土壌である。

b. 第4層上面の遺構と遺物

調査区南西部で、柱穴・土壌・溝・小穴を検出した。これらは密集し、切合いも多く認められた。

SK401 長辺1.1m、短辺0.2m、深さ20cm以上の土壌である。

SP402 長辺0.4m、短辺0.3m、深さ30cmの柱穴である。丹波焼播鉢、土師器火入れが出土した。

SK403 長辺0.7m、短辺0.5m、深さ20cmの土壌である。

SD404 幅1.0m、長さ1.6m以上、深さ50cmの南北溝である。埋め立てられており、肥前磁器碗・皿、丹波焼播鉢、土師器皿など17世紀中～後葉の遺物が出土した。

SK405 一辺0.6m、深さ10cmの土壌である。

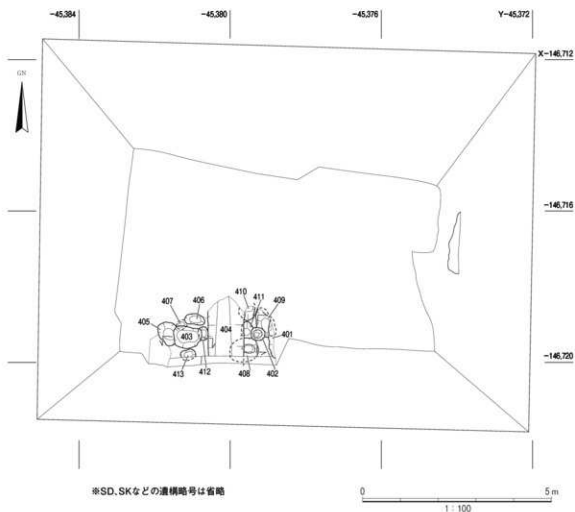


図6 第4層上面遺構平面図

- SK406 長辺0.5m、短辺0.2m、深さ12cmの土壌である。タイ産壺が出土した。
- SP407 一辺0.3m、深さ10cmの小穴である
- SP408 長辺0.8m、短辺0.6m、深さ80cmの柱穴である。直径20cmの柱痕跡が認められた。17世紀後半の肥前磁器鉢、土師器皿が出土した。
- SK409 長辺0.8m、短辺0.5m、深さ30cmの土壌である。肥前磁器、備前焼鉛鉢、土師器皿が出土した。
- SP410 長辺0.4m以上、短辺0.4m、深さ12cmの土壌である。肥前磁器が出土した。
- SP411 長辺0.4m、短辺0.3m、深さ20cmの土壌である。
- SK412 長辺0.4m、短辺0.3m、深さ6cmの土壌である。
- SP413 長辺0.4m、短辺0.3m、深さ5cmの土壌である。

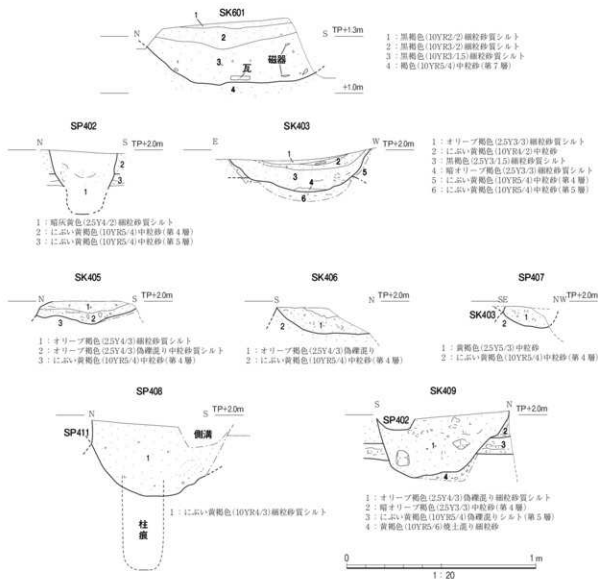


図7 遺構断面図

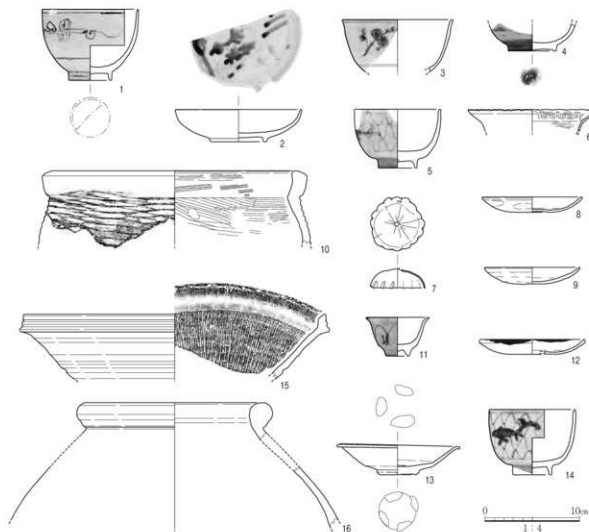


図8 出土遺物実測図

第6層(1・2)、SK601(3～8)、SK602(9・10)、SK603(11～14)、SK604(15)、第5層(16)

### 3) まとめ

今回の調査では、現代の攪乱が深く及び、豊臣期船場城下町に関連する遺構・遺物は確認できなかったものの、17世紀前半の作土層、17世紀中葉の土採りと考えられる土壌群、また、17世紀後半以降、この地の活発な活動を示唆する建物跡、溝など密集する遺構群が検出された。

### 引用文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「中央区南船場二丁目における埋蔵文化財発掘調査(OJ07-6)報告書」:  
 『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.37-40
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017、「中央区南船場二丁目30における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ15-4)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』、pp.119-146

中央区瓦町一丁目17における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-12)報告書

調査個所 大阪市中央区瓦町1丁目17  
調査面積 60㎡  
調査期間 平成29年10月25日～10月31日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、松本啓子

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の西北部に位置している(図1)。この地では1980年代以来、数多くの発掘調査が実施され、豊臣～徳川期の城下町にかかわる遺構・遺物が多数発見されている。本調査地南隣のOJ02～3次調査では、奈良時代の井戸・土壇、豊臣氏および徳川氏大坂城期の溝・土壇・礎石建物と、これらに伴う古代の土器、近世陶磁器などが出土し、北隣のOJ05～7次調査では奈良時代から江戸時代の遺構と遺物が確認された[大阪市文化財協会2003、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]。当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査で近世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたため、本格的な発掘調査を実施することとなった。

調査は敷地の東半部に南北7m、東西9mの調査区を設ける予定であったが、敷地が狭く、重機移動の際、壁面崩落の恐れがあったため、関係諸機関との協議の上、南北6m、東西10mに変更した(図2)。重機による掘削は地表下約2.3m以下の深さまでとし、以下を人力掘削で進め、この地域の地山である砂層(地表下約3.3m)まで掘り下げた。調査期間は平成29年10月25日～10月31日である。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP+○mと表記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地の現地表面はTP+4.1mで、調査地内はほぼ平坦であった。本調査では現代盛土の下に3つ

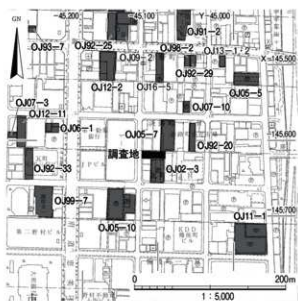


図1 調査地位置図

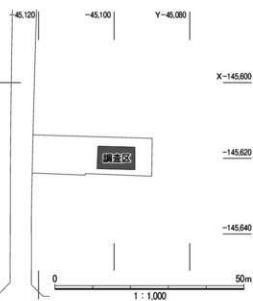


図2 調査区位置図

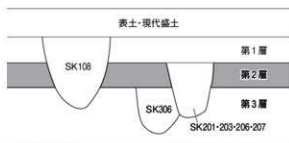


図3 地層と遺構の関係図

の地層が確認された。第1・2層は整地層で、第3層は自然堆積層である。各層とも本来あるはずの生活面は、削平を受け、すでに失われていた。

第0層：現代の表土・盛土層で、地表下2.0～2.9mにおよぶ。

第1層：調査区の西端に分布する暗褐色(10YR3/4)灰色シルト質砂層で、炭や焼土が混

じる。本層までを重機で除去した。最大層厚は30cmであるが、上面にあった生活面は削平されていた。18世紀前半の遺物が出土し、本層上面で18世紀前半のSK108が掘られていた。18世紀前半までの整地層である。

第2層：暗褐色(10YR3/3)礫混りシルト質細粒～中粒砂層で、豊臣後期の整地層である。最大層厚は90cmである。上面で豊臣後期のSK201・203・206・207を検出した。OJ02～3次調査やOJ05～7次調査の大坂ノ陣の焼土層や焼土整理層はTP+2.0mあたりの高さであり、本層上面よりも高い。したがって本調査地では大坂ノ陣の焼土層はすでに失われている可能性が高いと思われる。

第3層：均質な黄褐色(2.5Y5/6)細粒～中粒砂層で、海成層とみられる。層厚は40cm以上である。遺物は出土していない。本層上面で豊臣後期のSK306を検出した。

#### ii) 遺構と遺物(図5・6)

遺構番号は、重なるの順序で第1層上面以上からのSK108、第2層上面で見つかった200番台の遺構、第3層上面で見つかったSK306と名付けた。このうち、第2層上面には17世紀前半の徳川期の遺構と、16世紀末～17世紀初頭の豊臣後期の遺物しか出土しなかった遺構がある。第2層上面に本来あった生活面が失われているうえ、明確な時期の指標となる大坂ノ陣の地層も見られず、遺構の重複もないので、同時併存したのか、複数の時期に分かれるのかは判別できなかった。以下に各遺構の概略を述べる。

##### a. 第3層上面の遺構

SK306：調査区中央の南壁際で見つかった東西約0.7m、南北約0.6m、深さ約0.3mの土壌である。SK206により上部を削られている。埋土はオリブ黒色(5Y2/2)礫・炭混り砂質粘土で、豊臣後期の遺物が出土した。出土遺物のうち、豊臣後期の肥前陶器皿10を図示した。

##### b. 第2層上面の遺構

SK201：調査区中央の北壁際にある東西1.1m以上、南北0.7m以上、深さ約0.7mの土壌である。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂・礫混りシルト質砂で、肥前陶器皿11などの豊臣後期の遺物が出土した。

SK203：調査区東南隅にある東西1.1m以上、南北0.8m以上、深さ約1.2mの土壌で、中心部分を近代の攪乱で壊されている。埋土は上層が灰黄褐色(10YR4/2)礫・炭混り砂質シルト、下層が黒褐色(7.5YR3/2)炭・焼土・礫混り粘土質粗粒砂である。遺物は出土していない。

SK207：調査区西半の南壁際で見つかった東西約1.1m、南北0.5m以上、深さ約0.4mの土壌である。埋土は黒褐色(7.5YR3/1)炭・焼土・粘土混り砂質シルトで、豊臣期の土師器皿2や瀬戸美濃焼陶器



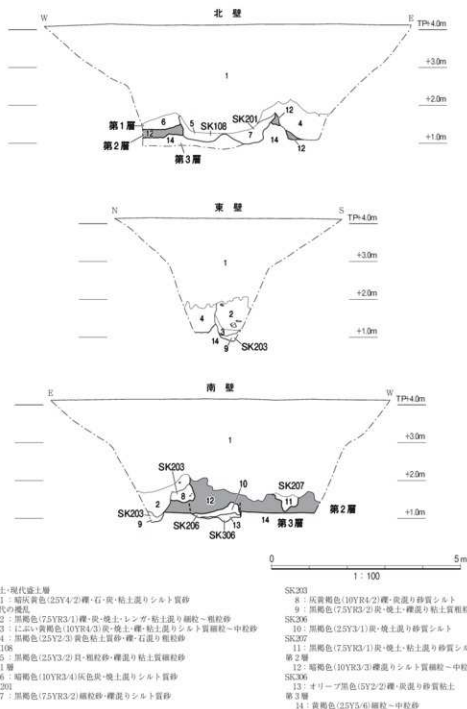


図4 地層断面図

灰釉折縁ソギ皿7などが出土した。

SK206 : 調査区中央の南壁際にある東西1.3m以上、南北約0.7m、深さ約1.0mの土壌である。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)炭・焼土混り砂質シルトで、籾の羽口1、土師器の皿3・焼壺4・焙烙5、肥前陶器碗14、中国産白磁皿16、肥前磁器染付皿17などが出土した。17世紀前半の徳川期の遺構である。

SK108 : 調査区西岸の北壁際で見つかった東西約0.9m、南北0.5m以上で、深さ0.7m以上の土壌である。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)貝・粗粒砂・礫混り粘土質細粒砂で、18世紀前半の肥前磁器などの遺物が出土した。

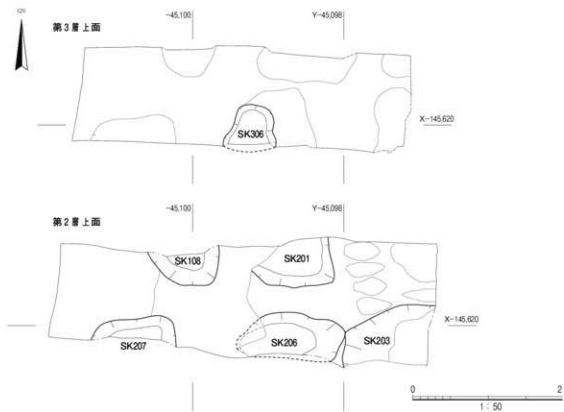


图5 遺構平面図

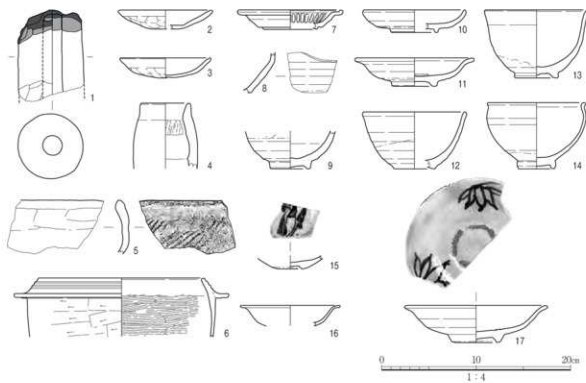


图6 出土遺物実測図

SK306(10)、第2層(6・8・9・12・13・15)、SK201(11)、SK207(2・7)、SK206(1・3~5・14・16・17)

### c. 地層出土の遺物

第2層から出土した遺物のうち、瓦質の羽釜6、瀬戸美濃焼陶器褐軸天目碗8・碗9、肥前陶器碗12・13、碁笥底の中国産青花皿15を図示した。これらは豊臣後期までのものである。

### 3)まとめ

今回の調査では、生活面が大きく失われていたが、豊臣後期から徳川期前半の遺構を検出することができた。調査地の周辺では豊臣期や徳川期の城下町の様相はかなり明らかになりつつあるが、引き続き調査の進展を待ってさらなる検討を加えたい。

### 引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「大坂城下町跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-2001・2002年度-』、pp.90-98

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城下町跡発掘調査(OJ05-7)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.149-160



中央区南本町一丁目18-3における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ17-13)報告書

調査個所 大阪市中央区南本町1丁目18-3  
調査面積 192㎡  
調査期間 平成29年11月20日～12月13日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明

## 1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は西の八百屋町筋と東の一丁目筋に挟まれ、北の本町通りと南の南本町通りに挟まれた街区にある。この街区と東隣の2街区は東西に通る小路によって南北に分割され、調査地は南側にあって南本町通りに面している。豊臣期の大阪城下町では東南の一角に想定され、これまでの付近の調査では、豊臣後期の建物などをはじめ、古墳時代から徳川期までの幅広い時代の遺構と遺物が見つっている。

調査地の東100m付近のOJ92-17次調査地では円筒埴輪片や滑石製品などの古墳時代の遺物があり、また飛鳥～平安時代の遺物が小穴や小溝などとともに出土した〔大阪市文化財協会2004〕。滑石製品は鋸歯文を刻んだ石製容器の蓋ないし器台と目されるもので全国でも類例の少ない資料である。東側は後に東横堀川となるラグーンが縄文時代には形成されていた南北に延びる低地で、その大阪湾側に並行した砂州の高まりが早い時期からの開発を可能としたものと考えられる〔趙哲済ほか2013〕という〔砂州A〕。OJ92-17次調査地では豊臣後期の井戸や土塼をはじめ、徳川初期からの遺構・遺物が多数見ついている〔大阪市文化財協会2004〕。また、調査区の北に接するOJ05-2次調査地〔大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006〕やOJ07-1次調査地〔大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009〕では豊臣後期の複数の遺構面や大坂冬ノ陣の片づけに係る焼土主体の整地層、徳川初期以降18世紀にかかる建物や土塼などが発見されている。いずれの調査地でも、大坂ノ陣以降、建物の建立など早い段階での復興が指摘されている。

大阪市教育委員会による試掘調査では、地表下約2.4m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面が検出されたことにより、発掘調査を実施することとなった。周辺の調査成果から

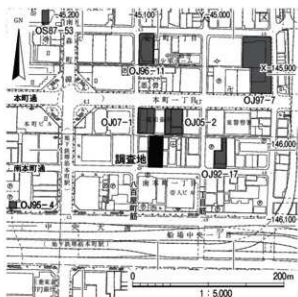


図1 調査地位置図

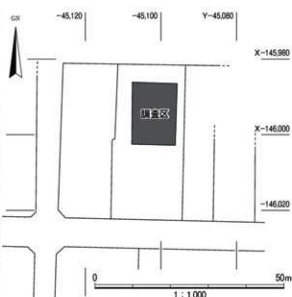


図2 調査区配置図

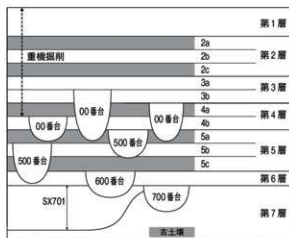


図3 地層と遺構の関係図

層までを重機で掘削し、第5b層上面以下を北区と同じ面で調査した。同年12月13日に機材を撤収し、現地におけるすべての作業を終了した。

また、本文で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5)

調査地はTP+4.9mで概ね平坦な地形であるが、西の堺筋ではTP+4.1mとなり、街区全体では西へ向かって低く傾斜している。

調査で確認された地層は7層に大別した。第2～5層は細分されたが、断続的な整地と、整地の間に形成された古土壌が重なる地層であった。整地によって調査地の南部から北部へ、また東部から西部へ高上げしながら平坦地を広げていった傾向がみられる。以下に各地層の詳細を記す。

第1層：黒褐色(2.5Y3/1)細礫混りシルト質粗粒砂を主体にコンクリートや金属片を含む現代の整地層である。層厚は第2層が残存する場所で110cm程度である。

第2層：第2a～2c層に細分された。平面的な調査をしておらず、詳細な時期は不明であるが、近世でも後半に相当する地層であろう。本層の整地によって調査区は概ね平坦となった。

2a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂層で、古土壌とみられる。層厚は20cm弱である。

2b層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂層で、整地層である。層厚は10cm弱である。

2c層：オリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト層で古土壌である。層厚は30cm弱である。

第3層：第3a・3b層に細分された整地層である。

3a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂層の整地層で、層厚は南部で10cm、北部では同等ないし5cm程度厚くなる。

3b層：オリブ褐色(2.5Y4/4)シルト偽礫を含む中粒砂層で、層厚は南部で20cm、北部では5～10cm程度厚くなっている。後述の第4b層上面で検出した遺構には、調査区地層断面の観察により本層上

は、豊臣期から徳川期にかかる大坂城下町の広がりとする。また、地層の堆積順序と年代的な変遷の理解をおもな目的とした。

調査は平成29年11月20日から開始した。当初計画のとおり東西12m、南北16mの調査区を設定し、南北2区に分けて反転調査とした。調査は北区から始め、地表から約1.6m下の後述する第4b層上面で17世紀代の遺構が検出されることがわかり、第4a層までを重機で除去し、第4b層、第5b層、第6層、第7層の各上面で調査を行った。南区は12月4日から開始した。調査期間を勘案して第5a



面から掘り込まれたものがある。これらの遺構で新しいものは18世紀前葉であることから、それ以前の可能性が高い地層ととらえておく。

第4層：第4a・4b層に細分され、4a層は古土壌、4b層は整地層である。4a層までを重機で掘削した。  
 4a層：暗褐色(10YR2/3)シルト質細粒～中粒砂層で、層厚は南部で10～15cm、北部西側では25cm

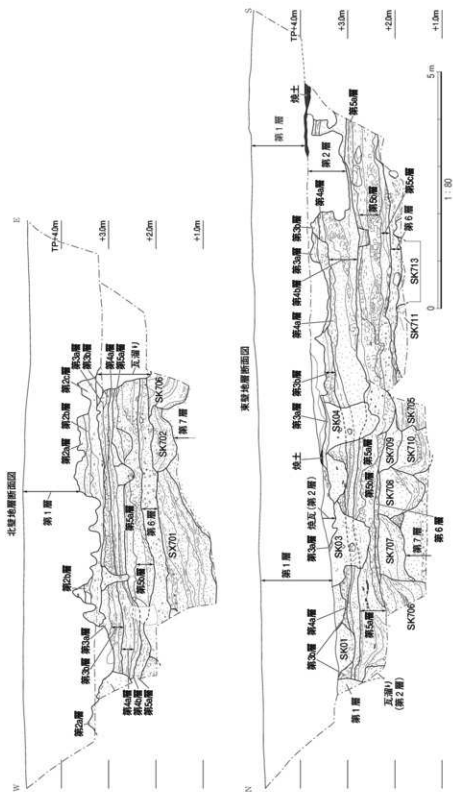


図4 調査区北壁・東壁地層断面図

以上になる。下位の4b層上面で検出した遺構には、本層上面から掘り込まれたものが含まれている。

4b層：オリブ褐色(2.5Y4/3)中粒～粗粒砂層で、層厚は南部で50cm以上、北部では10cm程度で、おもに敷地南部のかさ上げのための整地層である。上面で遺構を検出し、多くの遺構は17世紀後葉～末の遺物を含むが、18世紀初～前葉の遺物が出土する遺構があり、これらは第3b層あるいは第4a層上面から掘り込まれたものと考えられる。

第5層：第5a・5b・5c層に細分され、5a層・5c層は古土壌、5b層は整地層である。

5a層：灰オリーブ色(5Y5/3)細粒砂質シルト～シルト質中粒砂層で、層厚15cm程度の古土壌である。

5b層：暗灰黄色(2.5Y4/2)含シルト偽礫、シルト質細粒砂層で、層厚は南部で50cm程度、北部でも30～40cm程度である。本層上面で17世紀中～後葉頃の遺構を検出した。

5c層：暗褐色(7.5YR5/4)シルト質細粒砂層で、層厚は南部で約20cm、北部では東側で10cm弱あるが、西側は薄く確認できなかった。

第6層：暗褐色(10YR3/3)含焼土偽礫・シルト偽礫・炭、シルト質中粒～粗粒砂層で、層厚10～20cmの整地層である。本層上面で徳川初期の遺構を検出した。

第7層：明黄褐色(2.5Y7/6)中粒～細礫質粗粒砂層で、下部ほど粒径が大きい。最高地点は約TP+1.9mである。ラミナが認められるため上町台地の西側に縄文時代以降に形成された海浜性の浜堤(砂州A)と推定される[趙哲済ほか2013]。本層上面で豊臣後期の遺構を検出した。

## ii) 遺構と遺物(図5～11)

### a. 豊臣期以前の遺構と遺物(図5・6)

#### 古代以前

遺構は検出されていないが、第3層以下で須恵器の細片1が出土している。表面にタタキが施され、内面は当て具痕をナデで消している。詳細は不明だが古墳時代中期の壺の可能性もある。

#### 豊臣後期(第7層上面)

第7層上面で豊臣後期の遺構を検出したが、大坂ノ陣に係る焼面ないしは片づけによる焼土層は検出されなかった。見つかった遺構は調査区西北角から外に広がっている大きな落込みSK701のほか、平面形が円形ないし不定形な大小の土塋である(写真1)。

SK703は調査区北部にあり、長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.6mであり、炭や瓦を含む黄褐色シルト質粗粒砂層で埋められていた。出土遺物には肥前陶器皿6、軒丸瓦18などがある。6は豊臣後期のものである。18は巴文と珠文から徳川期に降る可能性があるが、層準から豊臣後期のものと判断する。

SK705は平面が不定形で南北2.9m以上を確認したが、全体は不明である。深さ0.7m弱で、底に機能時堆積層とみられる炭・大鋸屑を多く含む黒褐色シルト質細粒～中粒砂層がたまり、上



写真1 北区第7層上面遺構掘削状況(北東から)

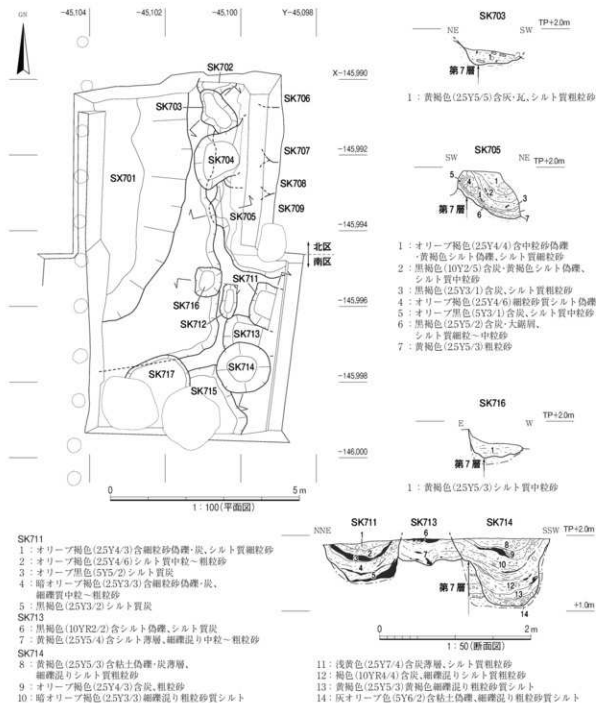


図5 豊臣後期(第7層上面)の遺構平面・断面図

部をオリーブ褐色シルト質中粒砂やシルト偽礫を多く含むシルト質中粒砂層で埋められていた。

SK716は長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.35mで、黄褐色シルト質中粒砂で埋められている。出土遺物は肥前陶器向付7、備前焼鉢鉢17など豊臣後期のものである。7は内面に葉を描いた絵唐津である。

調査区の東南にSK711・713・714がある。SK711・713は全体規模が不明である。SK711は南北1.1m、深さ0.5m弱で、底と中部に黒褐色シルト質炭が堆積し、その間と遺構の上部は炭や細粒砂の偽礫を含む暗オリーブ褐色細礫質中粒～粗粒砂層で埋められていた。SK713は平面形が直径1.3～1.4mの円形で、深さは0.9mである。埋土は炭や偽礫を多く含む地層であるが、一気に埋められたものではなく、徐々

に埋まっていたものとみられる。

以上の土壌はごみ捨ててに使用された穴であろう。

これらのほかに土壌から出土した遺物には、SK704から出土した肥前陶器碗3、SK717から出土した肥前陶器碗5、中国産青花皿13などがある。3は底部から体部へやや内側に傾く。13は底部内面に草花文を描く。これらも豊臣後期に属するものである。

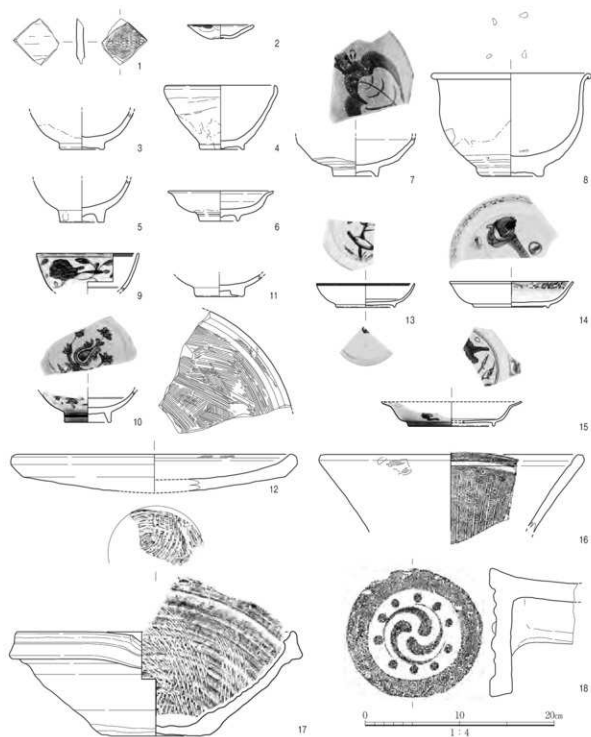


図6 豊臣後期(第7層上面)以前の遺物実測図

古代以前の遊離資料(1)、SX701(2・4・8~12・14~16)、SK703(6・18)、SK704(3)、SK716(7・17)、SK717(5・13)

平面での重複関係からSX701はこれらの土壌よりも古い。東西は最も広い調査区北壁で3.0m、深さ1.0mを確認した。東南部では上端の内側が浅いテラス状となっている。出土遺物には土師器小皿2、丹波焼播鉢16、肥前陶器碗4、鉢8、土師器大皿12、中国産青花碗9・10、皿14・15、中国産白磁碗11などがある。16は1本摺目で口縁部内側にやや凹んだ沈線が巡る。4は直線的に広がる体部で、口縁部をやや内側に屈曲させている。8は丸みを帯びた体部が直立して口縁部へ続き、端部は外方へ丸く折り曲げている。12は底部内面の全体をハケで調整したもので、ほとんど立上りのない皿である。中国産の9・10・15は精製品、11は高台畳付けを幅広くするものである。以上は豊臣後期に属するものである。

上記の土壌は、SX701が埋められて後にその東・南辺から外側に一部が重なって掘削されている。土壌を掘る場所が意識されていたためと考えられる。

#### b. 徳川期の遺構と遺物(図7～11)

##### 徳川期(第6層上面)

第6層上面で徳川初期の遺構を検出した。ほとんどが平面形が円形ないし不定形の土壌で、やや長いものを溝としたが区画溝のようなものはない。

SK605-606は調査区の中央付近で重なる土壌である。SK605は東西2.0m、南北2.2m、深さ0.4mで、埋土は下半が灰オリーブ褐色シルト質粗粒砂ないし暗オリーブ色シルト質細粒砂層で、上半は炭や細粒砂質シルト偽礫を多く含む黄褐色シルト質細粒砂層で埋められていた。SK606は細粒砂質シルトの偽礫を多量に含む暗灰黄色粗粒砂ないし黄褐色粗粒砂層で埋められていた。

SK607は調査区北部にある平面形が不定形の土壌で、東西3.1m、南北2.2m、深さ0.2mである。下半は炭を含むオリーブ褐色シルト質細粒砂および極細粒砂質シルト偽礫で埋められており、上半は第5b層による整地で埋められていた。

SK608はSK607南部に重なる土壌で、南北1.2m、東西0.9m、深さ0.3m程度である。第5b層に当る極細粒砂質シルト偽礫を含む灰オリーブ褐色シルト質極細粒砂層で埋められていた。肥前陶器碗24などが出土した。24は体部が丸みを帯びた碗である。

SK617・SD618は調査区西壁にかかる遺構である。SK617は幅0.7m、深さ0.3m程度、SD618は幅0.8m、深さ0.35mである。SD618が新しく、第5b層で覆われている。埋土の下半は極細粒砂質シルト偽礫を含むにぶい黄色シルト質極細粒砂層で埋められ、上半はオリーブ褐色ないしにぶい黄褐色で直径数cm程度の円礫を多量に含む粗粒砂層で埋められていた。SK617は極細粒砂質シルト偽礫を含むオリーブ褐色シルト質極細粒砂層で埋められていた。出土遺物とした肥前磁器皿26は混入であろう。26以外は徳川初期のもので、大坂ノ陣の後には調査区はおもにごみ捨て場として利用されていたと考えられる。

これらのほかに土壌から出土した遺物にSK609の中国産青花碗27、SK616の肥前陶器碗23および中国産青花28、SK620の肥前陶器碗25などがある。また、側溝で第6層ないしそれ以下の層準から出土した遺物に、土師器小皿19、肥前陶器碗20・播鉢21、中国産青花皿22などがある。中国産である22は輪花皿である。27は漳州窯産であろう。28は精製品である。肥前陶器碗の20は高台を残して、23・

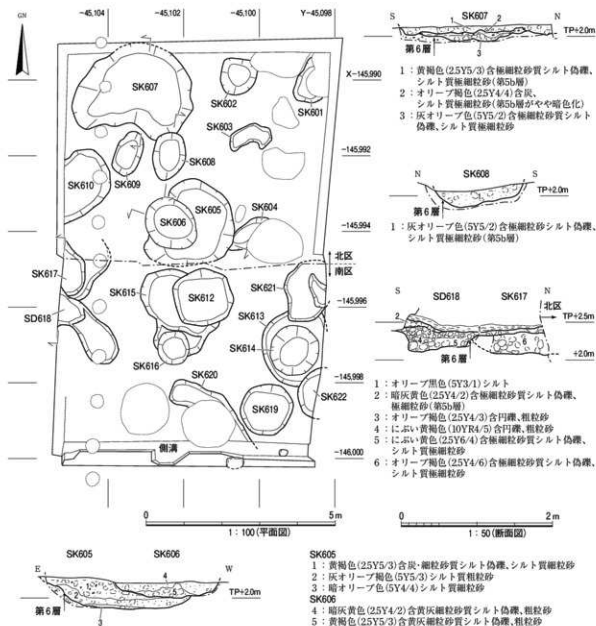


図7 徳川初期(第6層上面)の遺構平面・断面図

25は全面に施軸している。これらは豊臣後期から徳川初期のもので、第7層上面および第6層上面の遺構の時期と矛盾ない。

#### 徳川期(第5b層上面)

第5b層上面では17世紀後葉を中心に、一部に中葉を含む時期の遺構を検出した。建物と考えられる礎石柱列や溝、土壌など多様な遺構を検出した。なお、後述のSD520のように第5a層上面から掘られた遺構もこの面で一括して検出した。

SB523は調査区の南端にあり、柱間5間以上の礎石柱列である。礎石が大きく、後述の地業を施すなど基礎に手をかけているため、欄や塀ではなく、礎石建物の側柱と考えられる。地業は東西5.5m以上にわたり深さ0.5m程の穴を掘り、0.1m～0.25mの厚さで直径数cmの円礫を敷き詰め、その上に長さ40～50cmの礎石を並べている。礎石の間はシルト質極細粒砂の偽礫を含む暗オリーブ褐色極細粒砂

質シルト層で埋められていた(写真2)。柱はこの基礎上の礎石に並べたと考えられる。第5b層の上面より深い位置に礎石があるため、この方法で柱を設置すると柱の根本は地中に埋まった状態となり、布掘の掘形に礎石を据えた掘立柱と近い構造となっている。建物の廃絶時に東端と東から4番目の礎石は抜き取られ、最終的にぶい黄褐色の細礫混り中粒～粗粒砂層で埋められていた。



写真2 SB523北側柱列の礎石と地業(北から)

SD505は東西5m、南北6m以上で、北東で緩やかに屈曲した平面がL字状の板組の溝である。掘形の幅は0.45m、深さ0.1m程度で、内部に板を組んで幅0.2mの溝を作り、北西端部では小口板を当ている。板組溝の内部は灰オリーブ色極細粒砂質シルト層で水漬きの堆積であろう。掘形は灰オリーブ色極細粒砂質シルト層で埋められていた。屈曲部ではこぶし大の礫を狭い範囲で並べていた。板組溝の西外側に3個、東外側に1個を確認したが、遺構の検出作業中に除去された礫が若干存在した。これらは河原石であるが、板組溝の内部にも数個の礫があり割石である。これらの石組の役割は不明である。SD505の南端はSD520に壊されており、その南側では検出できなかった。なおSD505の南にはSD525があり、同程度の規模で方位も近似するが、板組はなく、位置もずれるため、別の遺構である。

SD520は掘形の幅0.45m、深さ0.35mで、内部に幅0.3m、深さ0.35mの板組の溝を作っていた。東西は6m以上で、直線に延びている。調査区東壁の地層断面で第5a層上面から掘削されていることが確認できる。

SK508は調査区西北部にあり、南北1.2m以上、東西1.0m、深さ0.25m弱で、底に機能時堆積層である炭を含んだ暗オリーブ褐色細粒砂質シルト層が堆積し、上部はオリーブ褐色シルト質中粒砂および黄褐色粗粒砂～シルト質中粒砂層で埋まっていた。出土遺物には肥前陶器碗31など、17世紀後葉のものがある。

SK512は調査区中央東部にあり、南北1.5m、東西1.3m、深さ0.4m以上である。底は未確認であるが、埋土の下部は漆喰の偽礫を含む暗灰黄色シルト質中粒砂ないしオリーブ褐色シルト質細粒砂層で埋められ、上部は暗灰黄色中粒砂質シルトおよび暗オリーブ褐色シルト質細粒砂層などで埋まっていた。出土遺物には肥前磁器碗33などがある。33は一重網目文で17世紀中葉のものである。

SK515・SD516は調査区中央付近の遺構で、SK515は南北0.6m、東西0.8m、深さ0.25mで第5b層の偽礫を含むオリーブ褐色極細粒砂質シルト層で埋まっていた。SD516はSK515より古く、溝としたが、SD505・520などの導排水を目的とするような性格とは異なる。第5b層の偽礫を含む暗灰黄色極細粒砂質シルト層で埋まっていた。SD516からは肥前陶器碗29が出土した。高台の高い全面施釉のもので、17世紀後葉のものである。

SK521は東西2.1m、南北2.1m、深さ0.4mで、底に機能時堆積層である炭を含む黒褐色極細粒砂質

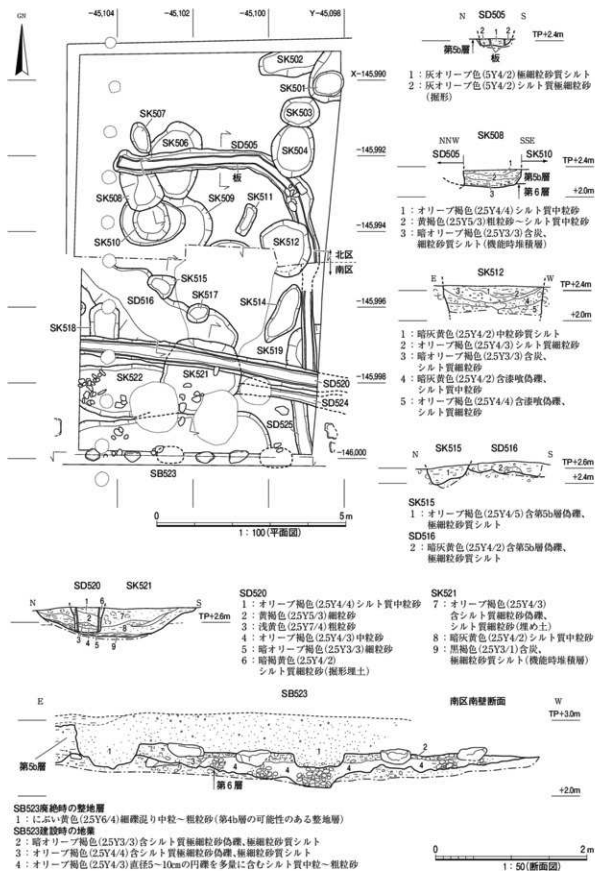


図8 徳川期(第5b層上面)の遺構平面・断面図



シルト層があり、最上部はオリーブ褐色シルト質細粒砂層で埋められていた。出土遺物には肥前磁器染付碗34などがある。34は17世紀後葉のものである。

以上のほか、土壌から出土した遺物にSK501の肥前陶器碗30・皿32がある。30はわずかに外反する口縁部となる刷毛目唐津である。32は口縁部を屈曲させ、端部をわずかに上方につまみ上げている。32は17世紀前半に、ほかは17世紀中～後葉にかかるものである。

#### 徳川期(第4b層上面)

先述のとおり本層上面では北区のみ調査を行い、南区では第5b層上面以下に達した深い遺構のみを検出した。また、本層上面では上位の第3b層上面やそれ以上の層準から掘り込まれた遺構も合わせて検出している可能性が高いが、埋土から本来の層準を判断することは困難であったため、ここで一括した。出土した遺物は17世紀後葉～18世紀前葉のものが含まれている。

検出された遺構は、北区では小型の土壌や小穴のみであるが、南区には井戸がある点で違いがある。このことから、17世紀後葉～末以降になっても、従来と同様に敷地の奥がごみ捨て場に利用され、その手前(南側)に井戸の配置される空間があったと考えられる。

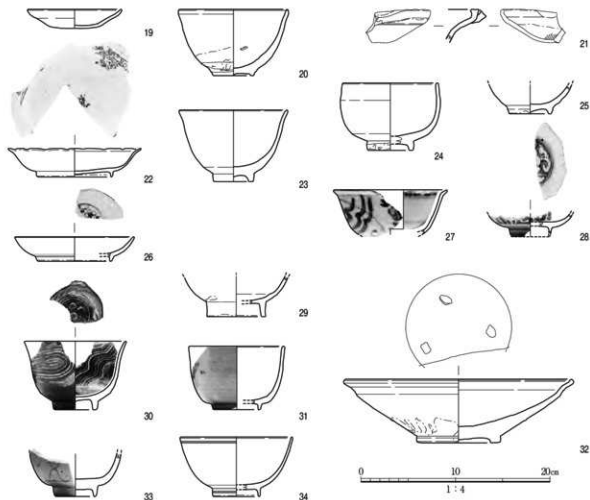


図9 徳川期(第6層上面・第5b層上面)の遺構および第6層以下出土遺物実測図  
 第6層以下(19～22)、SK608(24)、SK609(27)、SK616(23・28)、SK617(26)、SK620(25)、  
 SK501(30・32)、SK508(31)、SK512(33)、SD516(29)、SK521(34)

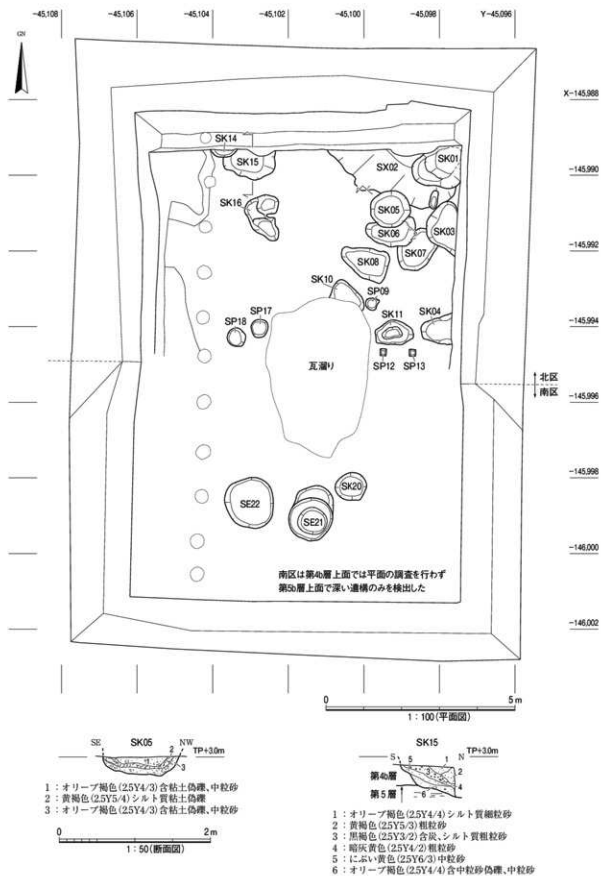


図10 徳川期(第4層上面)の遺構平面・断面図

SK05は東西1.0m、南北0.9m、深さ0.25mで、粘土偽磔を多量に含むオリーブ褐色中粒砂層で埋められていた。図化していないが、備前焼小壺、丹波焼播鉢、肥前陶器皿、肥前磁器碗・小杯、など17世紀後葉の遺物が出土している。

SK15は東西1.4m、深さ0.3m以上で、上部からオリーブ褐色シルト質細粒砂、黄褐色粗粒砂、炭を含む黒褐色シルト質粗粒砂、暗灰黄色粗粒砂、にぶい黄色中粒砂層などで埋まっていた。これらは機能時堆積層であろう。底の中粒砂偽磔を含むオリーブ褐色中粒砂層は加工時形成層であろうか。図化していないが丹波焼播鉢、肥前陶器碗、肥前磁器碗など17世紀後葉の遺物が出土している。

以上のほか、次のような遺構出土遺物がある

調査区北東部のSK03からは土師器皿35～37・培烙51、肥前磁器染付42、軟質施釉陶器ミニチュア仏花瓶49などが出土した。土師器皿は大中小3種類の大きさがあり、外面をユビオサエで調整している。51は焼成後に内面から外面に向けて穿孔している。42は草花文を施している。肥前磁器染付碗には型紙刷りのものもある。49は仏花瓶のミニチュア製品で底部外面に糸切痕がある。これらは17世紀

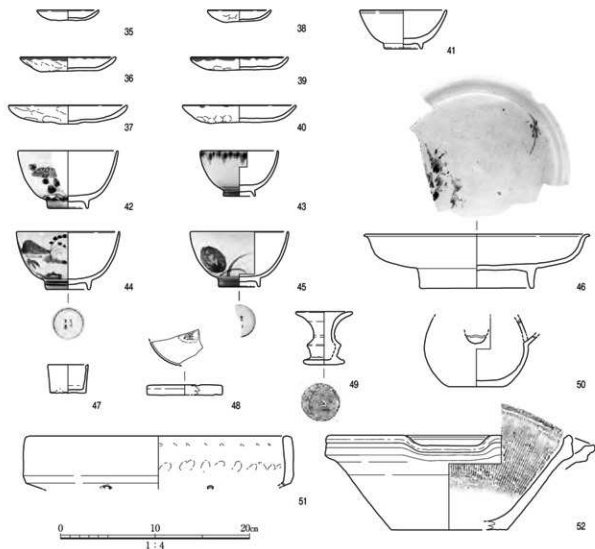


図11 徳川期(第4b層上面)出土遺物実測図

SK03(35～37・42・49・51)、SK04(38～41・43・44・46・48・52)、SP18(45・47・50)

末のものである。

調査区中央東部のSK04からは土師器皿38～40・播鉢52、焼塩壺48、瀬戸美濃焼碗41、肥前陶器皿46、肥前磁器染付43・44などが出土した。38～40はSK03の35～37と同じ型式のものである。52は土師器で備前焼の播鉢を模したものである。41は全面に施軸されている。46は高い高台が付く型式で全面に施軸され、底部内面に草文が描かれている。43は短い雨降り文が、44は草花文が描かれている。48は花焼塩を取めた鉢形焼塩壺の蓋である。これらは17世紀後葉～18世紀初のものである。

SP18からは肥前磁器染付45・白磁47、軟質施軸陶器50などが出土した。45は印判による九枚笹の家紋に草を描いている。47は傾入れないし猪口と思われる。50は丸みを帯びた体部で銚子あるいは片口である。これらは17世紀末～18世紀前葉のものである。

### 3) まとめ

本調査では古墳時代に遡る可能性のある須恵器片が出土したが遊離資料であり、中世以前の遺構は確認できなかった。東100m付近のOJ92-17次調査地で見つかった古墳時代～古代の遺構の広がりについては、今後さらに周辺調査を続ける必要があろう。

今回検出された最も古い遺構は豊臣後期のものである。大坂ノ陣の焼面はなく、複数の整地層もないため、開発の度合いはOJ07-1次調査地より低かった可能性があるが、敷地奥側の調査でもあり、一概に比較できない。SK703の軒丸瓦は瓦葺き建物の存在を、SX701で中国産青花が少なからず出土していることは居住者の階層が低くなかったことなどを示唆すると考えられる。

徳川期では、第6層上面で徳川初期の遺構が出現するため、周囲の調査と同じく大坂ノ陣後の復興は早かったと考えられる。しかし、遺構は土壌を主体とした単調なもので、調査地で開発が進むのは17世紀中葉から後葉にかかる第5b層の整地後である。地業を伴う礎石柱建物が敷地の最も奥に達し、導排水のためと考えられる板組の溝がめぐらされるのがこの時期であった。

砂州の上に立地し、開発が早かったと考えられる地域に当たるため、今後の調査では豊臣期より古い段階の遺構・遺物についてさらに注意が必要であろう。

### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城下町跡発掘調査(OJ05-2)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)」、pp.131-138
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大坂城下町跡発掘調査(OJ07-1)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)」、pp.171-182
- 大阪市文化財協会2004、「OJ91-24次および92-17次の調査」：「大坂城下町跡Ⅱ」、pp.327-336
- 趙哲清ほか2013、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」：脇田修「大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型-」

中央区瓦屋町一丁目15-1他における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-1)報告書

調査個所 大阪市中央区瓦屋町1丁目15-1他  
調査面積 72㎡  
調査期間 平成29年5月23日～5月30日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、絹川一徳

### 1) 調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は大阪市中央区瓦屋町一丁目に位置する。豊臣氏大坂城惣構の西南部にあたり、南端の「空堀通」は調査区の北約70mにある(図1)。「瓦屋町」という地名は、1615(元和元)年に初代が豊臣氏の御用瓦師だった二代目寺島惣左衛門休清が、徳川家康から引き続き御用瓦師を命ぜられ、南瓦屋町に4,600坪の屋敷地を拝領し、瓦窯を操業したことに因む。四代寺島藤右衛門は、1630(寛永7)年に瓦の土取り場として南瓦屋町の拝領地の東北側に地続きの空地进行を拝借し、以降これらの土地は「瓦屋藤右衛門請地」と呼ばれた。寺島藤右衛門は、尼崎屋又右衛門・山村与助とともに「三町人」と呼ばれ、江戸時代の大坂で特権町人として門閥を形成した[大阪市史編纂所1984]。今回の調査地は、この「瓦屋藤右衛門請地」の南西部分にあたる。

既往の調査として、調査地の南約50mでWR08-1次調査が行われている(図1)。この調査では、18世紀後半を中心とする17世紀末～19世紀前半の瓦を廃棄した土壌が多数見つかった。窯そのものは見つからなかったが、土壌から瓦窯道具や瓦范が出土しており、近隣で瓦生産を行っていたとみられる[大阪市文化財協会2009]。また、この調査では瓦生産のほか、陶器やベンガラ生産、鍛造・鍛冶・銅精錬・真鍮生産などの金属加工といった多種多様な産業に関係する遺物も出土している。

当地で大阪市教育委員会が平成29年3月21日に行った試掘調査において、地表下1.7m以下の深さで近世の遺構面と遺物包含層が発見され、本格的な発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成29年5月23日に着手した。東西9m×南北8mで72㎡の調査区(図2)を設定し、重機掘削によって現代盛土の除去を開始した。以降は人力による遺物包含層の掘り下げを進め、遺構検出・掘削、測量・記録などの必要な現場作業を行った。5月29日には調査区の北半に深掘りトレンチを設定し、記録作



図1 調査地の位置



図2 調査区の配置図

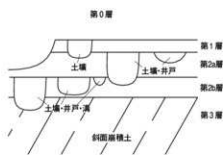


図3 地層と遺構の関係図

業を行ったのち、5月30日に発掘を終了した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面)で、TP+〇mと記した。また、本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することで得た世界測地系に基づく座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地の現地地形は南東から北西に向かって緩やかに下降しており、調査地の南東隅がTP+13.5m、北西隅がTP+13.3mであった。調査地よりさらに北西側は西へ下がる急斜面が形成されていることから、調査地は南北に長い上町台地の西側の縁辺に位置していることが分かる。第0層の現代盛土以下、第3層まで確認することができた。

第0層：旧建物の解体工事後の現代盛土層で、層厚は北側が80~90cmであったが、中央から南側は工事により大きく掘削されており、攪乱が深いところで地表下250cm以上に及んでいた。

第1層：灰オリーブ色(7.5Y5/2)中粒~粗粒砂混り粘土質シルト層の作土で旧表土である。ほとんどが解体工事による攪乱で削平されており、調査区北東のごくわずかな部分で認められた。残存する部分で層厚は10cm程度であった。本来の層厚では検出することができなかったが、この旧表土から掘り込まれたとみられるゴミ穴を第1層上面遺構として検出した。第2次世界大戦後の昭和期のものである。

第2層：徳川期の盛土層で、地層のしまりが緩く、炭粒を多く含む第2a層と砂質が優勢な2b層に細分された。瓦片を多く含むが、陶磁器などの生活用品の遺物は少なかった。第2a層は削平によって部分的に遺存していたが、第2b層は調査区の全域に堆積していた。

第2a層は上部がオリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒~粗粒砂混りシルト質粘土の盛土、下部が褐色(10YR4/6)または灰オリーブ色(7.5Y5/2)中粒~粗粒砂混りシルト質粘土の盛土で、いずれも径5~15cmの黄褐色粘土の偽礫や焼土塊、細礫、炭粒と瓦片を多量に含む。第1層と同様に、北東部分を除いて大半が解体工事により削平を受けていた。北東側で層厚は約90cmであった。19世紀後半の陶磁器類が出土した。また、第2a層上面で井戸や瓦・レンガ・グリ石などを廃棄した土壌を検出した。

第2b層は細礫を含む明褐色(7.5YR5/8)シルト質中粒~粗粒砂、褐色(10YR4/4)細粒~中粒砂混り粘土質シルト、径10cm前後の黄褐色粘土の偽礫や焼土塊、瓦片を多く含む褐色(10YR4/4)粘土質中粒砂からなる盛土で、層厚は50~70cmであった。第2b層は調査地の南側で実施されたWR08-1次調査の第2層(徳川期の整地層)と対応する地層である。この調査では17世紀末から19世紀前半にかけての遺構が第2層の層中と上面で検出されている[大阪市文化財協会2009]。本調査の第2b層上面では、瓦管が敷かれた溝、瓦を廃棄した土壌などを検出した。

第3層：調査区の北半中央部分に地層観察のために設けた深掘りトレンチで確認した地層である。WR08-1次調査の第3層に対応する地層で、16世紀末または17世紀初頭に発生したと推定される地



滑りによって斜面下方へ堆積した崩積土である[大阪市文化財協会2009]。地滑りにより崩壊した本来の堆積物が偽礫となって大量に含まれていた。地表下300cm前後、TP+10.0m付近まで部分的な掘り下げを行ったが、本層の基底は確認できなかった。径2～5cmの黄褐色・黄白色粘土の偽礫を含む黄褐色(10YR5/8)シルト混り粘土質細粒～中粒砂、径5～10cmの黄褐色・黄白色粘土の偽礫を含む黄褐色(10YR5/6)シルト混り中粒砂質粘土、径5～10cmの黄褐色・黄白色粘土の偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂質粘土からなる。層厚は200cm以上であった。第3層からは豊臣期とみられる瓦片が出土した。

## ii) 遺構と遺物(図4～6)

調査区は北東部分を除くと、第1・第2a層が大きく削平を受けていたため、各時期の遺構を第2b層上面で同時に検出した。溝・井戸・土壇・小穴・不整形な落込みなどの遺構からなる。これらの遺構は相互に複雑に切り合っており、出土遺物もほとんどが瓦片で陶磁器類をあまり含んでいなかったが、調査区の地層と遺構埋土の特徴から第1層上面・第2a層上面・第2b層上面の3時期の遺構に分類した。なお、第1層上面遺構については戦後の昭和期の遺構であり、記録も簡便なものに留めたため、本報告では割愛する。以下、第2a層上面・第2b層上面遺構について述べる。

### a. 第2b層上面遺構(図4～6)

第2b層上面で検出した遺構で、WR08～1次調査の第2層(徳川期の整地土)で検出した上部の遺構群と同時期で、19世紀前半の遺構とみられる。溝SD08・11・14、井戸SE26、土壇SK03・06・12・15・16・24、不整形な落込みSX17・25を検出した(図4)。

SD08・11・14は南北方向の溝で、SD08は幅0.50～0.96m、深さ0.15m前後、SD11は幅0.40～0.50m、

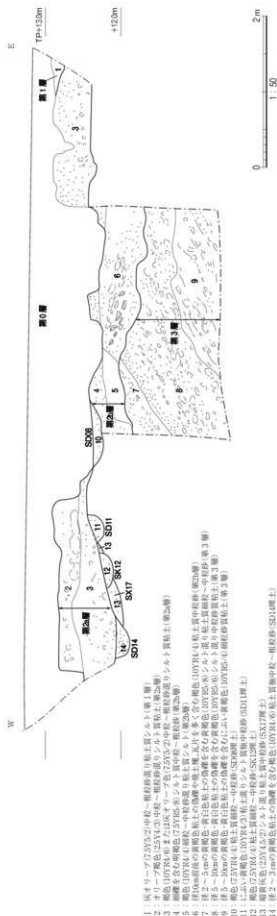


図4 北津地層断面図

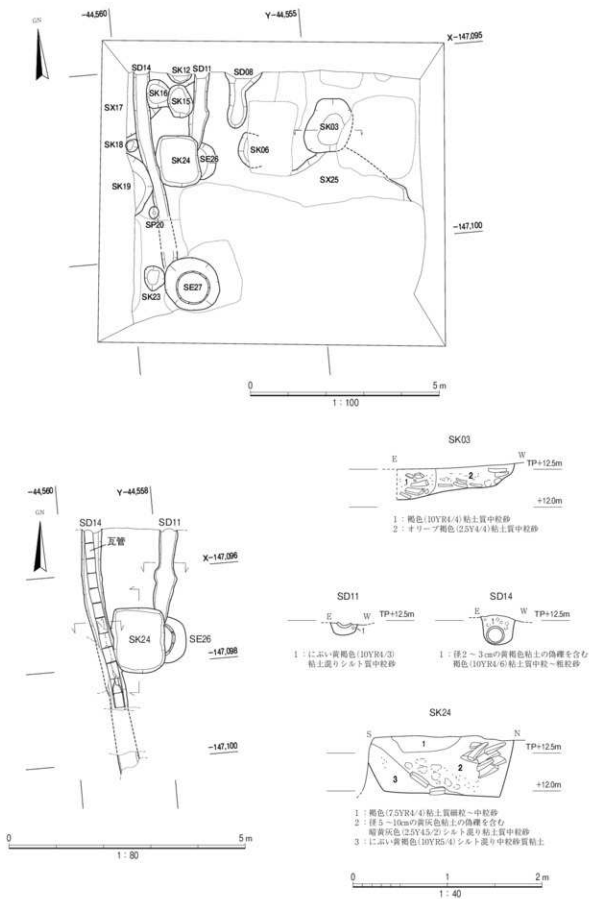


図5 第2a・2b層遺構平面・断面図

深さ0.05m前後、SD14は幅0.40～0.45m、深さ0.15～0.20mで、SD11・14には瓦管が敷設されていた。SD11は削平を受けており、瓦管もほとんどが破壊されていたが、SD14は瓦管が2個連結した状態で検出された(図5)。溝に沿って埋設し、暗渠として機能させたものとみられる。14(図6)は完形で出土した瓦管の一つで、長さ33.8cm、外径18.1cm、内径15.0cmである。SD11も同様の暗渠であったと考えられる。調査区から南の高所側は台地の平坦面にあたり、この場所では瓦生産のみならず、陶器やベンガラ、金属加工などの様々な工業生産に関わる遺物が廃棄された土壌を検出しており、近隣にこれらを製造する施設や職人らが居住した町屋があった可能性が高い[大阪市文化財協会2009]。SD11・14で認められた瓦管を敷設した暗渠の溝は、これら高所側にあったとみられる工房や町屋の区画から低所への排水を目的としたものであろう。

なお、暗渠に関わる遺物ではないが、SD11からは軒平瓦5が出土している(図6)。中心飾りが三葉系統の古式の均整唐草文である。

井戸SE26は土壌SK24に切られて、大半が失われている。井戸の復元径は1.00mで、井戸側は井戸瓦が組まれていた。

SK03・06・12・15・16・24は瓦などが廃棄された土壌で、そのうちSK06・12・15・16は深さが0.10～0.15mの浅い土壌である。SK03は南北1.42m、東西1.20m以上、深さ0.32m、SK24は南北1.37m、東西1.14m、深さ0.63mの土壌で、いずれも瓦がまとまって廃棄されていた。SK24からは肥前磁器染付碗1、平瓦10が出土した(図6)。1は高台に二重圏線を引き、見込みの圏線内側に一對の草文を配する。18世紀後葉のものであろう。10は平瓦で狭端面の左側に長方形の枠に「大坂瓦屋孫兵衛」の刻印がある。

SX17・25は不整形な落ち込みで、いずれも深さは0.10m以上である。SX17は北西方向に調査区外へ拡がる。SX17からは軒丸瓦11・13、軒平瓦6・7が出土した(図6)。このうち7・13は豊臣期の瓦であろう。11は八弁の菊丸瓦、13は直径16.0cm以上の三巴文の軒丸瓦で、圏線が認められる。6・7は中心飾りが三葉系統の均整唐草文でいずれも古式のものである。

#### b. 第2a層上面検出遺構

第2a層上面遺構として土壌SK18・19・23、井戸SE27を検出した(図5)。土壌からは瓦片・レンガ片が出土した。SE27は径1.48mの竪穴に井戸瓦によって径0.85mの井戸側を組んだもので、井戸内の埋土にはレンガや瓦・グリ石が廃棄されていた。いずれも近代以降の遺構とみられる。

#### c. その他の遺物

掘乱土中からは軒平瓦8・9が出土した(図6)。8は均整唐草文の軒平瓦で左側区に竹管による丸に「二」の刻印がある。9は中央飾りの部分に「山」字を配する。両側が欠損しているため、全体の文字は不明である。2～4は第2a層、12は第2b層から出土した(図6)。2・4は鍛冶に用いられた道具で、2は輪羽口である。外径7.1cm、孔径3.5cmで先端にガラス質の鉋滓が付着している。4は円盤状土製品で中央が穿孔されている。中央の高い部分は径6.5cmで、やや丸みを帯びる。用途は不明であるが、同じ遺物がWR08-1次調査で出土している。3は支脚形の瓦質製品で窯道具である。手づくね成形でユビナデにより仕上げられている。同じ遺物がWR08-1次調査で出土しており、おおむね18世紀

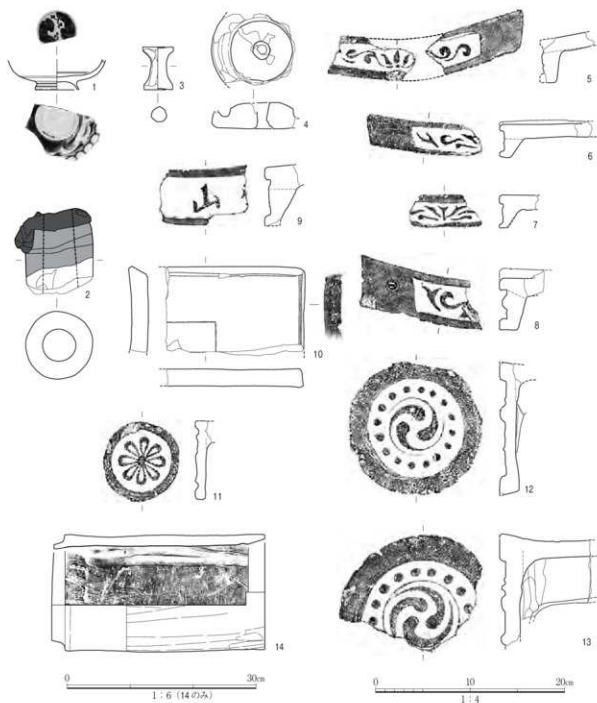


図6 出土遺物実測図

撥乱土(8・9)、第2a層(2~4)、第2b層(12)、SD11(5)、SD14(14)、SK24(1・10)、SX17(6・7・11・13)

後半～19世紀前半のものと思われる。軒丸瓦12は直径15.0cmの左巻き三巴文の軒丸瓦で珠文を16個巡らせている。

### 3)まとめ

調査地は徳川期の瓦生産を担った御用瓦師寺島家の請地内にあたる。第2b層上面では、19世紀前半とみられる瓦を廃棄した土壌や瓦管を使った暗渠が検出された。調査区の南約50mで行われたWR08

- 1次調査では、窯そのものは見つからなかったが、瓦窯道具や瓦範が出土していることから、近隣で瓦生産が行われていたとみられる。また、この調査では瓦生産のほか、陶器やベンガラ生産、鍛造・鍛冶・銅精錬・真鍮生産などの金属加工といった多種多様な産業に関する遺物も出土した。周辺には瓦生産だけでなく、こうした様々な製品の工房もあったようである。しかしながら、本調査では瓦が多量に出土したものの、生活用具や産業製品はほとんど出土しなかった。調査地が台地の縁辺にあたり斜面地に近いこともあり、もっぱら瓦の捨て場として利用されたと思われる。瓦管を使用した暗渠も調査地から南側の平坦地にあった町屋や工房の区画から引かれた排水路として利用されたのであろう。今回の調査では、瓦生産に関わる工房そのものは見つからなかったが、それらが近隣に存在することはほぼ確実であろう。今回の調査は小規模ではあったが、未発見の工房の場所を推定する手がかりを提供するものである。今後も引き続き周辺の調査を継続して、新たな知見を蓄積していくことが必要であろう。

#### 引用文献

- 大阪市史編纂所1984、『御用瓦師寺嶋家文書』大阪市史史料第13輯  
大阪市文化財協会2009、『瓦屋町遺跡発掘調査報告』  
佐古慶三1970、『古板大坂地図集成』、清文堂出版株式会社



中央区北新町16における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-2)報告書

調査個所 大阪市中央区北新町16  
調査面積 35㎡  
調査期間 平成29年6月12日～6月15日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、松本啓子





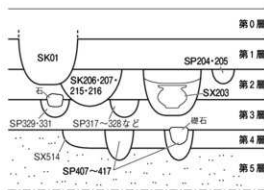


図3 地層と遺構の関係図

紀初頭までの遺構が見つかり、本層より上位から掘り込むSK01が18世紀後半の土壌であることから、本層は18世紀前半の地層と考えられる。

第2層：オリブ褐色(2.5Y4/4)礫・炭・焼土混りシルト質砂層(第2a層)、黄褐色(2.5Y5/4)礫・粘土混りシルト質粗粒砂層(第2b層)、浅黄色(2.5Y7/4)粘土質砂礫層(第2c層)からなる豊臣期～徳川期初頭の整地層と推定される。第2a層と第2b層は調査区全域に、第2c層は北西部に分布する。最大層厚は第2a層と第2b層が25cm、第2c層が8cmである。北西から第2c層、第2b層、第2a層の順に土を投入したようすが断面で観察された。本層上面では埋鉢SX203、土壘SK206・207・215・216、小穴SP204・205など、18世紀初頭までの遺構が見つかった。本層から土師器皿1のみが出土した。

第3層：黄褐色(2.5Y5/4)礫・粗粒～細粒砂・粘土混りシルトを主体とする整地層で、最大層厚は8cmである。薄層なので途切れてはいるものの、調査区全域に分布する。遺物は出土していないが豊臣期～徳川期初頭以前の整地層と推定される。本層の上面で豊臣期～徳川期初頭の穴SP317～336が見つかった。これらのうちSP329・331には石が据えられていた。

第4層：調査区南半の第5層上面の段SX514を埋める整地層で、にぶい黄褐色(10YR6/4)細粒砂混りシルト(第4c層)、にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土混り砂質礫(第4b層)、暗黄灰色(2.5Y4/2)細粒砂混り粘土質シルト(第4a層)の順に、北側から土を投入している。最大層厚は22cmである。

本層から平瓦が出土した。整地の時期は豊臣期～徳川期初頭以前と推定される。本層の上面で小穴SP407～417が見つかり、これらのうちSP409～411には礎石が据えられていた。

第5層：本層は洪積層で、いわゆる地山である。第5a～5d層に細分した。

第5a層は黄褐色(10YR5/6)礫質砂層で、シルト・細粒砂が帯状に挟まって堆積していた。水平に堆積しているが、南側上面が削平を受けて一段下がっている。最大層厚は40cmである。

第5b層はにぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト層で、最大層厚15cmで、調査区南西部に見られた。

第5c層以下は南壁と西壁を深掘りして断面で確認した。第5c層は淡黄色(2.5Y8/4)砂質礫層で、層厚は20～25cmである。両壁ともに見られた。

第5d層は明黄褐色(10YR7/6)粘土・シルト混り砂質礫層で、全域に堆積するとみられるもので、層厚は45cm以上ある。

第0層：近世後半～現代の地層である。本層と第1層層中までの約1.6mの間の地層は重機によって除去した。

第1層：火災後の整地層とみられる第1層は、オリブ褐色(2.5Y4/3)礫・炭・粘土・焼土混りシルト質細粒～粗粒砂層で、調査区全面に分布していた。層厚は10～20cmである。

本層から焼けた壁土、土師器皿、肥前磁器皿7、花崗岩の破片が出土した。下位の第2層上面で18

世紀初頭までの遺構が見つかり、本層より上位から掘り込むSK01が18世紀後半の土壌であることから、本層は18世紀前半の地層と考えられる。

第2層：オリブ褐色(2.5Y4/4)礫・炭・焼土混りシルト質砂層(第2a層)、黄褐色(2.5Y5/4)礫・粘土混りシルト質粗粒砂層(第2b層)、浅黄色(2.5Y7/4)粘土質砂礫層(第2c層)からなる豊臣期～徳川期初頭の整地層と推定される。第2a層と第2b層は調査区全域に、第2c層は北西部に分布する。最大層厚は第2a層と第2b層が25cm、第2c層が8cmである。北西から第2c層、第2b層、第2a層の順に土を投入したようすが断面で観察された。本層上面では埋鉢SX203、土壘SK206・207・215・216、小穴SP204・205など、18世紀初頭までの遺構が見つかった。本層から土師器皿1のみが出土した。

第3層：黄褐色(2.5Y5/4)礫・粗粒～細粒砂・粘土混りシルトを主体とする整地層で、最大層厚は8cmである。薄層なので途切れてはいるものの、調査区全域に分布する。遺物は出土していないが豊臣期～徳川期初頭以前の整地層と推定される。本層の上面で豊臣期～徳川期初頭の穴SP317～336が見つかった。これらのうちSP329・331には石が据えられていた。

第4層：調査区南半の第5層上面の段SX514を埋める整地層で、にぶい黄褐色(10YR6/4)細粒砂混りシルト(第4c層)、にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土混り砂質礫(第4b層)、暗黄灰色(2.5Y4/2)細粒砂混り粘土質シルト(第4a層)の順に、北側から土を投入している。最大層厚は22cmである。

本層から平瓦が出土した。整地の時期は豊臣期～徳川期初頭以前と推定される。本層の上面で小穴SP407～417が見つかり、これらのうちSP409～411には礎石が据えられていた。

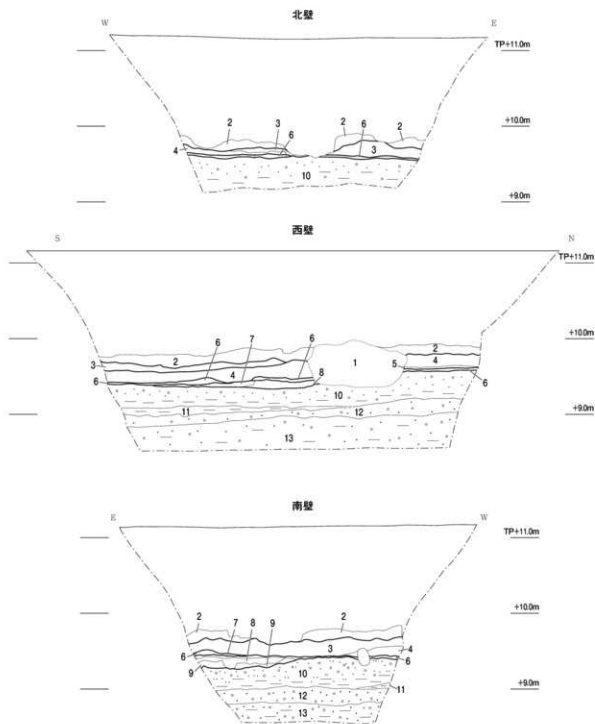
第5層：本層は洪積層で、いわゆる地山である。第5a～5d層に細分した。

第5a層は黄褐色(10YR5/6)礫質砂層で、シルト・細粒砂が帯状に挟まって堆積していた。水平に堆積しているが、南側上面が削平を受けて一段下がっている。最大層厚は40cmである。

第5b層はにぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト層で、最大層厚15cmで、調査区南西部に見られた。

第5c層以下は南壁と西壁を深掘りして断面で確認した。第5c層は淡黄色(2.5Y8/4)砂質礫層で、層厚は20～25cmである。両壁ともに見られた。

第5d層は明黄褐色(10YR7/6)粘土・シルト混り砂質礫層で、全域に堆積するとみられるもので、層厚は45cm以上ある。



(SK01)

1: 黒褐色(25Y3/1) 炭・焼土・礫・瓦混り砂質粘土

(第1層)

2: オリーブ褐色(25Y4/3) 礫・炭・粘土・焼土混りシルト質礫粒～粗粒砂

(第2層)

3: オリーブ褐色(25Y4/4) 礫・炭・焼土混りシルト質砂(第2a層)

4: 黄褐色(25Y5/4) 礫・粘土混りシルト質粗粒砂(第2b層)

5: 浅黄色(25Y7/4) 粘土質砂礫(第2c層)

(第3層)

6: 黄褐色(25Y5/4) 礫・粗粒～細粒砂・粘土混りシルト

(第4層)

7: 暗灰黄色(25Y4/2) 細粒砂混りシルト質粘土(第4a層)

8: にぶい黄色(25Y6/4) 粘土混り砂質礫(第4b層)

9: にぶい黄褐色(10YR6/4) 細粒砂混りシルト(第4c層)

(第5層)

10: 黄褐色(10YR5/6) シルト・細粒砂が帯状に挟まる礫質砂(第5a層)

11: にぶい黄色(25Y6/3) 粘土質シルト(第5b層)

12: 淡黄色(25Y8/4) 砂質礫(第5c層)

13: 明黄褐色(10YR7/6) 粘土・シルト混り砂質礫(第5d層)

0 2m  
1:50

図4 北壁・西壁・南壁地層断面図

ii) 遺構と遺物(図5～10、図版中・下)

今回の調査では、豊臣期～徳川期初頭以前の遺構面が3面と、徳川期前半の遺構面1面を調査した。

豊臣後期～徳川期初頭以前の遺構面は、第5層上面、第4層上面と第3層上面である。

第5層上面(図5)は、調査区中央部から南に約0.2m下がる段SX514があり、第4層で埋まっていた。南東隅でこの面はさらに0.2m以上下がり、ここも第4層で埋まっていた。

第4層上面(図6、図版中)では、小穴SP407～417が見つかった。

SP407・408・412～417は、長径が0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mほどの小穴で、これらは礎石が抜き取られた跡の穴と考えられる。SP409～411は、これらの小穴とほぼ同じ規模の小穴に礎石を据えたものである。礎石の大きさは、SP409が長さ・幅とも約30cm、高さ10cmの礎石、SP410が長さ25cm、幅15cm、高さ12cmで、上面が平坦になるように据えられていた。上面の高さはTP+9.5mで、調査区

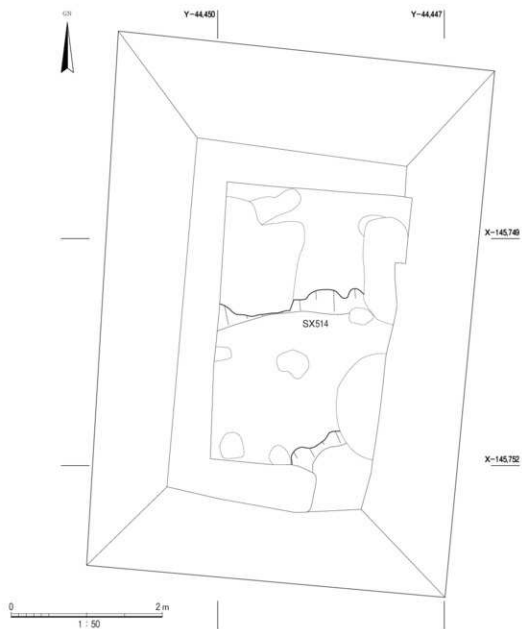


図5 第5層上面遺構平面図

北半の地面の高さに近い。石材は花崗岩である。

配置を見ると、SP407・409・410はほぼ一直線に並び、小穴間の距離は約0.7mと約1.2mである。この直線に直交して西側に、SP409から約1.0m離れてSP417が、また、SP410から約0.7m離れてSP415がある。これらの小穴は礎石建物の可能性がある。また、SP407・409・410を繋ぐ直線に並行して東に約0.9m離れたところに位置する直線上に、礎石SP411と小穴SP414・416がある。SP416・414の距離は約1.2mで、SP414・411の距離は約2.4mで、これら3個の小穴も組み合せて礎石柱列を構成していたものと考えられる。

SP407・408・413・415・416の埋土は、にぶい黄色(2.5Y6/3)炭・粘土・礫混り砂質シルトで、SP409～411の礎石据え土は、黄灰色(2.5Y6/1)砂・炭混り粘土質シルトである。遺物は、SP410の礎石の埋土から瓦片が出土し、SP407から鉄釘が出土した。

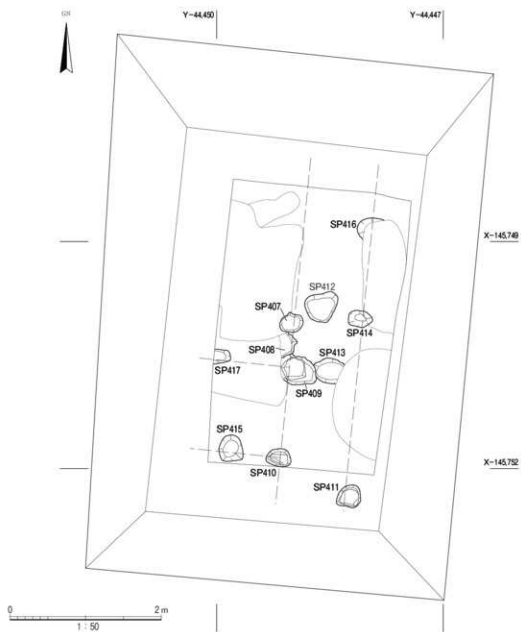


図6 第4層上面遺構平面図

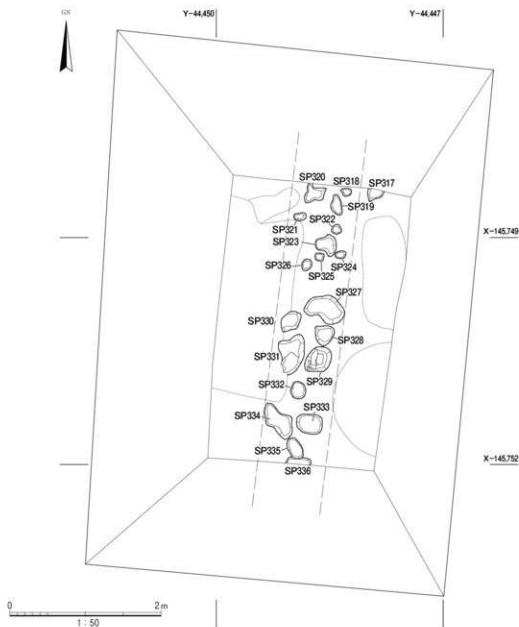


図7 第3層上面遺構平面図

第3層上面(図7、図版下)では、小穴SP317~336が見つかった。このうちSP329・331には長径20cmほどの石や瓦が埋土に入っていたが、石の上面が水平ではないので、さらに上に石が積まれた可能性が考えられた。これらの小穴はSP317を除き、約0.9mの幅で、南北方向の帯状に配置されている。形状は不整形なものから円形・楕円形のものなど様々で、規模も長径0.1~0.5m、深さも数cmのものから0.1m程のものまであって差が大きい。石の残るSP329・331の埋土は灰黄色(2.5Y6/2)炭・焼土混り粘土質シルトで、瓦片が多く混じる。他の小穴の埋土は、褐灰色(10YR5/1)礫・炭混り砂質シルトである。これらの状況からみて、幅約0.9mの南北方向の石敷きか石積みなどの配石施設があったものと推測された。また、この配石の方向は、少し北で東に振るが、第4層上面の構築物の配置を踏襲しているように思われる。

遺物はSP327・328・335から土師器皿、SP328・334から壁土、SP326から平瓦と中国景徳鎮窯産

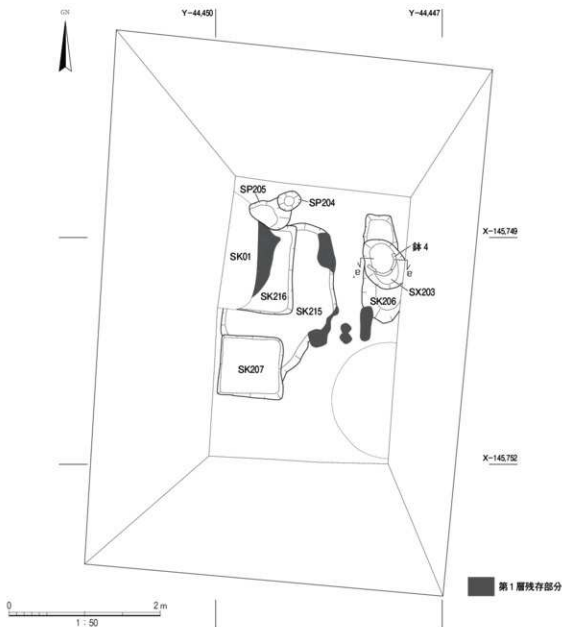


図8 第2層上面遺構平面図(調査開始前)

青花が出土した。いずれも破片で図化できなかったが、豊臣期のものと考えられる。

第2層上面(図8～10)は、17世紀前半～18世紀初頭の徳川期の遺構面である。

埋鉢SX203、土壇SK206・207・215・216、小穴SP204・205が見つかった。

埋鉢SX203は、東西約0.6m、南北約0.7mの楕円形の土壇を掘って、図10の4の鉢を据えたものである。第2層上面からの深さは約0.4mであるが、SX203の真上を東西約0.5m、南北約1.4mの細長い土壇状の掘り込み

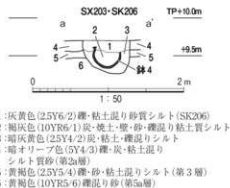


図9 SX203・SK206断面図

- 1: 灰黄色(2.5Y6/2)礫・粘土混り砂質シルト(SK206)
- 2: 暗灰色(10YR6/1)炭・焼土・礫・砂・礫混り粘土質シルト
- 3: 暗灰黄色(2.5Y4/2)炭・粘土・礫混りシルト
- 4: 暗オリーブ色(5Y4/3)礫・炭・粘土混りシルト質砂(第2層)
- 5: 黄褐色(2.5Y5/4)礫・砂・粘土混りシルト(第3層)
- 6: 黄褐色(10YR5/6)礫混り砂(第5a層)

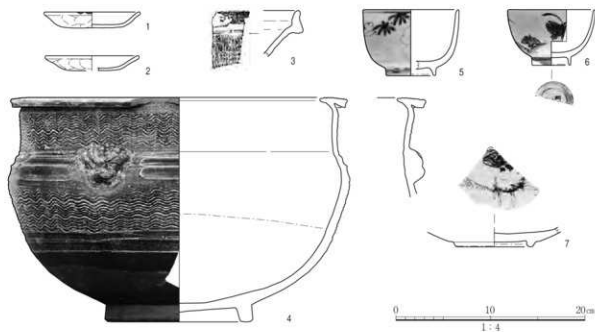


図10 出土遺物実測図  
第2層(1)、SK207(2・3・5・6)、SX203(4)、第1層(7)

SK206が覆っていた(図9-1)。SK206は鉢4の口縁部を壊しているので、鉢4の設置からある程度時間をおいてから掘られたものと考えた。

鉢4は肥前陶器で、成形後、体部外面上半と幅広い口縁部上面に柳描き波状文を施した後、表面のレリーフを肩部に貼り付け、赤紫～水色・藍色に変化する釉を掛けて仕上げたものである。SK206もSX203からも、鉢4以外に遺物は出土していない。

SK207は、東西約0.8m、南北約0.8m、深さ約0.2mの方形の土壌で、埋土は黄褐色(2.5Y5/3)炭・焼土・礫混り砂質シルトである。遺物は図10に示した土師器皿2・丹波焼播鉢3、肥前磁器染付碗5・6などの17世紀末～18世紀初頭の遺物が出土した。

SK215は、東西1.5m以上、南北2.2m以上、深さ約0.1mの浅い土壌で、埋土は灰黄色(2.5Y6/2)炭・焼土・粘土混り粗粒～細粒砂である。遺物は出土していない。

SK216は、東西約0.7m以上、南北約1.2m、深さ約0.2mの方形または長方形の土壌で、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂・礫混りシルトである。遺物は出土していない。

SP204は、東西約0.3m、南北0.25m、深さ約0.5mの小穴で、埋土はにぶい黄色(2.5Y6/3)砂・礫混りシルトである。壁土の破片が出土した。

SP205は、東西約0.6m、南北約0.4m、深さ約0.2mの小穴で、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂・礫混りシルトである。瓦と壁土の破片が出土した。

### 3)まとめ

今回の調査では、豊臣期～徳川期初頭以前の生活面3面と17世紀前半～18世紀初頭の徳川期の生活面を検出した。



豊臣期～徳川期初頭以前とした3面の生活面のうち、第4層上面で見つかった礎石建物や礎石柱列と、第3層上面の配石遺構は、あまり時期差がないと思われるが、詳細な時期の決め手となる遺物を欠いた。これらの遺構の時期や性格を解明するのは、周辺の調査成果を待って総合的に行わなければならない。

#### 引用参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「大坂城跡発掘調査(OS03-13)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)」、pp.69-102

大阪市文化財協会2003a、「OS86-35次およびその周辺の調査」：「大坂城跡Ⅵ」、pp.223-242

大阪市文化財協会2003b、「OS90-130次およびその91-32次調査」：「大坂城跡Ⅶ」、pp.211-222



中央区釣鐘町二丁目9・10における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-3)報告書

調査個所 中央区釣鐘町2丁目9・10  
調査面積 120㎡  
調査期間 平成29年7月6日～7月25日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明



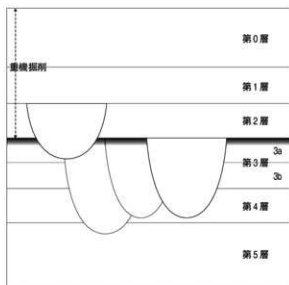


図3 地層と遺構の関係図

物の分布状況など、この地域の歴史の変遷の基礎資料を得ることを目的に実施した。

発掘調査は平成29年7月6日から開始した。調査地の東寄りで東西8m×南北15mの調査区を設け、土置場の確保のため南北2区に分けて掘削した。地表下1.0～1.4m前後の第2層までを重機により掘削した後、以下の層準において遺構・遺物の検出と写真・図面などによる記録作業を行い、同年7月25日に現地における全ての作業を終了した。

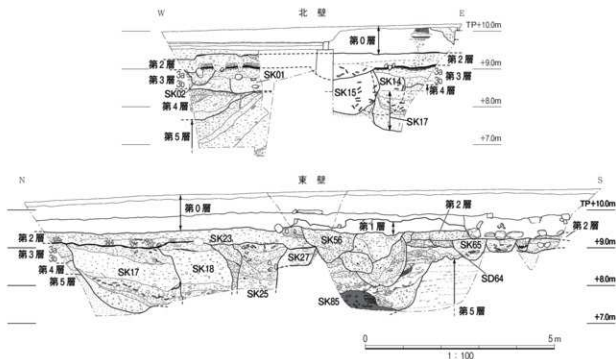
なお、方位は現場で記録した街区図を1/2,500 大阪市デジタル地図に合成することにより得た

世界測地系座標に基づき、標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4、図版1)

調査区の現況地形は、南東側が高くTP+10.5mで西へ0.2mの比高がある。また、北へは0.3m下がり、



- 第0層：コンクリート・埋・産・ガラスなどを含む建物解体後の現代地層  
 第1層：にじい・黄褐色(10YR5/4)～黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂層で黄褐色シルト塊・焼土塊・炭を多量に含む(近代・現代地層)  
 第2層：褐色(10YR4/4)含焼土塊・シルト質粗粒砂層(徳川期以降の埋地層)  
 第3層：にじい・黄色(2.5Y6/4)中粒砂層～灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細粒砂層で黄褐色シルト・粘土塊を含む(徳川期埋地層)上面は焼けている  
 浅黄色(7.5YR7/3)シルト質粗粒砂層(徳川期埋地層)  
 第4層：黄褐色(2.5Y5/3)細粒流りシルト質粗粒砂ないし明黄褐色(10YR6/6)細粒流り粗粒砂層で段丘構造層に由来する灰色ないし黄褐色粘土の塊を多量に含む(徳川期埋地層)  
 第5層：黄褐色(10YR5/8)ないし明黄褐色(10YR6/8)細粒流りシルト質中粒～粗粒砂層で段丘構造層に由来するシルト質粘土ないし粘土の塊を多量に含む(徳川期以前の埋地層)

図4 調査区地層断面図

北西部でTP+10.0mである。

第0～2層は重機で掘削したため、調査区の断面観察に基づいて記述する。

第0層：コンクリート・礫や金属、ガラスなどを多く含む現代の整地層で、層厚は50～70cmである。現代の建物解体後の整地層である。

第1層：黄褐色シルト偽礫や炭を多く含むにぶい黄褐色(10YR5/4)～黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂などからなる近代・現代の整地層で、層厚は40cm弱である。

第2層：褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層で、焼土偽礫を多量に含む整地層である。層厚は30～40cm程度である。調査区壁面の地層断面からSK56などは本層上面と判定されるが、平面的な調査は第3a層上面で行っている。これらの遺構から18世紀後葉以降の整地層と考えられるが詳細な年代は不明である。

第3層：上下に細分される。第3a層はにぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂層で黄褐色シルト・粘土偽礫を含む整地層である。層厚は20～30cmである。上面は焼けており享保9(1724)年の妙智焼けの被災面と推測された。調査で検出された遺構のほとんどは第3a層上面で一括して調査したが、一部で焼け面形成の前後に分けられ、前者からは17世紀末～18世紀前葉、後者からは18世紀前～中葉の遺物が出土する。第3b層は浅黄色(7.5YR7/3)シルト質粗粒砂層で黄褐色シルト・粘土偽礫を含む整地層である。層厚は20～30cmである。確認できた遺構は少ないがSK01・14・85およびSE80が第3b層上面である。SE80から17世紀後葉～末の遺物が出土した。

第4層：黄褐色(2.5Y5/3)細礫混りシルト質粗粒砂ないし明黄褐色(10YR6/6)細礫混り粗粒砂などで構成される整地層で、段丘構成層に由来する灰色ないし黄褐色粘土の偽礫を多量に含む。整地の方向は東から西へ向かい、最大80cmほどになる。北壁西部で基底がほぼ水平となることから下位の第5層とは別の地層として扱ったが、一連の地層である可能性もある。肥前磁器染付の細片が出土したことから、徳川期に属する地層である。

第5層：黄褐色(10YR5/8)ないし明黄褐色(10YR6/8)細礫混りシルト質中粒～粗粒砂などを主体とする整地層で、段丘構成層に由来するシルト質粘土ないし粘土の偽礫を多量に含む。東壁では明黄褐色細粒～中粒砂でシルトや粘土をほとんど含まない。層厚は160cm以上に達し、大規模な造成作業によるものである。徳川期以前の整地層と考えられるが、出土遺物はなく時期は不詳である。

#### ii) 遺構と遺物(図5・6、図版1・2)

本調査で見つかった遺構は全て徳川期のものである。以下、古い順に遺構・遺物を記述する。

##### a. 17世紀後葉～末の遺構

第3b層上面でSK01・14・85およびSE80を検出した。SK01・14・85は調査区の地層断面で層準を確認した。

SE80は調査区東南部に位置し、SD64やSK65に上部を壊されている。南北1.85mで深さは1.0m以上を確認した。掘形の埋土は漆喰や炭を含むオリーブ褐色中粒砂ないし灰色砂質シルト偽礫を含む明黄褐色中粒砂などである。内部には直径0.9mの井戸側を掘え、焼瓦を含むにぶい黄褐色粗粒砂で埋められていた。SE80の出土遺物には肥前磁器1・2、肥前陶器3、瀬戸美濃焼陶器4などがある。1は

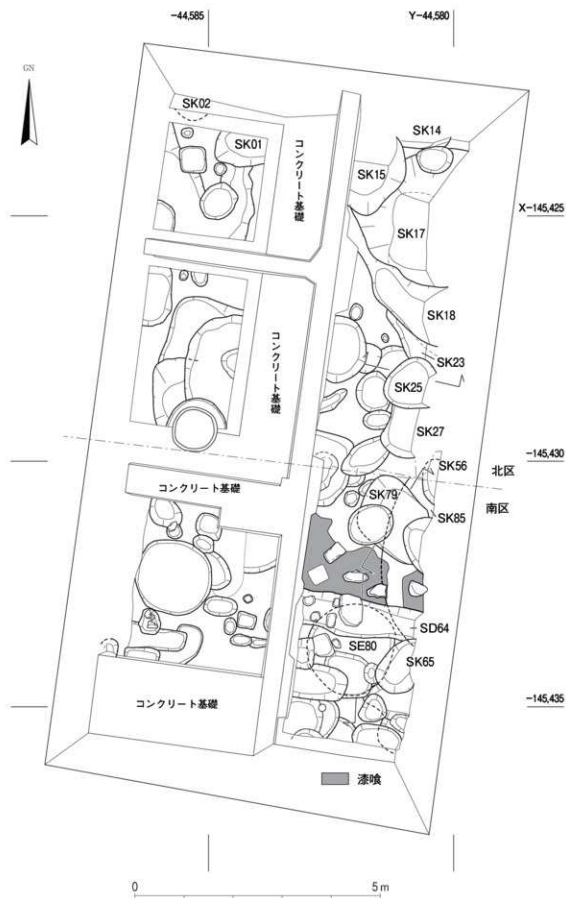


図5 遺構平面図



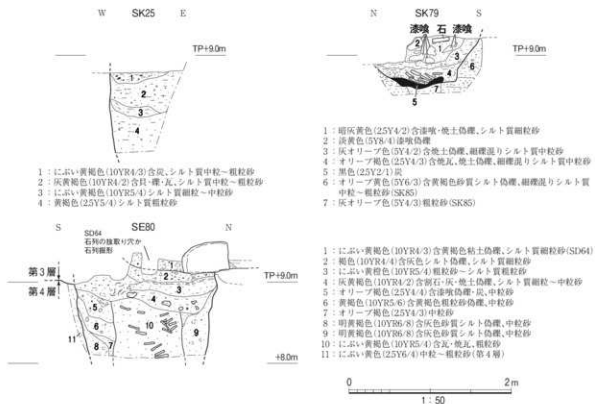


図6 遺構断面図

染付碗でやや長めの雨降文を施す。2は染付鉢で内外面に草花文で飾る。3は染付蓋で外面に草花文を施す。4は短い頸が直立する壺である。これらは17世紀後葉～末の遺物である。

#### b. 17世紀末～18世紀中葉の遺構

第3a層上面で多くの遺構を検出した。時期は18世紀前葉以前に収まるものと、18世紀中葉にかかるものがある。これらは同時に調査しているが、調査区壁面での地層断面観察では第3a層上面が焼ける以前のものと以後のものが有り、遺物から時期が判明した遺構では、前者は18世紀前葉以前、後者は中葉にかかる。このことから焼け面の形成時期が18世紀前葉で、享保9(1724)年の妙智焼けに該当するものと推測される。以下に各々の代表的な遺構を記す。

焼け面の形成以前の遺構にはSK17などがある。SK17は調査区の東北部にある大型の土壇で、南北長2.85m、深さ1.90mである。漆喰・炭・シルト礫層を多量に含む黄褐色ないしオリーブ褐色細礫混り粗粒砂で埋められていた。出土遺物は17世紀末～18世紀前葉に収まるものである。肥前磁器5～8、肥前陶器9、埴10、丹波焼11などがある。5・6は染付碗で、5の外面は、体部に四方博文と家紋風の花文を施し底部に「天明成化年製」を模した款をもつ。6の外面は体部に竹を描き底部には渦福銘を施している。7は白磁の仏飯器である。8は草花の周囲を魚子状に円文を充填した水滴である。9は大型の鉢、10は挿鉢、11は鉢である。

焼け面の形成以降の遺構にはSK25などがある。SK25はSK17の少し南にあり、南北1.40m、深さ1.10m以上を確認した。炭や瓦、礫を含む黄褐色から灰黄褐色のシルト質砂で埋められていた。出土遺物は18世紀前～中葉のものである。肥前磁器12～18、肥前陶器19・20、瀬戸美濃焼陶器21などがある。12～14は染付碗で12は草花文、13は菊花文、14は二重網目文を施して渦福銘をもつ。15は短めの雨

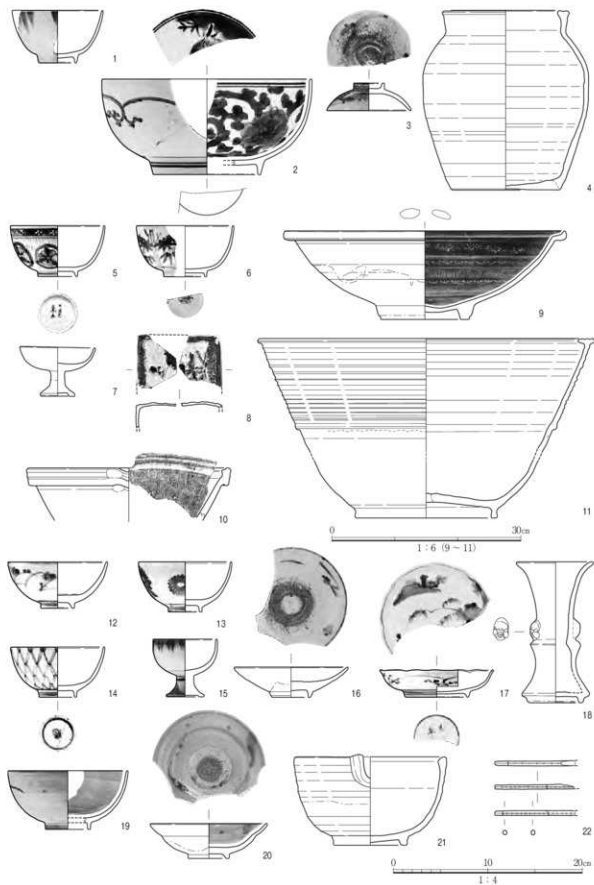


图7 出土遗物实测图  
SE80(1-4), SK17(5-11), SK25(12-22)

降文のある仏飯器である。16・17は染付皿で、16は見込みが蛇の目軸割ぎ、17は輪花皿で底部外面に「大明年製」銘がある。18は青磁の花生で人面の耳を一对付けている。19は刷毛目碗、20は折れ縁で見込みが蛇の目軸割ぎとなっている。21は片口鉢である。22は骨細工の棹桿である。

SK79も埋土には漆喰のほか焼土や焼瓦を多く含み、被災後の片付けによる廃棄土壌と考えられる。

既出のSD64はSE80の上位にある溝で、幅0.8～1.0m程度、深さ0.15～0.2m程度である。黄褐色粘土の偽礫を含むにぶい黄褐色シルト質細粒砂で埋められていた。溝の中央やや西寄りに南北長0.7m程の自然礫が据えられており、礫の垂直に近い面を溝の北縁に合わせていることから、この溝は同様の礫を東西に並べ据えた緑石の掘形と考えられる。緑石の北側には平らな面を上にして4個の礫を間をあけて並べ、その周囲は漆喰で覆われていた。漆喰上面から4個の礫の上面までは0.2m以下である。漆喰上面では水漬きの堆積物を認めなかったが、池のような施設の南岸に当る可能性がある。ただし、向かい合う岸は検出できなかった。

#### c. 18世紀後葉以降の遺構

調査区の中央付近にあるSK56は第2層上面と判定され、第3a層上面遺構より新しい18世紀後葉以降と考えられるが、遺物は出土していない。

### 3) まとめ

本調査地における調査成果を以下にまとめる。

調査地で見つかった第5層の盛土が豊臣期か徳川期かは特定できなかった。釣鐘町二丁目の調査はほかになく、今後も周辺における調査が必要である。

徳川期の遺構は17世紀後葉～末、17世紀末～18世紀中葉、それ以降の3時期に大別され、2番目のものは焼け面の形成以前と以降でさらに2分されることが確認された。

焼け面の時期は18世紀前葉に当り、妙智焼けによって形成されたと考えられる。

#### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大坂城跡発掘調査(OS07-13)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)」, pp.151-159

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城跡発掘調査(OS08-12)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」, pp.235-247

大阪市文化財協会2003、「OS87-33次およびその周辺の調査」:「大坂城跡Ⅵ」, pp.151-156

大阪文化財研究所2014、「大坂城跡Ⅶ」, pp.1-38

松尾信裕2004、「大坂城下町の町割」:「大坂城下町跡Ⅱ」, 大阪市文化財協会, pp.357-364



中央区大手前二丁目1-88における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-6)報告書

調査個所 大阪市中央区大手前2丁目1-88  
調査面積 約141㎡  
調査期間 平成29年9月19日～9月27日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、大庭重信、桑原武志

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城推定三ノ丸の西北部に位置しており(図1)、敷地内の東には大手前女子短期大学の校舎増築に伴って1981年に大手前女子大学が行った調査地が隣接している[大手前女子大学史学研究所・大坂城三の丸跡調査研究会1983、大手前女子大学史学研究所・大手前女子学園考古資料室1988]。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘調査を受け、遺跡の遺存状態が比較的良いと思われる範囲を、北半で南北11m、東西6m、南半で南北15m、東西5mの調査区を設定し(図2)、9月19日より調査を開始した。まず、重機により現代の盛土層および攪乱埋土の除去作業を行ったが、調査区北半は西側旧建物の基礎による攪乱がひどく、大坂城に係わる地層は調査区東壁付近にわずかに遺存していたのみであった。そのために北半は地層断面の記録を主体とし、平面での遺構・遺物の検出作業は南半を中心に行い、9月27日に現地におけるすべての作業を完了した。

なお、方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現地表の標高はTP+13.1~13.2mとほぼ平坦であり、現代の盛土層および攪乱埋土である第0層より下を第1~5層に区分した。調査は第0層を重機により除去し、以下、上町台地の段丘構成層である第5層上面までを層位毎に人力で掘削し、遺構検出作業を行った。

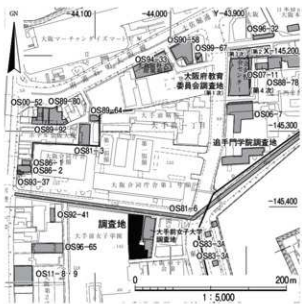


図1 調査地位置図

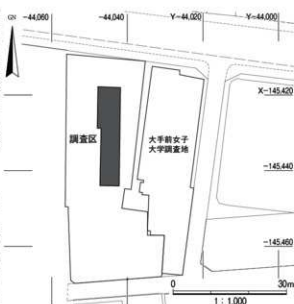


図2 調査区配置図

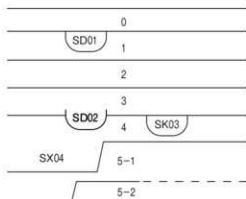


図3 地層と遺構の関係図

第1層：粘土偽礫を含む黒褐色(2.5Y3/2)中粒～粗粒砂からなる近代の盛土層で、煉瓦片・焼土・炭を多く含む。層厚は20～30cmある。上面でSD01を検出した。

第2層：粘土偽礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂～礫からなる盛土層で、層厚は20～30cmある。17世紀後半代の陶磁器を含むが遺物量が少なく、地層の年代を示すかどうかは不明である。

第3層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒～中粒砂からなり、炭粒を含む。上下の地層と比べて暗色化している

ことから古土壌と判断した。層厚は10～30cmあり、北へいくほど層厚が厚い。17世紀中葉の陶磁器類を含み、肥前磁器染付碗3、朝鮮半島産白磁碗4、丹波焼大平鉢6、およびミニチュア羽釜5を図化した(図5)。本層内から掘り込まれたSD02を検出した。

第4層：砂質シルト～粘土偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂～礫を主体とした盛土層で、調査区北半の落込みSX04を埋めるとともに、標高の高い南部も薄く覆う。北半では下部ほど偽礫のサイズが大きく、後述する第5-2層に由来する黄橙色シルト質粘土偽礫が主体を占める。層厚は北半で90～140cm、南半で20～40cmある。肥前磁器を含む17世紀前葉の陶磁器類が出土し、丹波焼播鉢7、備前焼播鉢8を図化した(図5)。

第5層：上町台地の段丘構成層で、第5-1層と第5-2層に区分した。上部の第5-1層は浅黄色(2.5Y7/3)粗粒～極粗粒砂からなり、ラミナ構造が認められる。最も高い南半では上面がTP+11.9mである。下部の第5-2層は黄橙色(10YR7/8)シルト質粘土からなり、調査区北半で部分的に確認した。上面の標高はTP+10.3mあり、北側で第5-1層によって削られ段差をなす。

#### ii) 遺構と遺物(図4・5)

SD01 調査区南部の第1層上面で検出した二段落ちの南北溝である。一段目は東辺のみ確認し幅2.1m以上、深さ0.15m、二段目は幅1.5m、深さ0.4mある。調査区南端から北に9.0m伸びたのち、東に直角に曲がる。煉瓦の細片を多く含む近代の遺構である。

SD02 調査区中央の第3層下面で検出した東西溝で、北側は攪乱により残っていないが、北端で立上がりを確認したことから溝と判断した。幅0.5m以上、深さ0.2mあり、埋土は第3層と共通し、第3層中から掘り込まれたものと考えられる。17世紀中葉の軟質施軸緑釉陶器杯1、中国産青花皿2が出土した(図5)。

SK03 調査区南部の第4層上面で検出した土壇で、南北3.1m、東西1.3m以上、深さ0.1m前後ある。埋土はシルト偽礫を含むオリブ褐色細粒砂～礫で、17世紀前半頃の肥前陶器皿片が出土した。

SX04 第5層上面で検出した調査区北半に広がる大規模な落込みで、第5層を掘り込んで南から北へ約1.2m急に下がる。埋土は第4層とした盛土層で、基底に第5-2層に由来する大型の黄橙色シルト質粘土の偽礫が点在しており、段丘構成層を深く掘削した際に生じた土で埋めていたことがわかる。落込みは調査区外北側に及んでいるため規模は不明であるが、埋土からは上述した17世紀前葉の



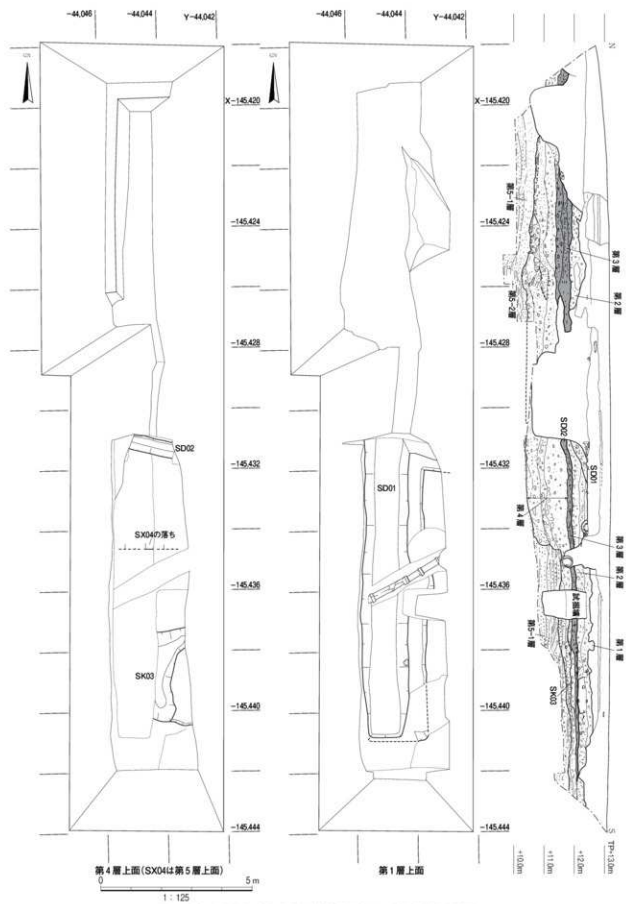


図4 第4層上面・第1層上面遺構平面および東壁地層断面図

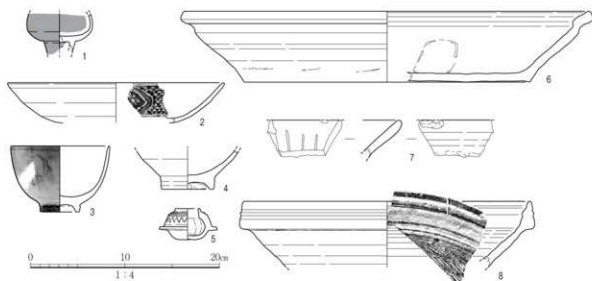


図5 出土遺物実測図

SD02(1・2)、第3層(3～6)、第4層(7・8)

陶磁器類が出土していることから、時期的に徳川期大坂城再築時の造成工事に伴うものの可能性がある。

### 3) まとめ

今回の調査では、遺構の遺存状態が良くなかったが、調査区南半の地山が高く、北半で17世紀前葉の遺物を含む大規模な落込みSX04を検出した。時期から徳川期大坂城再築時の造成工事に伴う可能性があるが、単独の掘込みであるのか、谷などの低い旧地形を加工・埋め戻したものは調査範囲内では明らかにできず、今後の周辺調査で改めて検討していく必要がある。

### 参考文献

- 大手前女子大学史学研究所・大坂城三の丸跡調査研究会1983、「大坂城三の丸跡Ⅱ」  
 大手前女子大学史学研究所・大手前女子学園考古資料室1988、「大坂城三の丸跡Ⅲ」

中央区船越町二丁目52-2における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-7)報告書

調査個所 中央区船越町2丁目52-2  
調査面積 112㎡  
調査期間 平成29年10月11日～10月26日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、南 秀雄、桑原武志



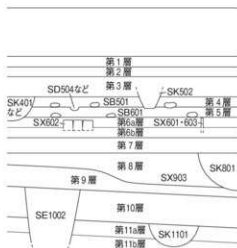


図3 地層と遺構の関係図

第4層：妙知焼(1724年)と推定される焼土層で層厚は5～10cmである。上面でSK401などを検出した。第4層から口紅の肥前磁器白磁小碗15、同染付碗16・17が出土した(図10)。

第5層：黄褐色(10YR5/6)中粒～粗粒砂層の盛土で層厚は5～15cmである。本層上面に焼失したSB501などがあつた。第5層から瀬戸美濃焼天目碗13、肥前磁器染付碗14が出土した。

i) 層序(図3～5)

現地表の標高はTP+7.7～7.8mである。旧地形の復元によれば、調査地の段丘構成層上面の高さはTP+2～4mの間にある([大阪文化財研究所2014]の図4)。

第1層：第2次世界大戦の空襲時と推測される焼土層で層厚は5cmである。

第2層：黄褐色(10YR5/6)中粒～粗粒砂層の盛土で層厚は10～15cmである。

第3層：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質中粒砂層の上層と、焼土混りオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層の下層から成る盛土である。層厚は25～30cmである。

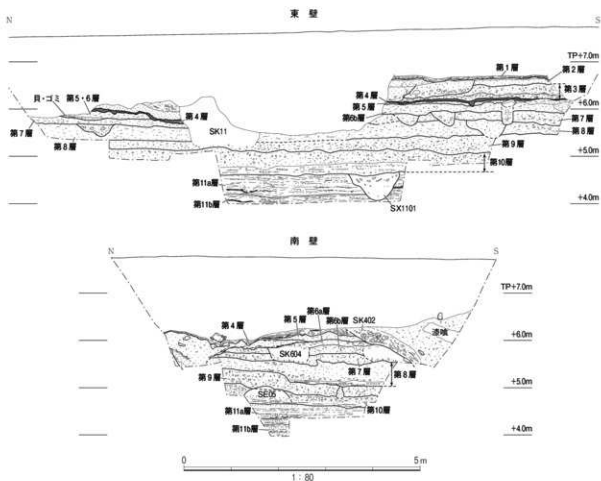


図4 東壁・南壁地層断面図

第6層：シルト偽礫混り暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒砂層の第6a層と、炭混りオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層の第6b層から成る盛土で、層厚は15～30cmである。上面にSB601があった。第6層から瀬戸美濃焼灯皿11、肥前磁器染付碗12が出土した(図7)。第6層は17世紀後葉と推定される。

第7層：シルト偽礫混りオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層で層厚は15～25cmである。畠の作土と推定される。第7層から土師器皿9、中国産青花皿10が出土した。第7層は17世紀中葉と推定される。

第8層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂層の盛土で、大部分は作土化されている。層厚は25～50cmである。南西のみは下部に厚さ10cm以下の中粒～粗粒砂の水成層があった。上面でSK801を検出した。本層の形成により調査区は西への傾斜が解消され、ほぼ平らになった。大坂ノ陣の焼土層はないが、地層の前後関係から第8層は17世紀前半の徳川期である可能性が高い。

第9層：シルト偽礫混り暗オリーブ色(5Y5/3)中粒～粗粒砂層の盛土で層厚は20～35cmである。少量の炭や焼土片が混じる。上面でSK901などを検出した。第9層から土師器皿4、五弁の中国産青磁皿5が出土した。第9層は豊臣後期と推定される。

第10層：シルト偽礫混り明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質中粒～粗粒砂層で、下部に細粒～中粒砂層の水成層を含む。層厚は20～55cmである。段丘構成層をおもに母材とし、1598(慶長3)年の盛土と推定される。上面でSE1002を検出した。

第11層：中粒砂ないしはシルト層で、にぶい黄色(2.5Y6/3)の第11a層と灰白色(7.5Y7/1)の第11b層から成る。水成層が主体を占め、炭層を含む。層厚は第11a層で35cm、第11b層で20cm以上である。豊臣前期以前の地層である。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第11層～第9層上面(図5～7)

おもに発見されたのは豊臣期の遺構で、第11a・b層は南北4m、東西2m、第10～9層は南北9m、東西4mのみの調査である。遺構の密度はさほど高くなく、建物跡は検出していない。

第11a層上面でSK1101を検出した(図5左)。SK1101は東壁地層断面(図4)で南北1.10m、深さ0.55mである。埋土はシルト偽礫混り明黄褐色(10YR6/6)中粒砂であった。SK1101は豊臣前期の遺構である。他にも第11b層上面で埋土に炭が混じる不定形な窪みを掘削したが、断面でうまく把握できず、遺構でないかもしれない。この窪みから中国産青磁碗1が出土した(図7)。窪みや第11b層以下は大坂本願寺期まで遡る可能性もある。

第10層上面と第9層上面は豊臣後期の遺構面である(図5右)。第10層上面でSE1002を検出した。SE1002は東西約2.2m、南北2m以上の隅丸方形で、深さ1m以上である。中粒～粗粒砂やシルト偽礫などで埋められている(図6)。SE1002からは肥前陶器碗2・皿3が出土し(図7)、豊臣後期の井戸である。SE1002の南のSK1001は直径0.95～1.05mの円形で、深さは0.35mである。

第9層上面のSX903は傾斜を反映した南西方向への落込みで、調査区内の比高は約0.3mである。SK901は直径0.50mの円形で、深さ0.20mである。北側のSK902は全形が不明で、その南西にいくつ

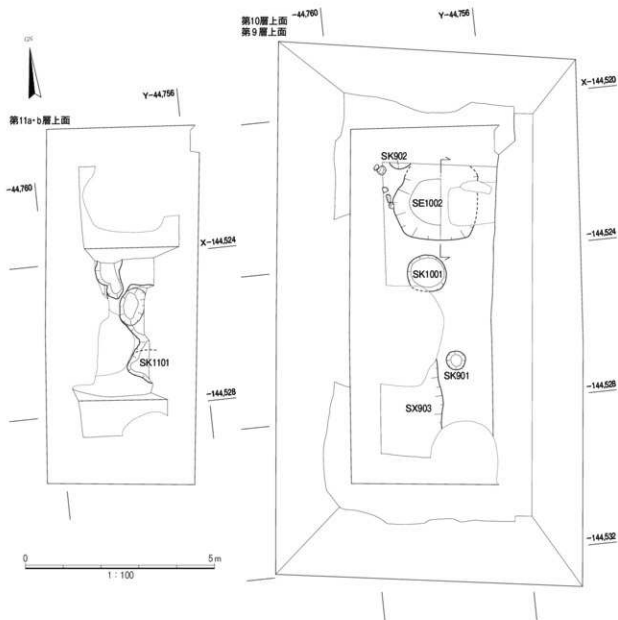


図5 第11～9層上面遺構平面図

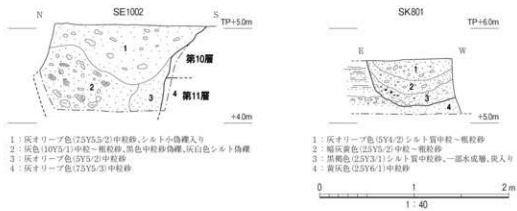


図6 SE1002・SK801断面図



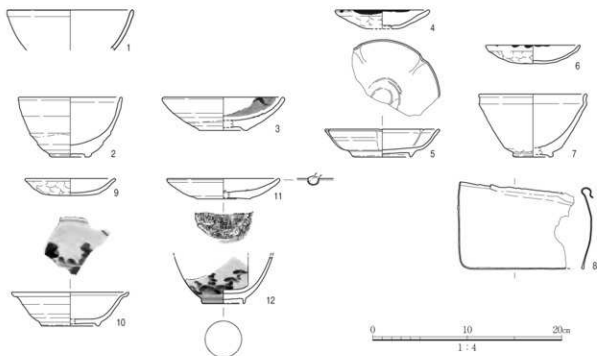


図7 出土遺物(1)

第11層(1)、SE1002(2・3)、第9層(4・5)、SK801(6～8)、第7層(9・10)、第6層(11・12)

かの石があった。

b. 第8層～第6層上面(図6～8)

大坂夏ノ陣(1615年)以降のおもに17世紀代の遺構面である。

第8層上面でSK801を検出した(図8左)。SK801は北や西に広がり、深さ0.50mである(埋土は図6)。SK801からは土師器皿6、肥前陶器天目碗7、用途不明の板状銅製品8が出土した。SK801は17世紀中葉と推定される。第8層上面～第7層上面ではほかに目立った遺構がなく、少量の石も孤立したり小さく、礎石とはし難い。17世紀前半～中葉の間は、おもに畠になっていたと考えられる。

第6層上面には礎石建物SB605、SX601～603があった(図8右)。SB605はプランが判然としないが、礎石の分布から調査区のほぼ全域に広がっていたと推測する。SB605の時期は、第6層の出土遺物と第5層上面のSB501との関係から、17世紀後葉前後と推定される。

SX601～603は、塼を列状に立てた遺構である。SX601・602は塼のみで1段1重、SX603は割れた塼と平瓦を交え、場所によって2～3重になっていた。掘形が見えず、第6層を盛土する過程で作られたと推定され、SB605が建っていたときは土中に埋まり見えていない。礎石配置との関係はよくわからないが、SB605と関連する遺構で、広義の塼列建物の範疇であろう。SX601～603は南北9.1～9.2m、東西4m以上である。

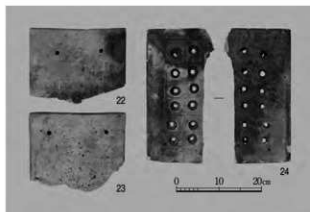


写真1 塼

SX601(22)、SX602(23)、第6層(24)

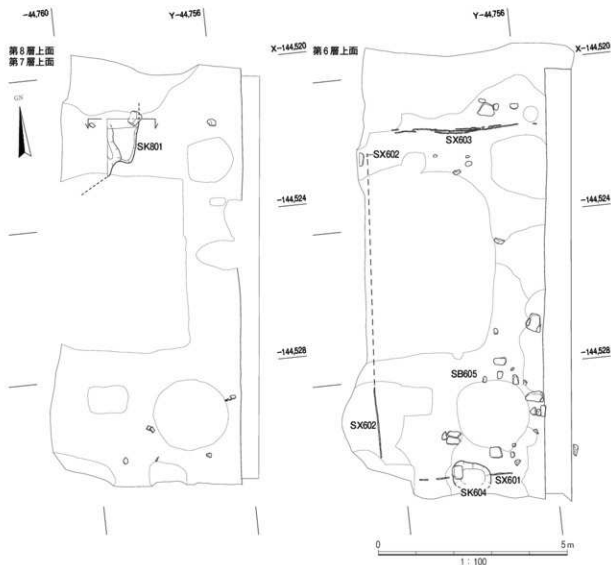


図8 第8～6層上面遺構平面図

22・23は使用された埴で(写真1)、22は幅22.4cm、厚さ1.7～1.9cm、23は幅22.3cm、厚さ1.9～2.0cmである。なまこ壁に使うものか、止めるための釘孔がある。24は第6層出土の埴で、長さ30.7cm、厚さ2.2～2.6cmである。方眼に割付けて12個以上の孔があげられており、用途はわからない。

c. 第5層～第4層上面(図9・10)

18世紀前葉を主とする遺構面である。第4層上面よりさらに上から掘られた遺構は、二桁の番号を付した。

SB501は第5層上面の礎石建物で(図9)、焼失して第4層の焼土層(妙知焼)に覆われていた。全形は明瞭でないが、礎石は南側に多い。

SK502は、部屋の角に据えられた丹波焼甕である。北西・南西・東の石は甕を固定するため、囲みの板や壁の痕跡と思われる炭化物の筋が残っていた(図版2頁下段)。囲みは南北0.60m、東西0.55mで、内側の一部に敷石があった。また、SD503・504・506のような建物方向と合致する直線的な細かい溝も、建物と関連するものであろう。

SK401・402は第4層形成後の火事の片付けなどに関する土壌で、埋土に多くの焼土を含む。

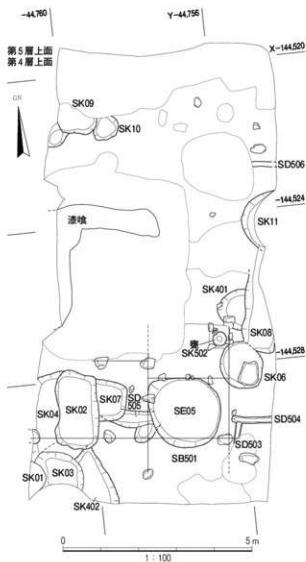


図9 第5・4層上面遺構平面図

SK402より新しいSK03からは、瀬戸美濃焼陶器碗18、肥前磁器染付碗19・皿20、関西系陶器碗21が出土し(図10)、18世紀後葉と推定される。

### 3) まとめ

今回の調査では、豊臣前期・後期の遺構から、大坂ノ陣後の遺構の希薄な時期を経て、17世紀後葉以降、敷地奥まで建物で占められるまでを連続して追うことができた。今回は到達していないが、豊臣前期より古い中世以前の遺構面が存在した可能性が高い。調査地から北や西にかけてはとくに豊臣期以前の地層や遺構面が深く重畳しており、大きな成果が期待できる。

### 引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「第三章第6～8節」：「大坂城跡」Ⅶ、pp.151～174

大阪文化財研究所2014、「大坂城跡」ⅩⅦ

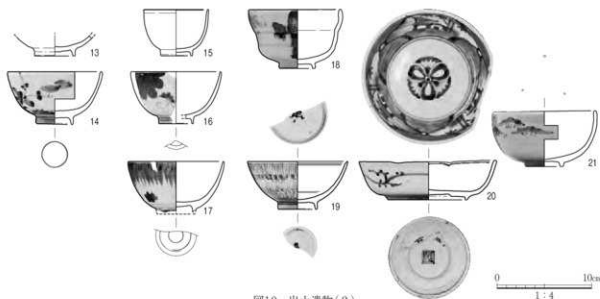


図10 出土遺物(2)

第5層(13・14)、第4層(15～17)、SK03(18～21)



中央区久宝寺町四丁目62他における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-8)報告書

調査個所 大阪市中央区内久宝寺町4丁目62他  
調査面積 475㎡  
調査期間 平成29年10月16日～11月10日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の西斜面上に立地し、付近は台地北部の脊梁部付近まで深く下刻している龍造寺谷とその支谷によって複雑な古地形が推測されている地域である。調査地の北にある和泉町とその北の農人橋町の境付近を東西に延びている龍造寺谷に対して、これまでの知見からは、調査地の南東400m弱の安堂寺町二丁目付近に谷頭が想定される「南大江谷」が調査地中央付近を通過して北へ延び、龍造寺谷へ合流すると推測されている[趙哲済ほか2013]。

付近ではこれまで多くの地点が調査され(図1)、豊臣期～徳川期の各種遺構が見つかっている。西100mのOS07-10次調査地では豊臣後期～徳川初期の土塋や井戸が[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]、北西150mほどのOS10-4次調査地では豊臣前期の城下町造成から18世紀前業に至る各段階の整地と遺構面[大阪文化財研究所2012a]、OS12-36次調査地では徳川期の17世紀中頃～後半の建物や土塋[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]、OS11-11次調査地では18世紀中頃と推定された背割下水の石積み[大阪文化財研究所2012b]などが見つかっている。南西100m内外のOS90-109次調査地では礎石建物や掘立柱塋[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991]、OS91-73次調査地では石垣など18世紀の遺構が見つかっている[大阪市文化財協会2003a]。また、北東100mの南大江小学校内に当るOS02-8次調査地の豊臣期の瓦窯は豊臣氏大坂城へ瓦を供給したものと考えられ、特筆すべき発見である[大阪市文化財協会2003b]。

調査地では、大阪市教育委員会による試掘調査で地表下約0.4m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面が検出されたことから発掘調査を実施することとなった。古地形の検証、豊臣期から徳川期にわたる遺構の確認とその性格を明らかにすることなどが主たる目的である。

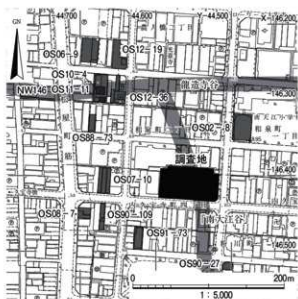


図1 調査地位置図

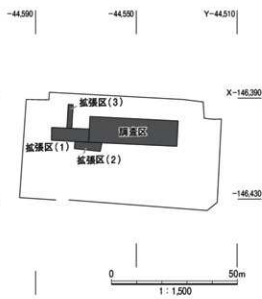


図2 調査区配置図

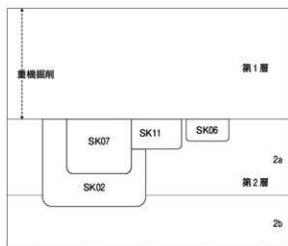


図3 地層と遺構の関係図

調査は平成29年10月16日から開始した。当初計画のとおり東西35m、南北10mの調査区を設定し、地表から0.3~0.4m下の第2層(地山層)上面までを重機で掘削した。その結果、もとあった建物基礎の撤去工事等により、調査地東半の大部分が深さ2m以上に及び攪乱されていることが判明した。そこで、遺構の広がりを確認するため、大阪市教育委員会と協議のうえ、西へ拡張区(1)、北へ拡張区(3)を設定したが、いずれも調査地の外縁に近い部分は建物基礎により同様の状況であった。一方、調査地西部南側では後述するよう

に近世の遺構が比較的残っており、南へ拡張区(2)を設定した。以上の結果、調査区は全体で475mとなった(図2)。

その後、第2層上面で遺構・遺物の検出と写真・図面などによる記録作業を行い、同年11月10日に機材を撤収し、現地における全ての作業を終了した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査区の周辺地形は西へ向かって低くなっている。調査地東南角に当る交差点はTP+10.3mで、西

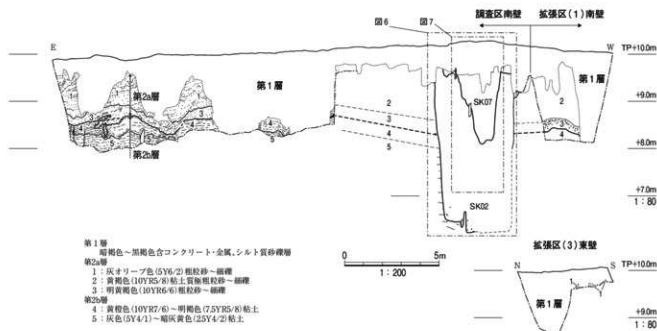


図4 調査区地層断面図



へ200mに至る松屋町筋との交差点ではTP+5.8mである。また、同じく北へ160m付近の南大江小学校西北角の交差点ではTP+8.2mで、緩やかに下っている。一方、調査地内の現況地形はTP+10.0m前後で概ね平坦なため、周囲の敷地境とは段差を生じている。

調査で確認された地層は、大別して2層であった。第1層が現代の地層、第2層は地山層であり、調査の対象とした近世の地層は遺構埋土中でのみ確認された。以下に、地層の詳細を記す。

第1層：暗褐色～黒褐色シルト質砂礫層で、コンクリートや金属片などのほか第2層の地山偽礫も大量に含む。旧建物を解体・除去した際に整地された現代の攪乱層であるが、近世の遺物も多く含んでいる。層厚は約30～190cmを確認したが、さらに深い地点もあった。本層は重機で掘削した。

第2層は第2a・2b層の上下2層に細分された。

第2a層：調査地東部では上部が灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒砂～細礫層で、西部では黄褐色(10YR5/8)粘土質極粗粒砂～細礫層となっている。いずれも下部は明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂～細礫層である。合わせて最大層厚150cmを確認した。本層上面で、調査区西部を中心に徳川期の遺構を検出した。

第2b層：上部は黄橙色(10YR7/6)～明褐色(7.5YR5/8)粘土層で第2a層とは明瞭な不整合となる。下部は灰色(5Y4/1)～暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土層である。合わせて層厚は80cm以上を確認した。上町層内の海成粘土層である。

一部は攪乱されているものの、第2層上面の標高からは、調査区内を南北に通る谷は見られない。また、第2a・2b層の境は東端でTP+8.5m、西端でTP+8.4mである。途中で第2a層の下刻によって凹凸はあるものの、明瞭な傾斜を認めるには至らない。こうした点から、従来想定されてきた「南大江谷」の谷筋については、さらに古地形のデータを集めて再考する必要がある。

## ii) 遺構と遺物(図5～9)

遺構は全て第2層上面で検出し、特に調査区西部から拡張区(2)にかかる範囲に集中していた(図5)。17世紀末～19世紀前葉の徳川期に属する。以下、出土遺物と遺構の重なりから判断して、古い順に記す。

SK02はT字状の平面形を呈する大型の土壇である(図6)。東側が南北4.3m、東西2.5m程度となる四角形で、ほぼ中央から直交して東西4.0m、南北2.2m程度の四角形が西側に合わさった形状である。壁面は垂直に近い立ち上がりで、深さは東側で約3.1mとなるが、直交する部分との境界付近の床面を高さ0.45m程度の畔状に削り出している。断面の確認のため、埋土下半は重機により掘削したが、観察中に埋土が崩落する危険が生じたため、記録は一部にとどまり、断面図中の点線部の床面はおおむね平坦と思われるが未確認である。埋土は第2層を主たる母材にした灰オリーブ(5Y5/2)ないしにぶい黄褐色(2.5Y6/3)細礫混りシルト質極粗粒砂～極粗粒砂層で、シルトや粘土の偽礫を大量に含んでいる。上半の観察からは、西から東へ向かって一連の作業で埋められている。

こうした平面形と深さの特徴からSK02は穴蔵と推測される。東側が室で、西側の直交部が通路であろうか。境の床面に削り出された畔は、ここに扉を設置した可能性が考えられる。通路部分の北壁は検出面からの深さ0.25m程度で平坦面を作っている。後述のSK07によって壊されているが、南壁

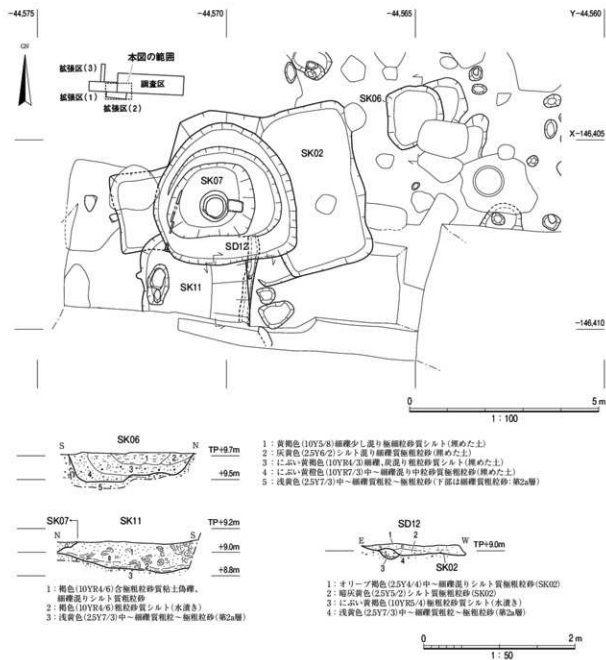


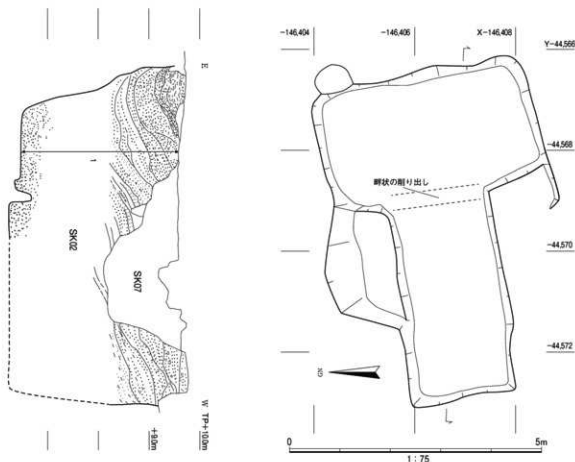
図5 調査区西部・拡張区(2)遺構平面・断面図



写真1 SK11断面(西から)



写真2 SK06断面(東から)



1 : 灰オリーブ(SY5/2)をいしにぶい・黄褐色(25Y6/3)含シルト・粘土角礫、  
細礫混りシルト質粗粒砂層～極粗粒砂

図6 SK02平面・断面図

でも同じような平坦面を作っていた可能性がある。通路に柵を作ったとすると床面から高すぎ、天井の架設に係る構造とも考えられるが、確認できなかった。

SK02の出土遺物には土師器皿、備前焼播鉢1、丹波焼播鉢・大平鉢、肥前陶器皿2、肥前磁器碗3・4・皿・壺や瓦の細片がある。1は口縁部が帯状に直立する播鉢で片口の一部が残っている。2は溝縁皿である。3は青緑染付碗で、4はその筒型碗である。これらは17世紀中頃のものでSK02の廃絶時期の上限を示すが、後述のように17世紀末に作られたSK07がSK02の掘削範囲を再利用したと考えられ、両者の時期がもっと近かった可能性もある。

SD12は幅0.25m、長さ2.4mの細い溝である(図5)。深さは0.15mで、水漬きのにぶい黄褐色(10YR5/4)極粗粒砂質シルト層が堆積していたため、排水などの機能があったとみられるが、周囲の土壌との関係は不明である。出土遺物はなく、重なりからはSK11に先行するもののSK02との先後関係は不明であった。

SK11は東西2.85m、深さ0.4mの土壌で、極粗粒砂質粘土の偽礫を多量に含む褐色(10YR4/6)細礫混りシルト質粗粒砂層で埋められていたが、埋土の基底には機能時堆積層の褐色(10YR4/6)粗粒砂質シルト層が水漬きで堆積していた(図5・写真1)。図化していないが土師器皿、肥前陶器碗・皿、曲物等の細片が出土した。遺構の重なりからはSK02に後出するため、徳川期に属するものである。

SK07は東西3.8m、南北3.8m、深さ1.5mの掘形に備前焼の大甕を据えた水溜である(図7)。掘形

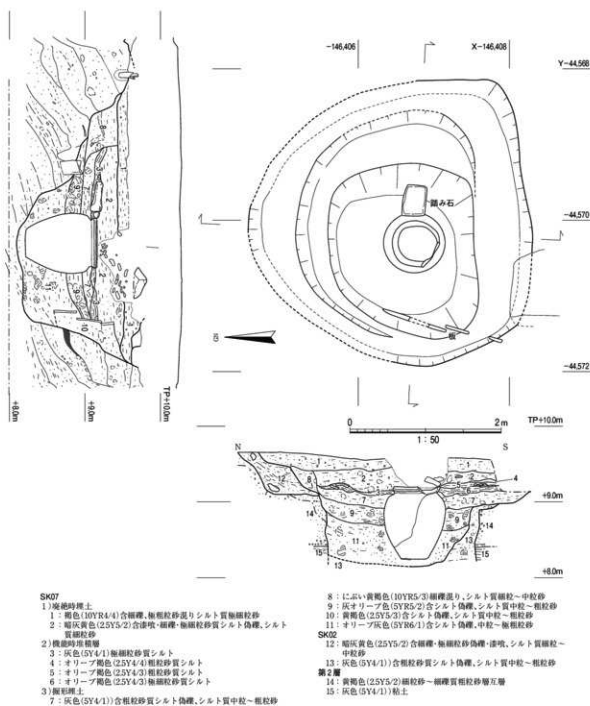


図7 SK07平面・断面図

はSK02の埋土内を再掘削したもので、基盤層としては軟弱であるが大甕を設置するのに特段の地業は施していない。掘形内に大甕を据え、一度は口縁部より高い位置まで埋めた後(図7-埋土8～11)、再度内側を掘り返して大甕頭部までを埋め戻しているが(図7-埋土7)、これは大甕の口縁部周囲を水平にならすための処置と思われる。埋土8～11の過程で、西側には板を並べて土留めにしていた。

大甕は口縁部が検出面よりも0.45m低い位置にあり、東側に接して、長さ45cmの板状に加工した豊島石の踏み石を据えていた。口縁部の周囲は最大厚9cmの灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルトないしオリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒砂質シルトで覆われており、機能時堆積層である。南部の一部では

表面に瓦片を敷き、さらにオリーブ褐色(2.5Y4/3~4)粗粒砂質シルトが溜まっていた。瓦片はシルトを固定して甕への流入を防ぐためとも考えられるが、効果は不明である。

出土遺物には肥前磁器染付小皿5、同碗6、ミニチュアの魚を象った肥前磁器7等がある。これらは機能時堆積層から出土し、同層の他の出土遺物も瓦質土器火入、肥前陶器碗・皿、肥前磁器鉢等17世紀末のものである。また、水溜に使われた備前焼大甕11は胴上部に「吉」、「武石入」とヘラ書きされている。同型式の大甕

が17世紀初頭の慶長年間に大坂へ多数搬入されており、甕蔵などに利用されている[伊藤純1989]。本例も紀年銘はないが豊臣後期に製作されて徳川期にかけて継続して使用されたものであろう。図化していないが、廃絶時の埋土から出土した遺物には17世紀末の肥前磁器皿等があり、水溜の使用期間は短期間であったようである。

そのほか徳川期の遺構として調査区西部のSK06、東部のSX08がある。

SK06は東西1.5m、南北1.7m、深さ0.4mで、にぶい黄橙色(10YR7/3)中～細礫混り中粒砂質極粗粒砂層や、にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫・炭混り粗粒砂質シルト層、灰黄色(2.5Y6/2)シルト混り細礫質極粗粒砂層などで埋めたのちに、中央付近を細礫の混じる黄褐色(10Y5/8)極細粒砂質シルト層で充填していた(図5・写真2)。図化していないが、土師器・須恵器・肥前陶器等の細片が出土した。他の遺構の遺物相から徳川期のものと考えられる。

SX08は東西6.1m、深さ0.6m程度の掘形内に横板を杭で固定して、東西3.2m程の多角形の壁を作った遺構である(図8・写真3・4)。SX08の出土遺物は肥前磁器碗9・小碗10・輪花皿8・備前焼と思われる鬼瓦12等であった。このうち、8は板組の水溜内から出土した。

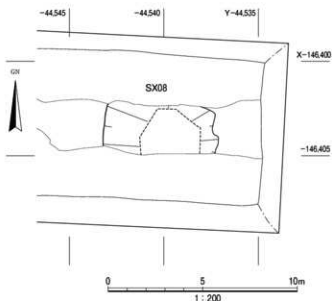


図8 SX08平面図



写真3 SX08掘削状況(西から)



写真4 SX08掘削状況(南から)

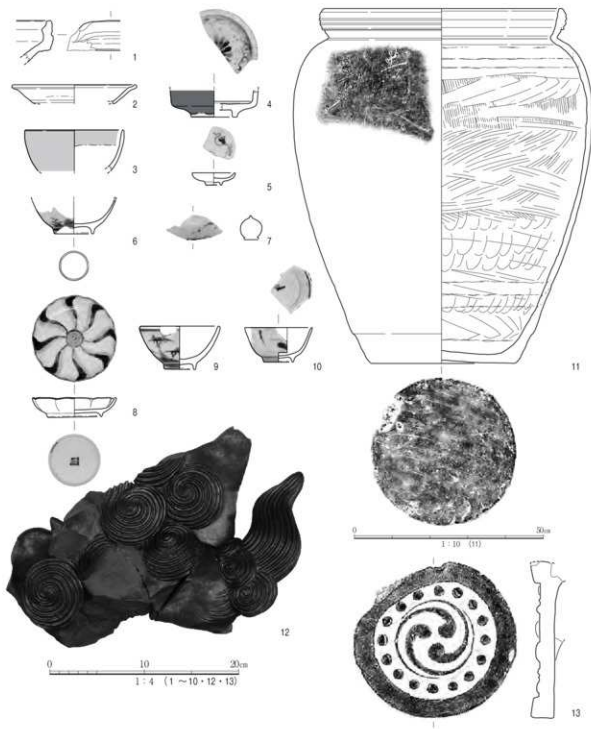


図9 出土遺物実測図

SK02(1~4)、SK07(5~7・11)、SX08(8~10・12)、攪乱(13)

当初は埋土が第1層に類似していたため攪乱として掘削したが、板組の壁を検出したことから第1層より古いことが判明した。出土遺物からは幕末ないしそれに近い時期のものと考えられる。南側は攪乱されて不明であるが、水溜りとして構築されたものであろうか。

以上のほか攪乱から巴文軒丸瓦13が出土した。17世紀代のものであろう。

### 3) まとめ

本調査で目的とした「南大江谷」は調査地内では存在しないことが明らかとなったことが第一の成果である。上町層の上面は削平されて残っていないが、第2a層と第2b層の層理面を追うと、調査地の東西で大きな変化はなく、台地の縁部としては、西側や北側より比較的平坦な場所であったと考えられる。

検出された遺構は全て徳川期のもので、豊臣期に遡るものはなかった。備前大甕を除く遺物相も同様である。しかし、当時の地表面は相当深く削平されたと考えられ、周囲の状況を鑑みても豊臣期に調査地全てが空閑地であったとは言い難いであろう。

徳川期の17世紀代には穴蔵とした大型土塀のSK02や、その廃絶跡を利用した水溜SK07など、特に深く掘削された遺構を中心に検出された。こうした遺構からは武家屋敷や有力な商人などの屋敷地であったことが窺える。

#### 引用・参考文献

- 伊藤純1989、「大坂夏の陣の証人－備前焼の大甕－」：『兼火』23号、p.7
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、「佐々木久夫氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS90-109)略報」：『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.43-47
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大坂城跡発掘調査(OS07-10)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.125-134
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「大坂城跡発掘調査(OS12-37)報告書」：『平成24年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.33-42
- 大阪市文化財協会2003a、「F地区の調査」：『大坂城跡Ⅵ』、pp.321-324
- 大阪市文化財協会2003b、「大坂城跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-2001・2002年度-』、pp.49-74
- 大阪文化財研究所2012a、「大坂城跡Ⅲ」、pp.1-18
- 大阪文化財研究所2012b、「大坂城跡Ⅳ」、pp.1-26
- 植竹哲ほか2013、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」：脇田修「大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－」





中央区東高麗橋24-4における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-9)報告書

調査個所 大阪市中央区東高麗橋24-4  
調査面積 約16㎡  
調査期間 平成29年10月25日～10月27日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、岡村勝行

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城惣構の西北隅に位置し、松屋町筋と釣鐘町通に面する。(図1)。周辺ではこれまで数多くの調査が行われ、弥生時代から近世にかけて遺構・遺物が確認されている。もっとも近接している西40mのOS08-10次調査地では、豊臣期の溝状遺構と塀が検出され、防御機能をもつ屋敷の区画施設の可能性が指摘されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。また、その北西側のOS07-8次調査地では、弥生・平安・鎌倉、豊臣期～徳川初期にかけての各時代の遺構が検出され、長期間にわたって居住域であったことが判明している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。

大阪市教育委員会により、試掘調査が実施され、現地地表下1.4m以下に近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。この結果を受け、本調査は敷地中央の東西4m、南北4mを対象にし(図2)、平成29年10月25日に開始した。まず重機で地表下1.1mまで掘削し、その後、下位層を人力で掘り下げた。層序に応じて、順次、遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進め、地表下2.5mまで調査した。10月27日に現地における全作業を終了し、資材・機材を撤収した。

本報告では1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現地地表の標高はTP+5.5~5.7mで、おおむね平坦である。現代の盛土層である第0層より下位の地

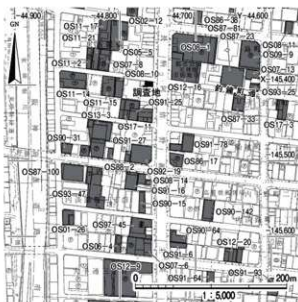


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

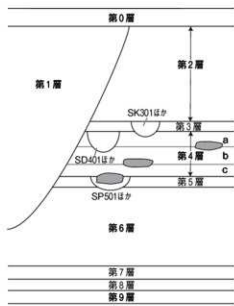


図3 地層と遺構の関係図

層は計9層に分かれた。調査区北壁の状況から以下にそれぞれを記す。

第1層：第2次世界大戦によると推定される焼瓦を多量に含む大型の土壌埋土で、調査区西半に広がる。層厚は最大170cmである。

第2層：オリーブ褐色(2.5YR4/3)細粒砂質シルトなどからなる盛土層で、層厚は約80cmである。重機によって掘削したため、詳細は不明であるが、断面観察では5層ほどに細分される。

第3層：褐色(10YR4/6)シルトの整地層で、層厚は5cm前後である。固く締まる。本層から遺物は確認できなかったが、上面でSK301など17世紀後葉の遺構を検出した。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト～シルトからなる盛土層で、3層に細分される。

第4a層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルトからなり、層厚は15cm前後である。上面でSD401ほかを検出した。

第4b層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトからなり、層厚は15cm前後である。上面で礎石404を検出した。

第4c層：オリーブ褐色(2.5Y4/2)シルトからなり、層厚は15cm前後である。上面で礎石403を検出した。

第5層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトの整地層で、層厚は5cm前後である。固く締まり、豊臣後期の肥前陶器碗1、土師器大和型羽釜2などが出土した。上面は焼けており、大坂夏ノ陣による被災面と考えられる。SP501・礎石502を検出した。

第6層：黄褐色(2.5Y5/6)シルト偽礫混り細粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は約70cmである。平瓦・壁土が出土した。周辺の調査から、慶長3(1598)年の大坂町中屋敷替え時の盛土層と推定され

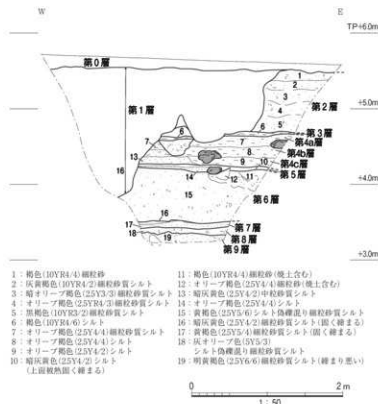


図4 北壁地層断面図

- |                                 |                                   |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1: 褐色(10YR4/4)細粒砂               | 11: 褐色(10YR4/4)細粒砂(壁土含む)          |
| 2: 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト         | 12: オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂(焼土含む)      |
| 3: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルト      | 13: 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト          |
| 4: オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト       | 14: オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト            |
| 5: 黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルト          | 15: 黄褐色(2.5Y5/6)シルト(偽礫混り細粒砂質シルト)  |
| 6: 褐色(10YR4/6)シルト               | 16: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト(固く締まる)   |
| 7: オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト       | 17: 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルト(固く締まる)    |
| 8: オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト           | 18: 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト(偽礫混り細粒砂質シルト) |
| 9: オリーブ褐色(2.5Y4/2)シルト           | 19: 明黄褐色(2.5Y6/6)細粒砂質シルト(締まり悪い)   |
| 10: 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト(上面較熱固く締まる) |                                   |

る。

第7層：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトを主体とする整地層で、層厚は10cmである。固く締まり、上面は生活面と考えられるが、顕著な遺構は確認できなかった。

第8層：灰オリーブ色(5Y5/3)シルト偽礫混り細粒砂質シルトからなる盛土層である。層厚は8cm前後である。遺物は確認できなかった。

第9層：明黄褐色(2.5Y6/6)細粒砂質シルトを主体とする盛土層である。締まりが悪い。層厚は12cm以上である。遺物は確認できなかった。

#### ii) 遺構と遺物(図5～7)

各層準の遺構を古いものから順に記述する。

##### a. 17世紀前葉(第5層上面)の遺構と遺物

大坂ノ陣による被災面で、豊臣期と考えられる礎石を備えた柱穴SP501、礎石502を検出した。前者の規模は長辺0.5m、短辺0.4m、深さ0.3mで、礎石の上面は焼けていた。

##### b. 17世紀中～後葉(第4a～c層上面)の遺構と遺物

第4c層上面で礎石403、第4b層上面で礎石404を検出した。いずれも単体で、組み合う礎石を調査区内では確認できなかった。第4a層上面でSD401・SK402を検出した。SD401は南北方向の溝で、幅0.4m、深さ0.2mである。17世紀中葉の肥前磁器が出土した。SK402は柱穴の可能性もある。

##### c. 17世紀後葉(第3層上面)の遺構と遺物

SK301～303・SP304を検出した。SK301は調査区南側への落込みで、幅0.3m以上、深さ0.3mである。

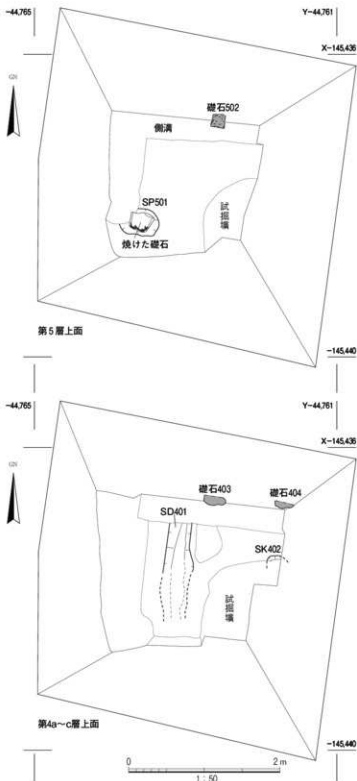


図5 第5層上面、第4a～c層上面遺構平面図

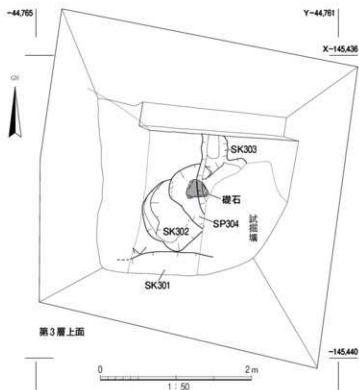


図6 第3層上面遺構平面図

廃棄瓦が多く出土し、東西方向の溝となる可能性もある。SK302は一辺0.6～0.7m、深さ0.1mである。底部が一部赤変硬化しており、竈の可能性はある。SK303は不定形な土塊で、長辺1.0m以上、短辺0.6mである。肥前磁器油壺3、土師器皿4・5が出土した。SP304は一辺0.4m以上の柱穴で、礎石を設置していた。掘形から丹波焼摺鉢6が出土した。3～6は、いずれも17世紀後葉のものである。

### 3) まとめ

今回の調査では、限られた面積ではあったが、大坂夏ノ陣の被災面で

豊臣期の遺構、17世紀後葉の遺構面で礎石や土塊・溝などを検出し、近辺に濃密に当時の生活面が広がっていることが確認された。

今後の周辺調査によって、さらに本地域の城下町の中での位置づけが明らかになることを期待したい。

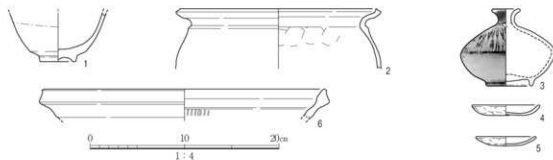


図7 出土遺物実測図

第5層(1・2)、SK303(3～5)、SP304(6)

### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大坂城跡発掘調査(OS07-8)報告書」:「大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)」, pp.103-114

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城跡発掘調査(OS08-10)報告書」:「大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」, pp.219-226

中央区東高麗橋26-4 他における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-11)報告書

調査個所 大阪市中央区東高麗橋26-4 他  
調査面積 約165㎡  
調査期間 平成29年12月15日～平成30年1月19日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、絹川一徳、桑原武志



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城惣構の西北隅に位置し、松屋町筋の西に面する(図1)。周辺ではこれまで多くの調査が行われ、弥生時代から近世にかけて多くの遺構・遺物が確認されている。本調査地北西のOS08-10次調査地では、豊臣期に属する大型の溝状遺構と塀が検出され、防御機能をもつ屋敷の可能性が指摘されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。また、その北側のOS07-8次調査地では、弥生・平安・鎌倉、豊臣期～徳川初期にかけての各時代の遺構が検出され、長期間にわたって居住域であったことが判明している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。

南50mのOS92-19次調査地では、奈良時代から平安時代の土器を含む土器溜りが発見され、13世紀後半頃の中世遺物もまとめて出土して、近隣が居住域であることが推定された。古代の難波津など、港湾施設との関係が考えられる。同調査地では、豊臣前期から同後期を経て徳川期に至る、一連の整地と屋敷跡が発見されており、近世以降は屋敷地となったことがわかっている[大阪市文化財協会2003]。なお、本調査地内ではOS91-25次調査が行われており、小規模なトレンチ調査ながら、豊臣期の礎石建物を検出している[大阪市文化財協会2003]。

本調査地では、大阪市教育委員会により平成29年5月12日に試掘調査が実施され、現地表下1.4m以下に本格的な発掘調査を必要とする近世の遺構面および遺物包含層が検出された。この結果を受け、旧建物(OS91-25次で調査済)によって破壊された中央部を避け、敷地の南東部と北西部にトレンチを設けて調査を行うこととなった(図2)。南東部のトレンチ(以下東区と称称)は東西14.5m×南北8.0m、北西部のトレンチ(以下西区と称称)は東西4.5m、南北11.0mで設定し、頭書の日程で調査を行った。重機を用いて地表下1.4mまで掘削し、その後、下位層を人力で掘り下げた。層序に応じて、順次

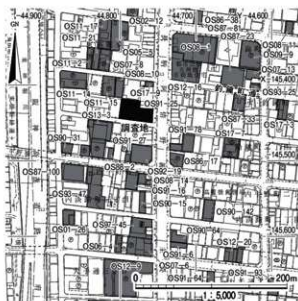


図1 調査地位置図

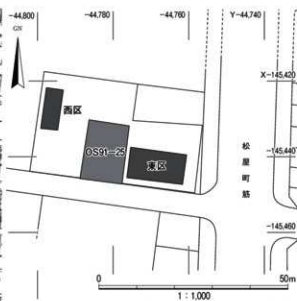


図2 調査区配置図

に遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進め、地表下約2.5mまで調査した。東区では、最終段階で深掘りトレンチ掘削し、地表下約4mまでの層序を確認した。

また、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。本報告書記載については、遺物の事実記載については学芸員小田木富慈美が行い、その他を絹川と高橋が共同で行った。

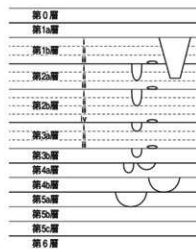


図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序

調査地一帯は平坦でTP+6.1~6.2mである。調査区の中央南寄りにはOS91-25次調査が行われているが、その後この位置には旧建物のコンクリート基礎が掘えられ、さらにその北側には立体駐車場の地下機械室が設けられたため、今回設定できた調査区以外の場所では攪乱がかなり深いところまで及んでいた。

東区・西区において、地表面以下で次の第0~6層を検出した。層序は両区で共通しており、東区北壁地層断面で代表して記述する。

第0層：瓦礫を多量に含むいぶい黄褐色(10YR4/3)粘土混りシルト質細粒~中粒砂層で、現代盛土である。調査地全体に分布する。東区・西区ともに60~110cmの層厚で堆積しているが、攪乱が深い部分では層厚は250cm以上に及んでいた。

第1層：西区では既往の建設工事により削平されていたため、東区のみで認められた。第1a・1b層に細分される。

第1a層は、東区西端部ではいぶい黄褐色(10YR6/4)細粒~中粒砂層で層厚は30cm前後であった。近世後半~近代の整地層である。

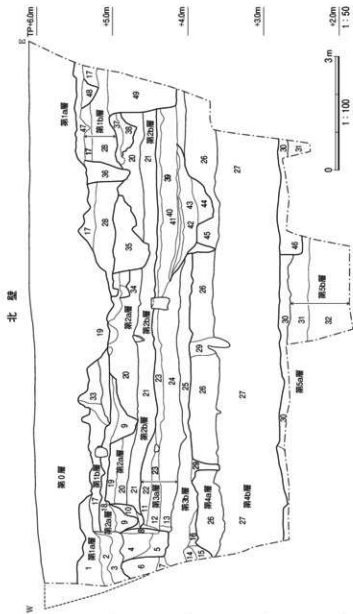
第1b層は、整地の単位によりさらに第1b-i~1b-iii層の3層に細分された。旧地表は第1b-i層でいずれも同時期に行われた整地である。

東区では、第1b-i層が炭・焼土を多く含む暗褐色(10YR3/4)粘土混り細粒砂質シルト層、第1b-ii層がオリーブ褐色(10YR4/4)粘土混りシルト質細粒~中粒砂層、第1b-iii層が径1~3cmの黄褐色シルト質細粒砂の礫礫を含む褐色(10YR4/6)粘土混り細粒~中粒砂層の整地土からなり、層厚は合わせて30~40cm前後であった。徳川期の整地層である。

第2層は東区・西区で認められた整地層で、第2a・2b層の2時期に細分される。17世紀後半以降に形成された徳川期の地層である。

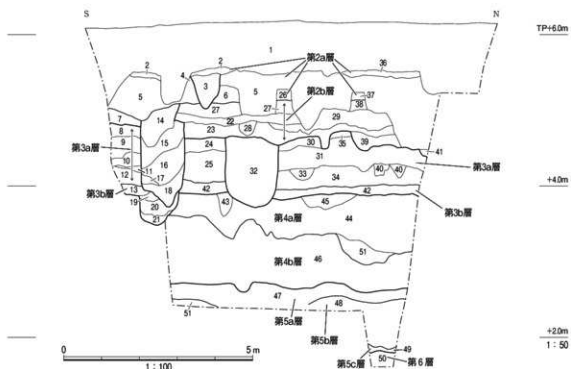
第2a層は、妙知焼け当時の地表部分(第2a-ii層)と火災直後の最初の整地土(第2a-i層)、それ以前の整地土(2a-iii層)からなる。

東区では、第2a-i層は炭・焼土・瓦を多く含むいぶい黄褐色(10YR4/3)粘土混りシルト質細粒砂層で、西端部のみで認められた。層厚は10cm程度であった。



- 1: 土に黄褐色(10Y7R6/4)細砂-中粒砂(第1層)
- 2: 灰-黄土を含む褐色(2S7Y2/1)シルトを多く含む細砂-細粒砂(第1層)上面遺構層上)
- 3: 黄褐色(10Y7R5/4)シルトを多く含む細砂(第1層)上面遺構層上)
- 4: 黄土を含む黄褐色(10Y7R4/4)粘土質シルト(第1層)上面遺構層上)
- 5: 粘土層リシルト質細砂(第2層)上面遺構層上)
- 6: シルトを多く含む粘土質細砂(第2層)上面遺構層上)
- 7: 黄土を多く含む粘土質細砂(第2層)上面遺構層上)
- 8: 赤褐色(5Y7R4/6)シルトを多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 9: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 10: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 11: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 12: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 13: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 14: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 15: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 16: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 17: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 18: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 19: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 20: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 21: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 22: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 23: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 24: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 25: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 26: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 27: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 28: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 29: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 30: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 31: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 32: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 33: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 34: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 35: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 36: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 37: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 38: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 39: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 40: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 41: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 42: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 43: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 44: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 45: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 46: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 47: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 48: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)
- 49: 黄土を多く含む粘土質シルト(第2層)上面遺構層上)

図4 東区北壁地層断面図



- 1 : 瓦礫を多量に含むにふい黄褐色(10YR4/3)  
粘土混りシルト質細粒～中粒砂(現代産土)
- 2 : 灰-焼土を含む黄褐色(10YR5/6)  
粘土混り細粒砂質シルト(第2a-層)砂加焼地土面
- 3 : 灰-小礫を含む褐色(10YR4/4)粘土混り細粒砂質シルト(SKW06埋土)
- 4 : 黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト
- 5 : 灰-焼土・瓦を含むにふい黄褐色(10YR5/4)  
粘土混り細粒砂質シルト(第2a-層)
- 6 : にふい黄褐色(10YR7/4)細粒～中粒砂(第2a-層)
- 7 : 明黄褐色(10YR6/6)シルト混り粗粒砂～細粒砂(第2b-層)
- 8 : 灰-焼土を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混り粘土質シルト(第2b-iv層)
- 9 : 暗褐色(10YR3/3)細粒砂混り粘土質シルト(第2a-層)
- 10 : にふい黄褐色(10YR5/4)粘土混りシルト質細粒～中粒砂(第3a-層)
- 11 : 灰-焼土を多く含む褐色(10YR2/2)粘土混りシルト質細粒砂(第3a-層)
- 12 : にふい黄褐色(10YR6/4)シルト混り細粒～中粒砂(SKW17埋土)
- 13 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土混り細粒砂質シルト(SKW17埋土)
- 14 : 灰-焼土・礫・瓦を多く含む褐色(10YR3/3)  
シルト混り粘土質細粒砂(SKW33埋土)
- 15 : 灰-焼土を含む黄褐色(10YR3/1)  
粘土混り細粒砂質シルト～シルト混り粘土質細粒砂(SKW33埋土)
- 16 : 灰-焼土・細礫を含む暗褐色(10YR3/4)粘土混り細粒砂質シルト(SKW33埋土)
- 17 : 灰-細礫を含むにふい黄褐色(10YR4/3)粘土混りシルト質細粒砂(SKW33埋土)
- 18 : 灰-焼土を含む褐色(10YR4/4)粘土混りシルト質細粒砂(SKW33埋土)
- 19 : オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土混りシルト質細粒砂(SKW17埋土)
- 20 : 灰黄褐色(2.5Y7/4)シルト混り細粒～中粒砂(SKW17埋土)
- 21 : 灰-焼土を多く含む灰褐色(10YR2/1)粘土混りシルト質細粒砂(SKW17埋土)
- 22 : 灰を含むにふい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～粗粒砂混り粘土質シルト(第2b-ii層)
- 23 : にふい黄褐色(10YR6/4)シルト混り細粒～中粒砂(第2b-iv層)
- 24 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)細礫を含む粘土混りシルト質細粒砂(第3a-層)
- 25 : にふい黄褐色(10YR3/4)シルト混り細粒～中粒砂(第3a-層)
- 26 : にふい黄褐色(10YR7/4)細粒～中粒砂(第2a-層)
- 27 : 灰-焼土・瓦を含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)  
細粒砂混り粘土質シルト(第2b-ii層)
- 28 : 灰-焼土・細礫・瓦を含むにふい黄色(2.5Y6/4)  
細粒砂混り粘土質シルト(第2b-iii層上面堆積土)
- 29 : 黄褐色(10YR5/6)シルト混り細粒～中粒砂(第2b-ii層)
- 30 : 灰-焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)  
粘土混り細粒砂質シルト(第3a-層)
- 31 : オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土混りシルト質細粒砂(第3a-層)
- 32 : 灰-焼土・礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)  
粘土混りシルト質細粒砂(SKW16埋土)
- 33 : 褐色(10YR4/6)粘土混りシルト質細粒砂(第3a-iii層の部分的な整地土)
- 34 : 明黄褐色(10YR7/6)シルト混り細粒～中粒砂(第3a-層)
- 35 : 灰-焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)  
細粒砂混り粘土質シルト(地土面)
- 36 : オリーブ褐色(10YR5/4)  
粘土混り細粒砂質シルト(第2a-ii層)砂加焼地土面
- 37 : 灰褐色(10YR5/6)シルト混り細粒～中粒砂(第2a-iii層)
- 38 : にふい黄褐色(10YR5/4)粘土混りシルト質細粒砂(第2b-ii層)
- 39 : 黄褐色(2.5Y5/4)  
粘土混り粗粒砂～細粒砂質シルト(第2b-ii層の部分的な整地土)
- 40 : 黄褐色(10YR5/6)粘土混り細粒砂質シルト(第2a-iii層の部分的な整地土)
- 41 : 黄褐色(10YR5/6)粘土混り細粒砂質シルト(第2b-iv層の部分的な整地土)
- 42 : 灰-焼土を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土混り細粒砂質シルト(第3a層)
- 43 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)  
粘土混り細粒砂質シルト(第4a層の部分的な整地土)
- 44 : 灰-焼土を含む黄褐色(2.5Y5/4)粘土混り細粒砂質シルト(第4a層)
- 45 : 黄褐色(2.5Y3/6)粘土混りシルト質細粒砂(第4a層の部分的な整地土)
- 46 : 黄褐色(2.5YR4/3)シルト混り粗粒砂～中粒砂(第4a層)
- 47 : 細礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土混り細粒砂質シルト(第5a層)
- 48 : にふい黄色(10YR6/4)中粒～粗粒砂(第5a層)
- 49 : にふい黄色(2.5Y6/3)シルト混り細粒～中粒砂(第5a層)
- 50 : 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂混り粘土質シルト(第6層(作土))
- 51 : 暗灰黄色(2.5Y5/2)  
細粒～中粒砂混り粘土質シルト(第4a層の部分的な整地土)

図5 西区西壁地層断面

上面が妙知焼けによる被熱により硬化していた第2a-ii層は、炭・焼土を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)または暗褐色(10YR3/3)粘土混り細粒砂質シルト～シルト質細粒砂層からなり、層厚は10cm程度であった。第2a-iii層は細礫を含む黄褐色(10YR5/8)シルト質細粒～中粒砂層で、層厚は20～40cmであった。

西区では、第2a-i層は削平されていたが、妙知焼けの被災面である第2a-ii層は炭・焼土を含む黄褐色(10YR5/8)粘土混り細粒砂質シルト層として認められた。層厚は5cm前後であった。第2a-iii層はにぶい黄褐色(10YR7/4)細粒～中粒砂層で、層厚は20～50cmであった。

第2b層は西区に厚く堆積しており、第2b-i～2b-iv層の4つの整地単位に細分された。17世紀後半に形成された徳川期の一連の整地層である。

東区では2b-i層のみが認められた。にぶい黄褐色(10YR5/8)細礫・粘土を含むシルト混り細粒～中粒砂層の整地層で、層厚は30cm前後であった。

西区では第2b-i層は炭・焼土・瓦を含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂混り粘土質シルト層で層厚が15～20cm、第2b-ii層は炭を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒～細粒砂混り粘土質シルト層で層厚が10～20cm、第2b-iii層は黄褐色(10YR5/6)シルト混り細粒～中粒砂層で層厚が10～20cm、第2b-iv層はにぶい黄褐色(10YR6/4)シルト混り細粒～中粒砂層で層厚が約20cmであった。

第3層は東区・西区の両方で認められた整地層で、整地単位によって第3a・3b層に分層が可能であった。さらに第3a層は3a-i～3a-iii層の3つの整地単位に細分された。第3層は徳川期でおもに17世紀前半の整地層とみられる。

東区では、3a-i層は炭・焼土を多く含む褐色(10YR4/6)細粒砂混り粘土質シルト層で、部分的な整地土とみられ西半部のみ堆積していた。上面が硬化しており、旧地表であったとみられる。層厚は約10～15cmであった。第3a-ii層は炭・焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂混り粘土質シルトおよび明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質細粒～中粒砂層で、第3-i層が認められない東半部で上面が硬化している状況が確認されたことから、3a-i・3a-ii層が当時の地表であったことがわかる。層厚は10～20cmであった。第3a-iii層は明黄褐色(10YR6/8)粘土をわずかに含むシルト混り細粒～中粒砂で層厚が20～30cmであった。

西区では、第3a-i層は炭・焼土・細礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土混りシルト質細粒砂～細粒砂質シルト層で層厚が約15cm、第3a-ii層はにぶい黄褐色(10YR3/4)シルト混り細粒～中粒砂またはオリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土混りシルト質細粒砂層で層厚が20～40cmであった。第3a-iii層は明黄褐色(10YR7/6)シルト混り細粒～中粒砂層で層厚が25cm前後であった。

第3b層は、東区では炭・焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト混り粘土質細粒砂層で層厚が10～30cm、西区で炭・焼土を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土混り細粒砂質シルト層で層厚が10～15cmであった。徳川期の地層で、上面では17世紀前半までの遺構が検出された。大坂ノ陣後の焼け跡整理に伴う整地層であろう。

第4層も東区・西区で共通して認められる整地層で、非常に均質で調査区全体に厚く堆積していた。整地の単位により、第4a・4b層に細分することができた。豊臣後期の地層で、町中屋敷替の整地工事

に係るとみられる。各上面では豊臣後期～徳川初期の遺構が検出された。

第4a層は、東区では径5cm前後の褐色細粒砂質シルトの礫を多く含む黄褐色(10YR5/6)粘土混りシルト質細粒～中粒砂層で、層厚は20～40cmであった。西区では炭・焼土を含む黄褐色(2.5Y5/4)粘土混り細粒砂質シルト層で、層厚は30～100cmであった。東区・西区とも均質な整地土であった。豊臣後期の地層である。

第4b層は、東区では明黄褐色(10YR6/8)シルト混り細粒～中粒砂層、西区では浅黄色(2.5Y8/4)シルト混り細粒～中粒砂層で、いずれも層厚は70～90cmであった。

第5層は東区・西区ともに深掘りトレンチにおいて部分的に確認した整地層である。第5a～5c層に細分された。第4層と同様、調査区全体に非常に厚く堆積していた。豊臣前期の地層である。

第5a層は、東区では黄褐色(2.5Y5/4)粘土混りシルト質細粒～中粒砂層、西区では細礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)粘土混り細粒砂質シルト層で、層厚はいずれも20cm前後であった。

第5b層は、東区では炭を含む黄褐色(2.5Y5/4)粘土混りシルト質細粒砂層で層厚が約30cm、西区ではにぶい黄色(10YR6/4)中粒～極粗粒砂層で層厚が60cmであった。

第5c層は、東区で黄褐色(2.5Y5/3)シルト質砂礫となり、層厚が60cm以上であった。一方、西区では堆積が薄く、にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト混り細粒～中粒砂層が5cm程度認められたのみである。

第6層は西区の深掘りトレンチで確認することができた。暗オリブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂混り粘土質シルトの作土層で、層厚は20cm以上であった。ごく部分的に確認しただけで、全体的な広がりについては不明である。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第5a・4b層上面の遺構(図6)

東区北半部の第4b層を掘り下げ、第5a層上面でSX125を検出した。

SX125は東西に延びる溝状の遺構で、幅0.80～1.80m、深さ0.02m前後で、オリブ褐色(10YR4/6)シルト混り中粒砂で埋められていた。詳細な年代が知れる遺物は出土しなかったが、層序から判断して豊臣前期の遺構とみられる。

東区南半部の第4b層上面では、SK123・SD124を検出した。

SK123は調査区の東南隅で検出された土壌で、SD124を切っていた。平面形は隅丸方形を呈し、南北1.4m、東西1.2m以上、深さ0.3mであった。礫を多く含む橙色(7.5YR6/8)シルト混り細粒～中粒砂で埋められており、50cmほどの花崗岩が出土した。礎石の根固めをしたものかもしれない。

SD124は東西に延びる溝で、調査区外へ続く。幅0.8～1.2m、深さ0.4m前後で、方位は東で8°南へ振る。明黄褐色(2.5Y6/6)粘土混り極細粒～細粒砂質シルトで埋められていた。周辺に展開する遺構は把握できていないが、敷地境などである可能性が考えられる。土師器火入れの細片や瓦片が出土したが時期が判定できるものはなかった。層序から考えて豊臣後期の遺構である。

### b. 第4a層上面の遺構(図7～9)

東区ではやや大型で、方形に近い平面形をもつ土壌(SK82・100・106・121)、直径1m前後の平面形が円形を呈する土壌(SK88・90・94・105・118など)、直径0.3mほどの小穴(SP96・117・120

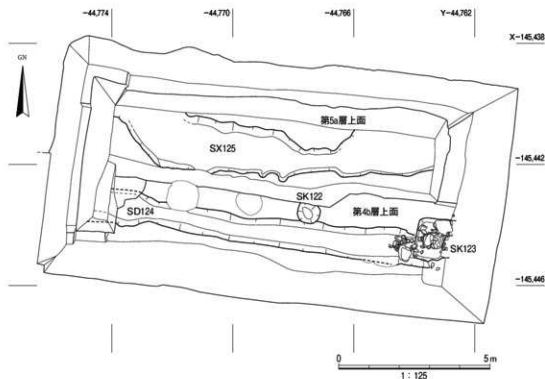


図6 東区第4b・5a層上面遺構平面図

など)、溝(SD97・98)を検出した。これらの遺構の配置は漫然としていて、目立った規則性は見出せない。しいていば、円形の土壇は重複・密集する箇所があり(SK88～90、SK93～95、SK107～110)、大型方形の土壇は散在するが、円形のを伴って密集傾向を示すものがある(SK82・121とSK79～81、SK106とSK107～110)。以下、代表的なものを報告する。

SK82は調査区北東部で検出され、長辺2.0m、短辺1.3m、深さ0.1mで、炭・焼土を含む褐色(10YR4/6)粘土混り細粒砂質シルトなどで埋められていた。平面形がほぼ円形のSK79・SK80・SK81に切られている。この3基の深さも0.1mからせいぜい0.15mほどと浅いのが特徴である。にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土混りシルト質細粒～中粒砂などで埋められていた。SK79・81からは肥前陶器壺、SK80からは瀬戸美濃焼志野皿が出土した。いずれも細片で図化できなかったが、豊臣後期のものである。

SK88～90は調査区東端付近にあり、3基が重複していた。深さはSK88が0.2m、SK89が0.7m、SK90が0.3mで、黄褐色(10YR5/6)粘土混り細粒砂質シルトなどで埋められていた。これらからは時期が判定できる遺物は出土しなかった。

SK100は調査区北辺にあって、東西1.8m、南北1.2m、深さ0.2mで、炭・焼土を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土混りシルト質細粒砂などで埋められていた。遺物は出土しなかった。

SK106は調査区の南西にあって、東西1.0m、南北1.8m、深さ0.6mである。明黄褐色(10YR6/6)粘土混り細粒～中粒砂質シルトなどで埋められていた。南西側にSK107～110が密集し、SK106はSK107に切られる。SK107～110は深さが0.1～0.2mほどで、炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)粘土混りシルト質細粒砂などで埋められていた。これらの遺構からは、土師器・瓦の細片のみが出土した。

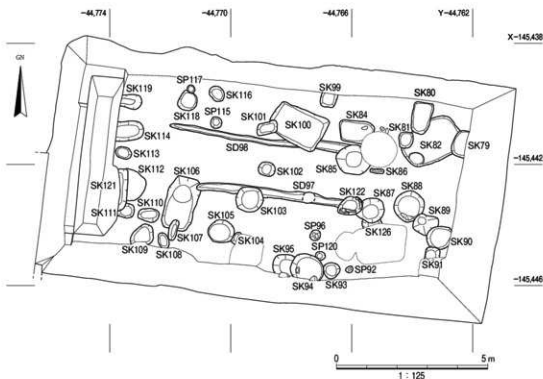


図7 東区第4a層上面遺構平面図

このほかの土壌も深さが0.2m程度の浅いものが多いが、SK103は0.6m、SK112は0.7mの深さがある。詳細な時期を判定できる遺物は少かったが、SK85からは三巴文軒丸瓦11、唐草文軒平瓦12が出土している(図9)。豊臣期の遺物とみて大過はない。

上記の土壌群は形状や無作為な配置からみてごみ穴とみられるが、浅いものが多く、遺物の出土量も概して少ない。遺構面を覆う第3b層は焼土・炭を多く含む整地層で、大坂ノ陣後の焼け跡整理に伴う整地層とみられるので、整地の際に遺構面の上部が削平を受けていることが考えられる。

溝SD97・98は調査区の中央で検出された。SD97は幅約0.30m、深さ0.15mで、炭・焼土を含む暗褐色(10YR3/4)粘土混りシルト質細粒砂で埋められていた。SD97から1.8m(芯々間)北にSD98がある。SD98は幅0.15~0.30m、深さ0.1mで、SD97と同様な埋土で埋められていた。器種不明の瀬戸美濃焼志野細片が出土している。SD97・98の方位は東に南に8°振り、下位層準のSD124と同じである。敷地境に係る遺

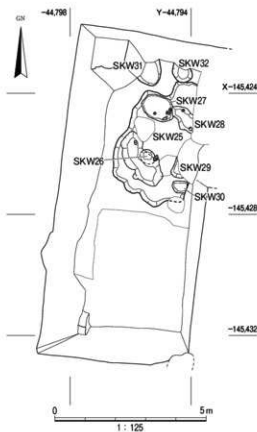


図8 西区第4a層上面遺構平面図



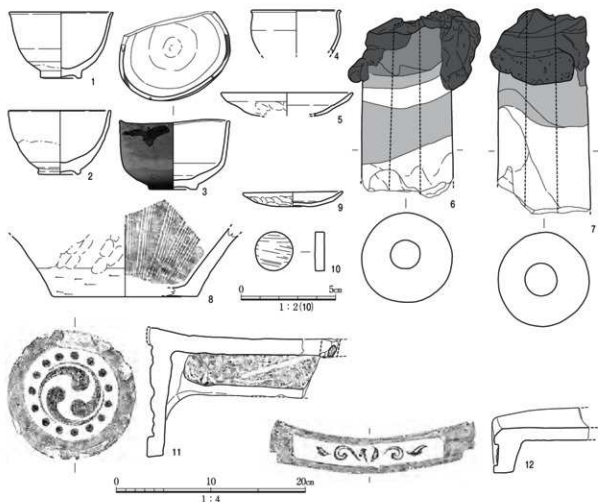


図9 第4a層上面の遺構出土遺物  
SKW28(1・2)、SKW25(3～7)、SKW27(8～10)、SK85(11・12)

構の可能性がある。

西区では、攪乱を免れた北半部で、大型で不整形な平面形をもつSKW25と、東区と同様な1m前後の円形や楕円形の平面形をもつ土壇(SKW26～32)が検出された。

SKW25は東西2.5m以上、南北4.2m、深さ0.4mで、炭・焼土・鍛冶滓を多く含む黒色(2.5Y2/1)粘土混りシルト質細粒砂で埋められていた。中国産青花・肥前陶器に加えて輪の羽口や鍛冶滓が多数出土し、鍛冶関係の遺物の廃棄土層とみられる。図9の3・4は肥前陶器碗である。3は鉄絵を施し、口縁部を歪ませる。4は体部が内湾し、口縁端部を外反させる。5は土師器皿である。6・7は輪羽口である。以上は徳川初期に属し、遺構の年代を示している。

SKW27はSKW25を切り、深さは0.2mである。炭・灰土を多く含む暗褐色(7.5YR3/3)粘土混り細粒砂質シルトで埋められていた。8は丹波焼挿鉢である。摺目は4条を1単位とする。9は土師器皿である。10は骨製品で盤双六の駒である。これらは徳川初期に属する。

SKW28はSKW25・27を切り、深さは0.1mである。炭・灰土を多く含むむい褐色(7.5YR5/4)シルト混り粘土質極細粒砂で埋められていた。1・2は肥前陶器碗である。これらは豊臣後期に属するが、

重複関係からみて遺構の年代を示すものではない。

そのほかの土壌SK26・29～32も深さは0.1～0.3m程度で、炭や灰土を含む細粒砂～シルトで埋められていた。以上の西区の遺構は、金属加工に係るものとみられる。

c. 第3b層上面の遺構(図10・11・17)

東区では礎石建物、溝、土塙や落込み、小穴群を検出した。

SB1は調査区の東半部にあつて、南北に主軸をもつ、梁行3.9m、桁行4.4m以上の礎石建物である。長軸の方位は北で東に8°振る。西側柱筋は掘形を伴う7個の礎石が並ぶが、60cmほどの大型の礎石の間に20～30cmの小型のものが配されており、小型のものは補助的なものとみられる。東側の柱筋は残りが悪く、3個の礎石がみとめられたのみであるが、西側の礎石によく対応する位置にある。両者の中間には1個の礎石(SP65)があるが、梁ラインからは少しずれた位置である。床材を支持する床束ないし根太の礎石かもしれない。SB1の北側にも調査区壁面に礎石らしい石材がみえており、北にも建物が並んでいた可能性がある。

調査区の西半にも2個の礎石(SP76・77)と小穴群が散在するが、建物を復元するには至らなかった。SK78はSP77に切られる土塙で、長軸1.8m以上、短軸1.1m以上、深さ0.1mほどを測り、炭を多く含む暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土混りシルト質中粒砂で埋められていた。土師器・丹波焼甕の細片、砥石が出土した。SX62はSB1を切る溝状の落込みで、東西2.0m以上、南北0.7m、深さ0.1mで、炭・焼土を多く含む暗褐色(7.5YR3/4)シルト質細粒砂で埋められていた。土師器細片が出土した。

SD73は調査区北西にあつた溝で、幅約0.2m、深さ0.1mで、炭・焼土を多く含む暗褐色(7.5YR3/4)シルト質細粒砂で埋められていた。中央で十字に分岐するようである。長軸の方位は東で南に4°振り、

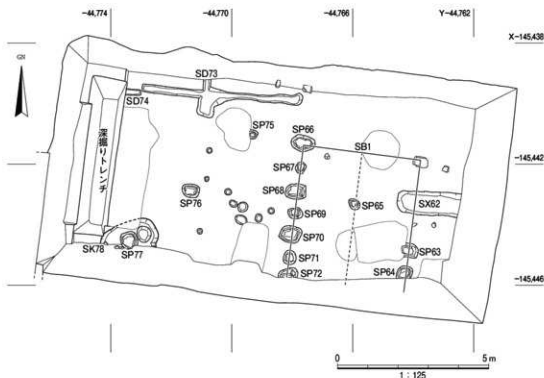


図10 東区第3b層上面遺構平面図

SB1と概ね直交方向をとる。北側調査区外に展開する建物の雨落溝であろうか。土師器細片が出土した。

西区では、1m前後で平面形が円形の土壙(SKW11・15・21~23)、それらよりやや小型の土壙(SKW12・14・19・24)と調査区の南西の規模不明の土壙(SKW17)を検出した。SKW20は深さ0.05mの浅い落込みである。

SKW11・15・21~23は深さが0.2m前後で、炭を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土混りシルト質細粒砂などで埋められていた。SKW15からは肥前磁器13・14(図17)が出土した。13は染付碗、14は白磁碗で、17世紀前半に属する。SKW12・14・19・24は深さ0.1~0.3mほどで、褐色(10YR4/4)粘土混りシルト質細粒~中粒砂で埋められていた。

SKW17は一部分のみが検出され、規模は不明であるが、上記土壙よりは大型とみられる。

以上、第3b層上面の遺構は、時期を詳細に判定できる遺物がほとんど出土しなかったが、概ね17世紀前半のうちに収まるとみてよい。第3b層が大坂ノ陣後の焼け跡整理に伴う整地層であることにも矛盾はない。

#### d. 第3a-i・3a-ii層上面の遺構(図11・12)

東区で柱穴群、土壙、石垣の下部構造とみられる石列を検出した。

SK42は東区の中央付近を南北に縦断する石列である。石列は、幅約40cm、深さ数cmの溝状の掘形の中にあり、拳大から30cmほどの割り石が積み重なり、列をなして置かれていた。長軸の方位は北で8°東へ振っていた。本来、低い石垣が積み重ねられており、その下部構造である栗石敷きが残ったものとみられた。敷地境に関係する遺構であろう。掘形からは肥前陶器碗の破片などが出土した。

石列の東側は0.3mほどの礎石を据えた柱穴(SP38・39・43・48)が散在していたが、建物を復元することはできなかった。

SK40は東西2.1m以上、南北2.5m以上、深さ0.1mほどの土壙で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土混りシルト質中粒砂で埋められていた。土師器焼塩壺、肥前陶器皿の破片などが出土しており、その形態から17世紀中頃の時期とみられる。SK37は東西1.5m以上、南北1.5m、深さ0.2mで、炭・焼土を含む褐色(10YR4/6)粘土混り中粒砂質シルトで埋められていた。SK60は撓乱をうけて南側半分が遺存していた。土師器皿片が出土し、その形態から17世紀代のものとみられた。

石列の西側でも0.3mほどの礎石を据えた柱穴(SP45・53・55・56)が散在していたが建物としての復元はできなかった。SP45・53は栗石がみえており、礎石が抜き取られた状態であった。これらの礎石より小型なものがSP46・47・49・50・57・59・126で、20cm前後の礎石を据えている。このうち、

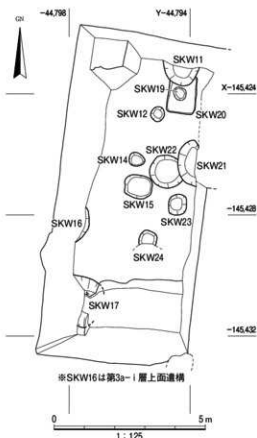


図11 西区第3b層上面遺構平面図

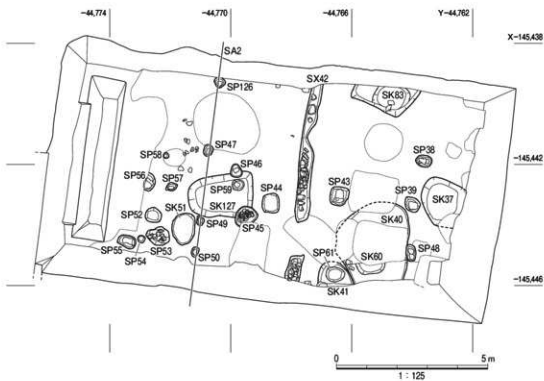


图12 东区第3a-i·ii层上面遺構平面图

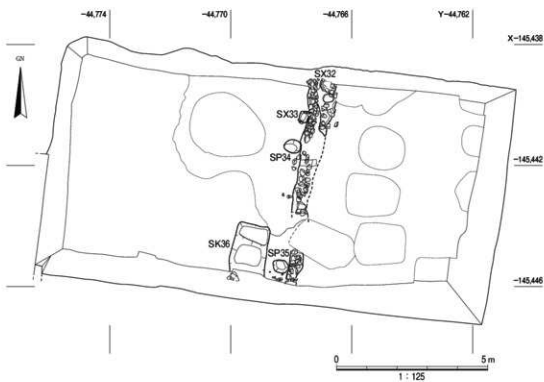


图13 东区第2b层遺構平面图

SP126・47・49・50は南北に一直線をなして並び、塀SA2を構成するものとみられる。方位は北で8°東へ振っており、石列SX42と約3.2mの間隔で平行する。SA2とSX42はともに敷地境に関係するものとみられ、先後関係にあるか同時に存在したかは不明である。前者の場合は、SX42を踏襲する位置で上位層にも石列があるので、SA2からSX42へ敷地境が移動したものと考えられる。後者の場合、間の空間は小路的な通路であるのかもしれない。ただし、柱穴などの遺構があるので、一時的なものだったのではないだろうか。

西区では大型の土壇とみられるSKW16が一部のみが検出された(図11)。規模は不明である。

以上の遺構の年代については、遺物の出土量が少なく、詳細な時期がわかるもので図化できたものはなかったが、SP44からは肥前磁器碗、SP46からは肥前磁器碗と土師器皿、SP55からは漳州窯産色絵鉛片が出土し、それらの形態から17世紀中葉頃のものともみられる。

e. 第2b層上面の遺構(図13・14)

東区では石列SX32、柱穴SP33～35、土壇SK36が検出された。

石列SX32は第3a層上面のSX42の位置を踏襲し、南北に延びる。溝状の掘形の幅は0.3～1.0mで、深さは0.2m前後であった。拳大から20cm程度の粟石を敷き詰めていた。上部を撤去された石垣の下部構造とみられる。方位もSX42と同じである。

柱穴SP33・34・35はSX32の西に沿って掘られている。平面形は直径0.3～0.5mほどのほぼ円形で、深さはSP33は0.05m、SP34・35は0.15mである。SP34・35は塀などを構成し、SX32とともに敷地境をなしていたものかもしれない。

土壇SK36は東西1.2m、南北1.5m以上、深さ0.3mで、褐色(10YR4/4)粘土混り細粒～中粒砂質シルトで埋められていた。

西区では、礎石SPW5・10、SXW3、土壇SKW4・8～10、瓦敷き遺構SXW18が検出された。

礎石SPW5・7・10は20～30cmの礎石を据えている。SXW3は幅0.2m、深さ0.1mで、にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト混り細粒～中粒砂で埋められていた。内部には20cmほどの礎石4個が据えられていた。SPW5もこの延長上にあり、小規模な塀などを構成していたのではなかろうか。

以上の遺構の時期は17世紀末までに取まる。

f. 第2a～ii層上面の遺構(図15～17)

東区では、50～70cmと大型の礎石を据えた柱穴(SP9～11・13・14・19・23・24・29)、一辺1.5～2.0mほどの平面形は方形を基調とする土壇(SK2～4・6・7・

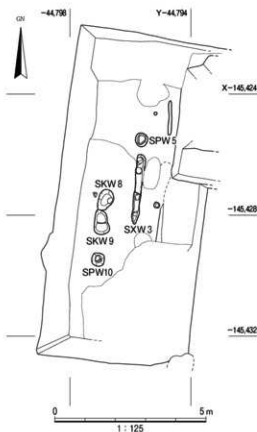


図14 西区第2b層遺構平面図

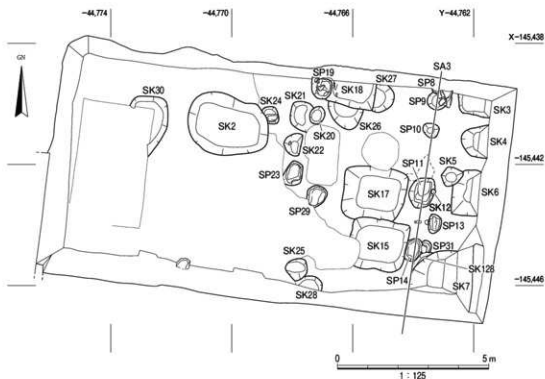


図15 東区第2a-ii層上面遺構平面図

16~18・30など)を検出した。

SA3 柱穴のうち、SP9・10・11・14は一直線上に並び、塀などの区画施設を構成するとみられる。あるいは礎石建物の西側柱筋であるかもしれない。その場合はSP19~SK25あたりに敷地境が求められよう。方位は北で東に9°振っており、下位層のSX32より3.5m東へ寄った位置になっている。

SP19・23・24・29の配置は規則性がなく、建物を復元しえない。調査区西方は攪乱をうけており、建物として組み合わせる柱穴が失われているのであろう。

平面形が方形で大型の土壇はSA3をはさまるように分布していた。深さは0.6~1.2mあり、炭や焼土、焼けた瓦を大量に含む砂などで埋められていた。火災の焼け跡を整理した際に掘られた廃棄用の土壇であろう。

遺構の時期については、SK17からはまとまった量の遺物が出土していて参考となる。図17の15~20は肥前磁器である。15~18は染付碗である。15はコンニャク印判による文様を施す。19は樹下に

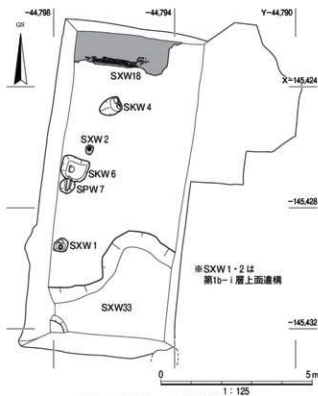


図16 西区第2a-ii層遺構平面図

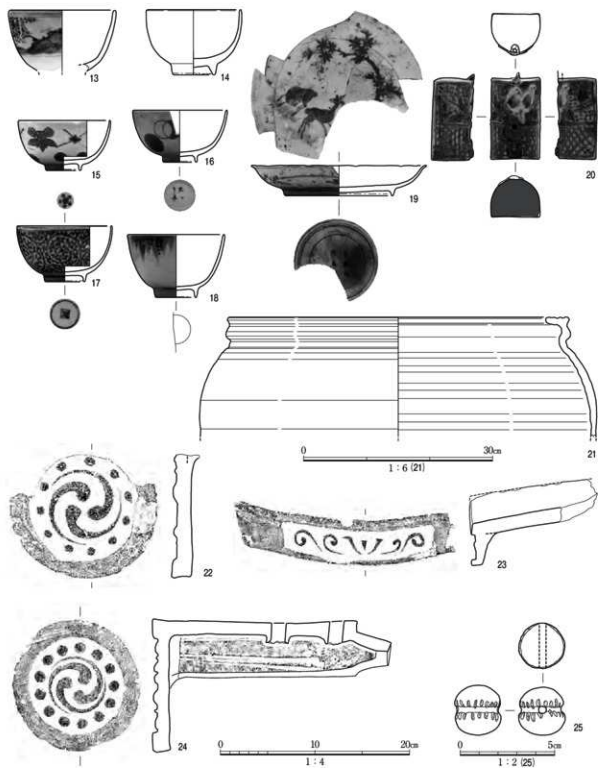


図17 第3b層上面・第2a-ii層上面の遺構出土遺物  
SKW15(13・14)、SK17(15~23)、SXW1(24)、SK25(25)

鹿を描く皿で、被熱している。20は2羽の鳥を型押しした水滴である。底部を墨で塗りつぶしている。21は丹波焼の大甕である。22は三巴文軒丸瓦、23は唐草文軒平瓦である。以上は17世紀末～18世紀前葉に属する。SK25から出土した25は用途不明の土製品で、球形を呈する。中央を溝状に窪ませ、その両側にキザミメを施す。中心には円孔を穿つ。このほかにも、SK3・17・26・30からは17世紀末から一部18世紀前葉にかかる特徴をもつ遺物が出土しており、遺構の年代を示している。こうした年代観から、上記遺構の年代は18世紀前葉を含むこととなり、多量の炭や焼土の原因となった火災は1724(享保9)年の享保大火(いわゆる妙知焼け)と目されるのである。

西区では遺構の分布は散漫で、SKW4・6、SPW7、SXW18・33が検出された。

SXW18は調査区北部にあり、東西1.8m、南北0.3mにわたって小口を立てた平瓦を敷き詰めていた。通路の舗装とみられる。SXW33は東西3.3m以上、南北3.3m以上、深さ0.5mの落込みで、炭・焼土を含む黒褐色(10YR3/1)粘土混り細粒砂質シルト～シルト混り粘土質細粒砂や暗褐色(10YR3/4)粘土混り細粒砂質シルトなどで埋められていた。17世紀末頃の肥前磁器碗・皿などや、「乾山(?)」刻印をもつ肥前陶器の破片が出土している。

#### g. 第1b-i層上面の遺構(図17・18)

東区の西側で穴蔵SX1を検出した。平面形は東西2.3m、南北3.9mの整った長方形を呈し、深さは0.5mほどであった。上部を削剥されたものであろう。内部には壁面に積まれていたとみられる石材が廃棄されており、解体後に放棄されたものとみられる。出土遺物には、土師器火入れ、肥前磁器碗・皿、関西系陶器土瓶・土鍋、軟質施釉陶器灯明皿・人形などがあり、18世紀後半から末にかけてのもので、遺構の年代を示している。

西区ではSXW1・2を検出した。SXW1・2は直径0.2～0.4m、深さ0.1mほどの平面円形の掘形内に、丸瓦を2枚円筒形に組み合わせて立てていた。24は三巴文軒丸瓦で、SXW1に用いられていたものである。用途は不明である。

#### h. 地層出土の遺物(図19)

第3b層 26は中国産青花の碗で、漳州窯産である。27は肥前陶器の皿である。28は瀬戸美濃焼で鉄絵を施す志野の向付である。以上は徳川初期に属する。

第3a層 29は華南三彩の盤で、被熱している。下位層に伴う遺物であろう。30・31は肥前磁器である。30は青磁碗である。31は染付皿である。32は瀬戸美濃焼で、志野の水指蓋である。33は丹波焼の播鉢である。以上は17世紀前～中葉以前に属する。

第2b層 34は分銅で、二匁の刻印を有する。35は火箸で、上部は鎖で連結している。36は古墳時代の須恵

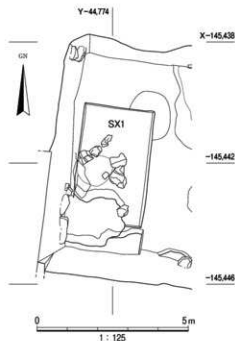


図18 第1b-i層上面の遺構平面図



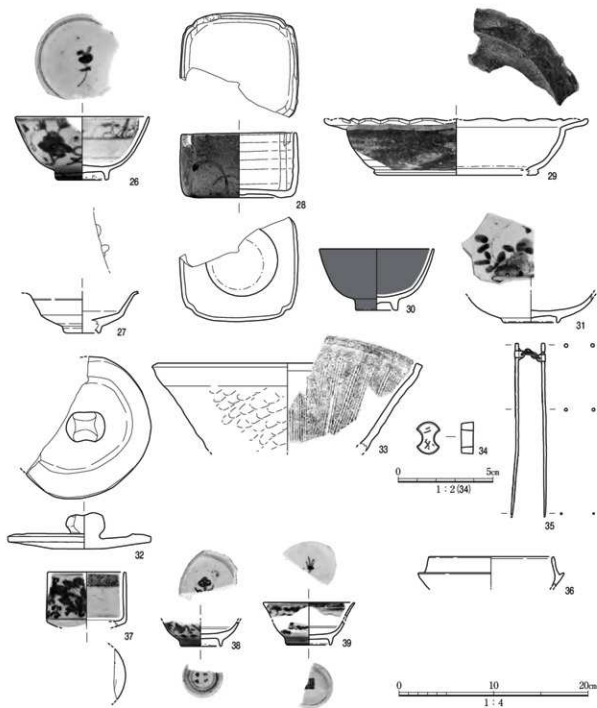


図19 包含層出土遺物

第3b層(26~28)、第3a層(29~33)、第2b層(34~36)、第1~2層(37~39)

器杯身である。

第1~2層 37は肥前磁器で染付の筒茶碗である。38・39は中国産青花の碗である。いずれも口縁部は端反になるもので、底部内面中央には花文を描く。以上は18世紀後葉に属する。

### 3)まとめ

今回の調査では、豊臣後期から徳川期(16世紀末から18世紀)にかけて、当地が一貫して屋敷地であることがわかった。東区では各時期の敷地境に関する遺構がみられ、その変遷を追うことができる。すなわち、豊臣後期の第4b層上面SD124は東西に伸び、屋敷地を南北に分かっている。一方、大坂ノ陣後の整地層より上位の第3a-i・ii層上面SX42・SA2、第2b層上面のSX32、第2a-ii層上面のSA3はいずれも南北に主軸をもつ区画施設で、東西に屋敷地を分割するようになっている。このことは、松平氏による大坂城下町の復興工事によって、敷地割に変化があったことを示しているであろう。

また、西区第4a層上面でみられた金属加工に係る遺物を含む遺構から、徳川初期、この地で鍛冶や鋳物などの生産活動が行われていたことがわかった。

屋敷地全体の把握、道路との関係は未解明で、今後の調査の進展が待たれる。

#### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大阪城跡発掘調査(OS07-8)報告書」：「大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)」、pp-103-114

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大阪城跡発掘調査(OS08-10)報告書」：「大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」、pp-219-226

大阪市文化財協会2003、「OS92-19次およびその周辺の調査」：「大阪城跡Ⅶ」、pp.157-168

中央区玉造二丁目22-12における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-12)報告書

調査個所 大阪市中央区玉造2丁目22-12  
調査面積 60㎡  
調査期間 平成30年1月22日～1月26日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮東南縁部から東へ150m足らずで、北は城星学園、南は大阪女学院に挟まれた街区に位置する。古代では難波宮城外でも東縁に近く、近世の豊臣氏大坂城では三ノ丸地域と推定された一画にあり[松尾信裕2005]、「玉造谷」と「上町谷」に挟まれた谷の南岸側に当る。本文の煩雑を避けて「玉造南谷」と仮称しておくが(図1)、本調査から北西100mのNW12-5次調査地では「玉造南谷」は認識されていない[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]。谷筋が図1より南を通る可能性も考えられよう。また、NW12-5次調査地では18世紀後葉の矢穴のある花崗岩の切石が出土し、NW48次調査地[難波宮址顕彰会1974]や、NW154-3次調査地[大阪市文化財協会1981]でも見つかっているため、この地が石材置き場であったか付近に石屋が存在したと推測されている。

大阪市教育委員会の試掘調査により地表下約1.2m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世の遺構面および遺物包含層が検出され、発掘調査を行うこととなった。上記のとおり、豊臣期および徳川期の大坂城に係わる情報を得ることがおもな目的である。

当初は調査地の西北部に65㎡の調査区を予定していたが、敷地の出入との関係で東北部に移し、面積を若干減じて60㎡とした。平成30年1月22日に調査を開始した。重機によって後述の第3層上面までを掘削して遺構を検出し、写真・図面などの記録を取りながら掘削を進めて、1月26日に現地における調査を終了した。

本文で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

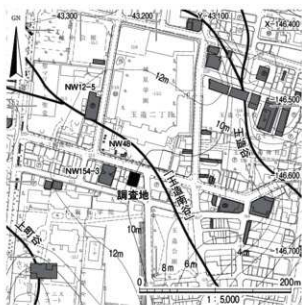


図1 調査地位置図(古地形復元は[趙哲済ほか2013]による)



図2 調査区配置図

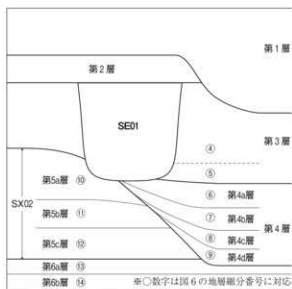


図3 地層と遺構の関係図

第3層：明黄褐色(10YR6/8)シルト質～粘土質粗粒砂層を主体に、下部で黄灰色(2.5Y5/1)含細粒砂偽礫、シルト質中粒砂層が認められる。層厚120cm以上となる分厚い客土層である。本層の上面で後述のSE01を検出した。調査区東壁では北から南へ向って埋めた堆積状況が明瞭に観察される。中世以前に遡るであろう赤褐色の土師器細片や平瓦片や近世の平瓦片が出土した。これらは細片のため図化しておらず、詳細な時期は不明だが、徳川期の天下普請に当る客土層の可能性を考えている。

第4層以下はSE01の截割りをしたトレンチ内で断面観察した所見である(図6)。出土遺物は確認できなかった。

第4層：本層は谷の中に堆積した水成層ないし、それを母材とする古土壌で、客土層である第5層への上面へ収斂している。確認した範囲では4層に細分された。4a層は黄灰色(2.5Y4/1)細粒～粗粒

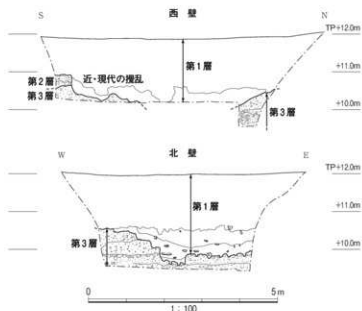


図4 調査区地層断面図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4・6)

調査区の現況地形は、およそTP+12.0mではほぼ平坦である。

第1層：炭・黄褐色偽礫を含む灰オリーブ色細粒砂質シルトからなる現代の整地層および攪乱の埋土で、最大層厚は約245cmである。

第2層：炭を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト～灰オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂質シルト層で、最大層厚は40cmである。調査区西南の一部で検出した。近世の作土層であろう。

砂の水成層で下部がやや暗色化している。4b層は黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト～細粒砂で水成層である。4c層は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質極細粒砂で上部は古土壌であろう。4d層は黒色(2.5Y2/1)シルト質極細粒砂の古土壌である。層厚は、合わせて60cm以下を確認した。

第5層：次項の第6a層上面の客土層で、確認した範囲では3層に細分された。5a層は灰色極細粒砂偽礫を含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト層である。5b層は灰色(5Y4/1)中粒～細粒砂層である。5c層は灰色

(7.5Y5/1)中粒砂～シルト質細粒砂層である。層厚は合わせて60cm以下である。本層で構築された高まりをSX02とするが、平面的な広がりについては未確認である。

第6層：本層は第4層と近い岩相であり、SX02構築以前に「玉造南谷」内に堆積した水成層ないしそれを母材とする古土壌と考えられる。6a層はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト層で古土壌と思われる。6b層は灰色(5Y4/1)細粒～中粒砂層の水成層である。

#### ii) 遺構と遺物(図5～7)

本調査で検出された遺構は第6層上面SX02と第3層上面のSE01の2つである。

SX02は先述のとおりSE01の截り断面で確認したのみであり、遺構の広がり是不明であるが、上位の第4層によって覆われた上面は北へ向って低く傾斜しており、第3層の造成方向とは逆である。「玉造南谷」の南斜面を第5層で埋めた造成の末端部の可能性があると考えておく。出土遺物はないが、第4層を狹在して方位の全く異なる第3層の造成が行われており、これだけの規模の造成工事としては徳川初期の天下普請の可能性が高いと考えられることから、SX02は豊臣期大坂城に遡る工事の可能性があろう。

SE01は南北1.6m、東西1.2mの素掘りの井戸である。検出面からの深さは1.4mであるが、本来の

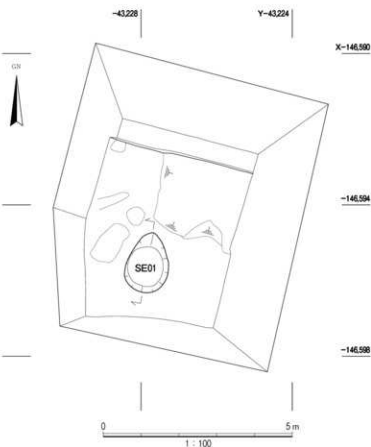
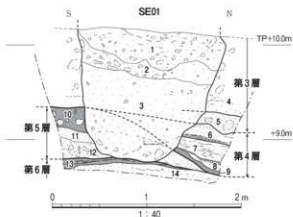


図5 遺構平面図



- SE01
- 1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)含黄褐色シルト偽礫-炭、中粒砂質シルト
  - 2：黄褐色(2.5Y5/6)含灰白色シルト偽礫、中粒砂質シルト
  - 3：灰オリーブ色(5Y3/3)含暗褐色シルト偽礫、細粒～中粒砂シルト
- 第3層(客土層)
- 4：明黄褐色(10YR6/8)シルト質～粘土質粗粒砂
  - 5：黄灰色(2.5Y3/1)含細粒砂偽礫、シルト質中粒砂
- 第4層(水成層ないしそれを母材とする古土壌：谷内の堆積層)
- 6(4a層)：黄灰色(2.5Y4/1)細粒～粗粒砂(下部がやや暗色化している)
  - 7(4b層)：黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト～細粒砂
  - 8(4c層)：黒褐色(2.5Y3/1)シルト質極細粒砂(上部古土壌)
  - 9(4d層)：黒色(2.5Y2/1)シルト質極細粒砂(古土壌)
- 第5層(SX02：客土層)
- 10(5a層)：オリーブ黒色(5Y3/1)含灰色極細粒砂偽礫、シルト
  - 11(5b層)：灰色(5Y4/1)中粒～細粒砂
  - 12(5c層)：灰色(7.5Y5/1)中粒砂～シルト質細粒砂
- 第6層(水成層ないしそれを母材とする古土壌：谷内の堆積層)
- 13(6a層)：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト(古土壌)
  - 14(6b層)：灰色(5Y4/1)細粒～中粒砂(水成層)

図6 遺構断面図

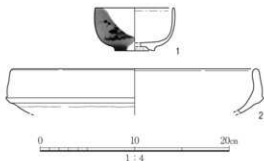


図7 出土遺物実測図  
SE01(1・2)

をヨコナデで消している。18世紀前葉のものであろう。1は草花文を描いた染付碗で、体部はやや丸みを帯び、口縁部内面が無軸であることから蓋物であろう。これらは17世紀末～18世紀前葉のものであり、18世紀前葉にはSE01が廃絶していたことを示す。

### 3) まとめ

本調査地では「玉造谷南谷」を埋めた2時期の造成工事を認めることができた。古い段階は、規模は不明だが南から北へ向かって谷の一部を埋めた工事の北端に当たると考えた。この段階では谷は残り、再び自然の堆積物が谷を埋めていくが、後により規模の大きな造成工事が北から南へ行われる。おそらくこの段階で、谷のほとんどが埋められたものと考えられる。工事の規模や埋立ての方向が大きく異なることから前者を豊臣期に、後者を徳川初期の大坂城再建に係る天下普請によるものと推測しておくが、今後の周辺調査での検証が必要である。

徳川期では18世紀前葉以降に廃絶された素掘りの井戸を検出し、耕作に係るものの可能性がある。

### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「中央区玉造二丁目における建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW12-5)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』, pp.77-86
- 大阪市文化財協会1981,「宮城東辺部の調査略報」:『難波宮跡研究調査年報 1975～1979.6』, pp.72-80
- 難波宮跡顕彰会1974,「第48次発掘調査概報」:『難波宮跡研究調査年報 1973』, pp.26-28
- 趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2013,「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」:脇田修「大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型-」
- 松尾信裕2005,「豊臣期大坂城の成立と展開」:『ヒストリア』, 大阪歴史学会, pp.1-23

掘込み面は第3層上面より上位であったと推定される。黄褐色シルトや灰白色シルトの段丘構成層を起源とする偽礫を大量に含む細粒～中粒砂質シルト層で埋められていた。偽礫には暗褐色シルトもあり、中世以前の地層の可能性があるが、調査区内では未検出である。

出土遺物には土師器焙烙2や肥前磁器碗1がある。2は立上りが垂直で浅く、かき上げの痕



中央区南新町一丁目33における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS17-13)報告書

調査個所 大阪市中央区南新町1丁目33  
調査面積 約24㎡  
調査期間 平成30年2月27日～3月1日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、平田洋司

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は本町筋から西へ1つ目、本町通りから北へ2つ目の街区に位置し、豊臣期大坂城の西部、三ノ丸に近接した惣構内に当る。また、地形的には上町台地頂部から西斜面を西南西方向に下刻する本町谷内に位置している。周辺では多くの調査が行われ、谷が埋没して土地利用がされていくようすが確認されている。また、谷以外の部分では比較的地山が高く検出される地域でもあり、豊臣期の生活面は大坂ノ陣の焼土層を含め、徳川期の整地により削平され、遺構のみが遺存している場合が多い。今回調査地の西側、OS92-6次調査では、南東に下がる谷内から飛鳥時代の土器が大量に出土したほか、中世の井戸が見つかった[大阪市文化財協会2003]。南のOS89-7次調査では北西方向に下がる谷斜面から飛鳥時代の遺構・遺物が確認され、豊臣前期・徳川期の遺構・遺物も見つかった[大阪市文化財協会2003]。東のOS92-12次調査でも北西が低くなる谷内から飛鳥時代を主体とする遺物が出土したほか、中世の堆積土、豊臣前期の礎石建物群、豊臣後期の大溝が検出されている[大阪市文化財協会2003]。

今回の調査地は大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下1.6m以下に近世の遺構面が検出されたため、調査を実施することとなった。平成30年2月27日より市教委の指示に基づき、比較的地層の残存状況がよい敷地北部に調査区を設定し、調査を開始した。当初、東西5m、南北6mで30㎡の調査区を設定する予定であったが、隣地との余地の関係および残土置場との関係から、東西幅・南北幅いずれも予定より減ぜざるを得なかったため、調査面積は24㎡となった。重機による掘削は現代の整地層である第1層までを行い、以下は人力による掘削を行った。また、掘削深度が深くなることから、第2層以下の掘削については四周に安全のため犬走りを設置した。途中適宜に遺構検出・掘削作業、



図1 調査地位置図

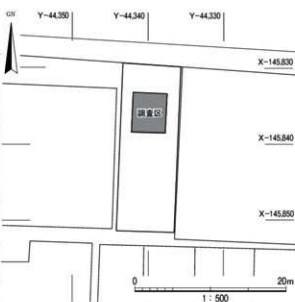


図2 調査区位置図

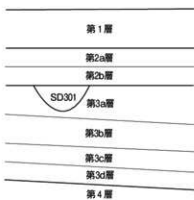


図3 地層と遺構の関係図

図面作成・写真撮影などの記録作業を行いながら調査を進めた。平成30年3月1日、現地における作業を終了した。

なお、調査に使用した基準点はMagellan社製ProMark 3により測位を行ったが、良好な結果が得られなかったため、本報告では、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4、図版上)

調査地の標高はTP+10.9~11.1mとほぼ平坦である。調査では部分的な掘削を含め、現地地表約3.0mまでの地層を確認し、第1~4層の4層に区分した。

第1層：現代の整地層および攪乱で、層厚は120~140cmである。

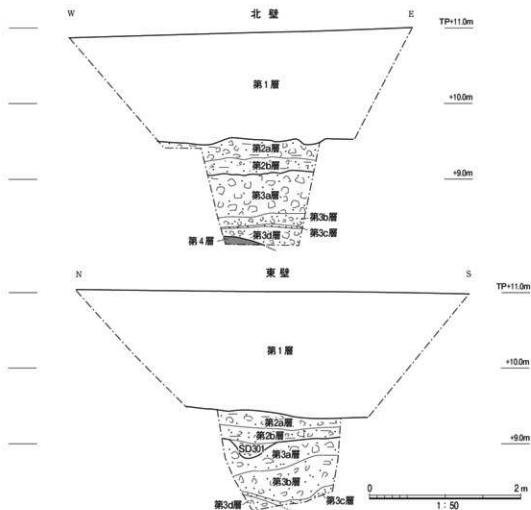


図4 地層断面図

第2層：第2a層と第2b層に区分した。第2a層はシルトおよび粘土偽礫を多く含む褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂からなる整地層である。周辺で観察される地山層由来の偽礫が目立つ。層厚は20cmである。第2b層はシルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5YR5/2)細粒砂混りシルト質粗粒砂からなる整地層で、層厚は15~20cmである。第2層出土の遺物は多くないが、肥前陶器を含み、豊臣後期の整地層と考えられる。大坂ノ陣の焼土に由来する偽礫が含まれないことから徳川期以降の整地層ではないといえよう。

第3層：第3a~3d層に区分した。谷を埋めた一連の整地層である。西北部で層厚90cmを確認したが、その他の場所では下端を確認することはできなかった。第3a層はシルトおよび粘土偽礫を多量に含むにぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂からなる。地山層由来の偽礫が目立つ。層厚は20~50cmである。上面は固く締まり、生活面となる。本層上面で溝SD301を検出した。第3b層はシルト偽礫を多く含む灰色(5Y4/1)粗粒砂からなり、層厚は15~50cmである。第3c層はオリブ灰色(5GY5.5/1)粗粒砂からなり、層厚は5~40cmである。第3d層はシルト偽礫を多く含むオリブ灰色(5GY5/1)粗粒砂からなり、層厚は20cm以上である。第3層からの遺物は多くないが、肥前陶器を含まないなど豊臣前期の様相を示す。近隣の調査の成果と合わせ、1598(慶長3)年の整地層の可能性が高い。

第4層：腐食物を含む黒褐色(10YR3/2)シルトからなり、層厚は10cm以上である。激しい湧水のため調査区西北端で一部を確認したのみであるが、谷の自然堆積層であろう。南東へと低くなる。遺物は出土しなかったが、豊臣前期以前の地層であろう。

#### ii) 遺構と遺物(図5・6、図版中・下)

遺構検出は第2a層上面以下、各層で行った。調査では谷が埋没していくようすを確認することができた。第2~4層は谷埋土と谷に係わる整地層と考えられる。

第4層は谷内の自然堆積層であるが、それ以下が観察できなかったため、さらに下位にも整地層があり、整地の一時的な休止面であった可能性もある。

第3層は谷をほぼ平坦に埋める整地層と考えられ、上面の標高はTP+9.1mである。第3d層からは中国産青花・平瓦片が出土した。1は中国産青花碗の小片で、口縁部内外面に圏線が認められる。第3c層からは土師器・備前焼片が出土した。2は土師器皿で豊臣前期に位置付けられる。谷を埋め立てる第3層の厚い整地層は周辺の調査成果とも合わせて、1598(慶長3)年の三ノ丸造成および大坂町中屋敷替に伴うものと考えられる。

第3a層上面では溝SD301を確認した。

SD301：幅0.6m、深さ0.3mの東西方向の溝である。埋土はシルト偽礫を含む灰色(5Y5.5/1)粗粒砂質シルトからなり、下部には部分的に水流の痕跡が認められる。遺物は出土しなかったが層序関係からは豊臣後期の遺構といえる。ほぼ正東西方向であるが、検出範囲が狭いため正確な方位は不明としておきたい。

第2層は豊臣後期の中での整地層と考えられる。第2b層上面では遺構は確認できなかった。第2b層からは土師器片・肥前陶器・平瓦片が出土した。3は肥前陶器碗で灰色の軸が掛かる。これらの遺物は豊臣後期に位置付けられる。

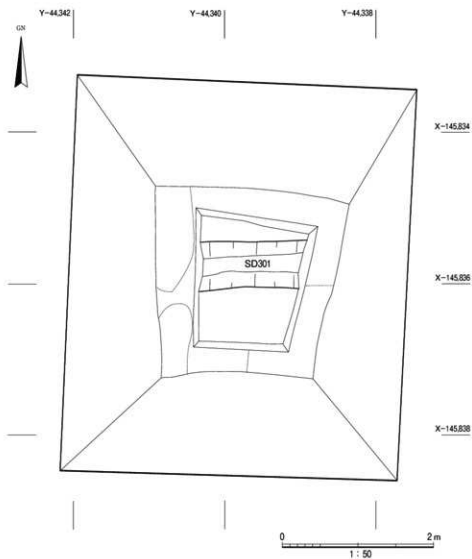


図5 第3層上面遺構平面図



図6 出土遺物実測図

第3d層(1)、第3c層(2)、第2b層(3)

第2a層上面でも遺構は確認できなかったが、上部を削平されているため本来の生活面の高さおよび遺構の有無は不明である。第2a層からは土師器・肥前陶器・中国産青花・瓦片が出土した。豊臣後期に位置付けられる。

### 3) まとめ

今回の調査では調査地が本町谷内に位置することが追認でき、埋没の一端を明らかにすることができた。攪乱が深くまで及んでいたこと、狭い面積であったこともあり、各時期の様相などは不明であるが、今後の周辺の調査の進展に期待したい。

#### 引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「OS86-35次およびその周辺の調査」：『大坂城跡』Ⅶ、pp.223-242

中央区島之内二丁目49-2における建設工事に伴う  
島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI17-1)報告書

調査個所 大阪市中央区島之内2丁目49-2  
調査面積 25㎡  
調査期間 平成29年7月4日～7月11日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、松本啓子



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大阪市における南北主要幹線道路の1つである堺筋から東へ約110m、道頓堀川から北へ約220mの場所に位置する(図1)。周辺で既往の調査としては、西約70mの地点のSI11-1次調査と南東約300mの地点のSI04-1次調査がある。SI11-1次調査では、TP+2.2m以下で海浜砂層を検出し、徳川初期以降の遺構と遺物を検出している。[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。また、SI04-1次調査では、TP+0.2m以下で水成の砂層を検出し、18世紀以降の遺構と遺物を検出した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。

平成29年4月26日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、本地点においても地表面下1.6m以下の深さで、近世以前の遺構面と遺物包含層が確認されたため、本調査を実施することとなった。地表面下1.6mの深さまで事業者が重機で掘削した後、関係諸機関と打合せを行い、排土置場と作業効率を考慮し、図2のとおり東西5m、南北5mの調査区に変更して平成29年7月4日に調査を開始した。地層ごとくに人力で掘り下げて遺構・遺物の検出を行い、適宜、写真・図面等の記録をとり、遺物を採集した。7月11日に現地における掘削や記録などの作業を終え、器材類を撤収して調査を完了した。

なお、本報告の平面図に示す方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪デジタル地図にあてはめて得た世界測地系座標の座標北で、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4・6、図版上)

調査地の現況地形は平坦で、地表面の標高はTP+3.5m前後であるが、調査地北辺の道路は50mほ

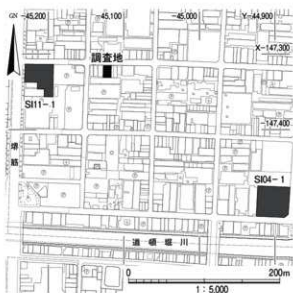


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

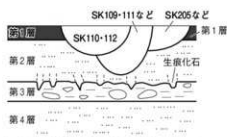


図3 地層と遺構の関係図

第2a層は、調査区全域に堆積する黄色(2.5Y8/4)細粒砂層で、最大層厚は55cmであった。本層の上端はほぼ水平である。第2a層からは図6に示した徳川初期の肥前陶器碗1が出土した。

第2b層は、褐灰色(10YR6/1)シルト混り細粒砂層で、最大層厚は10cmで、ほぼ水平に堆積する。調査区の南東隅以外に分布する。遺物は出土していない。

第2c層は、調査区全域に堆積する浅黄色(2.5Y7/4)細粒砂層で、東に向かって下がって堆積し、層厚は15~60cmあって、東壁で最大になる。下端付近から第3層にかけて生痕化石が観察された(図版上)。遺物は出土していない。

第3層：調査区全域に堆積する黒褐色(10YR3/1)細粒砂混りシルト層で、最大層厚は30cmである。

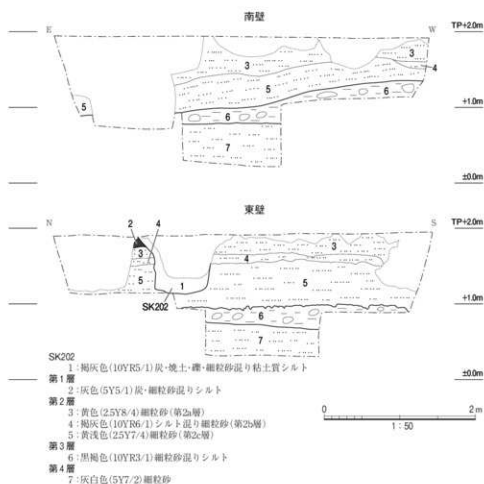


図4 南壁・東壁地層断面図

どの間で約0.3m西から東へと下がっている。

調査開始面からの層序は以下の通りである。

第1層：調査区北半部に残る灰色(5Y5/1)炭・細粒砂混りシルト層で、近世初頭の整地層である。最大層厚は16cmであった。本調査の遺構はすべて本層上面で検出した。

第2層：シルト～細粒砂からなる自然堆積層で、3層に細分した。

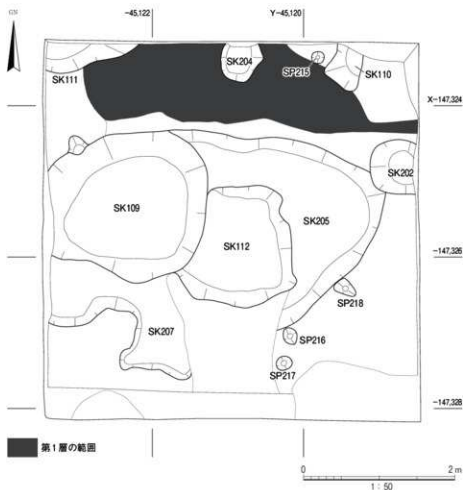


図5 第1層平面図

本層中には大小さまざまな形状の灰白色(5Y7/2)細粒砂が偽壁状に観察された(図版上に見える円形の遺構の断面参照)。また、先にも述べた本層と第2c層の間で観察された生痕化石も灰白色(5Y7/2)細粒砂の中に詰まっていた。

本層の上端は東に下がる傾斜となるが、下端はほぼ水平であった。遺物は出土していない。

第4層：調査区全域に堆積する灰白色(5Y7/2)細粒砂層で、自然堆積層である。層厚は55cm以上ある。上端はほぼ水平であった。遺物は出土していない。

ii) 遺構と遺物(図5・6、図版下)

第1層の上面で17世紀代と18世紀代の遺構を検出した。

17世紀代の遺構は、土壇SK202・204・205・207と、小穴SP215~218である。

SK202は、東西0.7m以上、南北約0.7m、深さ約0.7mの土壇で、埋土は褐灰色(10YR5/1)炭・焼土・礫・細粒砂混り粘土質シルトである。遺物は、17世紀後半の土師器焙烙・焼塩壺のほか、丹波焼、肥前陶器、肥前磁器、中国漳州窯産青花、鉄釘が出土した。

SK204は、東西約0.6m、南北0.5m以上、深さ約0.3mの土壇で、埋土は褐灰色(10YR5/1)炭・焼土・礫・細粒砂混り粘土質シルトである。遺物は、17世紀後半の土師器焙烙・火鉢、肥前磁器青磁碗・染付碗が出土した。

SK205は、SK112・109によって西側と南側を削平されているため、正確な規模はわからないが、現状で、東西2.8m以上、南北2.6m以上、深さ約0.4mの土壌である。埋土は褐色(10YR5/1)炭・焼土・礫・細粒砂混り粘土質シルトである。土師器焙烙・焼塩壺のほか、瓦質土器、備前焼、丹波焼播鉢、京焼、肥前陶器、肥前磁器といった国産の陶磁器と、中国産青花、銅銭、瓦、鈇滓など、17世紀初頭までの遺物が出土した。これらのうち、瀬戸美濃焼陶器灰釉折縁ソギ皿2、肥前陶器灰釉丸碗3・皿4を図6に示した。

SK207は、東西2.0m以上、南北2.0m以上、深さ約0.2mの不整形な土壌で、SK109・112やそれ以降の攪乱によって大半が失われている。いくつかの土壌が重なっているのかもしれない。埋土は灰黄

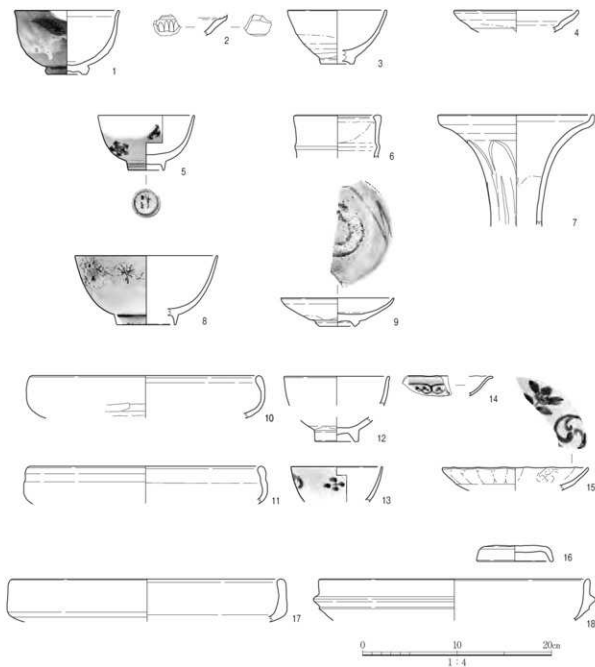


図6 出土遺物実測図

第2a層(1), SK205(2~4), SK109(5~9), SK110(10~15), SK111(16~18)

褐色(10YR5/2)炭・焼土・シルト混り細粒～中粒砂である。遺物は、土師器火鉢・皿と肥前陶器灰軸碗、肥前磁器染付碗、瓦、硯、砥石が出土した。これらは17世紀のものである。

SP215～218は、径が0.15～0.35mの円形または楕円形の小穴で、深さは0.05～0.10mである。いずれも調査区の東半で見つかったが、組み合わせるものはない。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)シルト混り細粒砂で、遺物は出土しなかった。

18世紀代の遺構は、土壙SK109～112である。

SK109は、東西2.1m以上、南北約2.0m、深さ約1.0mの瓦溜めで、埋土は灰黄色(2.5Y4/2)炭・焼土・礫混りシルト質砂である。遺物は、大量の瓦とともに18世紀前半の遺物が出土した。これらのうち、肥前磁器の染付「大明年製」銘コンニャク印判五弁花文碗5、染付蛇の目軸刺皿9、青磁竹節形香炉6、青磁蓮弁文瓶7、色絵鉢8を図6に示した。

SK110は、東西0.5m以上、南北約0.6m以上、深さ約0.6mの土壙で、埋土は灰色(5Y5/1)炭混り砂質シルトである。18世紀前半までの遺物が出土した。これらのうち、土師器焙烙10・11と肥前陶器内野山系碗12、景德鎮青花皿14、肥前磁器の染付くらわんか碗13・染付輪花皿15を図示した。

SK111は、東西1.2m以上、南北約0.5m以上、深さ約0.6mの土壙で、埋土は褐灰色(10YR5/1)炭混りシルト質砂である。18世紀中頃までの遺物が出土した。これらのうち、土師器焙烙17・18と焼塩壺の蓋16を図示した。

SK112は、東西約1.6m、南北約1.6m、深さ約0.5mの土壙で、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)炭・粘土・礫・シルト混り粗粒砂である。焼けた壁土や軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦、輪の羽口・鉾滓などとともに18世紀前半までの遺物が出土した。

### 3)まとめ

今回の調査では、17世紀と18世紀の遺構を調査開始面で検出した。また、北半にわずかに残る近世初頭の整地層(第1層)を検出した。さらに、第1層の下に堆積する水成層中で、生痕化石を検出した。

これらのことから、調査地周辺が町屋として開発されるのは中世末～近世初頭の頃と考えることができる。こうした成果はこのあたり一帯の歴史的景観を復元するための手がかりとなる。今後の調査と合わせてさらなる検討を行いたい。

#### 引用参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI04-1)報告書」：「平成16年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.19-20

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI11-1)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)」、pp.375-384



中央区島之内二丁目9-24における建設工事に伴う  
島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI17-2)報告書

調査個所 大阪市中央区島之内2丁目9-24  
調査面積 55㎡  
調査期間 平成29年8月30日～9月6日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋 工、松本啓子



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大阪市における南北主要幹線道路の1つである堺筋から東へ約200m、道頓堀川から北へ約100mの場所に位置する(図1)。周辺で既往の調査としては、北西約200mの地点のSI11-1次調査と南東約150mの地点のSI04-1次調査、北西約150mのSI17-1次調査がある。SI11-1次調査では、TP+2.2m以下で海浜砂層を検出し、徳川初期以降の遺構と遺物を検出した。[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。また、SI04-1次調査では、TP+0.2m以下で水成の砂層を検出し、18世紀以降の遺構と遺物を検出した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。そして、SI17-1次調査では近世初頭の整地層の上で17世紀と18世紀の遺構と遺物を検出し、下位の水成層で生痕化石を検出した[大阪文化財研究所2017]。

平成29年4月14日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、本地点においても地表下1.5m以下の深さで、近世以前の遺構面と遺物包含層が確認されたため、本調査を実施することとなった。当初は東西15m×南北5mの調査区を予定していたが、調査開始直前に行った現地での関係諸機関との打合せで、隣地境界の安全を確保するため、図2のとおり東西10m、南北5.5mの広さの調査区に変更することになった。

調査は平成29年8月30日より開始した。地表下1.5mの深さまで重機で掘削した後、地層ごとに人力で掘り下げて遺構・遺物の検出を行い、適宜、写真・図面等の記録をとり、遺物を採集した。9月6日に現地における掘削や記録などの作業を終え、機材類を撤収して調査を完了した。

なお、本報告の平面図に示す方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪デジタル地図にあてはめて得た世界測地系座標の座標北で、標高はTP値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記した。



図1 調査地位置図

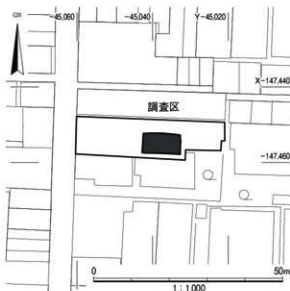


図2 調査区配置図

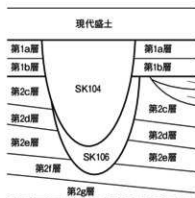


図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4・6、図版上)

調査地の現況地形は平坦で、地表面の標高はTP+3.0m前後である。

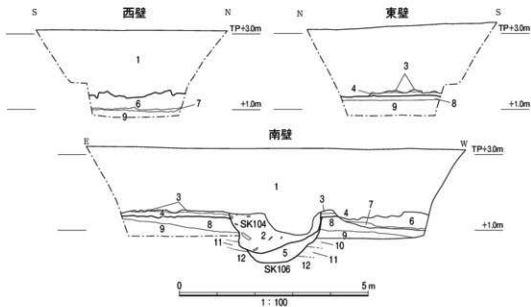
現代盛土以下の層序は以下の通りである。

第1層：17世紀末～18世紀中頃の整地層で、2層に細分した。

第1a層は固くしまった灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂混りシルト質砂層で、後世の攪乱で本層の上面はさほど平坦ではないが、ほぼ水平に堆積し、均質に固く締まっていることから、本層の上面が生活面になっていたと考えられる。本層から土師器の十能12が出土し、本層上面で18世紀中頃のSK104を検出した。

第1b層は灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂混りシルト質砂層で、ほぼ水平に堆積する。最大厚層は第1a層が10cm、第1b層が18cmであった。遺物は第1b層と第2c層の境界で17世紀後半頃とみられる肥前磁器染付の高台部分11が出土した。

第2層：シルトや砂からなる水成の自然堆積層で、7層に細分した。各層とも東から西へと下がるラミナが観察された。本層からの出土遺物はない。本層上面で17世紀末頃のSK106を検出した。



### 現代盛土

1: 暗褐色(10YR3/3)灰-焼土混り砂質シルト

### SK104

2: 黒褐色(2.5Y3/2)シルト・礫混り砂

### 第1a層

3: 灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂混りシルト質砂

### 第1b層

4: 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂混りシルト質砂

### SK106

5: にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土・細粒砂混りシルト

### 第2a層

6: 褐色(10YR4/6)礫混り細粒砂

### 第2b層

7: 灰黄褐色(10YR5/2)砂混り粘土質シルト

### 第2c層

8: 黄褐色(10YR5/8)粗粒～細粒砂と礫の互層

### 第2d層

9: 明黄褐色(10YR6/8)細粒砂質シルト

### 第2e層

10: 浅黄色(2.5Y7/4)礫混り細粒～粗粒砂

### 第2f層

11: 黄褐色(2.5Y5/4)礫混り細粒～粗粒砂

### 第2g層

12: オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂混り粗粒砂～礫

図4 地層断面図

第2a層は、褐色(10YR4/6)礫混り細粒砂層で、調査区の西半に分布する。最大層厚は45cmである。  
 第2b層は、灰黄褐色(10YR5/2)砂混り粘土質シルト層で、最大層厚は15cmである。  
 第2c層は、黄褐色(10YR5/8)粗粒～細粒砂と礫の互層で、層厚は38cmである。  
 第2d層は、明黄褐色(10YR6/8)細粒砂質シルト層で、層厚は50cm以上である。  
 第2e層は、浅黄色(2.5Y7/4)礫混り細粒～粗粒砂層で、層厚は15cmである。  
 第2f層は、黄褐色(2.5Y5/4)礫混り細粒～粗粒砂層で、層厚は30cmである。  
 第2g層は、オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂混り粗粒砂～礫層で、層厚は30cm以上である。

ii) 遺構と遺物(図5・6、図版中・下)

第2層の上面でSK106を検出し、第1層の上面でSK104を検出した。この2基の土壇はほぼ同じ位置にあって、SK104よりSK106は大きく壊されていた。

SK106は、東西約2.0m、南北1.5m以上、深さ約1.2mの土壇で、埋土にはいり黄色(2.5Y6/4)粘土・細粒砂混りシルトである。上部がSK104によって削平されているため、出土遺物は少なく、図化しえたものはないが、17世紀末頃の土師器や肥前磁器などの遺物が出土した。

SK104は、東西約2.5m、南北2.0m以上、深さ約1.1mの土壇で、埋土は黒褐色(2.5Y3/2)シルト・

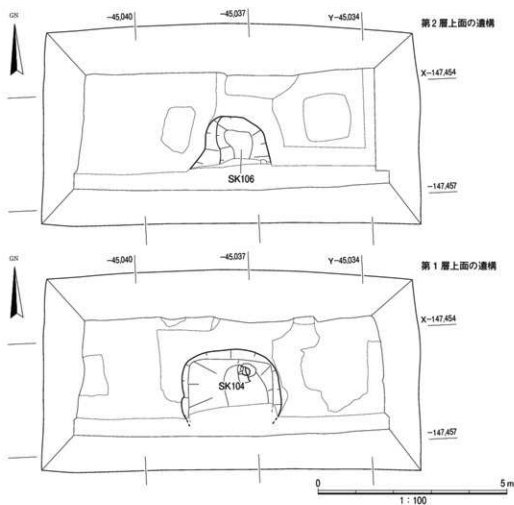


図5 遺構平面図

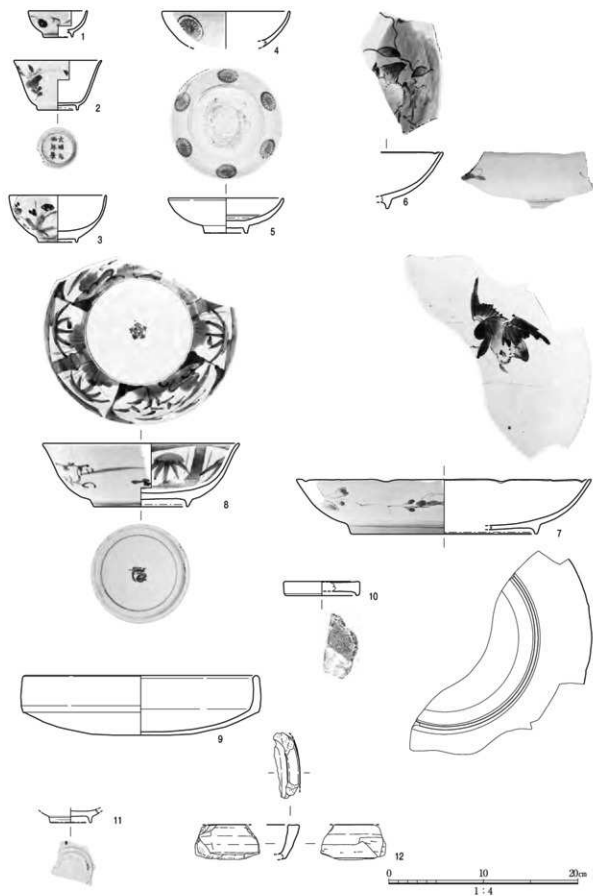


图6 出土遗物实测图  
第1b层(11)、第1a层(12)、SK104(1~10)

礫混り砂である。出土遺物のうち、肥前磁器1～8と、土師器焙烙9・焼塩壺の蓋10を図6に示した。1は染付小杯、2は「大明成化年製」銘の染付杯、3は染付草花文碗である。4・5はコンニャク印判の菊花文を染付けた皿で、やや大きさは異なるが揃いの器であろう。5は内面を蛇の目状に釉剥ぎしている。6と7は内面に鳥を描いた輪花大皿で、8は内面に笹か竹の図案を巡らせ、見込みにコンニャク印判で五弁花を押し、高台内に渦福を描く染付鉢である。

これらの遺物は18世紀中頃のもので、SK104の時期を示す。

### 3)まとめ

今回の調査では、自然堆積層の上面で17世紀末の遺構を、また、整地層の上面で18世紀中頃の遺構を検出した。これらから、調査地あたりは17世紀末頃には町屋として開発されていたことがわかる。こうした成果は、このあたり一帯の歴史的景観を復元するための手がかりとなる。今後の調査と合わせてさらなる検討を行いたい。

#### 引用参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI04-1)報告書」：「平成16年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.19-20

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI11-1)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)」、pp.375-384

大阪文化財研究所2017、「中央区島之内二丁目49-2における建設工事に伴う島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI17-1)報告書」



中央区上汐二丁目 2 - 29 他における建設工事に伴う  
上本町遺跡発掘調査(UH17-6)報告書

調査個所 大阪市中央区上汐2丁目2-29他  
調査面積 54㎡  
調査期間 平成29年12月26日～12月27日  
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上本町遺跡の中央部に当り、上町台地脊梁部の近世平野町を通る位置に推定される熊野街道に西面する位置にある。近接した調査事例は少ないが、北約300mの上汐一丁目で行われたUH14-1次調査地では飛鳥時代の建物群や中世の正南北に延びる溝など、難波宮前段階から前期難波宮期、およびその後の都市の変遷に係わる遺構が検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016]。北東150mのUN05-1次調査地では古代～近世の遺構に加えて、古代から中世にかけて埋没した谷頭付近にあたる落込みが見つかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]。この谷は南東へ延びて「味原谷」へ合流するものと考えられる。また、南50m付近のUH11-5次調査地では14世紀前半に廃絶した井戸が見つかり、古代の丸・平瓦のほか、中世の土器や軒丸瓦が出土していることから、熊野街道沿いの熊野参詣に関連する施設が存在した可能性が指摘されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。

大阪市教育委員会の試掘調査により現地表から0.4m下で近世以前の地層や遺構面が確認され、発掘調査を行うこととなった。古代・中世の状況を明らかにすることがおもな調査目的となる。

調査地内に東西9m、南北6mの調査区を設定し、平成29年12月26日に調査を開始した。重機によって後述の第3層(地山層)上面までを掘削して遺構を検出し、写真・図面などの記録を取りながら掘削を進めた。翌12月27日に現地における調査を終了した。

本文で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。



図1 調査地位置図

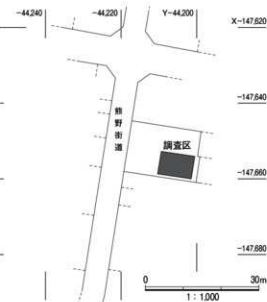


図2 調査区配置図



図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査区の現況地形は、およそTP+21.1～21.2mでわずかに西へ低くなっている。

第1層：現代の整地層および攪乱の埋土で、最大層厚は約90cmである。

第2層：炭と少量の地山偽礫を含む褐色(10YR4/6)細礫混り中粒砂質シルト層で、最大層厚約30cm弱である。近世の地層で、本層を埋土とする遺構が複数ある。本層は調査区南壁沿いにしか残存せず、第4層上面の検出作業で残った窪みを遺構と判断したが、本層のすべてが遺構埋土である可能性もある。

第3層：下位の第4層の偽礫を含む明黄褐色(7.5YR5/8)粘土層や、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土

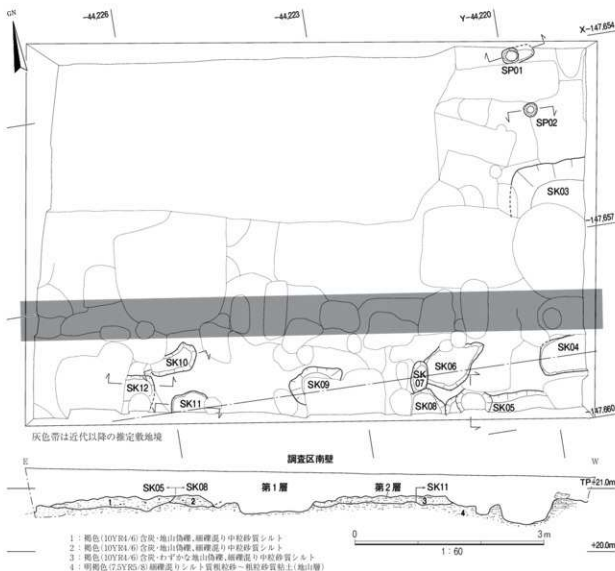


図4 調査区地層断面および遺構平面図

- 1: 褐色(10YR4/6)含炭・地山偽礫・細礫混り中粒砂質シルト
- 2: 褐色(10YR4/6)含炭・地山偽礫・細礫混り中粒砂質シルト
- 3: 褐色(10YR4/6)含炭・わずかな地山偽礫・細礫混り中粒砂質シルト
- 4: 明褐色(7.5YR5/8)細礫混りシルト質粗粒砂～粗粒砂質粘土(地山層)

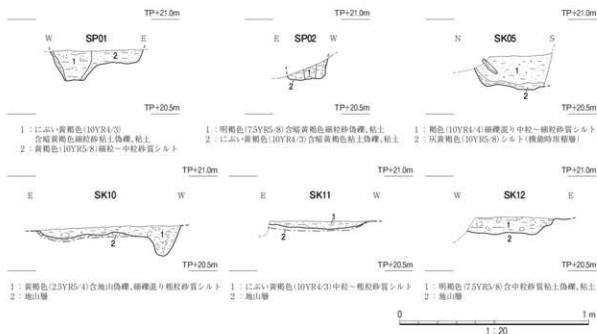


図5 遺構断面図

層などを主体とする遺構埋土である。古代から中世の地層であろう。

第4層：明褐色(7.5YR5/8) 細礫混りシルト質粗粒砂～粗粒砂質粘土層で、上町台地を構成する地山層である。

ii) 遺構と遺物(図4・5、写真1)

本調査ではすべての遺構を第4層上面で検出したが、第2層を埋土とするものと第3層で埋められたものがある。

第3層で埋められた遺構には調査区東北部のSP01・02および西南部のSK12があった。

SP01は長さ0.5m、幅0.25m、深さ0.2m弱で、直径15cmの柱痕跡があった。埋土は掘形が黄褐色細粒～中粒砂質シルト層、柱痕跡は細粒砂質粘土偽礫を含むぶい黄褐色粘土層であった。柱痕跡からの出土遺物に土師器1・2がある。甕や皿の細片と思われるが、詳細は不明である。1は赤褐色、2は浅黄褐色で、胎土は精良であり古代～中世に遡るものであろう。

SP02は直径0.2m、深さ0.1mで、直径8cm弱の柱痕跡があった。埋土は掘形が暗黄褐色粘土偽礫を含むぶい黄褐色粘土層で、柱痕跡は暗黄褐色細粒砂偽礫を含む明褐色粘土層であった。出土遺物はない。

SK12は攪乱によって規模は不明だが、深さ0.1m弱である。埋土は明褐色粘土層で中粒砂質粘土偽礫を多く含んでいた。出土遺物はない。

以上のほかは第2層を埋土とする近世の土壌である。

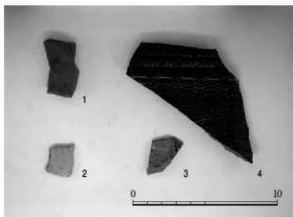


写真1 出土遺物

SP01(1・2)、SK03(4)、SK05(3)

SK05は東西2.0m以上、深さ0.25mで、埋土は上部が褐色細礫混り中粒～細粒砂質シルト層で、下部は機能時堆積層である灰黄褐色シルト層であった。出土遺物には須恵器細片3があり、器形は不明だが中世以前の可能性がある。

SK10は東西0.8m、深さ0.2m弱で、埋土は黄褐色細礫混り粗粒砂質シルト層で地山偽礫を含む。

SK11は東西0.5m、深さ0.05mで、埋土はにぶい黄褐色中粒～粗粒砂質シルト層である。

以上のほか、遺構から出土した遺物にSK03の肥前陶器鉢4がある。直立する体部に刻目や波状の文様を施した17世紀後葉のものである。

なお、調査区南部では南壁と並行して東西に並ぶ攪乱があり、地山の色調がやや薄く変色している地帯がある(図4の灰色帯)。近代以降の敷地境であった可能性があろう。SK04・06・09・11はこの南側に近接して直線上に等間隔で並んでいる。これらの土壌が柱穴であった確証はなく、方位も一致しないが、徳川期の敷地境であった可能性も考えられよう。

### 3)まとめ

本調査地では古代～中世に遡る遺構として、柱穴2基のほか小型の土壇1基を確認した。台地脊梁部に近いこの付近では常に後代の削平や攪乱がおよぶことから、かつてはさらに多くの遺構が存在していた可能性が高い。当地における難波京や熊野街道の解明もまだ十分に進んではおらず、引き続き周辺地域における細密な調査が必要であろう。

### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「上本町北遺跡B地点発掘調査(UN05-1)報告書」:「平成17年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.19-25
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「上本町遺跡発掘調査(UH11-6)報告書」:「平成23年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.67-74
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016、「上本町遺跡発掘調査(UH14-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2014)」、pp.225-234
- 横山洋2010、「難波大道と難波京」:「東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究」、PP.69-

---

大 阪 市 内 埋 蔵 文 化 財 包 蔵 地  
発 掘 調 査 報 告 書 ( 2 0 1 7 ) 第 1 分 冊

発 行 日 平 成 3 1 年 3 月 2 9 日

発 行 大 阪 市 教 育 委 員 会  
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編 集 大 阪 市 教 育 委 員 会 事 務 局 文 化 財 保 護 課  
(大 阪 市 北 区 中 之 島 1-3-20)

印 刷 株 式 会 社 フォーラム K

---

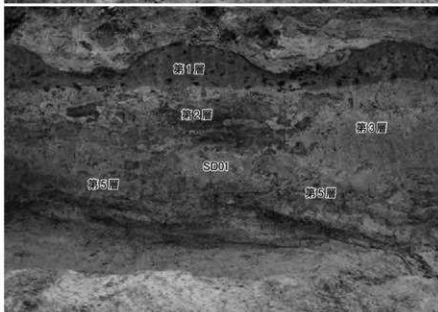
第4層上面全景  
(南東から)



南壁地層断面1



南壁地層断面2



南壁地層断面(北から)



第5層上面全景(東から)



SX301・201と  
第3層下部の  
遺物出土状況  
(第4層上面：東から)



東壁地層断面



SX701(北から)



第5層上面(南から)





第4層上面(南東から)



第3層上面(北から)



竈SX311(北東から)



東壁地層断面  
(第6層まで)



第6c層上面(南から)



礎石に残る柱痕跡  
(西から)



第5層上面(南から)



第4層上面(南から)



第3層上面(南から)



調査区南壁地層断面  
(北東から)



調査区南壁西端地層断面  
(南から)



第5・6層堆積状況  
(調査区東壁SK74部分、  
西から)



弥生時代～古代遺構検出状況  
(調査区東半、北から)



SK72・73間遺物出土状況  
(南西から)



中世後半～徳川期の遺構  
検出状況(西から)



調査区西壁(SD07・08)  
地層断面(北東から)



第5層上面SD09断面  
(北から)



第3層上面遺構  
掘削状況(南から)



第3層上面SD07断面  
(南東から)



第2層上面遺構  
掘削状況(南から)



第2層上面SK03断面  
(北から)



SX1101(南から)



SK1001断面(東から)



第6層上面(東北東から)





第5層上面(南西から)



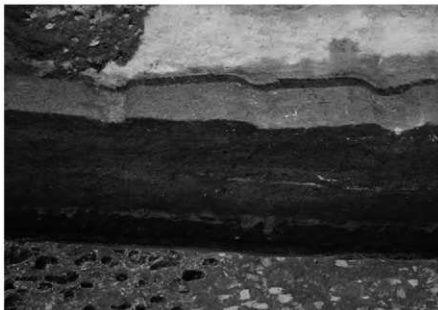
第4層上面(南西から)



SX356(南東から)



西調査区 西壁地層断面  
(東から)

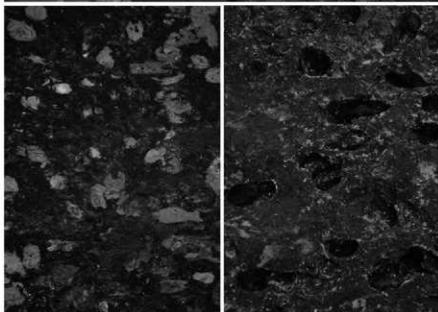


西調査区 第4c層上面  
検出状況(南から)



左：西調査区 第4c層  
上面の足跡(検出状況)

右：西調査区 第4c層  
上面の足跡(完掘状況)



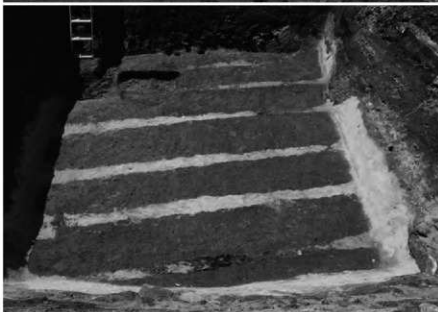
西調査区 第4a層上面  
・第2b層下面  
検出状況(南西から)



西調査区 第2a層上面  
完掘状況(南から)



西調査区 第1b層上面  
検出状況(北から)



東調査区 南壁地層断面  
(北から)



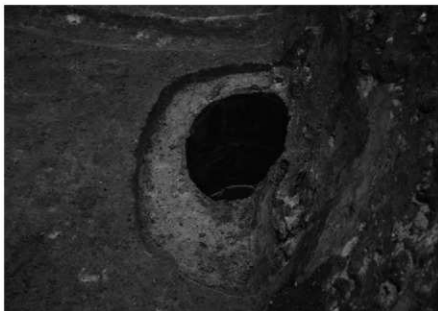
東調査区 第4d層上面  
検出状況(北から)



東調査区 第3a層上面  
完掘状況(北から)



東調査区 第3a層上面の  
SE337(西から)



東調査区 第2a・3a層上の  
SD227・327(南から)



東調査区 第2b層上面  
完掘状況(北西から)



北壁地層断面  
(南から)



第6層上面  
(南から)



第4層上面  
(南から)



西壁地層断面(東から)



第3層上面検出状況  
(東から)



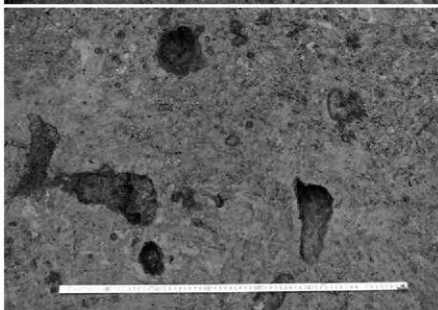
第2層上面検出状況  
(南から)



西区第9層上面  
遺構は第3～5層  
(西から)



西区第8層下  
足跡



西区西壁断面





東区第5層SD11と耕作溝  
(真南から)



東区第6層上面  
SD12(真南から)



東区東壁断面



東壁南半地層断面  
(西から)



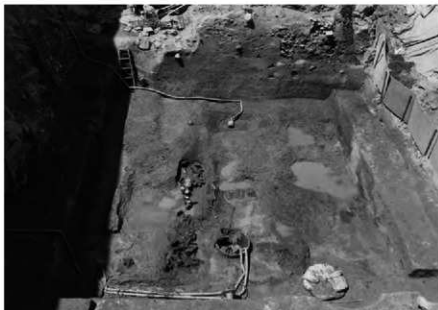
南壁西半地層断面  
(北東から)



南壁西半地層断面  
(北西から)



第8層上面検出  
NR114落込みC  
遺物出土状況(東から)



西半部北第6層上面  
遺構完掘状況  
(西から)



西半部南第6層上面  
遺構完掘状況  
(東から)



東半部南第4-1層上面  
遺構完掘状況  
(東から)



西半部南第4-1層上面  
遺構完掘状況  
(東から)



東半部南第3-2層上面  
遺構完掘状況  
(東から)



西半部南第3-2層上面  
遺構完掘状況  
(東から)



西半部南第3-1層上面  
遺構完掘状況  
(東から)



西半部南第2-1層上面  
遺構完掘状況  
(東から)



第8層上面検出  
NR114落込みから  
出土した漆椀



第8層上面検出  
NR114落込みから  
出土した下駄



妙知院の被災遺物  
廃棄土壌および  
上層から出土した  
土人形と金属製品



中区 南壁(第7層以下)  
地層断面(北西から)



南区 第9b層上面遺構  
掘削状況(南から)



北区 第9層上面遺構  
掘削状況(北から)



中区 第8層上面遺構  
検出状況(北から)



中区 第8・9層上面遺構  
掘削状況(北から)



南区 第8・9層上面遺構  
掘削状況(南から)





北区 第7層上面遺構  
(SX705)掘削状況  
(北西から)



北区 第6c2層上面遺構  
掘削状況(北から)



北区 第6b層上面遺構  
掘削状況(北から)



中区 第6b層上面遺構  
掘削状況(北から)



南区 第5層上面遺構  
掘削状況(南から)



穴蔵418南壁(北から)



中区 穴蔵418東壁と  
石室内埋土(調査区東壁)  
堆積状況(西から)



北区 第4層上面遺構  
掘削状況(北から)



中区 第4層上面遺構  
掘削状況(北から)



南壁地層断面  
(北東から)



第3層上面焼土  
検出状況  
(北から)



第2層上面遺構検出状況  
(北から)



調査区西壁地層断面  
および遺構発掘状況  
(北東から)



遺構検出状況(東から)  
(SE05、SK08は未掘)



SK06南北断面  
(北西から)



西区第7(6)層上面(東から)



西区第5層上面(東から)



東区第5層上面(東から)  
奥の排土下が西区



西区第4層上面  
(東から)



東区第4層上面  
(東から)



東区第3層下面耕作痕  
(南から)



西区第3層上面  
(東から)



西区SX348埋莖群  
(北から)



東区第3層上面  
(東から)





西区第2層上面  
(西から)



西区第2層上面  
(東から)



東区第2層上面  
(東から)



西区第1層上面(西から)  
奥は御堂筋



西区第1層上面(東から)



東区第1層上面(東から)



北壁地層断面  
(南西から)



東壁地層断面SK702付近  
(西から)



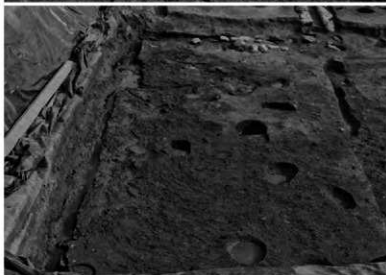
南壁SD402断面  
(北から)



SB901  
(北から)



第7層上面遺構  
(北から)



SB801(北から)



北区 第4層上面遺構  
(北東から)



北区 第4層上面遺構  
(北から)



北区 SD401・402  
石組検出状況  
(南から)



南区 4～8層上面遺構  
(西から)



南区 堀・門・石組溝  
(北から)



南区 SB802  
(北から)



塙 2  
(北西から)



SB401瓦敷南端  
(東から)



第2層上面遺構  
(未掘はSK202、西から)





西壁北部地層断面



第2層上面遺構検出状況 南から



調査区東壁地層断面  
(西から)



調査区南壁地層断面  
(北西から)



第6層上面遺構  
掘削状況(東から)



第5層上面遺構検出状況  
(東から)



第5層上面遺構掘削状況  
(SA05除去後 東から)



SA05・10・SD08・09  
断面(東から)



西区 第9層上面遺構  
検出状況(南西から)



西区 第9層上面遺構  
掘削状況(西から)



西区 第7層上面遺構  
検出状況(南西から)



西区 第4層上面遺構  
検出状況(南西から)



西区 SK416断面  
(南東から)



東区 第4層上面遺構  
検出状況(東から)



東区 第4層上面遺構  
掘削状況(北西から)



東区 第3層上面遺構  
掘削状況(東から)



東区 SP05断面  
(北東から)



第10層上面と東壁地層断面  
(西から)



第9層上面全景  
(北から)



第8層上面全景  
(北から)



第8層上面全景  
(南から)



第7(6)層上面全景  
(南から)



第7(6)層上面全景  
(北東から)



第3層上面遺構掘削状況  
(北西から)



SK11断面  
(北から)



SK12断面  
(西から)





南壁地層断面  
(北から)



第6層上面検出状況  
(東から)



第4層上面遺構  
(北から)



調査区全景(第3層上面、西から)



南壁地層断面(北から)



第2層上面全景(南から)



北区調査区東壁地層断面  
(西から)



北区第7層上面  
遺構掘削状況全景  
(北から)



南区第7層上面  
遺構半載状況全景  
(北から)



北区第7層上面  
SK708・709断面  
(西から)



南区第7層上面  
SK711断面(西から)



北区第6層上面  
遺構掘削状況全景  
(北から)



南区第6層上面  
遺構掘削状況全景  
(北から)



南区第6層上面  
SK617・SD618断面  
(南東から)



北区第5b層上面  
遺構掘削状況全景  
(北から)



南区第5b層上面  
遺構掘削状況全景  
(北から)



南区第5b層  
SB523北側礎石柱列  
(北東から)



北区第5b層  
SD505石の出土状況  
(北西から)



南区第5b層  
SD520・SK521断面  
(西から)



北区第5b層  
SK508断面(西から)



北区第4b層上面  
遺構掘削状況全景  
(北から)



北壁深掘りトレンチ断面  
(南から)



第2b層上面遺構完掘状況  
(北から)



SD14瓦管出土状況  
(南から)





南壁地層断面  
(北から)



第4層上面完掘状況  
(南から)



第3層上面の遺構と  
埋裏SX203(北から)



北区北壁(西半)  
地層断面  
(南西から)



北区第3a・b層上面  
遺構掘削状況  
(北から)



南区第3a・b層上面  
遺構掘削状況  
(南から)



南区SE80断面  
(東から)



北区東壁地層断面  
(SK17・18・23・25など  
北西から)



南区SK79断面  
(西から)



東壁地層断面  
(北西から)



第5層上面検出状況  
(南から)



第1層上面検出状況  
(南から)



東壁地層断面(西から)



第10層上面SE1002  
(北北西から)



第6層上面SX601~603  
(南西から)



第6層上面SB601  
(北から)



第5層上面SB501  
(東から)



第5層上面SK502  
(南西から)



全調査区掘削状況  
(西から)



調査区南壁東端地層断面  
(北東から)



拡張区(1) 掘削状況  
(北西から)



拡張区(3) 掘削状況  
(北西から)



SK02・SK07(南半)・  
SK11検出状況  
(南西から)



SK02(東部)断面  
(北から)



SK02・11・SD12  
掘削状況(南西から)





SK02・11掘削状況  
(北東から)



SK07(北西部)断面  
(北西から)



SK07・SK11南北断面  
(北西から)



調査区北壁地層断面  
(南から)



第5層上面遺構  
(南から)



第3層上面遺構  
(南から)



東区北壁地層断面  
(南西から)



西区西壁地層断面  
(東から)



西区深掘りトレンチ  
(南から)



東区第5・4b層上面  
(西から)



東区第4a層上面  
(西から)



東区第3b層上面  
(西から)



東区第3a層上面  
(西から)



東区第2a層上面検出  
(西から)



西区第4a層上面  
(南から)



西区第3b層上面  
(南から)



西区第2b層上面  
(南から)



西区第2b層上面瓦敷き  
(北から)



第3層上面遺構検出状況  
(南から)



調査区東壁第3層堆積状況(北西から)



SE01下部半截状況(北東から)

SE01下部・SX02断面(東から)



東壁地層断面



第3a層上面(南から)

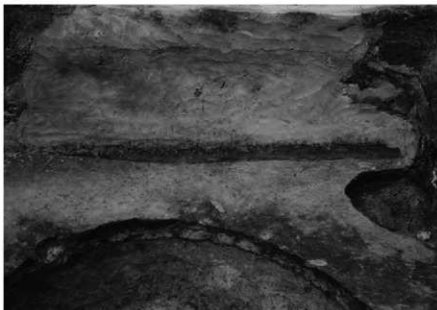


SD301(東から)





東壁地層断面(西から)



調査区全景(第3層上面、  
北東から)



遺構検出状況(北から)



南壁地層断面図



第2層上面(西から)



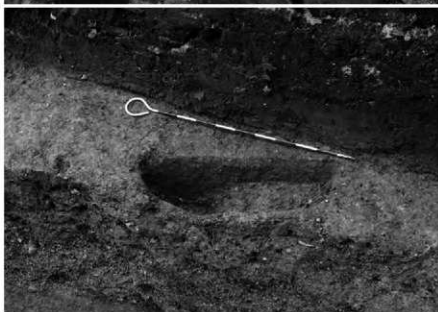
調査地全景  
(第1層上面、西から)



地山上面遺構検出状況  
(西から)



SP01断面(南東から)



左：SP02断面(北から)  
右：SK12断面(北から)

